

## 目 次

<b>I あいさつ</b>			
	九州地区中学校国語教育研究協議会	会長 田尻 博道	1
	熊本市中学校国語教育研究会	会長 上妻 昭仁	2
<b>II 基調提案</b>	熊本大学教育学部附属中学校	益田 俊男	3
<b>III 各部会研究報告及び学習指導案</b>			
	○「話すこと・聞くこと」部会		
	研究報告	熊本市立龍田中学校	岩野 満 ..... 9
	公開授業・研究の実際	熊本市立江原中学校	西本 真也 ..... 13
	助言者より	熊本大学 准教授	北川 雅浩 ..... 21
	○「書くこと」部会		
	研究報告	熊本市立力合中学校	田中 文子 ..... 23
		山都町立矢部中学校	坂田 友紀
	公開授業Ⅰ・研究の実際	嘉島町立嘉島中学校	山田 修平 ..... 30
	公開授業Ⅱ・研究の実際	熊本市立京陵中学校	矢田 知等世 ..... 39
	助言者より	熊本大学 シニア教授	濱平 清志 ..... 50
	○「読むこと」部会		
	研究報告	熊本市立龍田中学校	岩下 嘉邦 ..... 52
		菊池市立菊池北中学校	工藤 寛
	公開授業Ⅰ・研究の実際	熊本市立城西中学校	杉崎 勢 ..... 60
	公開授業Ⅱ・研究の実際	大津町立大津北中学校	高宗 洋 ..... 73
	助言者より	熊本大学 准教授	仁野平 智明 ..... 85
	○「伝統的な言語文化」部会		
	研究報告	熊本市立西山中学校	中熊 正博 ..... 87
	公開授業・研究の実際	熊本大学教育学部附属中学校	荒牧 剛志 ..... 92
	助言者より	熊本大学 教授	堀畑 正臣 ..... 102
<b>IV 九州各県の実践報告</b>			
	○話すこと・聞くこと		
	(第1分科会)	福岡県遠賀町立遠賀中学校	畠山 智加枝 .... 105
		熊本県宇城市立不知火中学校	原武 聡子 ..... 107
	○書くことⅠ		
	(第2分科会)	長崎県長崎市立土井首中学校	湊 建太 ..... 109
		熊本県多良木町立多良木中学校	那須 裕貴 ..... 111
	○書くことⅡ		
	(第3分科会)	宮崎県宮崎市立生目台中学校	野口 晶子 ..... 113
		熊本県阿蘇市立阿蘇中学校	熊谷 潤一 ..... 115
	○読むことⅠ		
	(第4分科会)	大分県大分市立滝尾中学校	山本 賀奈子 .... 117
		熊本県水俣市立水俣第一中学校	寒川 邦江 ..... 119
	○読むことⅡ		
	(第5分科会)	沖縄県浦添市立浦西中学校	名富 綾乃 ..... 121
		熊本県天草市立牛深中学校	赤城 孝幸 ..... 123
	○伝統的な言語文化		
	(第6分科会)	鹿児島県屋久島町立安房中学校	中村 恵理 ..... 125
		熊本県小国町立小国中学校	後藤 葵 ..... 127
<b>V 九州地区中学校国語教育研究大会のあゆみ</b>			129
<b>VI 九州地区中学校国語教育研究協議会規則</b>			131
<b>VII 熊本県中学校国語教育研究大会のあゆみ</b>			133
<b>VIII 大会関係者一覧</b>			135

# I あいさつ

## 第43回九州地区国語教育研究大会・ 第56回熊本県中学校国語教育研究大会熊本大会 研究紀要の発刊にあたり

九州地区中学校国語教育研究協議会  
熊本県中学校教育研究会国語部会  
会 長 田 尻 博 道

各県におかれましては、今も、新型コロナウイルス感染拡大防止を図りながら、日々、教育活動に取り組んでおられることと存じます。熊本県も同様に、授業時数の回復を図りつつ、子ども達が少しでも満足できる学校生活にしたいと奮闘する毎日です。

さて、この度は、全く予期せぬ事態とは言え、「第43回九州地区中学校国語教育研究大会 熊本大会」の開催を中止し、誌上発表という形をとらせていただきましたことを心よりお詫び申し上げます。

本県では、これまで、全国大会、九州大会等を好機と捉え、県全体としての取り組みを一層充実させるために、熊本市が核となり、県内各支部の協力・連携の下、研究を進めてきました。ところが、今回、三密を避けるため、研究推進委員会はおろか少人数の部会さえ開催が困難となり、研究推進に大きな支障が出てまいりました。しかし、そのような制約があっても、全国大会の成果を踏まえて研究を更に推し進めたいという熱意を支えに、研究部が中心となって検証授業、成果と課題のまとめと、精いっぱい努力を重ね、ようやく今日に至っております。本来であれば、皆様には、熊本の子ども達が教室で学習する姿を直に見て、研究の成果を「実感」して頂きたかったところですが、誠に残念ながら、紀要並びに資料集という形でお伝えすることとなりました。各県の優れた実践と共に、参考にしていただければ幸いです。

一方、今回は、県会長として今後の研究組織の在り方、研究会や大会の運営の仕方について根本から考え直すよい機会となりました。ご他聞にもれず、熊本県も、熊本市以外の支部における会員の急速な減少という課題に直面しております。少子化と相まって学校規模が縮小し、一つの中学校に国語教師一人ということも珍しくありません。遠隔地で多忙な毎日を過ごしながら孤軍奮闘する先生方も気軽に参加できる部会や大会はどうあるべきか、「リモート」等をキーワードとして、これから考えていきたいと思えます。今回、熊本県は提案できませんでしたが、いわゆる「ニューノーマル」における研究会や大会の在り方等についても、次期大会で互いに提案できれば幸いです。

いよいよ今年度から新学習指導要領が全面実施です。また、先の中教審では、ICTの活用や少人数指導による児童生徒への「個別最適の学び」が答申されたところです。現場教師には、教科の本質を踏まえた指導に加え、広範囲で高い指導力がますます求められるようになります。この九中国研が、貴重な学びの場の一つとして、これから更に充実、発展することを願っています。

終りになりましたが、今回の熊本県の方針をご理解いただき、支持していただきました九州理事会並びに各県支部の皆様にご心よりお礼を申し上げます、あいさつといたします。

熊本市中学校国語教育研究会  
会 長 上 妻 昭 仁

皆様方には、日頃より、九州各県中学生の国語力向上のためにご尽力いただいておりますこと、そして、熊本市中学校国語教育研究会の研究活動にご理解とご支援を頂いておりますことにお礼を申し上げます。

本来であれば、令和2年11月13日に熊本市におきまして、本県の中学生の学習の様子を公開し、国語科教育について考え合う熊本市大会を開催いたすところでしたが、新型コロナウイルスの世界的感染拡大により、各校の教育課程の実施の見通しもつかない状況であったため、大会中止の決断に至りました。大会開催に向けて授業実践・研究や運営等に取り組んでくださった本県研究会会員をはじめ、各県からの提案者、研究会の皆様、貴重な発表と研修の場をご提供できませんでしたことをお許してください。

さて、新学習指導要領が、今年度から全面実施となりました。それには、「何を学ぶか」に加えて、「何ができるようになるか」「どのように学ぶのか」という視点が示され、その実現を図るための「カリキュラム・マネジメント」や「主体的・対話的で深い学び」をするための授業改善が求められています。これまでの知識の量から知識の深さに重点を移し、身につけた知識をどのように生かしていくかという視点を持つ必要性が打ち出され、それを具体化することが学校現場に求められています。

このような中、私達は、今回の研究テーマを「社会生活につながる国語科教育 ～言葉を駆使しながら自ら学び続ける生徒の育成をめざして～」といたしました。国語教育が、国語科の授業だけでしか通用しない限定的な力を養うものではなく、現在、そして未来の社会でも通用するような普遍的で汎用的な力をつけていくものとなることをめざして、これまでの研究をベースにしながら、カリキュラム・マネジメントの視点に立ち、生徒たちに実生活で生きて働く「より豊かな言語感覚やより深い思考力、より確かな言語能力」を、いかに効果的に身に付けさせていくかを研究することとしました。

奇しくも新型コロナウイルスがもたらした新しい生活様式のように、明日の状況がいかに変化するか予測できない未来を生きる生徒たち一人ひとりに、未来を力強く生き抜く力を育てる授業を実現するためには、私達国語教師自身が互いに学び合い、実践の交流を続けていくことを怠らず、日々バージョンアップしていくことが不可欠です。この紀要により、熊本県・市と九州各県の国語教育研究会の皆様の実践研究の成果が広まり、生徒たちのための授業の現場まで届くことを祈念しております。

結びに、本大会の研究活動にご支援を賜りました熊本県教育委員会並びに熊本市教育委員会をはじめ、ご助言・ご指導いただきました皆様、そして、貴重な実践・研究の成果をまとめ、ご提供くださいました会員の皆様に心より感謝を申し上げ、ご挨拶といたします。ありがとうございました。

## Ⅱ 基調提案

### 1 研究主題

**社会生活につながる国語科教育**  
～言葉を駆使しながら自ら学び続ける生徒の育成をめざして～

### 2 研究主題設定の理由

#### (1) 「社会生活」とは

「社会」という言葉は、今回の学習指導要領改訂におけるキーワードの一つであるといえる。平成28年に示された「中央教育審議会答申」には、「本答申は、2030年の社会と、そしてさらにその先の豊かな未来において、一人一人の子供たちが、自分の価値を認識するとともに、相手の価値を尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、よりよい人生とよりよい社会を築いていくために、教育課程を通じて初等中等教育が果たすべき役割を示すことを意図している。」と述べられている。教育の目的と役割に「2030年の社会」という具体的な未来の社会が見据えられた。

令和3年度から全面実施の新学習指導要領も、この答申をふまえ、今の子どもたちが、成人して活躍する未来の社会を想定し、改定されている。それは、変化の激しい、予測困難といわれる時代の中にある社会である。「総説」には、そのような時代を生きていく子どもたちに、「よりよい社会と幸福な人生の創り手となる力を身に付けられるようにすることが重要である」と述べられている。まさに、われわれ教師の思いそのものだ。私たちは目の前の子どもたちに、「大人になって、社会で活躍してほしい」「今よりももっと豊かな社会を築き上げてほしい」、そして何よりも「幸せに人生を歩んでほしい」と願っている。

そのために、国語科の授業において、子どもたちに、どんな力を、どのようにして付けていけばよいだろうか。本研究では、国語科の各領域の特色をそれぞれ生かして工夫しながらも、共通してこの命題に答えるべく、ともに同じ思いをもって、これからの国語科教育の在り方を追究していくことをめざすことにした。そこで私たちは、本研究の主題を「社会生活につながる国語科教育」と設定した。

ところで、新学習指導要領において、「社会生活」という言葉自体は、「国語科の目標」で登場する。「国語科の目標」は以下のとおりである。

言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を次のとおり育成することをめざす。

- (1) 社会生活に必要な国語について、その特質を理解し適切に使うことができるようにする。
- (2) 社会生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、思考力や想像力を養う。
- (3) 言葉がもつ価値を認識するとともに、言語感覚を豊かにし、我が国の言語文化に関わり、国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養う。

(下線は筆者)

さらに学習指導要領解説では、上記の(1)と(2)についてそれぞれ以下のように記されている。

(1)は「知識及び技能」に関する目標を示したものである。日常生活から社会生活へと活動の場を広げる中学生が、社会生活において必要な国語の特質について理解し、それを適切に使うことができるようにすることを示している。(中略) こうした「知識及び技能」を社会生活における様々な場面で、主体的に活用できる、生きて働く「知識及び技能」として習得することが重要となる。

(2)は、「思考力、判断力、表現力等」に関する目標を示したものである。社会生活における人と人の関わりの中で、思いや考えを伝え合う力を高め、思考力や想像力を養うことを示している。(中略) こうした力を未知の状況にも対応できる「思考力、判断力、表現力等」として育成することが重要となる。

(下線は筆者)

ここでの「社会」が意味するものは、先に述べた、遠い未来の社会ではなく、私たちを取り巻く現在の実社会であることが分かる。「社会生活に必要な国語」を「社会生活における人との関わりの中で」養うことが求められているのである。

以上により、我々の研究主題が掲げる「社会生活」とは、現在の実社会から未来の社会までを含むものと広く定義する。国語科教育が、国語科の授業だけでしか通用しない限定的な力を養うものではなく、現在、そして未来の社会でも通用するような普遍的で汎用的な力を養うものとなることをめざしたい。

## (2) 国語科教育の課題

この研究主題の実現に向けて、現在の国語科教育の課題はどこにあるのか。その手がかりを探るため、まずは、令和元年度全国学力・学習状況調査生徒質問紙の、全国における回答結果から考察していきたい。

「国語の勉強は大切だと思いますか」の問いに、ほぼ九割の生徒が肯定的に捉えている。ところが、「国語の授業の内容はよく分かりますか」の問いでは約七割、「国語の勉強は好きですか」については約六割と肯定派の割合が減少していく。また、「国語の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つと思いますか」の問いにも、九割弱の生徒が肯定的に答えているにもかかわらず、「国語の授業で学習したことを、普段の生活の中で話したり聞いたり書いたり読んだりするときに活用しようとしていますか」の問いでは約七割に減少してしまう。これらの結果からは、子どもたちは国語科の学習の重要性や有用性を頭では感じていながらも、実際の授業や生活ではそれを十分に活かしてきていないという現実が見えてくる。

次に、実際の問題別調査結果も見ていきたい。以下は、課題として示された部分の引用である。

- ・話し合いの話題や方向を捉えることはできているが、それを踏まえて自分の考えをもつことに課題がある。
- ・自分が伝えたいことについて資料の中から根拠となる情報を取りだして正確に書くことはできているが、自分が伝えたいことの根拠として読み手に分かりやすいように書くことに課題がある。
- ・文章の構成や展開、表現の仕方について、根拠を明確にして自分の考えをもつことや、文章の展開に即して情報を整理し、内容を捉えることに課題がある。

ここからは、「話すこと・聞くこと」と「読むこと」においては、「自分の考えを持つこと」に共通して課題があることが分かる。また、「書くこと」と「読むこと」からは、情報の取り出しはできても、それを活用することが課題であることも分かる。

本県の課題に目を向けてみても、「知識」に関する問題よりも「活用」に関するもので、特に記述式の問題において、全国と比べても無回答率が高いという傾向がある。

これらの結果からは、子どもたちの「思考力」や「情報活用力」における課題が見えてくる。

### (3) 国語科教育によりめざす子ども像

副主題の「言葉を駆使しながら自ら学び続ける子どもの育成をめざして」は、私たちが国語科教育を通して育成をめざす最終的な子どもの姿である。

「駆使する」とは、「思い通りに使いこなす」の意である。国語科の授業では「言語活動」を通して、「言葉による見方・考え方」を働かせて「国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力」を身につけていく。「言葉を駆使しながら」とは、国語の知識・技能を生かしながら、言葉を自在に使って思考し、判断し、表現する生徒のイメージである。

「自ら学び続ける」は、子どもたちが学んだことをつなげながら、国語科の学習に意欲的かつ能動的に取り組んでいるイメージである。先の全国学力・学習状況調査生徒質問紙の回答からも明らかのように、子どもたちは、国語科の授業について、将来、社会に出たときに役立つとは思っている。しかし、いざ学習したことを活用する段階になると、その実感をもてていない生徒がいる。これは、国語科で学習したこと自体が漠然としているためではないだろうか。子どもたちに、「今日の国語の授業で学んだことはこれだ。」という実感をもたせたい。同時にそれが、「生活の中で使えるし、社会に出ても役に立つ。」という有用感を伴うものでもあってほしい。

それでは、子どもたちが、「言葉を駆使しながら自ら学び続ける」ためには、どのような授業を展開していけばよいただろうか。私たちは、授業の理想的な形を以下の三点に整理した。

- 言語活動設定の工夫により、子どもたちが言葉による見方・考え方を働かせ、自らの課題意識を持てる授業。
- これまでの生活体験や学習で身につけてきた国語の力と関連させて、自らの課題を解決する見通しをもち、他者と協働しながら課題を解決していく授業。
- 学んだことや、学び方自体の振り返りの際に、次の学習や生活に生かせるという実感をもてる授業。

以上のように、子どもたちが自ら課題を見つけ、その解決に見通しをもち、他者と協働しながら解決していくような単元を工夫し、学びの振り返りを充実させることにより、子どもたちに汎用的な国語の力を身に付けさせていきたい。本研究では、社会生活で役に立つ国語の力とともに、「生きる力」そのものの育成もめざしていく。

### 3 研究の視点

#### 視点① 学習意欲のサイクルを生み出す「見通しと振り返り」

平成 30 年度に開催された熊本県中学校国語教育研究大会熊本市大会では、「領域をつなげる国語科授業の開発」をテーマに、研究発表を行った。この研究では「領域等をつなぐ」学習課題の設定により、子どもたちが学習を見通し、振り返りながら、各領域の身に付けるべき力を効率よく身に付けていくことをねらった。本研究でも引き続き、言語活動の一つのあり方として、その有効性を検証していく。

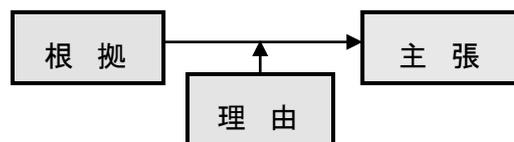
さらに、今年度は、子どもたちに「今日の授業ではこれを学んだ。」という実感をもたせられるような「振り返り」に焦点を当て、追究していく。学びを子どもたちの言葉で語らせ、記させ、蓄えさせていきたい。

また、その学びが、どのような学習過程により獲得できたのかを振り返り、どのような場合に、どのような学習方法が有効であったのか、またはそうでなかったのかについても考えを深めさせていく。このような振り返りの蓄積は、新たな課題の解決方法を見通す力にもつながるものと考えている。「振り返り」を充実させることで、最終的には、子どもたちが次の学習課題での「見通し」をもてるようになることをめざしたい。

#### 視点② 考えを深めるための協働的な学びの場の設定

社会生活において、他者と協働して課題を解決していくことは欠かせない。学習の場においても協働的な学びによって、自分とは異なる他者の考えに触れ、それを自らの考えと比較、統合していくことで、子ども一人一人が自らの考えをより確かなものにしていく。授業においては、教師が明確な意図をもち、効果的に協働的な学びの場を設定することが重要である。

また、そこでは、論理的に思考したり表現したりするために、「根拠・理由・主張の3点セット」（鶴田清司，河野順子，2014）【資料1】を子どもたちに意識させることが有効である。これは、平成24年度全国大会における本研究会の研究成果を継承するものである。



【資料1】「根拠・理由・主張の3点セット」

#### 視点③ 学びの質を高める「思考のキーワード」

視点①や視点②をとおして、子どもたちは、授業の中で様々なことを思考する。どのように考えたかという思考の流れや、それによってたどり着いた結果については、ワークシートにまとめたり、発表して共有したりする場面が多くある。しかし、その思考そのものがどのようなものであったかを振り返る機会は、そう多くないのではなかろうか。

そこで、子どもたちに考え方の例として「思考のキーワード」（熊本大学教育学部附属中学校，2018）【資料2】を提示する。これにより、思考を可視化・自覚化し、主に視点①の「見通しと振り返り」で活用させることをねらう。

また、視点②の「根拠・理由・主張の3点セット」を用いた協働的な学びの場では、主に「理由」の中にこの「思考のキーワード」を意識させること

で、考えをより深めさせていく。

子どもたちが自らの思考そのものにも関心を向け振り返ることや、他者の考え方も視覚化により共有することで、子どもたちの学びの質を一段と高めていきたいと考えた。

思考	キーワード	
 比較	共通点は 相違点は	複数の情報を比べて、共通点と相違点を見出すような思考
 分類	この視点で分けると	複数の情報を、一定の視点をもとにして分けるような思考
 関連	これらを関連付けると	複数の情報を、共通点などを見出し結びつけるような思考
 類推	似たようなことから推測すると	ある情報をもとにして、類似性のある情報を作り出すような思考
 一般	これらのことから	具体的な情報を、抽象的で汎用性の高い情報にするような思考
 具体	例えば	抽象的な情報を具体的な情報にするような思考
 多面	他の視点から	視点を変えるなどして、複数の視点をふまえて行う思考
 統合	まとめると	複数の情報を合わせて、新しい情報を生み出すような思考
 批判	本当にそう言えるのか	情報の正誤、確かさ、適否等について捉えなおすような思考
 反証	反対の例を示すと	自分の考えと相反する例を想定し、考えを確かにするような思考

【資料2】思考のキーワード

<参考文献>

- ・文部科学省：中学校学習指導要領解説国語編，2018
- ・自己調整学習研究会「自己調整学習 理論と実践の新たな展開へ」，北大路書房，2012
- ・鶴田清司 河野順子「論理的思考力・表現力を育てる言語活動のデザイン 中学校編」，明治図書，2014
- ・熊本大学教育学部附属中学校「平成30年度熊本大学教育学部附属中学校研究紀要『未来を拓く力』を育成する教育課程の開発（4年次）」，2018

Ⅲ 各部会研究報告及び学習指導案

# 「話すこと・聞くこと」部会



# 【「話すこと・聞くこと」部会】 研究報告

## I 研究主題との関わり

新学習指導要領は「話すこと・聞くこと」の学習において、話題設定をはじめ、構成の検討や表現（話すこと）、構造と内容の把握や精査・解釈（聞くこと）、話し合いの進め方の検討（話し合うこと）等を指導事項として求めている。なお、「話すこと・聞くこと」の学習は話し手と聞き手との関わりの中で成立する学習であるため、各指導事項は相互に密接な関連がある。

また、「話すこと・聞くこと」の活動は学校の授業だけでなく、社会生活の中でも日常的に行われるものである。その中で「報告」「紹介」「討論」などの場面は多くあり、「話すこと・聞くこと」は学習者にとって最も身近な学習とも言える。しかし、本県・本市の子どもにおいて全国学力・学習調査の結果では、「自分の考えを持つこと」に課題があるという実態が見られた。

授業者においても、授業の中で「話すこと・聞くこと」の学習は行っているが、目的意識・相手意識が明確でないまま学習を行わせてしまい、評価においても学習者の相互評価・自己評価に頼ったり、声の大きさ・話す速さ等の「話し方」のみの評価に終始させてしまう傾向にあった。

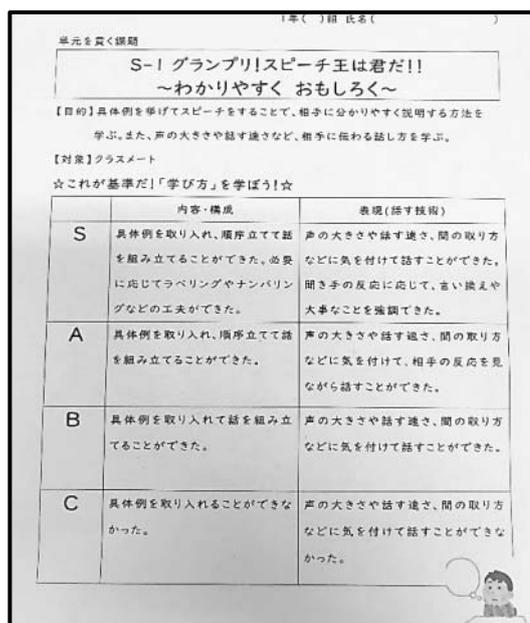
そこで本部会では、研究テーマ「社会生活につながる国語科教育～言葉を駆使しながら自ら学び続ける生徒の育成をめざして～」を受け、まず生徒の実生活・社会生活につながる単元構想、その中で「何を学ぶのか」「どのように学ぶのか」を明確にした見通しと「どんな力がついたか」「どのように学んだか」が明確な振り返りを目指すこととした。それによって、副題にも掲げられた「自ら学び続ける生徒の育成」にもつながっていくものと考えた。

## II 研究の視点

### 1 視点① 学習意欲のサイクルを生み出す「見通しと振り返り」

「話すこと・聞くこと」の領域においては、生徒の学習意欲によって活動が活発になるか否かが大きく左右される。そこで、本部会では学習者の生活体験から課題を設定することを基本とした。また単元づくりの際に、具体的な対象や目的、状況を踏まえた学びを重視するようにした。それにより、目的意識や相手意識を持つようになり、また単元を通して学び取られた知識も社会生活とつながる本物の力となり、現実の問題解決に生きて働くと考えた。

振り返りでは ICT 機器やルーブリック（評価基準表）を活用した（【資料 1】）。「話すこと・聞くこと」においては、活動の多くが音声言語を基盤として行われるため、自身の活動を評価することが難しい。そこで、観察をするグループを設け、相互評価を行う方法や ICT 機器を活用して自身のパフォーマンス（スピーチやプレゼンテーション）を評価



	内容・構成	表現(話す技術)
S	具体例を取り入れ、順序立てて話を組み立てることができた。必要に応じてラベリングやナンバリングなどの工夫ができた。	声の大きさや話す速さ、間の取り方などに気を付けて話すことができた。聞き手の反応に応じて、言い換えや大事なことを強調できた。
A	具体例を取り入れ、順序立てて話を組み立てることができた。	声の大きさや話す速さ、間の取り方などに気を付けて、相手の反応を見ながら話すことができた。
B	具体例を取り入れて話を組み立てることができた。	声の大きさや話す速さ、間の取り方などに気を付けて話すことができた。
C	具体例を取り入れることができなかった。	声の大きさや話す速さ、間の取り方などに気を付けて話すことができなかった。

【資料 1】ルーブリック（評価基準表）

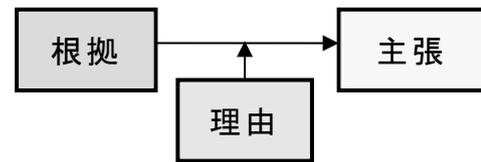
する方法を用いた。また、ルーブリックを用いて、常に自分の活動を基準に沿って評価できるようにし、「どのように学ぶのか」を意識させるようにした。ルーブリックを活用した自己評価・振り返りは「話し合い方」を振り返る、「学び方」を学ぶ、というスタイルで学習活動を進めるために非常に有効な手立てであったと考える。

## 2 視点② 考えを深めるための協働的な学びの場の設定

ペアや班での活動を「協働的な学びの場」にするためには、生徒それぞれが自分の考えを持っていることが重要である。本研究会では以前より論理的思考モデルである「根拠・理由・主張の3点セット(以下、「3点セット」)」を活用してきた(【資料2】)。授業の中で、生徒が根拠や理由を示さずに主張のみを語っていることや、根拠と主張は述べるものの、理由が不十分であることも少なくない。

この点に関して、本部会では以前より活用を行ってきた「3点セット」を用いた対話活動を授業に取り入れた。論理的に思考し、表現する生徒を育成するために、教師は「主張」「根拠」「理由」のつながりを意識しながら、生徒の発言を見取っていく必要がある。あわせて、生徒自身にも「どこからそう考えたのか」「どのような理由で考えを導いたのか」を意識させていった。

さらに、本部会では領域の特性に合わせて、ただ単に「3点セット」に言葉を当てはめて説明したり、対話したりすることを目指すのではなく、「相手意識をもって話すこと」「根拠や理由に着目して聴くこと」を重視して、活動を行ってきた。



【資料2】「根拠・理由・主張の3点セット」



「3点セット」を用い、相手を意識して説明活動を行う様子。

## 3 視点③ 学びの質を高める「思考のキーワード」

本部会では「思考のキーワード」を視点①「見通しと振り返り」や視点②「協働的な学び」を支えるものと捉えた。そこで、【資料3】のプリントを生徒に配付し「話すこと・聞くこと」の領域だけでなく、国語科の学習において様々な場面で活用してきた。また、授業を行っていく中で、生徒がどのような思考をしているかを見取り、それを評価と指導につなげていった。

実践の一例として、後述の「具体例を挙げて伝えよう」の授業を挙げる。〈比較〉という思考は、学習者自身と他者のパフォーマンス(スピーチやプレゼンテーション

	思考	キーワード	
	比較	共通点は 相違点は	複数の情報を比べて、共通点と相違点を見出すような思考
	分類	この視点で分けると	複数の情報を、一定の視点をもとにして分けるような思考
	関連	これらに関連付けると	複数の情報を、共通点などを見出し結びつけるような思考
	類推	似たようなことから推測すると	ある情報をもとにして、類似性のある情報を作り出すような思考
	一般	これらのことから	具体的な情報を、抽象的で汎用性の高い情報にするような思考
	具体	例えば	抽象的な情報を具体的な情報にするような思考
	多面	他の視点から	視点を交えるなどして、複数の視点をもたえて行う思考
	統合	まとめると	複数の情報を合わせて、新しい情報を生み出すような思考
	批判	本当にそう言えるのか	情報の正誤、確かさ、適否等について捉えおさずような思考
	反証	反対の例を示すと	自分の考えと相反する例を想定し、考えを確かにするような思考

【資料3】生徒に提示した「思考のキーワード」

等)を比べ、学びを深めることにつながった。また、単元導入時と単元終了時の自身の姿を比べることで、学びの有用性を実感することもできた。

さらに、〈多面〉の思考を知っていることによって、声の大きさや強弱、話す速さといういわゆる「話し方」に捉われていた生徒も「話の構成や内容」を意識した発言が見られるようになった。

### Ⅲ 研究の実際

#### 1 実践①「具体例を挙げて伝えよう」(東京書籍 1年)

本実践は「具体例を挙げて伝えよう(東京書籍)」を基に、実践を行った単元である。

単元のゴールとなる課題として、以下のような課題を設定した。

**S-1 グランプリ！クラスメートに分かりやすく伝えよう！**  
～故事成語・ことわざを具体例で説明せよ！～

生徒は「オオカミを見る目」(東京書籍)で構成や具体例の役割について学んでいる。また、本単元では「故事成語」を事前に学習し、語句の由来や辞書的な意味、用法を確認している。そこで、本単元では視点①「学習意欲のサイクルを生み出す『見通しと振り返り』について」、単元の導入において、教師の体験談について故事成語を交えてスピーチを行った。まず教師がスピーチを行うことで、導入及びモデルを示し、学習への見通しを持てるようにした。また、今までのスピーチの既有知識を確認し、「声の大きさ」「話す速さ」「表情」などの「話し方」に加え、本単元では「具体例を挙げる」「自分の体験と故事成語をつなげる」「聞き手に分かりやすい構成を考える」という「話す内容」の部分を学んでいくことを確認した。

また自身のスピーチを定期的に振り返り、新たな見通しをもたせるためにルーブリック評価表を活用した。「話す内容」と「話し方」に視点を向けたことで、「話し方」に意識が向きやすい生徒も、構成や具体例の中身にこだわっていく姿が見られた。

次に視点②「考えを深める協働的な学びの場の設定」では先に述べた「根拠・理由・主張の3点セット」を基盤として、対話活動を行った。

「読むこと」の学習では、小説や説明的文章の本文が、意見を述べる際の根拠となるが、スピーチは音声言語であるために根拠を示して対話をするのが難しい場合があった。そこで、ICT機器を活用し、ペア学習として互いのスピーチを撮影した。双方で助言を行う際は、動画を根拠として、聴いている側がどう受け取っているかを伝え合うようにした。「話すこと・聞くこと」領域では音声言語の特性上、客観的な根拠がないままに対話活動を行うことも多かった。スピーチをした本人も、自分で自分のスピーチを確認することで客観的な振り返りができたようである。

さらに、ICT機器を活用した対話活動を行えたことは他の学習においても効果的であった。

視点③「学習者の学びを支える『思考のキーワード』」では、学習者の学習活動そのものを



【資料5-①】ICT機器を活用し、スピーチを相互に撮影する。



【資料5-②】ICT機器を活用した対話活動。見通しや振り返りにもつながった。

学習材とした。例えば、ICT 機器等を用いて、ある学習者のスピーチを撮影し、自己評価や相互評価を行った。その際に、思考のキーワードである〈比較〉を用い、「自分のイメージするスピーチと録画されたスピーチの違い」や「教師が行ったモデルのスピーチとの違い」について自分の考えを持たせるようにした（【資料5-①②】）。その考えを基盤として、ペアや班での学びの場を設定した。対話の際には〈多面〉を意識させることで、スピーチを様々な要素から評価したり、改善点を議論したりすることができた。以下に生徒の感想を紹介する。※登場する生徒は仮名。また下線は筆者による。

今日は自分のスピーチを由美さんに撮影してもらいました。声を大きく、聴いている人の表情を見ながら言ったつもりでしたが、タブレットの動画を見ると、もっと声を出した方がいいなと思いました。話すのも少し速かったです。今日のスピーチの動画は評価表だとBだと思うので、次はAを目指したいです。交代で由美さんのスピーチも撮影したんですけど、自分のと比較してみると、具体例のところはゆっくりめに話していて、分かりやすさが違いました。それに、具体例の部分が「蛇足」という故事成語の意味とちょっとズれてるんじゃないかというアドバイスももらったので、内容ももう一度考えたいです！

生徒の記述内には〈多面〉という言葉は見られないが、自分のスピーチの課題を内容や構成、話す速さや声の大きさなど多面的に捉えていることが分かる。

## 【話すこと・聞くこと部会】第2学年国語科学習指導案

(新しい国語2(東京書籍) p 139～146「説得力のある提案をしよう / プレゼンテーション」)

授業者 熊本市立江原中学校 教諭 西本真也

### 1 単元構想

 社会生活での理想の姿	・現状を分析・把握して、建設的に話し合いながら、他者と協働してよりよい解決策を導き出している。 ・聞き手の行動を変容させるために、話に論理性を持たせ、展開を考え、わかりやすい資料の提示を行い、相手の心を揺さぶる発表をする。		
単元名	考えてみよう。次世代の江原中の姿		
本単元でめざす子どもの姿	・聞き手の立場や感覚を想定して、相手の変容を促すための説得力のある話を組み立てる。(A (1) イ) ・相手の行動の変容を目的とし、説得力ある提案をするために、構成、効果的な資料の提示、表現の方法を工夫している。(A (1) イ, ウ)		
単元の評価規準	知識・理解	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
	① 言葉は、相手の行動を促す働きがあることに気づいている。(1) ア ② 情報と情報との関係の様々な表し方を理解している。(2) イ	① 「話すこと・聞くこと」において、目的や進め方を確認し、互いの意見や共通点や相違点に着目して、考えをまとめている。(A (1) オ) ② 「話すこと・聞くこと」において、自分の立場や考えが明確になるように、根拠の適切さや論理の展開などに注意して、話の構成を工夫すること (A (1) イ) ③ 資料や機器を用いるなどして自分の考えが分かりやすく伝わるように表現を工夫している。(A (1) ウ)	① 積極的に友だちと意見を交換し、互いの意見や共通点に着目し、よりよい話し合いの方法について話し合おうとしている。 ② 進んで話の構成や、資料の提示、表現の方法を工夫し、学習の見通しをもって、説得力のある提案をしようとしている。
単元を通した言語活動			
「目安箱」に出ていた「校則への不満」をもう一度精査し、これからの時代に合っている且つ、将来の江原中学校がより良くなるための校則を作ろう！			
 学習前の姿 (生徒の実態)	・自分にとって都合のいい論の展開に終始し、客観的な根拠を持った話し合いや提案をする経験が少ない。(観察) ・説得力という観点で提案の方法を工夫した経験がある生徒は少ない。(下記アンケート)		
	○これまでに、人前で聞き手に何らかの行動を促すための提案をしたことがありますか？ また、「ある」と答えた人は、どんな場面でしたか？ ・ある 20%      ・ない 25%      ・分からない 55% ○集団に対して、自分が望むような行動を相手にとってほしい時に、それを提案する方法を工夫して行った経験がありますか？ ・ある 15%      ・ない 18%      ・分からない 67%		

## 2 単元について

本単元では提案型のプレゼンテーションを行うことを通して、聞き手の立場を想定しながら、双方にメリットのある提案を考え、その提案をまとめる力と、資料を効果的に活用して、説得力のある提案をする力をつけることをめざす。

そのために、生徒にとって一番身近な社会である学校における校則について、自分たちや後輩たちがより良い学校生活を送るためには校則をどう変容させていくと良いかを考え、プレゼンテーションの中で、校長先生や、生徒指導主事に向けて提案する内容や方法を考えるという単元を通した言語活動を設定した。

現在、社会ではこれからの時代には、一部そぐわないであろう校則が取りざたされている。熊本市でも学校改革推進課が「校則・生徒指導の在り方に関わるアンケート」を令和2年の10月に行った。その中でおよそ30%の生徒が「校則の中に必要ないと思うものがある」と答え、80%以上の生徒が「学校全体の校則を生徒が作ったり考えたりする場が必要だ」と答えている。さらに熊本市ではすべての小中学校に一人一台のタブレットが配布された。本校でも12月に全員に配付し使用している。これまでになかった機器を使う中で、新たなルールの設定も必要になるだろう。

また本校では、生徒会で「目安箱」というものを設置している。その中にも多くの校則や校則以外の学校のルールについての意見が寄せられている。本単元ではおよそ自分にとって最も身近なルールの一つである「校則」について、現在の自分たち、そしてこれからの後輩たちがよりよく学びやすい環境になるために提案できることはないかという視点で話し合いを行い、資料や機器を用いて提案させることにした。これは、これまで自分たちが心の中や友人同士で呟いていた意見を、より具体的、論理的に再構築し、プレゼンテーションの相手である他者(=校長・生徒指導主事)に変容を促すという「どうすれば、うまく自分の思いを具体的な形にできるか？」や「どうすれば、説得力ある提案を行うことができるか？」といった国語科で身につけさせたい力を実の場を利用して育む機会とすることを狙ったものである。

生徒たちは人前で自分の意見を明確に筋道立てて話すということをほとんど経験していない。しかしこれからの「Society 5.0」といわれる社会では、様々な社会的課題を周囲の人との協働やデジタル機器を有効に使いながら解決に向かっていかねばならない。今回の単元での学びを契機として、生徒たちが相手のことを慮りながら、単なる「我儘」ではない自分の意見を他者に伝え、より良い状況へと変容させることができる態度を養ってほしい。

## 3 単元の系統

	第1学年	第2学年	第3学年
A 話すこと・聞くこと 表現、共有 (話すこと)	具体例を挙げて伝えよう ・順序立てて話を組み立てる ・聞き取りやすく効果的な話し方をする	説得力のある提案をしよう ・説得力のある話を組み立てる ・資料や機器を活用する	場面に応じて話そう ・目的や相手、時間を意識する ・場の状況や相手の様子に応じて話す
A 話すこと・聞くこと 話し合いの進め方の検討、考えの形成、共有(話し合うこと)	話し合いで理解を深めよう ・体験や考えを出し合う ・相手の考えを受けて話す	話し合いで問題を検討しよう ・テーマを決め、メリットとデメリットを出し合う	話し合いで問題を解決しよう ・論点を整理する ・お互いの考えを生かし合う

本単元に関する 「話すこと・聞くこと」の言葉の力	第2学年における「話すこと・聞くこと」の知識・技能を用いる単元		
	問題意識を持って聞こう	説得力のある提案をしよう	話し合いで問題を検討しよう
i 社会生活の中から話題を設定する			◎
ii 根拠の適切や論理の展開に注意して話す	○	◎	○
iii 資料や機器を活用する		◎	
iv 話し手の考えと比較しながら聞く	◎	○	○
v 互いの立場や考えを尊重しながら話し合う			◎

#### 4 研究の視点に沿った授業の工夫

##### (1) 視点1 学習意欲のサイクルを生み出す「見通しと振り返り」について

「見通し」をもたせる手立てとして、まず、日本一の高校生のプレゼンテーションを視聴させる。そこから「他者に伝わるプレゼンテーションとはどういうものか。」と「そのためにはどんなことができるようになれば良いか。」という「見通し」且つ「評価(ループリック)」を自分で考えさせる。そして、この「見通し」「評価」に沿って実際に授業の中で様々な試行錯誤し、毎回の授業ごとの到達度をタブレットのアンケート機能により確認していく。

##### (2) 視点2 考えを深めるための協働的な学びの場の設定について

(1)で立てた「見通し」を「論の展開・構成」「発表の仕方(音量・表現)」「資料の中身と提示の仕方」の3つの柱に分ける。その3つを班で手分けして考え、試行錯誤し、それぞれの主担当を手伝いながら共有する。プレゼンテーションの練習は毎回動画で撮影し、主担当が振り返ることで更なる学びへとつなげていきたい。

##### (3) 視点3 学びの質を高める「思考のキーワード」について

見通しでは〈比較〉〈分類〉というキーワードを用いることで3つのループリックの柱を立てさせたい。学びや振り返りの中では〈具体〉と〈一般〉を使い分けることを意識させたい。特に「論の展開・構成」の中ではその部分をはっきりさせることで伝わりやすく説得力のある論を組み立てさせたい。また動画を撮影し、前回と〈比較〉することで次の学びへの見通しを立てるサイクルを作り上げたい。

#### 5 単元の学習活動と評価計画

次	時	学 習 活 動	評 価
1	1	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本単元と本時の学習について知る。</li> <li>・説得力のある提案をするための見通しを持つ。</li> <li>説得力ある提案をするためにどうすればよいだろうか？</li> <li>・実際のプレゼンの動画を視聴する。</li> <li>・「論の展開・構成」「発表の仕方(音量・表現)」「資料の中身と提示の仕方」のループリックを作る。</li> <li>・授業の振り返りをする。</li> </ul>	【態①】 【思①】 ループリック 振り返りシート
2	2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本時の学習と目標について知る。</li> <li>・今回の課題(校則について)に対する自分の考えを持つ。</li> <li>・グループとしての提案事項を決定し、それぞれの主担当がこれからの見通しを持つ。</li> <li>校則をどう変える？それは何故？</li> <li>・授業の振り返りをする。</li> </ul>	【態①】 【思②】 【知①】 振り返りシート
3	5 本時 2/3	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本時の学習と目標について知る。</li> <li>・説得力のあるプレゼンのための見通しを持つ。</li> <li>説得力あるプレゼンするにはどうすればよいだろうか？</li> <li>・班でプレゼンの準備と練習をする。</li> <li>・授業の最後に必ず動画を取り、進捗状況や成長を確認する。</li> <li>・授業の振り返りをする。</li> </ul>	【態①】 【思②】 【知②】 振り返りシート
3	6	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本時の学習と目標について知る。</li> <li>・班でプレゼンをする。</li> <li>・他の班のプレゼンを聞き、評価する。</li> <li>説得力ある提案をするためにどうすればよいだろうか？</li> <li>・本単元と授業の振り返りをする。</li> </ul>	【態①】 【思②】 【知②】 振り返りシート

## 6 本時の学習（第5時）

### （1）本時の目標

○説得力のあるプレゼンテーションに必要な材料をそろえることができる。

### （2）本時の展開

過程	生徒の学習活動	形態	教師の指導・評価	備考
導入 (5分)	1 本単元の学習内容について知る。	全体		
展開 (5分)	2 本単元の学習課題を知る。	全体	・ループリックの評価規準もう一度確認させる	タブレット
	<b>課題</b> 自分たちの提案をループリックと照らし合わせながらもう一度確認しよう。			
(10分)	3 「論の展開・構成」「発表の仕方(音量・表現)」「資料の中身と提示の仕方」の3つの柱に分けてもう一度ループリック基準に当てはまっているかを確認する。	班	・机間巡視をしながら、どの部分が評価規準に相当するのかを確認していく。	振り返りシート
(5分)	4 リハーサル動画を撮影する。	班		
	<b>発問</b> 動画を見て他の柱の人たちともう一度比較・検討しよう。			
(15分)	5 気づいたことをメモしながら最後の修正を行う。	班	・ループリックや最初の時間に見た動画（「高校生ビジネスグランプリ・グランプリ受賞動画」「つくばプレコンWEB」）と見比べながら修正していく。	モニター
まとめ (10分)	6 前回の動画と比較し、振り返りフォームに記入する。	個人	<b>〈 評価規準 〉</b> ・ループリックに合わせたプレゼンの材料を作ることができる。 【思①③】／タブレット ・効果的な話し合いの方法について班で具体的に表現することができる。 【思②③】／動画	タブレット 振り返りフォーム

## 7 授業の実際

本授業は「説得力のある提案をしよう(東京書籍)」を基に、実践を行った単元である。単元を通した言語活動として、以下のような課題を設定した。

考えてみよう、次世代の江原中の姿。 ～今変えるべき私たちのルール～

視点①「見通しと振り返り」においては、

- ・「本校の3年生が文化学習発表会で披露したプレゼンテーション『棚替え』」
- ・「つくばプレコンWEB：春日学園義務教育学校8年生によるプレゼンテーション『つくばの街再発見』」
- ・「高校生ビジネスグランプリ：三国丘高等学校によるプレゼンテーション『ビック～安全な蚊除け商品開発ブランド～』」

という同年代の人たちが作った3つのプレゼンテーション(以下プレゼン)を視聴させた。そこから自分たちで「展開」「発表」「資料」の3観点について「どうすればよりよいプレゼンになるか」というループリックを作った。そのループリックを基に「論の展開」「発表の仕方の工夫」「発表資料の工夫」を考えていった。

また、それぞれの動画はQRコード化し、いつでも自身のタブレットで振り返ることができるようにした。

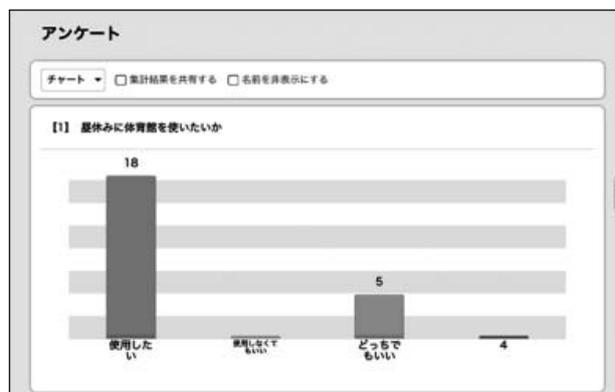
このように3つの動画(モデル)や自分たちで作りに上げたループリック(評価の観点)を先に示しておくことで、自分たちがどういう主張をすべきか、また自分たちプレゼンは対象の行動を変容させる主張であるかという「見通し」や「振り返り」を自分の好きなタイミングで行うことができた。

また、ICT機器(タブレット)で自分の班を撮影し、それを振り返りながらループリックと照らし合わせることで、自分たちの現在地(S～C)が分かり、そこからどうしたらさらに良いものになるのかというのがすぐにわかるようになった。このように「振り返り」と「見通し」が螺旋構造となり、生徒が戸惑い手を止めてしまうということが少なくなった。

視点②「考えを深める協働的な学びの場の設定」について、本実践では班学習でプレゼンを作っていた。班の中で「展開」「発表」「資料」という3観点で担当を決めた。それぞれが担当部分の大枠を作り、それを班員全員でブラッシュアップしていく方法をとった。

自分の得意なものを担当することで「何もしていない人」が少なくなった。また、各時間の最後に班の中で「次までの宿題」をそれぞれが提示し、班の進捗状況を振り返り、次時への見通しも考えさせることができた。

また、説得力を上げるためには「根拠」と「理由」をより丁寧に作り上げていくことが大切である。特に「根拠」を探すにはICT機器が非常に有効であった。WEBから資料を探し出すことはもちろん、ロイロノートのアンケート機能を使い、クラスメートにアンケート調査を行い、その結果を基に資料作りを行う工夫が見られた(【資料6】)。また、根拠の質をさらに高めようと、自分のクラスにとどまらず他のクラスにまでアンケートの対象を拡げる生徒も見られた。



【資料6】タブレットの様々な機能を使い根拠を固めることができた。

さらにスピーチの練習を撮影して班で振り返るときも「展開」「発表」「資料」の担当がそれぞれをチェックし、ルーブリックと照らし合わせながら意見交流をすることで、より活発な意見交換が行われた。（【資料 7, 8】）



【資料 7】小道具を使いより伝わりやすい発表の方法を考えた。



【資料 8】ルーブリック「発表」の S 評価を目指してジェスチャーを取り入れた。

視点③学習者の学びを支える「思考のキーワード」について、自分たちのスピーチとお手本となる 3 つのスピーチを〈比較〉することでルーブリックを作ることができた。また、論の展開を考えるとときに以前授業で学んだ「反対意見を想定して書こう」での学びを駆使し、自分たちの論の〈反証〉を考えることで、より説得力のある論の展開を構成することができた。（【資料 9】）

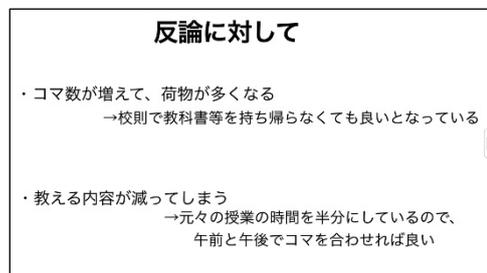
〈具体〉を意識することで、自分たちの意見をより分かりやすく伝えるために、自分たちでアンケートを取ったり、自分たちで実験などの工夫を行ったりすることができた（【資料 10】）。

「思考のキーワード」自体を生徒が意識的に使おうとしたのかは分からないが、振り返りの時に、「自分たちが使った考え方はこのキーワードに当てはまる」という確認をしたので、この単元中はより意識して使うようになったと感じた。

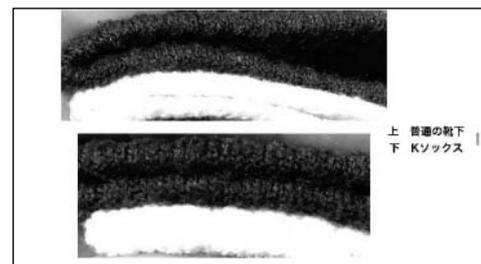
モデルとなる 3 つの動画、ルーブリック、自分たちの動画の 3 点を常に〈比較〉し、めざすものやどうすればさらに良いスピーチになるかを考え続けることができた。

単元を通して生徒たちは何度もモデルとなる動画やルーブリックを見直し、より良いプレゼンとなるよう、学習活動を行うことができた。また、他教科でもタブレットを用いていたこともあり、資料作成はとてもスムーズであった。しかし、タブレットがあるが故に、資料の細部に時間を割いてしまい、肝心の発表の質が少し足りなかったと感じた。

モデルとなる動画には「論の展開」「発表の仕方の工夫」「資料の作成と提示の仕方の工夫」など学ぶことが多いが、何度もお手本を見ることで、どうすればより良いものになるか感覚的に理解していったと感じた。生徒自身が、その感覚を言語化



【資料 9】反論に対する意見を考えることで説得力を高めた。



【資料 10】自分たちで実際に実験や観察を行った。

することはまだ難しいが、これからの単元で継続的に振り返りを行い「思考のキーワード」を含め、生徒の中に形として残せるようにしていきたい。

#### ◇単元終了後の生徒感想より

- 相手の反論を考えて、資料を使って提案することは大切だと思いました。個人的にはジェスチャーを入れることができなかつたことが反省点です。相手の行動を変容させる提案をすることはとても難しかったのでこれからも学んでいきたいです。
- ラベリングやナンバリングをすることでより分かりやすく相手に伝わるのが分かりました。普段の場面でも心がけていきたいです。
- 声の大きさや資料を出すタイミングを班の人ともう少し話し合いをすればよかったなと思いました。
- 対象に納得してもらえるように気持ちを込めた発表をすることが大事だと感じた。説得力のある発表をするためには相手に問いかけて、相手の興味を惹くことが大事だなと思いました。

## IV 研究のまとめ

### 1 成果

- (1) ルーブリックを用いた「見通しと振り返り」を行うことで、学習者自身が、基準や視点をもって学習活動を行うことができた。
- (2) ICT 機器を活用した対話活動を行うことで、領域の特性を維持しながら論理的な学びにつながった。
- (3) 「思考のキーワード」を意識することで「見通しと振り返り」「対話」等の学習活動が活発になった。

実践例1「具体例を挙げて伝えよう」の授業では、単元の見通しを持ち、対象や内容を明確化したことで毎時の学習活動を充実させることができた。また、ルーブリック評価を行うことで、めざす基準が明確になり、生徒は自分のスピーチへの過不足を確かめながら学習を行うことができた。

また論理の「3点セット」を基盤にし、ICT 機器を活用しながら対話活動を行った。それによって協働的な学びの場へとつなげることができた。GIGA スクール構想が進む中で「話すこと・聞くこと」領域の学習ではICT 機器の活用は、主体的で対話的な学びに効果的である。

さらに「思考のキーワード」では特に〈比較〉や〈多面〉という思考を意識させた。それによって、単元の前半と終了時のスピーチの変化を具体的に実感することができていた。これは視点②の「考えを深める協働的な学びの場の設定」にもつながっていった。

公開授業I「説得力のある提案をしよう」の授業では、学習者にとって身近で切実な学習課題を設定したことで、主体的な学びに繋げることができた。また、ルーブリックやモデルとなる動画を活用することによって、自分たちがめざす姿をイメージしながら学習を進めることができた。

また、本単元ではプレゼンの対象である校長先生や生徒指導主事の先生にも協力をいただき、プレゼンがより自分たちの生活に直結する、という実感を生むことができた。さらに、自分たちの主張に説得力を生み出そうと〈反証〉〈批判〉という

思考を用いる生徒も見られた。具体的には「指定靴下から白・黒・紺の靴下にするのはどうか」というプレゼンをした班の主張が挙げられる。反対意見の「指定靴下によって統一感が出る」という主張を想定し、「式典の場合は統一したらどうか」「日常生活において靴下で統一感を出す必要があるのか」「汚れが目立たない点では色は選択制の方が良いのではないか」などの意見を考えていた。

## 2 課題

- (1) 学習者にとって切実感のある学習課題の設定が難しい。
- (2) 学習活動を行う際に「内容や構成はどうか」「根拠の量・質は妥当であるか」などの視点が不十分であった。ループリックや見通し・振り返りを行う際に、学習者への意識付けが必要である。
- (3) 「3点セット」を基盤とした対話活動に加え、「思考のキーワード」を意識した対話活動を行っていくことで学びの深まりが期待できる。対話活動のレベルアップが課題である。
- (4) 〈比較〉や〈多面〉といった「思考のキーワード」を含む「学習用語」の定着が不十分であった。

### 〈参考文献〉

- ・文部科学省：中学校学習指導要領解説国語編，2018
- ・奈須正裕「『資質・能力』と学びのメカニズム」，東洋館出版社，2017
- ・鶴田清司 河野順子「論理的思考力・表現力を育てる言語活動のデザイン 中学校編」，明治図書，2014
- ・熊本大学教育学部附属中学校「教えたいたいの『考え方』です。—思考力を活かす・広げる・深める授業改善」，学事出版，2014

## 【話すこと・聞くこと部会】 助言者より

熊本大学准教授 北川 雅浩

### 1 本年度の実践の意義・価値

本年度、提案された授業は、まさに ICT を活用して自立的にプレゼンテーションのスキルを高める学習者の育成が目指された実践であった。現在、スピーチやプレゼンテーションの学習において、タブレットによる動画撮影・視聴の機能を使って、自身のふるまいを客観的に捉えて改善の材料とするという手立ては多く取り入れられるようになってきた。確かにこの方法は、メタ認知的活動となるため、学習者の発表力を高める契機となることが多い。しかし実際には、動画撮影によるセルフモニタリングだけでは、自立的にプレゼンテーションのスキルを高める学習者を育成することは難しい。それを実現するためには、よりよく伝えたいという学習者の熱意や意欲といった情動が起点となるからであり、セルフモニタリングするうえでの視点を学習者が明確にもっている必要があるからである。そのうえで、話すこと・聞くこと部会が開発・実践した以下の方法はとても参考になる。

#### (1) 「校則の見直しを提案する」というオーセンティックな学び

校則の見直しといった現在、実際に議論が求められている題材を活用し、校長先生等に提案するというオーセンティックな学びを実現している。このような学びでは、自ずと相手や目的、条件への意識が明確となり、学習者の熱意が高まることが期待できる。本単元でも、よりよく伝えたい、説得したいという学習者の願いがプレゼンテーションを高めるための学びの原動力となっていた。

#### (2) 教師と学習者の協働によるループリックの作成・活用

本単元では、教師が参考例として示したプレゼンテーション動画をもとに、教師と学習者とでループリックを作成している。学習者は動画を見ることで具体的なイメージをもちながら基準を設定することができたであろうし、教師としても提示する動画の選択を通して指導事項をループリックに含めやすくなったであろう。ループリックの作成を通した目指す姿の共有という点で、示唆に富んだ方法である。

#### (3) 必要な場面で何度でも見直すことができる参考動画

ループリックの作成を通してイメージを共有したとしても、文言だけでは具体的に思い起こせないという学習者もいるだろう。そういった学習者にとって、もととなった動画をいつでも参照できる環境は有効な支援となる。また、必要な時に見直すことができるため、練習の中で出された課題や迷いを解決する際に主体的に活用されたようである。ICT の利点が発揮され、自立的な学びを支えていたと言えよう。次年度以降は、校内の先輩の姿を参考動画として活用し、学びをつないでいきたい。

### 2 今後の「話すこと・聞くこと」への期待 ―言語能力育成を中核としたカリキュラムマネジメント―

#### (1) 他教科等での関連学習の充実

本単元のように「話すこと・聞くこと」領域の指導で身に付けたプレゼンテーションスキルは、当該の提案がうまくいくということだけでなく、他教科等の学習で生かされることが求められる。言語能力育成の要である国語科の教員として、指導したことが他教科等での発表の向上につながったかを確認したり、他教科等での発表の様子を録画してもらって国語科の学習材としたりといった取り組みが今後さらに求められてくると言えよう。まずは、プレゼンテーションスキルを高めるためにこんな実践をしましたという情報を、国語科から他教科の教員に発信していくことから始めてはいかがだろうか。

#### (2) 話し合い・討論の指導の充実

今回の実践を通して、スピーチやプレゼンテーションといった言語活動における自立的な学習者を育てる指導法は開発されてきた。では、話し合いや討論といったダイアログ型コミュニケーションの学習では、何が生かして、何は新たに考えていく必要があるだろうか。学びの自立を促すためには、自分たちが小学校から学んできた話し合いについての方略的知識を呼び起こし、多様な状況で用いることによって有効性や条件を吟味・検討するといったメタ認知的活動が重要となるだろう。また、自分たちで建設的に議論するためには、定められた進め方で話し合うだけでなく、議論展開への意識を高め、目的や状況に応じて計画・調整できるようにすることも大切である。そのために、今回提案したタブレットやループリックの活用はどのように生かせるだろうか。今後の実践開発を期待したい。

Ⅲ 各部会研究報告及び学習指導案

# 「書くこと」部会



# 【「書くこと」部会】 研究報告

## I 研究主題との関わり

子どもたちが社会で活躍するところには、一人一人が持続可能な社会の担い手として、質的な豊かさを伴った個人と社会の成長につながる新たな価値を生み出していくことが期待されている。そんな中、新学習指導要領総則第1章第3の1の(2)には「国語科を要としつつ各教科等の特質に応じて言語活動を充実すること」と書かれている。つまり国語科は全ての教科等における資質・能力の育成や学習の基盤を担っていることになる。

生徒たちの実態として、日記ひとつとっても書いていることが伝わってこず、何を伝えようとしているのか、詳しく尋ねなければならぬことが多々ある。SNSの普及により、省略した言葉を多用したり、絵文字に頼ったりと場や相手に応じた適切な言葉の使い方に課題を持つ生徒も増えてきているように感じる。

生徒がこれから社会生活の中で書いていく文章の種類は多岐にわたる。伝えたい相手や目的に合わせて言葉を選んだり、表現の方法を工夫したり、文章構成を使い分けたりしていかなければならない。読み手に伝わりやすく、また読み手の心を動かすような文章を書くことができる力はこれからも求められるものである。

このようなことをふまえて「書くこと」部会が生徒につけたい力は「簡潔で伝わりやすい文章を書く力」「読み手の心を動かすような表現豊かな文章を書く力」である。簡潔で伝わりやすい文章を書くためには説明的文章を読むときの読み方として身につけた力を活かすことができる。読み手の心を動かすような文章を書くためには文学的文章で学んだ力を役立てることができる。既有知識を生かしながら自分で見通しを持ち、協働的な学びの中で生きて働く力をつける。また、どのような思考スキルを使えば、伝える文章を書くことができるかを考えさせることが実生活で役に立つことにつながるのではないかと考える。

そこで、本部会では社会生活につながる力をつけるための見通しや振り返りができるような学習シート等の工夫や協働的に学ぶための学習活動の工夫を中心に研究と実践を行った。

## II 研究の視点

### 1 視点① 学習意欲のサイクルを生み出す「見通しと振り返り」

それぞれの学習課題について、どのような考え方をすればよいか、使える既有知識はないかなどの見通し(計画)を持たせる。実際に学習活動してみて、自分が見通した内容(計画)でうまくいったのか、改善すべき点はなかったかという視点をもって振り返らせる。このような段階まで高めていくことがめざすべきところである。

「見通しと振り返り」については、以下の視点②「協働的な学びの場の設定」や視点③「思考のキーワード」を効果的に活用しながら進めていきたい。

### 2 視点② 考えを深めるための協働的な学びの場の設定

中教審答申に「他者との協働につながる『言葉を通じて伝えあう力』が育成されることが必要だ」とある。そのため、適宜班活動やペア学習を取り入れていく必要があるが、その場面で言葉を駆使して伝え合うことを大事にするために以下の点に留意したい。

- ・学習計画を立てる段階から他者と協働する活動を取り入れる。
- ・書くための材料集め、推敲など様々な学習過程で協働的な学びの場を設定する。

- ・ペアや班で協働的な学びを行う場合、他者との意見交換が中心になってくる。そのため、質の高い学びにするために、互いの考えていることが明確に相手に伝わるように、「根拠・理由・主張の3点セット」を用いた発言の仕方を意識させる。
- ・ペアや班活動では、予め個人で思考する時間を確保する。自分の考えを持ってなかった生徒も「分からなかったことが分かるようになった」と実感できるような学びの場を設定する。
- ・生徒のメタ認知を促すための活動を設定する。

### 3 視点③ 学習者の学びを支える「思考のキーワード」

どのような考え方をすれば、解決につながるのかということを知るために、繰り返し学習していくことが必要になる。「思考のキーワード」を生徒に意識させるために、以下の点に留意したい。

- ・「思考のキーワード」を一覧表にして、黒板に掲示したりノートに貼らせたりなどして、常に生徒の目に触れるような工夫をする。
- ・設定した課題を解決するためにどの思考スキルを必要としているかを生徒に考えさせ、見通しをもたせる活動を取り入れる。
- ・話し合いの道具として思考スキルを活用する。
- ・振り返りの中で「思考のキーワード」を用いて整理し、日常生活で活用できる力につなげていく。

## III 研究の実際

### 1 実践① 「主張文 推論と対話で考えを広める」(三省堂2年) ねらい

どのような「主張文」を書けば自分の主張がより伝わるのかを考えさせる。

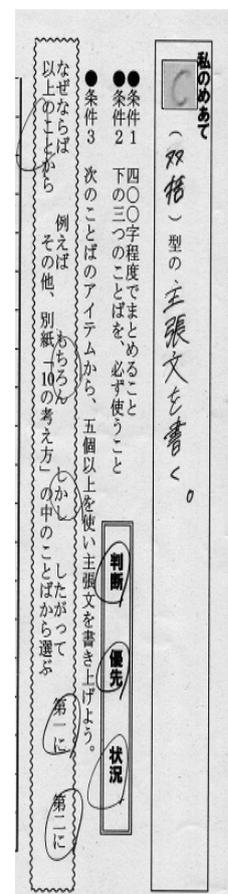
#### (1) 指導の実際

##### i 視点① 学習意欲のサイクルを生み出す「見通しと振り返り」

実際の活動では、まず自分が書きたい「主張文」の型を考えさせ、各自の課題を設定させた(【資料1】)。本実践では、生徒に 意欲的に主張文を書かせるために、以下のA・B・Cの課題の中から一つを選択して書くという方法をとった。

- A キーワードを使いながら、「頭括型」の主張文を書くことができる。
- B キーワードを使いながら、「尾括型」の主張文を書くことができる。
- C キーワードを使いながら、「双括型」の主張文を書くことができる。

その結果、出来上がった主張文を見てみると、それぞれの生徒が書いた内容が課題から大きく外れるということがほとんどなかった。「自分も頭括型で同じような内容が書けた。」とか「双括型でまとめる方が、最初と最後に結論を入れられるから内容が伝わりやすいということがわかってよかった。」「自分が書いた主張文を、班のみんながよく書けているねと言ってくれてうれしかった。」などの感想を聞くことができ、課題を



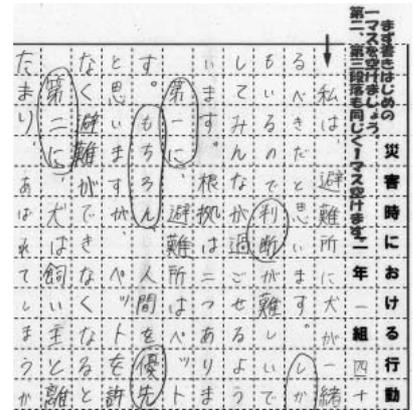
【資料1】  
各自で課題を設定したワークシート

3つの選択制にした成果が見られた。

ii 視点② 考えを深めるための協働的な学びの場の設定

「主張文」を班で読み合い、感想を述べたり、交流し合ったりすることで、達成感や、やる気、意欲を感じた生徒が多く、こうした「振り返り」の活動の重要性を再確認できた。

さらに、スクリーンに拡大した友達の主張文を見せることで、表現の工夫点や間違いやすい接続詞の使い方などについて確認し合えたことも成果と言える。また、ポイントを明確にした「振り返りシート」を毎時間活用したことで、勉強のモデルステップとなり、1時間ごとに達成したことを自分で確認しながら学習を進めることができた。



協働的な学びを通して  
推敲した作品

iii 視点③ 学びの質を高める「思考のキーワード」

本実践では、一人一人の生徒に、どんな文章を書き上げるかということを経験に考えさせることで「見通し」を持たせ、実際に書いていく際には、キーワードを使う約束で主張文を書くようにさせた。「思考のキーワード」に出ている言葉を「アイテム」と呼び、5つ以上のアイテムを使って書こうというルールを決めた。ゲーム的感覚を持たせて主張文を書かせるという工夫をしたことで書くことに苦手意識をもつ生徒たちの意欲も高まった。また、使ったアイテムを、○や□で囲むというルールを決めて取り組ませた。そのことで、学習者にとっては文章を論理的に組み立てる方法を学び、楽しさにつながった。また、授業のまとめでは、班で「振り返り」(【資料2】)をし、それを各個人にフィードバックさせることで学びを深めるというステップを大事にした。

【主張文 振り返りシート】 \*最後に集めて評価します。 組番( )

**学習の目標**  
 ◎ 自分の立場や考えとともに、それを支える事実や事柄を明らかにして、文章の構成を考える。  
 ◎ 書いた文章を読み合い、互いの主張や表現の仕方について意見を交流して、自分の考えを広げる。

日付	内容	ポイント	自己評価	分かったこと・感想
① 7/17	・場面と課題の把握 ・行動の推論 ・対話	推論	A B C D	「自分はどう思う」と思っている自分の意見の中だけの世界だということ。対話を通して、倍以上の考え方や、感じ方がある。相手を全然理解できなかった。
② 7/21	・立場の決定 ・別の立場の意見との対話	対話	A B C D	相手の立場を考えた言葉で意見を述べた。対話を通して、相手の立場を考えた言葉で意見を述べた。対話を通して、相手の立場を考えた言葉で意見を述べた。
③ 7/27	・主張文の条件の確認 ・主張文の型 ・キーワード(接続詞など)	・構成の型 ・キーワード(接続詞など)	A B C D	今回の議論のキーワードと構文の理解が2月17日から2月21日まで大変な流れで進んでいくことがわかった。今回も主張文を書くことに思っている。私は自分の主張文を自分の中で書く。キーワードは自分の主張文の中で使う。接続詞は自分の主張文の中で使う。接続詞は自分の主張文の中で使う。
④ 8/4	・主張文を書く	三角ロジック	A B C D	今回は自分の考えを三角ロジックにまとめた。これは自分自身で考えている。自分の考えを三角ロジックにまとめた。これは自分自身で考えている。自分の考えを三角ロジックにまとめた。これは自分自身で考えている。
⑤ 8/4	・交流 ・感想	・構成の型 ・キーワード ・説得力	A B C D	自分の考えを三角ロジックにまとめた。これは自分自身で考えている。自分の考えを三角ロジックにまとめた。これは自分自身で考えている。自分の考えを三角ロジックにまとめた。これは自分自身で考えている。

★学習を振り返ろう  
 「主張文」を書く授業を通して、大切だと思ったことや学んだこと、これからの生活に活かしていきたいことを書きましよう。

一番楽しかったのは、互いの意見を交換し合うこと。自分の立場と相手の立場では、意見や見方が違うことも多い。相手の立場を考えた言葉で意見を述べた。対話を通して、相手の立場を考えた言葉で意見を述べた。対話を通して、相手の立場を考えた言葉で意見を述べた。

【資料2】生徒の振り返りシート

## (2) 授業のまとめ

生徒は、1年時に説明文「玄関扉」（三省堂1年）の単元で「三角ロジック」について学び、「主張」「事実」「理由づけ」の3つを区別することによって、論理的に文章を読み解くことができることを学習している。この「三角ロジック」の学習の中で、生徒は実際に短い主張文を書くことを経験している。本実践となる2年時は、人々の行動について、そのもとになった考えや判断を推論し、班で対話をし、交流した上で、自分の主張文を書くという学習をした。この経験をふまえ、3年時では「小論文」や「批評文」を書く。「小論文」の単元では、論理の展開を工夫して、説得力をもたせる文章を書いていく。その際に生徒は、課題に対する自分の考えを書くことを経験する。本実践を含めた1・2年時での「書くこと」の学習のまとめとなるような実践ができるものと考えられる。



協働的な学びの場面

ただ、本実践では、新型コロナウイルス感染拡大防止の面から、安全性を保つために距離をとった中での小声での班活動となった。以前の授業のように机をつけた状態で行う班活動に戻すことができる日を望むばかりである。

## 2 実践②「思いや感覚に向き合い、考えを確かなものに 意見文」（三省堂1年） ねらい

「書くこと」に対して苦手意識をもっている生徒を含めた全ての生徒が意欲的に学習に取り組むことができ、そして自分自身が授業を通して「何を学ぶのか」あるいは「何を学んだのか」を実感できるような振り返りシートの活用をめざす。

### (1) 授業の実際

本実践では、書くことの実践として意見文に取り組んだ。その際に、「玄関扉」で学習をした「三角ロジック」（「主張」「事実」「理由づけ」）を踏まえて文章の構成を行い、より論理的で説得力のある文章となるようにした。また、課題設定に関しても、生徒自身の生活に関連させ、より意欲をもって取り組めるよう工夫を行った。

本実践は、「思いや感覚に向き合い、考えを確かなものに 意見文」という題材を4時間扱いで行ったものである。具体的な4時間の流れは以下の通りである。

- 1 意見文の書き方を知り、共通テーマについて、自分の考えをまとめよう。
- 2 「問い」と「対話」から自分の意見を書こう。
- 3 「三角ロジック」を使って意見文を組み立てよう。
- 4 自分たちの生活を見直した意見文を書こう。

授業の際に留意したことは、「意欲的に学習に取り組める」、「協働的な学びの場面の設定」、「『思考のキーワード』を用いた見通しと振り返り」である。

#### i 視点① 学習意欲のサイクルを生み出す「見通しと振り返り」

書くことに対して苦手意識をもっている生徒が意欲的に学習に取り組めるように、自分自身の生活とも大きく関連している、校内の「学習・生活に関するアンケート」の結果を資料として提示し、その資料から読み取ったことをもとに「この学年の良いところは〇〇だ！」もしくは、「□□を頑張るともっと良

くなる！」という課題設定のもとに意見文を書かせた。これにより、見通しをもって意見文を書く活動を行うことをねらった。さらに、普段の生活と関連付けて考えることができる上に、意見文として書いた内容が今後の自身の実生活に結びつくことから、生徒の意欲の向上にもつながった。また、自分たちのマイナスな面ばかりに目を向けないように課題の設定を行ったことも工夫の一つである。



書き進める生徒の様子

さらに、アンケート結果のグラフを読み取る活動を取り入れたことで、資料の読み取りに対する補足的な学習も行うことができた。

## ii 視点② 考えを深めるための協働的な学びの場の設定

協働的な学びに向かうためには、まずは個の考えを深めておく必要がある。そのための書くことが苦手な生徒に対する手立てとしては、ヒントカードなどを通して例文の提示が有効である。本実践ではヒントカードを生徒が使用する原稿用紙の裏面に予め印刷した。そうすることで、支援の必要な生徒が席を立つことなく作文するための手立てを随時確認することができ、「ヒントが欲しいけれど周りの目が気になる」という生徒も安心して学習することができた。

また、書くための手立てとして協働的な学びを取り入れるために、下書きの段階で4人班のグループ内で原稿用紙を回し読みし、構成に関して気付いたことや、参考にしたいことを付箋に書き出して互いに貼るという活動を行った。その結果、他者の文章を読み、自身の意見文を改善することにつながった。「読みやすい段落構成になっていることを参考にしたい」という生徒の言葉も挙がっていた。また、付箋を通して他者からコメントをもらうことで、誰かに自分の文章を読まれるという意識が高まり、自己有用感を高めることにもつながった。

## iii 視点① 学習意欲のサイクルを生み出す「見通しと振り返り」

### 視点③ 学びの質を高める「思考のキーワード」

本実践では、生徒に「何を学ぶのか」あるいは「何を学んだのか」の実感をもたせるために、振り返りシート(【資料3】)を活用して学習の見通しをもたせ、生徒自身の言葉で振り返りを記入させた。その際に、「思考のキーワード」を生徒に提示し、その時間の授業においてどのような考え方を用いたか、ということを意識させ、思考の可視化を図った。

生徒の振り返りシートによると、授業の振り返りの際に「考えを書くときは〈比較〉して考えると書きやすいことがわかった」「自分の体験したことや、昔と今との違いを書くと、わかりやすくなり、読みやすくなる」など、授業において〈比較〉をして考えを広げ、自分の既存の知識や体験と〈関連〉をさせ、そこから〈類推〉を行う過程をまとめる様子が見られた。「思考のキーワード」を用いて、学習の振り返りを行い、自分自身の学習の過程を可視化し、自覚することによって、次の学びへとつながる学習のツールとして活かすことができるように思われる。

以上のように、「思考のキーワード」を用いた振り返りシートの取り組みは、学習者が今後新たな課題に出会った際に、既存の知識を生かしながら課題を解決していく力を育む上で有効な取組であるように感じた。

国語科 振り返りシート  
 (一)年(二)組(四)番

書くこと「意見文」教P184、187

学習目標

☆日常生活の中から課題を決め、「問い」と「対話」によって自分の考えをまとめよう。

○事実や体験から導き出した自分の考えを、根拠を明確にして書く。

つきたい力

○「問い」と「対話」によって考えをまとめる力

○「三角ロジック」を使って、根拠が明確な文章構成を考える

学習日	めあて(学習内容)	振り返り(気づき・どのようにわかったか・自分の考えがどう変わったか・もつと知りたいこと・疑問等)
5/9 例	<p>①意見文の書き方を知り、共通テーマについて、自分の考えをまとめる</p> <p>②「問い」と「対話」から自分の意見を一「二文」で書くこと</p>	<p>私は反対だったけど、むしろ君の意見でさうと考える方が良かったです。</p>
10/21	<p>①意見文の書き方を知り、共通テーマについて、自分の考えをまとめる</p> <p>②「問い」と「対話」から自分の意見を一「二文」で書くこと</p>	<p>共感したことをみつけると、自分にどうなのかわかるとか、かきやすくなる。ここから自分の意見を考えることができた。</p>
10/23	<p>③「三角ロジック」を使って意見文を組み立てよう</p> <p>④自分の意見をしっかりと、図をかきやすさ。</p>	<p>この間、書いた意見文などをと、もとの図をかくことができた。考えをかくときは比較して考えるとききやすさ、ことがわかった。</p>
10/29,28	<p>④ 300、400字で、自分たちの生活を正直に意見文を書くこと。</p> <p>⑤ 自分の体験したことや、昔と今のちがいを書くこと、わかりやすく、読みやすくすること。</p>	<p>れいらさんは、昔と今の感じ、方、のちがいを書いていて、私も共感することができたし、とてもいい書き方だと思った。この書き方は、はしたことがなかったの、次やってみよう。</p>

【資料3】生徒の振り返りシート

3 実践③ 「短歌から始まる物語」 (東京書籍2年)

ねらい

示されたゴールに向かって自分で計画を立て、調整しながら、目標を達成する力をつける

(1) 指導の実際

【物語を創作し、1冊の本を仕上げよう】

i 視点① 学習意欲のサイクルを生み出す「見通しと振り返り」

まず、単元の学習課題と学習時間を示した。ゴールにたどりつくためには何をすべきか、また、それを達成するためには何時間必要かという学習計画を自分たちで立てた。その中で、視点②「協働的な学びの場」にも関わるが、どのような活動が考えられるか、班で意見を出し合いながら自分の計画の参考にした。また、困り感を持つ生徒が参考にできるように物語を創作するうえで必要な活動をまとめた資料も配布した。実際に活動に入ってから毎時間、計画を見直したり修正を加えたりするなど、振り返りながら活動を行った。また、振り返りをする際も、これからの活動につなげられるように、1時間の感想や自分の活動の反省に終わらないように、毎時間「学んだこと、身につけたこと」と「こんなときに役立てたい」という視点で振り返りを行った(【資料4】)。

2/19 (水)	2/28 (火)	3/7 (月)	3/14 (金)	3/23 (木)	3/30 (月)	4/7 (金)	日付
① 読書会をする	⑥ 推敲・仕上げ	③ 本を書く	④ 本を書く	③ フロントを仕上げる	② 設定(三要素・ジャンル)を決める	① 学習計画を立てる	学習活動
4	4	4	4	2	3	4	評価
勉強になりました。	読書会が楽しかった。先生の話が面白かった。自分も頑張りたい。	先生の話が面白かった。自分も頑張りたい。	先生の話が面白かった。自分も頑張りたい。	先生の話が面白かった。自分も頑張りたい。	先生の話が面白かった。自分も頑張りたい。	先生の話が面白かった。自分も頑張りたい。	先生の話が面白かった。自分も頑張りたい。
先生の話が面白かった。自分も頑張りたい。	先生の話が面白かった。自分も頑張りたい。	先生の話が面白かった。自分も頑張りたい。	先生の話が面白かった。自分も頑張りたい。	先生の話が面白かった。自分も頑張りたい。	先生の話が面白かった。自分も頑張りたい。	先生の話が面白かった。自分も頑張りたい。	先生の話が面白かった。自分も頑張りたい。

【資料4】学習計画を自ら立てた学習シート

ii 視点② 考えを深めるための協働的な学びの場の設定

視点①でも触れたように、計画段階で互いの計画を参考にしたりアドバイスをしたりする時間を確保した。一人では計画が難しい生徒も大きな見通しをもちながら、活動を進めることができた。物語作成の段階でも、少しずつ周りの友達に読んでもらったり、訂正箇所がないかどうか指摘してもらったりと、積極的にアドバイスをもらおうとする姿が見られた。これまで文学的文章を読む活動で学んだ表現の工夫などを生かして、比喩表現についてアドバイスをすることもあった。系統立てて指導を継続していくことの意義を感じた。

(2) 授業のまとめ

本実践は、3年間の学習をとおして、段階的に力をつけていけるようにするための2段階目の実践である。物語を完成させて、1冊の本の形に仕上げるという活動なので、ゴールもイメージしやすく、やらなければならないことも明らかだったので、計画は立てやすかったように思う。自分の学びを的確に振り返り、次は確実に成長が見られるような活動をしていくには、積み重ねをしていくしかないと感じている。

協働的な学びの場の設定については、一人での活動が難しい生徒にとっては有効に設定できたと思う。生徒全員にとって有用感のある、協働的な学びの場としてどのようなものが考えられるか、研究をしていく必要がある。

また、本実践において視点③「思考のキーワード」の活用を意識させることが十分にできなかった。これも1年時から、生徒の身近な使える言葉として位置付けて、国語科の授業に限らず、さまざまな場面で活用できるように定着させる活動を設定していかなければならない。

## 【書くこと部会】第3学年国語科学習指導案

(現代の国語3 三省堂 p 142～147「批評文 観察や分析をとおして、判断する」)

授業者 嘉島町立嘉島中学校 教諭 山田修平

### 1 単元構想

 <b>社会生活での理想の姿</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>社会生活における様々な物事や事柄について、客観性や信頼性のある情報を取捨選択し、情報の発信者として責任のある表現を心掛けることができる。</li> <li>目的や意図に応じて、論理の展開を考えることで、様々な考えをもつ多様な読み手を説得できる文章を書くことができる。</li> </ul>																																											
<b>単元名</b>	<b>批評文 ～観察や分析をとおして、判断する～</b>																																											
<b>本単元でめざす子どもの姿</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>対象を観察し、分析したことや話し合ったことを基に、対象について自分なりの判断を下し、自分の考えや根拠、理由付けなど明確に示しながら批評文を書いている。</li> </ul>																																											
<b>単元の評価規準</b>	<b>知識・技能</b>	<b>思考・判断・表現</b>	<b>主体的に学習に取り組む態度</b>																																									
	①文章の種類とその特徴について理解を深めている。(1)ウ ②具体と抽象など、情報と情報との関係について理解を深めている。(2)ア	①「書くこと」において、目的や意図に応じて社会生活の中から題材を決め、集めた材料の客観性や信頼性を確認し、伝えたいことを明確にしている。(B(1)ア) ②「書くこと」において、多様な読み手を説得できるように論理の展開などを考えて、文章の構成を工夫している。(B(1)イ)	①学習の見通しをもち、積極的に対象を分析し、自分の考えや根拠などを批評文にまとめようとしている。																																									
<b>単元を通した言語活動</b>																																												
<b>新型コロナウイルスの感染が収束していくのか、再び拡大していくのか分からない今、校内に掲示するポスターとしてどちらが適切かを判断し、批評文を書こう。</b>																																												
 <b>学習前の姿(生徒の実態)</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>1, 2年時に三角ロジックを用いた学習を行っているが、主張を支える根拠と理由付けの妥当性や信頼性を吟味することには至っていない。</li> <li>本単元を学習するにあたって身に付けておくべき基礎基本の定着状況(%)</li> </ul> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse; text-align: center;"> <thead> <tr> <th style="width: 40%;">調査内容</th> <th style="width: 10%;">正答</th> <th style="width: 10%;">ほぼ正答</th> <th style="width: 10%;">誤答</th> <th style="width: 10%;">無答</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>3段落構成で文章を書くことができる。</td> <td>51.4</td> <td>8.1</td> <td>21.6</td> <td>18.9</td> </tr> <tr> <td>自分の立場を明確に書くことができる。</td> <td>78.4</td> <td>0</td> <td>2.7</td> <td>18.9</td> </tr> <tr> <td>自分の立場の理由を書くことができる。</td> <td>29.7</td> <td>43.2</td> <td>8.1</td> <td>18.9</td> </tr> </tbody> </table> <p style="text-align: right;">(令和2年度標準学力調査より)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>本単元の学習に関する意識の状況(%)</li> </ul> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse; text-align: center;"> <thead> <tr> <th style="width: 40%;">調査内容</th> <th style="width: 10%;">よく</th> <th style="width: 10%;">まあまあ</th> <th style="width: 10%;">あまり</th> <th style="width: 10%;">ない</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>読み手を意識し構成を工夫できる。</td> <td>26.8</td> <td>36.9</td> <td>27.6</td> <td>8.7</td> </tr> <tr> <td>主張、根拠、理由付けを明確に書ける。</td> <td>12.3</td> <td>26.7</td> <td>51.4</td> <td>9.6</td> </tr> <tr> <td>対話で考えを深めたり広げたりできる。</td> <td>32.4</td> <td>52.9</td> <td>14.7</td> <td>0</td> </tr> </tbody> </table> <p style="text-align: right;">(生徒アンケートより)</p>				調査内容	正答	ほぼ正答	誤答	無答	3段落構成で文章を書くことができる。	51.4	8.1	21.6	18.9	自分の立場を明確に書くことができる。	78.4	0	2.7	18.9	自分の立場の理由を書くことができる。	29.7	43.2	8.1	18.9	調査内容	よく	まあまあ	あまり	ない	読み手を意識し構成を工夫できる。	26.8	36.9	27.6	8.7	主張、根拠、理由付けを明確に書ける。	12.3	26.7	51.4	9.6	対話で考えを深めたり広げたりできる。	32.4	52.9	14.7	0
調査内容	正答	ほぼ正答	誤答	無答																																								
3段落構成で文章を書くことができる。	51.4	8.1	21.6	18.9																																								
自分の立場を明確に書くことができる。	78.4	0	2.7	18.9																																								
自分の立場の理由を書くことができる。	29.7	43.2	8.1	18.9																																								
調査内容	よく	まあまあ	あまり	ない																																								
読み手を意識し構成を工夫できる。	26.8	36.9	27.6	8.7																																								
主張、根拠、理由付けを明確に書ける。	12.3	26.7	51.4	9.6																																								
対話で考えを深めたり広げたりできる。	32.4	52.9	14.7	0																																								

## 2 単元について

本単元では、社会生活の様々な事物や事柄について、分析したことや話し合った内容を基に、自分なりの判断を下し、結論や根拠、理由付けなどを明確に示しながら文章を書く力を身に付けることをめざす。

そのために「今後、感染が収束していくのか、再び拡大していくのか分からない今、校内に掲示するポスターとしてどちらが適切かを判断し、批評文を書こう」という単元を通した学習課題を設定した。

批評とは、対象とする事柄について、そのもののよさや特性、価値などについて論じたり、評価したりすることである。中学3年生となると自分自身の関心事や日常の身のまわりの出来事だけでなく、社会的な題材に目を向けることが求められている。本単元では批評の対象として、違う視点から新型コロナウイルスの感染拡大防止を呼びかける2つのポスターを取り扱う。導入では、生徒に「今後、感染が収束していくのか、再び拡大していくのか分からない今、校内に掲示するポスターとしてどちらがよいのだろうか」という問いをもたせ、学習をスタートさせる。次に、ポスターの観察・分析や、友達との対話を通して、集めた材料の客観性や信頼性を吟味しながら取捨選択し、生徒一人一人が自分の考えを明確にもてるようにしていく。さらに、批評文という形式を理解し、多様な読み手を説得するための論理の展開や構成について検討し、文章の記述につなげていきたい。

こうした学びの経験や積み重ねが、将来、社会生活における様々な物事や事柄について、自分の考えを論理的に伝える能力や情報の発信者として責任ある表現を心掛け、他者と協働してよりよい社会生活を営もうとする資質の育成に資すると考えている。

## 3 単元の系統

	第1学年	第2学年	第3学年
B書くこと 構成の検討	<p>目的や相手に応じて、情報を編集する 行事案内リーフレット</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>目的と相手を明確にわかりやすく構成する</li> </ul> <p>多角的な視点で作品を読み解く 鑑賞文</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>捉え方や根拠の明確さなどについて交流する</li> </ul>	<p>推論と対話で考えを広げる 主張文</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>自分の立場や考えと事実や事柄を明らかにして、構成を工夫する</li> <li>主張や表現の仕方について意見を交流する</li> </ul>	<p>観察や分析をとおして、判断する 批評文</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>社会生活の中から題材を決め、集めた材料の客観性や信頼性を確認し、伝えたいことを明確にする。</li> <li>論理展開が明確な文章構成を工夫する</li> </ul>

本単元に関する 「書くこと」の言葉の力	第3学年における「書くこと」の知識・技能を用いる単元		
	論理の展開を工夫して、説得力をもたせる 小論文	観察や分析をとおして、判断する 批評文	中学校生活を振り返って 名言集
i 社会生活の中から話題を決め、集めた材料の客観性や信頼性を確認する	○	◎	
ii 論理の展開や文章の構成を工夫する	◎	◎	
iii 表現の仕方を考えたり、資料を適切に引用したりする	◎		
iv 目的や意図に応じた表現になっているかを確かめる		○	◎
v 読み手からの助言などを踏まえ、文章の良い点や改善点を見いだす		○	◎

#### 4 研究の視点に沿った授業の工夫

##### (1) 視点① 学習意欲のサイクルを生み出す「見通しと振り返り」について

「見通し」をもたせる手立てとして、まず批評文のモデルを提示し、生徒にこれからのような文章を書くのかのイメージをもたせる。次に、批評文を書く題材とポイントを確認することで、生徒一人一人により具体的な学習の見通しをもたせる。「振り返り」については、単元を通した「振り返りシート」に「授業で学んだこと」や「自分の学び方がどうであったか」「難しかったことや課題として残ったこと」を記入させる。また、単元の最後に学習全体を振り返り、「本単元の学習が今後の学校生活や社会生活のどのような場面で役に立ちそうか」について考えさせることで、生徒一人一人の学びを今後につなげたい。

##### (2) 視点② 考えを深めるための協働的な学びの場の設定について

生徒の協働的な学び合いとして、同じポスターを選んでいる生徒同士で交流・検討する場を設定する。その際、グループごとにどのような話し合いをしたのかを可視化し、考えを深めるツールとしてマトリックスを活用させる。また、単元の途中で立場を変えないという決まりを設けることで、最初に選んだポスターにこだわってそのよさや価値についての考えを深めさせ、記述につなげていく。

##### (3) 視点③ 学びの質を高める「思考のキーワード」について

「思考のキーワード」のうち、本単元では〈比較〉を中心に活用する。2つのポスターを〈比較〉し、共通点や相違点、それぞれのポスターのよさや価値を整理する中で書く材料を集めさせたい。また、〈比較〉以外の考え方についても、協働的な学び合いの場や振り返りの場面で活用された項目があれば適宜全体に紹介し、今後国語の学習を進める際の学習用語として認識させたい。

#### 5 単元の学習活動と評価計画

次	時	学 習 活 動	評 価
1	1	○「批評」について知る。 ○単元を通した課題について知り、批評する前の時点での見解を書く。	【態①】 【知①】 ワークシート
		新型コロナウイルスの感染が収束していくのか、再び拡大していくのか分からない今、校内に掲示するポスターとしてどちらが適切かを判断し、批評文を書こう。 ○批評文のモデルを見て、批評文を書くポイントを知る。	
2	2	○2つのポスターを観察し、それぞれの特徴を捉える。 ○自分なりに観点を決め、2つのポスターを〈比較〉することでそれぞれのよさや価値に気付く。	【態①】 【知②】 ワークシート
	3 本 時	○同じポスターを選んでいる人でグループを作り、観察・分析したことを交流し、考えを広げる。 ○これまでの学習で集めた材料を三角ロジックに整理し、根拠となる事実や理由付けを明確にする。	【思①】 【知②】 ワークシート 振り返りシート
3	4	○読み手を説得できる文章の構成を考える。	【思②】 構成メモ 振り返りシート
	5	○前時の学習を基に、批評文を書く。	【態①】 【思②】 批評文・振り返りシート
4	6	○書いた批評文を交流し、助言し合う。 ○単元の振り返りを行う。	【知①】 【思②】 批評文・振り返りシート

## 6 本時の学習（第3時）

### （1）本時の目標

観察・分析を交流することを通して、自分の考えを三角ロジックに整理することができる。

### （2）本時の展開

過程	生徒の学習活動	形態	教師の指導・評価	備考
導入 (5分)	1 単元を通した課題と前時の学習を振り返る。	全体	・単元を通した課題を確認し、前時の振り返りを数名発表させる。	単元計画 振り返りシート
	2 本時の学習課題を知る。	全体	・生徒の発言から課題を設定する。	
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;"> <b>課題</b> </div> 2つのポスターの分析を深め、自分の考えを整理しよう。				
展開 (15分)	3 分析したことを交流し、考えを広げる。	グループ	・同じポスターを選んでいる生徒同士でグループを作る。	マトリックス
	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;"> <b>発問</b> </div> マトリックスを用いて、グループで分析しよう。			
(10分)	4 グループで検討したことを紹介し合う。	全体	<ul style="list-style-type: none"> <li>・マトリックスを用いて交流し、2つのポスターの特徴やよさについて検討させる。その際、グループによって違う観点で検討させる。</li> <li>・個人の気づきを付箋紙に書かせる。</li> <li>・グループで選んだポスターのどのようなよさや価値を出し合ったのかを紹介させる。</li> <li>・別のグループの分析を自分たちの分析と比べながら聞かせ、質問や意見を述べる機会を設ける。</li> </ul>	付箋紙
(15分)	5 これまでの学習を基に、自分の考えを三角ロジックに整理し、根拠となる事実や理由付けを明確にする	個人	<ul style="list-style-type: none"> <li>・三角ロジックを用いて、根拠と理由付けを記入させる。</li> <li>・三角ロジックのそれぞれの項目を掲示し、整理する際の手がかりにさせる。</li> <li>・活動が進まない生徒には教師との対話の中で根拠と理由付けのつながりを見つけさせる。</li> </ul>	ワークシート（三角ロジック）
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;">                     主張：選んだポスター                 </div> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 45%;">                         根拠： 選んだポスターの具体的な特徴                     </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 45%;">                         理由付け： 分析・交流を基に考えたこと                     </div> </div>			<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <b>〈評価規準〉</b>                          ・それぞれのポスターの分析を基に、選んだポスターとその根拠や理由付けを書いている。  <div style="text-align: right;">【思①】 / ワークシート</div> </div>	
まとめ (5分)	6 本時の振り返りを行う。	個人		振り返りシート
	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;"> <b>発問</b> </div> グループや全体での話し合いが自分の考えにどう生かされたのかを振り返ろう。			
			・数名発表させ、次時へとつなげる。	

## 7 授業の実際

### (1) 実践のねらい

本実践は、社会生活の様々な物事や事柄について、分析したことや話し合った内容を基に、自分なりの判断を下し、結論や根拠、理由付けなど明確に示しながら文章を書く力を身に付けることをめざす。また、生徒が本実践によって身に付けた力を社会生活で活用している理想の姿を次のように設定した。

- ・ 社会生活における様々な物事や事柄について、客観性や信頼性のある情報を取捨選択し、情報の発信者として責任のある表現を心掛けることができる。
- ・ 目的や意図に応じて、論理の展開を考えることで、様々な考えをもつ多様な読み手を説得できる文章を書くことができる。

### (2) 指導の実際

#### i 教材について

実践のねらいを実現するため、本実践では次のように単元を通した言語活動（単元を通した課題）を設定した。

新型コロナウイルスの感染が収束していくのか、再び拡大していくのか分からない今、校内に掲示するポスターとしてどちらが適切かを判断し、批評文を書こう。

批評とは対象とする事柄について、そのもののよさや特性、価値などについて論じたり、評価したりすることである。本単元では、批評の対象として、違う視点から新型コロナウイルスの感染拡大防止を呼びかける2つのポスター（【資料1】）を取り扱う。導入では、生徒に「今後、感染が収束していくのか、再び拡大



【資料1】批評の対象となるポスター

していくのか分からない今、校内に掲示するポスターとしてどちらがよいのだろうか」という問いをもたせ、単元の学習をスタートさせた。

#### ii 視点① 学習意欲のサイクルを生み出す「見通しと振り返り」

##### a 批評文のモデルの提示

「見通し」をもたせる手立てとして、まず、導入において共有した単元のゴール（単元を通した言語活動）と類似課題で書かれた批評文のモデル（【資料2】）を提示し、生徒にこれからどのような文章を書くのかイメージをもたせた。また、批評文を書くポイントについても全体で確認した。

**批評文のモデルを読んで、今後の学習の見通しやイメージをつかもう**  
ある市で、「マイボトル」の利用を勧めるためのポスターを募集し、次の2点が候補として残った。「マイボトル」の利用を呼びかけるポスターとしてどちらが適切か。

**批評文モデルA**  
私は、マイボトルの利用を勧めるためのポスターとして、Aが最も優れていると思う。  
Aのポスターでは、水滴の形をした大きな絵の中に、さまざまな色のキャップのペットボトルがたくさん入っている。これによって、いろいろな飲み物のペットボトルを大量に消費したという事実が巧みに印象づけられ、今年の夏はこれだけ飲みましたというキャッチコピーとうまく合っている。私たちは、だん何気なくペットボトル飲料を飲み、その容器を作るのに大量の資源が消費されているというところまでは考えない。Aのポスターは、絵と文字の両方によって、私たちが気付かなかった「事実」を目の前に示してくれる。  
これに対し、Bのポスターは、「ペットボトルよりおしよれボトル」というキャッチコピーからも分かる通り、マイボトルを使うことはおしよれボトルだという印象を与えている。流行に敏感な若い世代の人たちは、ふだんペットボトル飲料を買う機会も多いだろう。このポスターには、そんな若者世代にマイボトルの魅力をアピールすることができるというよさがあり、その効果も期待できると思う。  
しかし、A市がマイボトルの利用を呼びかける理由は「資源保護」であると考え、それをより幅広い世代の人たちに、直接呼びかけるという意味では、Aのポスターが最も効果的なのではないだろうか。

**批評文モデルB**  
マイボトルを使い、多くの人に思わせるポスターは、Bがよい。その観点から考えて、私はBを選んだ。Bに描かれているのは、おしよれに敏感そうである。また、マイボトルよりおしよれボトルというキャッチコピーがある。  
世の中で流行するものは、「おしよれ」「かっこいい」「かわいい」と感じさせるものである。Bのポスターは、おしよれだからマイボトルを使ってみようという人にも思わせる可能性を持っている。

①どちらが優れた批評文だと思いますか？ (A・B)  
②なぜそう思いましたか？

③批評文を書くポイントを出し合い、メモしよう。(自分が批評文を書くときの参考にしよう)

【資料2】 批評文のモデルを示したワークシート

b 単元を通した学習計画・振り返りシートの活用

単元全体の見通しをもたせると同時に、各段階での学びを振り返らせる手立てとして「学習計画・振り返りシート」(【資料3】)を活用した。振り返りの視点としては、「学習で学んだこと」や「自分の学び方がどうであったか」「難しかったことや課題として残ったこと」を記入させた。また、単元の最後に「本単元の学習が今後の学校生活や社会生活のどのような場面で役に立ちそうか」について振り返り、書かせることで、生徒一人一人の学びを今後の学習や社会生活につなげられるようにした。

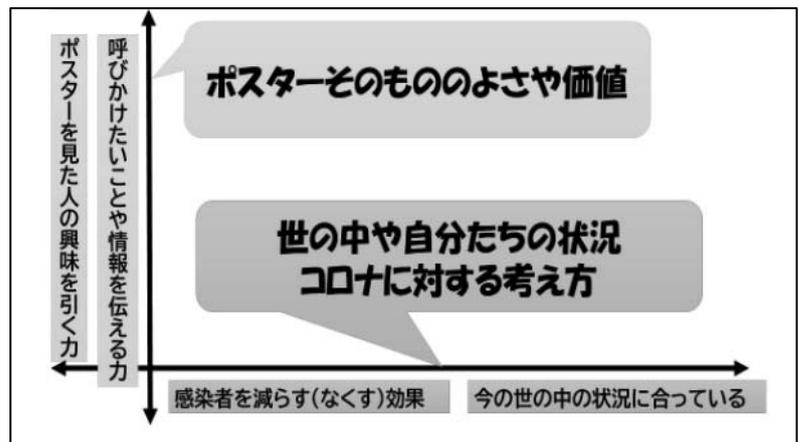
④批評文を読み合い、単元を振り返る	⑤批評文を書く	④批評文の構成を考える	②～③ 批評文を書く材料を集める	①ゴールを知り、見通しをもつ	内容	振り返り
○単元の振り返りを行う。 言し合う。	○これまでの学習をもとに批評文を書く。	○読み手を説得できる批評文の構成を考える。	○自分の考え、根拠、理由付けをはっきりさせる。 ○観察・分析したことを友達と交流し、自分の考えを深める。	○批評について知る。 ○単元を通した課題について知る。 ○批評文のモデルを見て、批評文を書くポイントを知る。(見直しをもつ)	○批評について知る。 ○単元を通した課題について知る。 ○批評文のモデルを見て、批評文を書くポイントを知る。(見直しをもつ)	今日の授業で感じたこと考えたこと、これからの学習法を書こう 説明文や意見文とはまた違う文 と、いろいろ感じました。主張と根拠 を付けを明確にした説得のある文に なるようにしたいです。 このポスターの特徴や良さを挙げるために考えたことは、 AとBのちびりを見つけて、それぞれ の良さを挙げてみることにしました。 交流を通して、自分の考えや根拠、理由付けは変化しましたか 自分の考えを深めたり、気づきがありました。皆で協力 するこまますと改めて感じました。 批評文の構成を考え、工夫したところなどは何ですか AとBそれぞれの良さを、自分の で、文を書くことが初めてで、難しかった 今まででは、自分でいろいろには、反対意見 最初に書いた文章と比べて、よくなったところを挙げてみる と比べて書いてみたので、良さを述べた ハッとするのは新鮮でした。次はいろいろ な人と交流したいです。

【資料3】 単元計画・振り返りシート

iii 視点② 考えを深めるための協動的な学びの場の設定

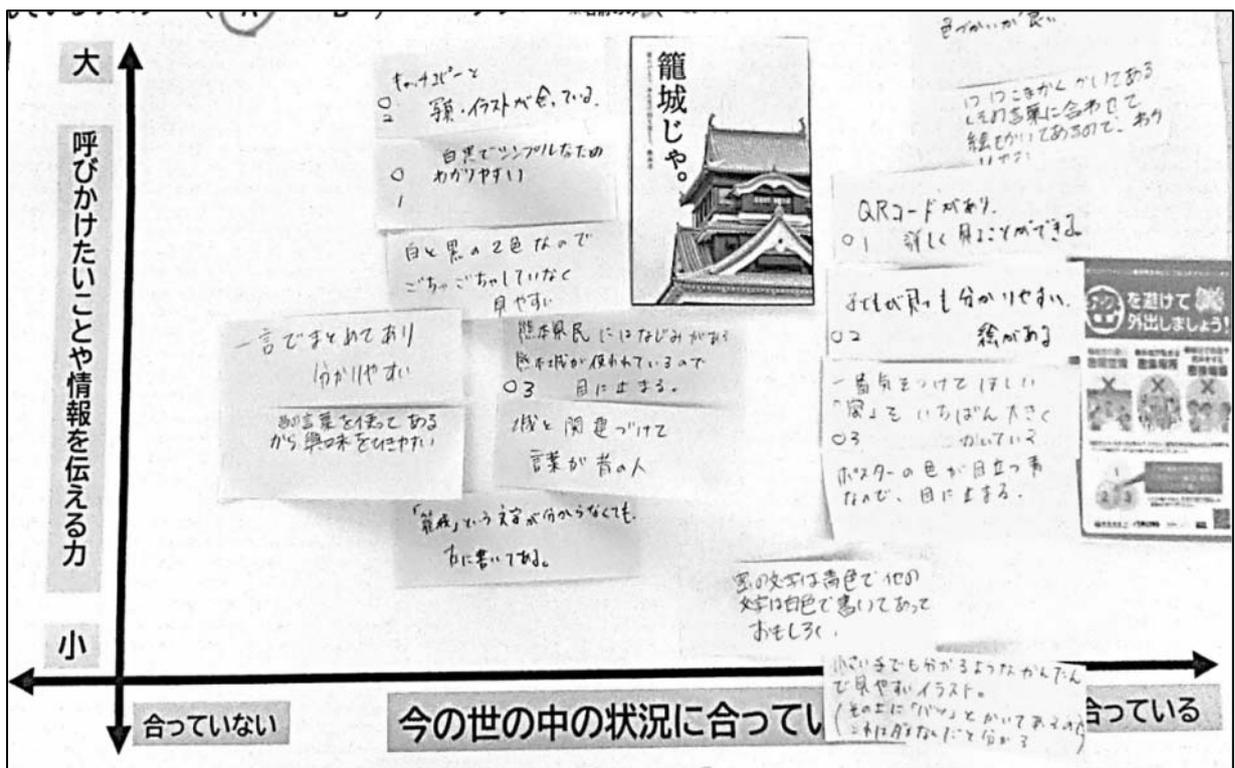
a マトリックス表を用いたポスターの分析

個人でそれぞれのポスターの特徴や良さ、価値等を分析した後、同じポスターを選んでいる生徒同士でグループを作り、交流・検討する場を設定した。その際、グループごとにどのような話し合いをしたのかを可視化し、考えを深めるためのツールと



【資料4】 分析の観点

としてマトリックスを活用させた。単元の導入で書かせた〔はじめの考え〕をもとに、分析の観点(【資料4】)を縦軸・横軸共に2つずつ設定した。そしてグループによって組み合わせを変えて分析を行うことで、違う観点のグループの分析結果を聞き、それぞれのポスターがもつ特徴や良さ、価値についての理解を広げたり、深めたりすることができるようにした。



【資料5】 マトリックス表を用いた分析の例

b 三角ロジックで考えをまとめる手立て

個人やグループで行った分析をもとに批評文を書く前段階として、それぞれの考えを三角ロジック（主張・根拠となる事実・理由付け）に整理させた。しかし、1・2年生で三角ロジックを用いた学習を行っているが、主張を支える根拠と理由付けの妥当性や信頼性を吟味することには至っていないという学級の実態がある。そこで、前時に活用したマトリックス表（特に気づきが書かれている付箋紙）を再度見直し、「根拠となる事実」や「理由付け」として妥当性や信頼性、説得力が高いと思われる順に並び替えを行わせた。その結果、自分の考えを三角ロジックに整理することが難しい生徒もまとめやすくなった（【資料5】）。

iv 視点③ 学びの質を高める「思考のキーワード」

「思考のキーワード」のうち、本単元では〈比較〉を中心に活用した。2つのポスターを〈比較〉し、共通点や相違点、それぞれのポスターのよさや特徴、価値等を整理させた。また、「自分の考え」と「友達の考え」、「グループごとの分析結果」を〈比較〉したり、「はじめの考え」と最終的に書いた批評文を〈比較〉したりと本単元では学習過程全体を通して〈比較〉する場面を設定した。〈比較〉という言葉は教師から提示するのではなく、個人思考や協働的な学び合いの場や振り返りの中で生徒が何かと何かを〈比較〉することで学びを深めている場面を適宜全体に紹介し、学習用語として認識させていった。

**課題** 新型コロナウイルスの感染が収束していくのか、再び拡大していくのかわからない今、校内に掲示するポスターとしてどちらが適切か。

条件①600字以上書きましょう。 条件②縦書きで、原稿用紙の使い方を守って書きましょう。

選んだポスターに○を付けよう。

A ○

B ○

【はじめの考え】

私はAのポスターが良いと思います。Aは伝えたことが信憑性があるし、昔の言葉が使われていて記憶に残りやすいと思います。また、このポスターは行ける場所から行かないように促しているから、みんなの家をいざというときに守ることができると思います。だから私はAのポスターが良いと思います。

可	印	と	行	い	ばい	A	字	と	オ	の	新	出	た	し	お	も	給	が	お	ら	感	有	こ	が	香	り								
を	象	ど	知	今	て	分	の	の	が	人	ら	型	し	か	し	り	た	め	使	こ	し	深	本	い	て	A	新							
ポ	に	は	後	あ	が	い	の	量	本	大	の	コ	テ	リ	ガ	知		使	わ	れ	い	く	村	県	に	い	て	の	今	型	ポ			
ス	残	思	家	の	ら	て	ス	が	事	容	い	ロ	も	て	し	る	新	二	外	が	れ	い	う	村	民	に	る	の	ポ	ス	ト			
タ	リ	り	に	の	た	も	外	に				イ	ら	い				型	の	国	明	て	村	民	に	ら	め	の	リ	ス	ト			
ー	わ	と	と	め	く	意	い	い	い	い	い	い	い	い	い	い	い	い	い	い	い	い	い	い	い	い	い	い	い	い	い	い	い	
と	ま	せ	ど	ち	っ	て	載	は	思	考	を	い																						
し	い	し	の	任	も	と	め	り	の	任	務	を	い																					
て	A	で	り	が	わ	か	ら	と	ら	又	の	ス	は	イ	ン	テ	タ	で																
前	の	印	を	標	を	も	見	ま	て	の	ポ	ス	ト	は	イ	ン	テ	タ	で															
切	本	見	感	は	に	短	る	感	A	の	優	ス	ト	は	イ	ン	テ	タ	で															
ら	ス	を	採	り	す	っ	い	の	来	の	先	タ	は	イ	ン	テ	タ	で																
と	月	人	を	在	ら	家	籠	ら	B	を	再	再	再	再	再	再	再	再	再	再	再	再	再	再	再	再	再	再	再	再	再	再	再	
り	が	興	不	今	い	じ	同	不	大	月	行	が	密	イ																				
校	内	を	せ	ら	う	の	た	か	た	よ	が	イ	け	ム																				
い	は	わ	を	の	だ	か	た	よ	が	イ	け	ム																						
編	入	り	を	の	だ	か	た	よ	が	イ	け	ム																						
入	り	を	の	だ	か	た	よ	が	イ	け	ム																							

【自分の「批評の力」を振り返ろう】

ポスターの伝え方と今現在の状況と照らし合わせて、AとBのポスターを比較して、その優劣を述べよう。

文の量が減った。 Bのポスターにも3つある。 Aのポスターの1つは3つより多くある。 Bのポスターは、よくわかりやすいので良かったです。

優劣を明確に伝えるために、一文が読みやすくなるように書きました。

何かを「批評」する際、ポイントとなることは何だろうか？

- ・事実と意見を区別する。
- ・両方の利点を述べて、比較する。
- ・両方の長さをよく書く。

生徒が書いた批評文の例

## 8 授業のまとめ

### <成果>

#### (1) 視点① 学習意欲のサイクルを生み出す「見通しと振り返り」

- ・導入で批評文のモデルを示し、文章を書くポイントを確認したことで、どのような文章を書くのかイメージできたことに加え、実際に批評文の構成を考え、記述する際にも参考にしながら学習を進めることができた。
- ・「単元計画・振り返りシート」を配付・活用したことで学習のゴールや学習の過程等の見通しをもって学習を進めることができた。また、学習の段階ごとに振り返りを行い自分自身の学びの状況を書かせることで、できたことと不十分なことを整理し、次時の学習につなげることができた。また、教師側も生徒一人一人の学習状況を把握し、手立てや言葉かけなどの支援を考える参考となった。

#### (2) 視点② 考えを深めるための協動的な学びの場の設定

- ・マトリックス表を用いて行った分析は、書く材料を集める手段として効果的だった。特にグループごとに違う観点で分析を行ったことで、様々な視点からの気づきを共有することができた。また、選んでいないポスターについても気づきを記入させることで、両方のポスターの良さや特徴、価値等に触れながら説得力のある批評文の記述へとつなげることができた。

#### (3) 視点③ 学びの質を高める「思考のキーワード」の活用

- ・「2つのポスターの〈比較〉」「自分と他の人の分析の〈比較〉」「はじめの考えと批評文との〈比較〉」など、単元を通して、〈比較〉というキーワードを使って学習を進めることができた。単元全体の振り返りにおいて「今後、何かを批評する際にポイントとなること」を書かせた際、〈比較〉という言葉を用いていた生徒が多かった。今後の国語の学習や他教科の学習においても〈比較〉することで学習を進める生徒の姿が期待できる。

### <課題>

生徒は学習の見通しをもち、意欲的に観察・分析を行い、モデル文を参考にしながら構成を考えて批評文を記述することができたが、読み手にわかりやすく、伝わりやすい表現の仕方について個人やグループで推敲する時間の確保が不十分であった。今後、「書くこと」だけでなく、「話すこと」の単元においても時間を十分に確保し、社会生活につながる表現力の育成をめざしたい。

## 【書くこと部会】第2学年国語科学習指導案

(新しい国語2 東京書籍 p.203～209「いきいきと描き出そう 短歌から始まる物語」)

授業者 熊本市立京陵中学校 教諭 矢田知等世

### 1 単元構想

 社会生活での理想の姿	・社会生活における様々な場面で、相手とのつながりを築く豊かな表現、相手の心を動かし心に響く表現を用いて、自分の考えや思いを伝えている。 ・自他の身の回りの物事や体験、心の動きなどに関心を寄せ、ものの見方や感性を豊かにしていこうとする。		
単元名	あの子の心に届くとおきの物語を書こう。		
本単元でめざす子どもの姿	・これまでに学習した物語の表現、手がかりにした短歌の設定、自分の体験等を材料にして、描写を工夫して物語を書いている。B(1)ウ、エ ・書いた文章や出来上がった本を互いに読みあい、描写の工夫や効果などについて意見を述べ合うことを通して自分の文章を見直している。B(1)オ		
単元の評価規準	知識・理解	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
	① 言葉には、相手の行動を促す働きがあることに気づいている。(1)ア) ② 類義語や多義的な意味をあらわす語句などについて理解し、文章の中で意図的に使い分けている。(1)エ)	① 「書くこと」において、表現の効果を考え描写を工夫している。(B(1)イ) ② 「書くこと」において、読み手の立場に立って表現の効果を確かめ、描写を検討している。(B(1)エ) ③ 描写の工夫とその効果について、読み手からの助言などを踏まえて振り返っている。(B(1)オ)	① 積極的に情景や人物の心情などをいきいきと表す表現を工夫し、お互いの表現について友だちと意見を交換しながら、より効果的で魅力的な描写を用いて、読み手の心に届く物語を書き上げようとしている。
単元を通した言語活動			
これまで学んだことや、題材となる短歌の設定を生かして「短歌から始まる物語」を書き、自分で設定した読者の心に届く、とおきの物語を作ろう。			
 学習前の姿 (生徒の実態)	・まとまった長さの文章を書くことに抵抗感のある生徒も多い。(観察・生徒アンケート) ・読み手を楽しませようとする文章、また、読み手の心を動かす文章を書こうとした経験のある生徒はほとんどいない。(生徒アンケート) ・「読むこと」や「書くこと」の学習で学んだことを、次の学習に活用しようとしている生徒もいる。(生徒アンケート)		
○書くことが好きか(とても・まあまあ 32.4% あまり・全く 67.6%) ○これまでに随筆や物語を自分で書いたことがあるか。 ある 32.4%(小学校で) ない 67.6%(実際には1学期に随筆を書いている) ○これまで、文章を書くときに気を付けたことはあるか。(選択式・複数回答)			
構成(組み立てや順序)		51.3%	
題材選び		35.1%	
言葉選び		59.4%	
全体の雰囲気・その他		0%	

## 2 単元について

本単元では、情景や心情などをいきいきと表すように、描写を工夫して場面や人物を描き出す力をつけることをめざす。そのために、既存の短歌を題材として物語を書き、それを「心に届くとおきの物語」という形に仕上げ感想を述べ合うという単元を通した言語活動を設定した。

描写とは、物事の様子や場面、行動や心情などを、読み手が言葉を通して具体的に想像できるように描くことである。これまで様々な読書体験、そして、物語を読むことの学習を積んできた生徒たちにとって、描写を通じて、物語の中の人物や出来事が臨場感を持って目の前に立ち表れるように感じ、心を動かされた経験が多少なりともあるはずである。描写という表現に的を絞り、これまでに学習した作品の良さを見つめ直し、その良さを活用した作文を書く活動に取り組むことで、学習したことを次の学習につなげ、生かそうとする力を身につけさせたい。また、物語を仕上げる過程で、推敲のポイントを明確にするため、読んでほしい対象と、届けたいメッセージを自ら設定して「あの人の心に届くとおきの物語を書く」という単元設定を行った。このことが書き上げた物語を読む人の姿を具体的にイメージさせ、読み手を意識し、工夫した描写をしやすくする仕掛けとなっている。読む人を楽しませたいと、よりよい表現を模索しながら検討していく中で、読み手の心を動かす表現を追求する姿勢を身に付けることをねらったものである。

さらには、描写を工夫して一つの物語を書き上げることが、文章表現を磨くことや、語彙を増やし、語感を磨くことのみならず、生徒一人一人が自分自身の内面を改めて見つめ直す契機ともなりうる。作品を読み合うことで、互いの文章の良さに気付くだけでなく、作品を通して表れた相手の人柄を改めて知ることにもつながるであろう。生徒たちにとって、将来にわたって「物語を書く」という機会は多くあるものではないかもしれない。しかし、描写を工夫して自分の考えや思いを表現し、その描写が読み手に与える効果や互いの解釈の違いに気づく経験を通じて、表現の楽しさや可能性を感じ取り、言葉に対する感性を磨こうとする積極的な態度へとつながってほしい。そのことが将来、創作以外の、意見や提案を述べる文章を書く場面、お礼や依頼の文章を書く場面等にも生かされるはずである。

## 3 単元の系統

	第1学年	第2学年	第3学年
<b>B 書くこと</b> 考えの形成, 記述	小さな発見を詩にしよう (詩歌創作) ・表現を工夫する 作品のよさを表現しよう 歌の鑑賞文(感性・想像) ・作品を鑑賞し考えをまとめる ・感じたことや考えたことを表現する	短歌のリズムで表現しよう (詩歌創作) ・描き方を工夫する いきいきと描き出そう 短歌から始まる物語 (感性・想像) ・豊かに描写する ・意見交換の観点を持つ	俳句を作って句会を開こう (詩歌創作) ・読みあって評価する 今の思いをまとめよう 時を超える手紙 (感性・想像) ・書きたい内容を考える ・手紙の書き出しと結びを整える

本単元に関する 「書くこと」の言葉の力	第2学年における「書くこと」の知識・技能を用いる単元		
	短歌のリズムで表現しよう	依頼状やお礼状を書こう	いきいきと描き出そう
i 社会生活の中から話題を設定する	○	◎	○
ii 文章の構成や展開を工夫する		◎	
iii 表現の効果を考えて描写する	◎		◎
iv 読み手の立場になって表現を検討する	◎	○	○
v 自分の文章の良い点や改善点を見つける	○		◎

#### 4 研究の視点に沿った授業の工夫

##### (1) 視点① 学習意欲のサイクルを生み出す「見通しと振り返り」

「見通し」をもたせる手立てとして、まず、先輩たちが書き上げた物語に触れ、自分にも書けそうだ、書いてみたいという意欲を持たせる。また、学習計画を生徒自身が考えていく過程で、物語を読む学習で学んだことやこれまでの書く学習で学んだことを活用して、自らの表現に還元させていくイメージを持たせる。さらに、いくつかの段階で、計画の見直しや学習の振り返りをすることで、描写の工夫を生徒自身が主体的に学び取り、学んだこと生かして、良い作品を作り上げようとする意欲を継続し、創作活動を楽しむことのできる授業を展開していきたい。

##### (2) 視点② 考えを深めるための協働的な学びの場の設定

考えを深めるための協働的な学びの場を二つ設定する。一つ目は、選んだ短歌から物語の設定を考える場面である。短歌から想像したことをペアで交換しながら、効果的な設定を考えさせたい。二つ目は、書いた物語の一部を読み合い、描写の工夫と効果について助言し合う場面である。ペア活動やグループ活動を通じて、読み手の反応を知るとともに、より一層読み手の存在を強く意識させ、読み手を引き込む作品を仕上げたいとする原動力につなげたい。

##### (3) 視点③ 学びの質を高める「思考のキーワード」

本單元では、〈比較〉の考え方を中心に活用する。同じ短歌を題材にした複数の生徒の作品を〈比較〉することで、描写の工夫の違いを分かりやすくし、表現の効果が検討しやすくなる。また、そのことで互いの作品の良さを、多く見つけることが可能になるだろう。さらに、「思考のキーワード」として共通言語化することによって、作品を評価し合う場面では、これまでに学習した作品と比べて、描写を〈分類〉したり、自分たちの描写と〈関連〉付けたりして、描写の工夫について、その効果を〈一般〉化していくような思考が用いられるはずである。生徒が仲間の作品の良さや、自らが学んだことを意識化しやすくなり、他の場面でも徐々に学んだことを活用できるようになることを期待したい。

#### 5 単元の学習活動と評価計画

次	時	学 習 活 動	評 価
1	1	○「物語」を書くために必要なことを考える。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;">読む人の心に届く物語を書くには、どのような工夫をしたらよいだろうか。</div> ○これまでの物語の学習を振り返ったり、先輩たちの作品に触れたりしながら、学習計画を立て、見通しを持つ。	【態①】 【知①】 振り返りシート
2	2 3	○題材とする短歌を選び、「誰に」「どんな」物語を読んでもほしいかを考える。 ○協力して作品を作り上げるパートナーを決める。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;">誰よりも「おもしろい」物語を書くための構想を練ろう。</div>	【態①】 【知①】 ワークシート
本時	2/2	○短歌から想像したことを、パートナーと交換し合いながら、設定やストーリーを考える。 ○読み手を引き付ける表現を工夫し、効果的な書き出しを書く。 ○書き出しを読み合い、相互評価をする。	【思①】 【知②】 ワークシート 振り返りシート
3	4 5	○物語を書く。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;">描写や書き出しを工夫して、「○○に読んでほしい、心に届く○○な物語」を完成させよう。</div> ○友達の助言を参考に、推敲する。	【態①】 【思②】
4	6	○完成した物語を読み合い、感想を伝え合う。 ○単元の振り返りをする。	【知②】 【思③】

## 6 本時の学習（第3時）

### (1) 本時の目標

伝えたい相手とメッセージをもとに設定を考え、物語の書き出しを工夫することができる。

### (2) 本時の展開

過程	生徒の学習活動	形態	教師の指導・評価	備考
導入 (5分)	1 単元を通した課題を確認し前時の学習を振り返る。	全体	<ul style="list-style-type: none"> <li>単元を通した課題を確認し、常に前方に提示しておく。</li> <li>単元計画を確認しながら課題を設定する。</li> </ul>	電子黒板 単元計画 振り返りシート
	2 本時の学習課題を知る。			
	<b>課題</b> 誰よりも「おもしろい」物語を書くための構想を練ろう。			
展開 (15分)	3 前時に選んだ短歌から想像したことを交流し、考えを広げながら、設定やストーリーを考える。	ペア	<ul style="list-style-type: none"> <li>同じ短歌を選んだ生徒同士でペアを作らせる。</li> </ul>	ワークシート
	<b>発問</b> 短歌から想像したことを伝え合い、物語を書く材料を集めましょう。			
(15分)	4 考えた設定とストーリーを生かして物語の書き出しを書く。	ペア	<ul style="list-style-type: none"> <li>「①他のペアに内容を知られないこと」「②誰にどんな話を書くのかをいつも意識すること」約束とする。</li> <li>時間を区切って、集中力を高めさせる。</li> <li>パートナーと協力して書いてよいことを伝える。</li> <li>気軽に取り組める字数を設定する。</li> <li>書く方法は手書き・タブレット入力から選択させる。</li> </ul>	ワークシート
	5 書き出しをグループで読み合っ、効果的な書き出しになっているか検討する。	グループ	<p>〈評価規準〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>読み手を意識して、表現を工夫し、興味を引く書き出しを書いている。</li> </ul> <p>【知②】 【思①】 ／ワークシート</p>	タブレット
(10分)	<b>発問</b> どのような書き出しが効果的でしょうか？			ワークシート
			<ul style="list-style-type: none"> <li>続きが読みたくなるかどうかの観点で良いところを探し、アドバイスをさせる。</li> <li>星の数で評価させることで、感覚的にとらえやすくする。</li> </ul>	
まとめ (5分)	6 本時の振り返りと、今後の授業の目標を書く。	個人	<ul style="list-style-type: none"> <li>数名発表させ、次時へとつなげる。</li> </ul>	振り返りシート
	<b>発問</b> 一番書きたい場面ではどんな工夫をしたいと思いますか？			

## 7 授業の実際

### (1) 実践のねらい

本実践は、情景や心情などをいきいきと表すように、描写を工夫して場面や人物を描き出す力をつけることをめざす。また、生徒が本実践によって身に付けた力を社会生活で活用している理想の姿を次のように設定した。

- ・社会生活における様々な場面で、相手とのつながりを築く豊かな表現、相手の心を動かし心に響く表現を用いて、自分の考えや思いを伝えている。
- ・自他の身の回りの物事や体験、心の動きなどに関心を寄せ、ものの見方や感性を豊かにしていこうとする。

### (2) 指導の実際

#### i 教材について

実践のねらいを実現するため、本実践では次のように単元を通した言語活動（単元を通した課題）を設定した。

これまで学んだことや、題材となる短歌の設定を生かして「短歌から始まる物語」を描写を工夫して書き、自分で設定した読者の心に届く、とっておきの物語を作ろう。

描写とは、物事の様子や場面、行動や心情などを、読み手が言葉を通して具体的に想像できるように描くことである。本単元では、物語を仕上げる過程で推敲のポイントを明確にするため、想定する読者対象と、届けたいメッセージを自ら設定し、「あの人の心に届くととっておきの物語を書く」という単元設定を行った。このことが書き上げた物語を読む人の姿を具体的にイメージさせ、工夫した描写を検討しやすくすると考えた。さらに、読み手の心を動かす表現を追求する姿勢を身に付けることもねらっている。「読む人の心に届く物語を書くには、どのような工夫をしたらよいだろうか」という問いをもたせ、単元の学習をスタートさせた。

#### ii 視点① 学習意欲のサイクルを生み出す「見通しと振り返り」

##### a モデルの提示

物語を書いた経験もなく、まとまった長さの文章を書くことに抵抗感を持つ生徒もいる中、「見通し」をもたせる手立てとして、まず導入で、ゴール（単元を通した言語活動）と類似課題で先輩たちが作成した物語（本として装丁済みのもの）の冒頭部分等を提示し（【資料1】）、生徒に物語を書くことのイメージを持たせるとともに、書いてみたいという意欲を引き出した。また、これまでの学習を振り返り、物語を書く際に生かせそうなポイントを想起させた。



【資料1】 物語文のモデル

b 単元を通した学習計画・振り返りシートを活用

単元全体の見通しをもたせると同時に、各段階での学びを振り返らせる手立てとして「学習計画・振り返りシート」を活用した。

振り返りの視点としては、「学んだことや次の活動に生かせそうなこと」「課題として残ったこと」を記入させた。「学習の進め方」についても振り返るようにし、ペアで書き進めたことの良さや難しかったことについて、記述させた。また、1時間単位の中でもゴールを意識し、見通しを持って活動できるように、ワークシートや前面の電子黒板に常にゴールや作業の残り時間を提示しておくようにした（【資料2】）。



【資料2】電子黒板によるゴールと作業時間の提示

単元の最後には「本単元の学習が今後の学校生活や社会生活のどのような場面で役に立ちそうか」について振り返り（【資料3】）、生徒一人一人の学びを今後の学習や社会生活につなげられるようにした。

④物語を読み合い、単元を振り返る	③物語を書く推敲する	②物語を書く材料を集める	①ゴールを知り見通しをもつ	内容	メモ	振り返り
<p>振り返り</p> <p>読後感と作る。</p> <p>読後感</p> <p>書き進めよう</p>	<p>推敲</p> <p>推敲</p> <p>推敲</p> <p>推敲</p>	<p>想像</p> <p>人物</p> <p>（書き相手）</p> <p>シナリオ</p>	<p>千順をたどる。</p> <p>千順</p> <p>千順</p>			
	<p>順序</p> <p>順序</p>	<p>順序</p>				
<p>情景描写を最後に使った。明瞭な表現が、読者の心を捉え、物語の世界に入り込ませた。お互いアドバイスし合っていたので、お互い成長できた。お互いアドバイスし合っていたので、お互い成長できた。お互いアドバイスし合っていたので、お互い成長できた。</p>	<p>友達に読んでもらうことで、アドバイスをもらえ、友達の話も読んで、よりよい物語が書けるようになった。</p>	<p>① 一番最初の文をわかりにくくするように書いた。</p> <p>② 一番中の部分を書き進めた。</p> <p>③ 主人公の心情をくわしく書き進めた。</p>	<p>中学までの、りんがした、たこと、みんな知っている人に向けて、前に分けるような物語と書きた。考えた。書いた。</p>			

読者のターゲットをしっかりと絞り、描写や書き出しを工夫して物語を書こう。

読者の心に届く物語を書くには、どのような工夫をしたらよいか。

【資料3】 単元計画・振り返りシート

### iii 視点② 考えを深めるための協動的な学びの場の設定

#### a ペア活動を用いた物語を書くための材料集め

まずは、物語の題材となる短歌を個人で選び、それぞれの短歌から想像を膨らませて、ウェビングを用いてワークシートに記入した。その後、同じ短歌を選んでいる生徒同士でペアを作った。



想像したことを交流する様子

このペアを「誰よりも『おもしろい』物語」を書くためのパートナーとして位置づけ、ペアで協力して物語を書きあげていくこととした。その際、後から表現を推敲する時の視点となる「誰を対象にした」「どんな物語」を書くのかということも共通理解をし、

ゴールを意識して話し合いながら、「誰が」「いつ」「どこで」という物語の設定と大まかなストーリーを考えていった(【資料4】)。ペアで物語の材料を集めていくことにより、それぞれが想像したことを交流しながら会話を重ね、より効果的な設定を考えたり、より面白みのあるストーリー展開の可能性に気付いたりできるようにした。

いつ	どこで	誰が	どうと
ある晴れた夏の運動会前日の休み時間。	教室	利道(主人公)と重信(仲良し)	運動会前日、リレの順番を決めること、利道と重信のけんか、利道の重信の顔を殴ったこと、重信は病院に行くこと、帰り支度をして重信を見、利道は「めん」と言いたかった、言えなかった。

× (けんかをした二人)に話をほい(仲直りする) 特に関心したのは... 二人のけんかするシーン 甚甚

【資料4】 設定とストーリーのメモ (構想を練る)

#### b 物語を書く・物語を推敲する過程でのペア活動

実際に物語を書く活動でも、最初に決めたパートナーと協力しながら進めていった。基本的には、話し合いながら二人で表現を検討して書き進めていたが、場合によっては、途中でそれぞれに物語を分岐させたり、表現の一部を変更したりしながら、パートナーを相談相手としてそれぞれの物語を仕上げていくペアも出てきた。また、文章の推敲を手軽にするために、手書きではなくタブレット入力(【資料5】)で書くことも認めた。ある程度書き進めたところで、別のペアと読み合い、表現の工夫や効果についてアドバイスし合うことで、読み手の反応を楽しみながら、文章を練り上げようとする姿が多く見られた。結果的に、いつもは書くことに苦手意識をもつ生徒も、ひとまとまりの文章を書くことができた。



【資料5】 構想メモを見ながらタブレットで入力する。



## 8 授業のまとめ

### <成果>

#### (1) 視点① 学習意欲のサイクルを生み出す「見通しと振り返り」について

- ・導入で類似課題の完成作品を示したことで、どのような文章を書くのかイメージでき、意欲を持たせることができた。
- ・「単元計画・振り返りシート」を活用したことで学習のゴールや学習の過程等の見通しをもって学習を進めることができた。また、学習の段階ごとに振り返りを行い自分自身の学びの状況を書かせることで、できたことと不十分なことを整理し、次時の学習につなげることができた。また、教師側も生徒一人一人の学習状況を把握し、手立てや言葉かけなどの支援を考える参考となった。

#### (2) 視点② 考えを深めるための協動的な学びの場の設定について

- ・書く材料を集める段階からパートナーを設定して、話し合いながら一緒に文章を作り上げていくことが非常に有効であった。同じ短歌を選んでいても想像の視点や幅が一人ずつ違うので、思いを交流しながら多くの材料を集めることができ、より豊かな描写を工夫しようとする土台となっていた。
- ・設定の段階から一緒に作り上げることで、気軽にアドバイスをし合える環境ができていたようだ。推敲も、普段より活発に行われていた。
- ・互いに文章を読み合うことで、読者の姿をより具体的にイメージすることができ、学習の後半では、描写を付け足してだけでなく、そぎ落としていく方が有効な場合もあるのではないかというような視点を持ち始めた生徒も出てきた。
- ・ペア活動により生徒たちが非常に楽しそうに活動に取り組めた。書くことに抵抗感のあった生徒たちも、創作活動の喜びを感じることができたと考える。一つの文章を二人以上で書き上げていくことに、私自身これまで取り組んだことがなかったが、想定していた以上に有効であることが分かったことは大きな成果である。

(生徒の振り返りより)

- ・単元を通して一から物語を作れたことに感動した。友達の記事を読むことで、こんな表現の仕方はいいなあと思ったことがたくさんあった。他の人と交流することが大切だと思った。
- ・ペアで行うことで、他人の視点から見てもらって分かることもあって良かった。将来編集の仕事に就きたいと思っているので、言葉の選び方を今後生かしていきたい。
- ・情景を描写して心情を表すことの難しさが分かったけど、友達にほめてもらえて嬉しかった。パートナーから客観的な意見をもらえたけど、相手が書いている時に話しかけるのは少し気が引けた。
- ・パートナーがいてアドバイスをたくさんしてくれて、間違いに気づいてくれたので、一人ではできないことができた。話が合わないところが難しかった。

### (3) 視点③ 学びの質を高める「思考のキーワード」について

- ・互いの文章の〈比較〉にとどまらず、これまで学習した内容、自らの生活経験、ペア活動で考えたことを〈統合〉して、より良いものを作り上げようとしていた。単元の終末で学習用語として提示したことにより、今後の国語の学習や他教科の学習においても、（国語に限らない）既存の知識、身に付けたスキル等を振り返り、〈統合〉しながら、相手とのつながりを築く豊かな表現、相手の心を動かし心に響く表現を用いて、自分の考えや思いを伝えようとする生徒の姿が期待できる。

#### <課題>

- ・生徒は学習の見通しをもち、意欲的に材料を集め、読者の姿をイメージしながらより有効な描写を工夫しながら物語文を創作することができた。ペア活動により創作活動を楽しむことができた生徒が多かったが、書き進めていく中でお互いの合意がなかなか得られずに、時間がかかってしまったペアもいくつか見られた。
- ・書く活動の時間が限られていたので、モデルで示したように装丁まで行う時間は確保できず、書き上げた達成感という部分では不足する面もあったかもしれない。
- ・今後も、社会生活につながる国語の力を念頭に、言葉にこだわってよりよい表現を選び取ろうとする力、伝えたいことを、相手の心を動かす言葉で届けようとする姿勢の育成を目指したい。

## IV 研究のまとめ

### 1 成果

#### (1) 生徒の意欲を高める課題の設定

実践①「意見文（三省堂1年）」の授業では、書くことが苦手な生徒が意欲をもって意見文に取り組めるように、校内の「学習・生活に関するアンケート」を資料として提示した。自分の生活に直結する資料であるため、資料の読み取りの際の意欲や意識が向上し、生徒間の交流も活発になった。その結果、本実践における生徒の意見文に対する書く意欲の高まりが感じられた。教科書等の課題をそのまま利用するのではなく、いかに生徒の実態に則した課題の設定ができるか、ということを確認できた。

#### (2) 生徒のまとめる振り返りシートの活用

実践①では、「何を学ぶのか」あるいは「何を学んだのか」の実感をもたせるために、振り返りシートを活用した。その結果、生徒は学習の見通しをもつことができ、「思考のキーワード」と相まって、生徒自身が「何を学んだのか」を自覚することができ、本実践において学んだことを今後の学習課題において生かしていくための素地ができた。

#### (3) 「書くこと」における協働的な学びの場の設定

これまで「書くこと」における協働的な学びの場として推敲の場面が設定されることが多かった。授業②のように実際に書き出すところから協働的な学びをしていくことで、活発に活動する生徒の姿が見られた。共によりよいものを作り上げるという意識から、推敲の場面でも遠慮なく指摘し合う姿が見られた。

## 2 課題

### (1) 「思考のキーワード」の日常的な指導の必要性

実践①「主張文（三省堂2年）」実践②「意見文（三省堂1年）」の授業は、ともに「思考のキーワード」を用いて振り返りシートの記入を行い、見通しと振り返りを行った。その有用性については、前項で述べたとおりである。しかし、本実践では、生徒が主体的にそれらの「考え方」に気づき、意識して使用するという段階にまでは至らなかった。そのため、日頃から日常的にそれらを使用し、慣れ親しんでおくことで、さらに効果が期待できるのではないかと思われる。また、校内において他教科の授業とも連携しながら前述の「考え方」を使用し、授業者が適切に声かけして評価を行っていくことで、さらに生徒の力が高まるように思う。いかに日常的な活動にしていくかが今後の大きな課題となるだろう。

### (2) 「見通し」の持たせ方

実践③では、3年間で段階的に自分たちで見通しを持つことができるようになるための工夫をしてみた。「書くこと」の領域においては、自分で一つの作品を仕上げるといった活動が多いため、計画を立て、見通しを持つことは難しくはなかったが、個人の活動の場合、協働的な学習として周りの友達に推敲する手伝いをしてほしいと思っても、友達と本時の学習内容が違う場合、うまく活動できなかった場面もあったことが課題である。グループで学習を進める場合と個人で学習を進める場合とで工夫が必要である。

#### <参考文献>

- ・文部科学省：中学校学習指導要領解説 国語編, 2018
- ・中央教育審議会：幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）, 2018

## 1 研究の歩みを止めない

とりわけこの1年、研究を進めるための協議や研究授業の実施が困難な状況で、田中文字子、坂田友紀両部会長を中心に熊本市や上益城郡の部会の先生方、特に二人の授業者が多く時間を割いて研究を進められたことに敬意を表したい。誌上発表という結果にはなったが、研究の歩みに携わった一人として授業で見た生徒達のいきいきとした学びの姿は成果という言葉では表せないほどの感動をもたらすものだった。

改めて言うまでもなく、書くことが苦手な生徒は多い。また、書くことの力の差も大きい。スマホやゲーム等を通して日々多くの文章（絵文字も含めて）を交信しているにもかかわらず。作文用紙に向かう時間は減ったが、相手に分かりやすく自分の考えや意見を表現する機会は国語科の授業に限らず増えてきている。言い換えると、国語科での学びを援用する場に応えるだけの学びの内実が国語科の授業に求められていることになる。

### (1) 理を尽くす

山田先生は、コロナ禍を逆手に取った実にリアルな社会生活の中から題材を決められた。この1年余り日常生活でこの話題は今も残念ながら尽きることがない。そこでは、様々な情報とその分析、話題が取り沙汰されていることを生徒も知っている。生徒が我がこととしてテーマを捉えたことで、相手を打ち負かす批判文ではなく、相手を尊重しながら、自分の意見や考えを論理的に説明する批評文を書く過程で、生徒は真剣に相手を納得させようと「理を尽くす」ことに努めた。

### (2) 情を尽くす

矢田先生は、創作活動という書くことにおいてはハードルの高い授業に挑戦された。ここに来て、自らの書く力のなさを自覚させてしまっただけでは元もこもない。そこで先生は、ペア学習を仕組まれた。書くことは本来個別に進められるもので、協同作業で文章を作ることはない。しかし、社会生活の中では新聞も雑誌もドラマも複数の書き手が互いの意見を出し合いながら文章を組み立てている。つまり社会生活で見られる文章作法を援用することで、書くことの抵抗感を減らし、いかに読み手が「おもしろい」と感じる文章になるか、生徒はレトリックの工夫も含め「情を尽くす」ことに努めた。二つの実践はまさに書くことにおいて「情理を尽くす」方向性を示された。それは文学的文章の読みや説明的な文章の読みと、書くこととの往還にもつながる意義あるものである。

## 2 これからの書くことの学びに向けて

### (1) 協働的な学びを一連の書く過程で積極的に取り入れる

書くことは構想から推敲まで一連の過程を個々人で辿っていくことが多い。過程の途中で仕組まれる協働的な学びは、ともするとネガティブな「比べあい」になることが多く、これがかえって生徒の意欲・関心をそぐことにつながりかねない。さらに、単元の終わりに仕組まれる協働的な学びは、「学び」というより「活動」に重きがおかれてしまう。それを転換するモデルを今回授業者は示された。

山田実践では、自分の立場を途中で変えないというルールに基づいて、最初から最後まで、自分が選んだポスターについての主張を同じ立場で組織された班で、相手を説得する分析方法と記述の違いを生徒は熱心に検討していった。

また、矢田実践では、最初から同じ題材を選んだペアで協力・検討し合いながら創作文の構想を練り、互いの意見を尊重し取り入れて、表現の工夫の検討に入り、最終段階になってペアを解き自分のオリジナルな作品を仕上げた。二つの実践とも書く過程のはじめから終わりまで協働的な学びを生かすことで生徒は興味関心を維持しながら意欲的に楽しんで書くことに取り組めた。

### (2) 社会生活に根ざした課題を工夫する

教科書を使用しながらも、社会生活に根ざした課題を設定することが必要である。なぜなら、生徒達も大人と同じく多くの情報を得て、「我が事」として考えているからだ。ただ、大人と違い、それを表現する場とスキルが不足しているだけである。不足するスキルについては学習の随所でポジティブに教え合い学び合い、表現する場については、教科等横断的な学習の場との援用を図りながら、校内、家庭や地域を含め様々な場で発信していくと、社会生活に根ざした課題に取り組んだ結果として自らの日常生活に生かそうとする学びを生徒が実感できると考える。

### Ⅲ 各部会研究報告及び学習指導案

# 「読むこと」部会



# 【「読むこと」部会】 研究報告

## I 研究主題との関わり

新学習指導要領では、「社会に開かれた教育課程」が重視され、「予測困難な社会の変化に主体的に関わり、（中略）目的を自ら考え、自らの可能性を發揮し、よりよい社会と幸福な人生の創り手となる力を身に付けられるようにすることが重要である」と述べられている。また、そのために育成すべき資質・能力として「何を知っているか、何ができるか（個別の知識・技能）」、「知っていること・できることをどう使うか（思考力・判断力・表現力等）」、「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか（学びに向かう力・人間性等）」という3つの柱が掲げられている。

これらを受けて、熊本市中学校国語教育研究会では「社会生活につながる国語科教育～言葉を駆使しながら自ら学び続ける生徒の育成を目指して～」というテーマが立てられた。このテーマには、未来の社会でも通用するような汎用的な力を身に付けてほしいという願いが込められている。このテーマのもと、「読むこと」部会では、どのようにして「言葉を駆使しながら自ら学び続ける生徒」を育成することができるか考え、研究を進めてきた。

まず本部会が重視したのは、「生徒自身が課題に対して主体的に関わり、解決していく学習の在り方」である。「自ら学び続ける生徒」を育成するためには、学習活動が受動的なものになってはいけなからである。そのため、単元を通した課題を設定し、その課題を解決するための方策を学習者自らに考えさせるという学習の流れを組み立てた。その際、いわゆる「活動あって学びなし」とならないよう、「読むこと」の領域で育成すべき資質・能力とは何か考え、単元計画を組み立てていった。

では、「読むこと」の領域で育成すべき資質・能力をどのように捉えればよいか。学習指導要領における国語科の目標を見てみると、「国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力」の育成が目指されていることがわかる。表現する内容となる自分の考えを形成するためには、様々なテキストから書かれている事柄や書き手の思い、考え等を読み取ることが欠かせない。そのため、本部会では、「読むこと」領域で育成すべき資質・能力を「正確にテキストの内容を読み取るとともに、それをもとに自分の考えを形成する資質・能力」と捉えた。

以上より、本部会では、「正確にテキストの内容を読み取るとともに、それをもとに自分の考えを形成する資質・能力」を育成するために、「生徒自身が課題に対して主体的に関わり、解決していく学習の在り方」を探究することとした。そのことが、結果的に「言葉を駆使しながら自ら学び続ける生徒」の育成に繋がると考えたのである。

## II 研究の視点

### 1 視点① 学習意欲のサイクルを生み出す「見通しと振り返り」

本部会では、「生徒自身が課題に対して主体的に関わり、解決していく学習の在り方」を探究している。その際、「見通しと振り返り」という言葉を以下の2つに整理し、授業づくりに繋げていった。

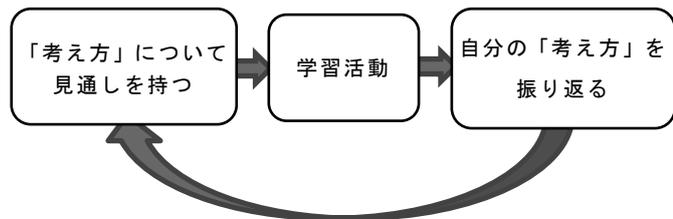
- ① 単元を通した見通しと振り返り
- ② 毎時間の授業における見通しと振り返り

まず①は、単元レベルでの見通しと振り返りをどのように行っていくかという問題

である。これについては、単元を通した課題を設定し、どのように課題を解決するか見通しを持たせること（見通し），そして単元の最後に自分の学びが成果物として表れるような学習活動を設定すること（振り返り）が望ましいと考えた（【資料1】）。

次に②は、毎時間の授業における見通しと振り返りである。これについては、毎時間の課題を解決させる際に「どのように考えていけば良いか」を自分たちで考えさせる学習活動を入れること（見通し），そして授業の最後には振り返りをまとめる時間を確保すること（振り返り）を意識したい。これら二つの見通しと振り返りが有機的に作用することによって、生徒の学びが促進されると考えている。

このうち「見通し」に関しては、ジーマン（2014）によると、課題に対して「どのように考えていけば良いか」を意識している学習者とそうでない学習者では、前者の方が新しい知識や技能の獲得が促進されやすいことが明らかにされている。そのため、単に「どの



【資料1】「見通し」と「振り返り」を意識した学習サイクル

ような課題に取り組むか」という見通しではなく、課題に対して「どのように考えていくか」という「考え方」についての見通しを持たせたい。この指摘をもとにすると、振り返りも単に「何を学んだか」の振り返りに留まらず、今後の活動に生かせる「考え方」まで意識させる振り返りが望ましい。

このことを踏まえ、「読むこと」部会では、次のような基本となる「振り返りシート」（【資料2】）を作成し、実践に活用していった。

<p>●今日の単元では、どのようなリザ考え方が役に立ちましたか。</p> <p>●単元の最初と比べて、自分はどのように成長しましたか。</p>	<p>◎ 単元を通した振り返り</p>					<p>日付</p> <p>今日の見通し</p> <p>今日の振り返り</p>	<p>国語科振り返りシート</p> <p>単元名『 』</p> <p>年 組 号 氏名( )</p>
	<p>単元の合計</p> <p>丸の数… <input type="checkbox"/></p> <p>発表の数… <input type="checkbox"/></p>	<p>／ ( )</p>	<p>／ ( )</p>	<p>／ ( )</p>	<p>／ ( )</p>		
<p>□学び—今日の授業で学んだこと</p> <p>□他者—参考になった他者の意見</p> <p>□ワザ—役に立ったワザ（考え方）</p> <p>□具体性—具体的に書かれているか（「いろいろわかった」などは×）</p> <p>□独自性—人に見えない点か（自分の経験と照らし合わせると◎）</p> <p>□見通し—次への見通し</p>	<p>□学び</p> <p>□他者</p> <p>□ワザ</p> <p>□具体性</p> <p>□独自性</p> <p>□見通し</p>	<p>□学び</p> <p>□他者</p> <p>□ワザ</p> <p>□具体性</p> <p>□独自性</p> <p>□見通し</p>	<p>□学び</p> <p>□他者</p> <p>□ワザ</p> <p>□具体性</p> <p>□独自性</p> <p>□見通し</p>	<p>□学び</p> <p>□他者</p> <p>□ワザ</p> <p>□具体性</p> <p>□独自性</p> <p>□見通し</p>	<p>□学び</p> <p>□他者</p> <p>□ワザ</p> <p>□具体性</p> <p>□独自性</p> <p>□見通し</p>	<p>先生のチェック</p>	

【資料2】「読むこと」部会で作成した基本となる振り返りシート

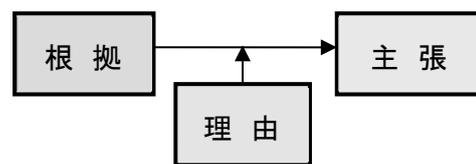
この振り返りシートには、上段に「今日の見通し」を、中段に「今日の振り返り」を書く欄が用意されている。ここに生徒は毎時間の学びを記録し、教師に提出する。

そして、教師は生徒の記述に対して直接コメントをしたり、左下のチェック基準を満たしていれば「先生のチェック」欄に記入したりして生徒に返却するという仕組みになっている。これを基本の形とし、各授業者が学校や生徒の実態に応じたシートを作成し、使用していくという形を取った。

## 2 視点② 考えを深めるための協働的な学びの場の設定

視点②について、「正確にテキストの内容を読み取るとともに、それをもとに自分の考えを形成する資質・能力」を育成する上で、他者との協働的な学びの場は非常に大切である。なぜならば、自らの読みと他者の読みを交流させることで、より質の高い読みを形成することができるからである（佐藤佐敏，2013）。

この点に関しては、論理的思考・表現のモデルである「根拠・理由・主張の3点セット」（鶴田清司，2017）（【資料3】）の活用を行ってきた。鶴田氏によると、自分の「主張」を他者に分かりやすく伝えるためには、客観的な事実である「根拠」と、どうしてその根拠から主張を導けるのか、「理由」を示すことが大切である。これを意識して話すことで、互いの考えがより明確になり、交流が活性化するのである。そのため、授業中の発問等もこれを意識して作っていくのが望ましいと考えた。



【資料3】「根拠・理由・主張の3点セット」

## 3 視点③ 学びの質を高める「思考のキーワード」

「読むこと」部会では、「思考のキーワード」（【資料4】）は、「自分の考えを形成する」際に重要であると考えている。生徒が自分の考えを形成するためには、テキストと自分の考えを〈比較〉したり、自分の経験から〈類推〉したりすることが欠かせない。

しかし、単に授業を行っているだけでは、生徒たちは自分がこれらの思考を使っていることを意識できない。そこで、教師がこれらのキーワードを常に意識しておくことで、生徒がそれらを使った時にすぐに価値づけられるようにしておいた。

思考	キーワード	
比較	共通点は 相違点は	複数の情報も比べて、共通点と相違点を抽出しようとする
分類	この視点で分けると	複数の情報も、一定の視点をもとにして分けるようとする
関連	これらを関連付けると	複数の情報も、共通点などを抽出し結びつけるようとする
類推	似たようなことから推測すると	ある情報をもとにして、類似性のある情報も予測しようとする
一般	これらのことから	具体的な情報も、抽象的に一般化できるようにする
具体	例えば	抽象的な情報も具体的な情報にするようとする
多面	他の視点から	考えを多面的に捉え、複数の視点から捉えようとする
統合	まとめると	複数の情報を合わせて、新しい情報を生み出そうとする
批判	本当にそう言えるのか	情報の正誤、強さ、適切性について疑いを持とうとする
反証	反対の例を示すと	自分の考えと相反する例を提示し、考えを確かめようとする

【資料4】「思考のキーワード」

## III 研究の実際

### 1 説明的文章の実践例

「説得力のある意見文を書こう！～コロナ禍の今、私たちに出来ること～」

#### (1) 単元のねらい

本単元では、新しく出会う本文を読み深めるための見通しを自ら立て、筆者の工夫について他者と話し合いながら読み取ることができる力や、筆者の文章の内容や論理の展開の工夫を読み取り、それらを踏まえて自分の考えを意見文として表現することができる力の育成を目指している。そのため、「コロナ禍の今、私たちに出来ること」というテーマについて自分たちの意見をまとめ、文章の構成や展開を考えて説得力の高い意見文を書くという言語活動を設定した。世界中が未曾有の災害

に見舞われている今、自分たちにできることを考えさせる課題を設定することで、主体的に「読むこと」の学習に参加させるとともに、自分の考えを形成する力を育成できると考えた。

単元の中では、「オオカミを見る目」と「スズメは本当に減っているか」という二つの説明的文章教材を用いる。前者の教材からは、説明的文章の構成の基本となる「序論・本論・結論」という枠組みと、本論の中には筆者が選び抜いた事例が書かれているということを学ばせた。後者の教材からは、説得力のある文章にするためには、根拠を複数挙げて説明することが有効であるということ学ばせた。本単元と研究の視点との関係性を下に示す。

### 視点① 学習意欲のサイクルを生み出す「見通しと振り返り」

- |   |
|---|
| ① 単元を通した見通しと振り返り<br>→「コロナ禍の今、私たちに出来ることは」というテーマで説明文を書くという見通しのもと、説明文を書いた後での振り返りをまとめる。 |
| ② 毎時間の授業における見通しと振り返り<br>→毎時間の「振り返りシート」に、その時間の見通しと振り返りを書く。                           |

### 視点② 考えを深める協働的な学びの場の設定

- |   |
|---|
| ①「主張・根拠・理由」の3点を意識した話し合いが行えるように、「序論はどこまでか」のような主張を限定した発問を行う。      |
| ② 自分の「主張」を発表させる際、本文の言葉を「根拠」とした上で各自の「理由」を発表させることで、互いの読みを共有させていく。 |

### 視点③ 学びの質を高める「思考のキーワード」

- |   |
|---|
| ①「オオカミを見る目」では、〈比較〉や〈一般〉などの思考が使われていることに気づかせる。      |
| ②「スズメは本当に減っているか」では、〈批判〉や〈多面〉などの思考が使われていることに気づかせる。 |

以上の視点に留意し、次のように単元を計画していった。

## (2) 単元計画 (13 時間扱い)

次	時	学 習 活 動
1	1	・「コロナ禍の今、私たちに出来ることは」というテーマで意見文を書くことを告げ、既習内容を想起させる。
	2	・「オオカミを見る目」の全文を読み、この文章の序論はどこからどこまでか考える。
	3	・「ヨーロッパと日本の違い」と「日本でのイメージの変化」という二つの問いに対する答えを確認する。
	4	・この文章の結論はどこからどこまでか考える。
	5	・「オオカミを見る目」を読んだの納得度をまとめ、発表し合う。
2	6	・「スズメは本当に減っているか」を⑧段落まで読み、「スズメは減っている」と結論づけて良いかどうか話し合う。
	7	・⑬段落までの本文を読み、「スズメは減っている」と結論づけて良いかどうか話し合う。
	8	・⑯段落までの本文を読み、「スズメは減っている」と結論づけて良いかどうか話し合う。
	9	・「スズメは本当に減っているか」の納得度をまとめ、発表し合う。

3	10	・自分の意見文の根拠となる情報を収集し、意見文を書き始める。
	11	・「コロナ禍の今、私たちにできることは」というテーマについてタブレット上で意見文を書く。
	12	・タブレット上で意見文を推敲し、内容を修正する。
	13	・タブレット上で互いの文章を読み合い、評価し合った後、提出させる。

第1次で「オオカミを見る目」の学習を行い、第2次で「ズメは本当に減っているか」の学習を行った。その上で、第3次ではタブレットを使って意見文書きを行った。

### (3) 授業の実際（生徒名は全て仮名）

#### ① 第1次の学び

1次では、「コロナ禍の今、私たちにできることは」というテーマで意見文を書くことを告げた後、「オオカミを見る目」の学習を行った。この教材は、比較的捉えやすい「序論（①～④段落）本論（⑤～⑮段落）結論（⑯～⑰段落）」の構成になっており、説明文の基本の構成を教えるのに適した教材である。そこで、「序論はどこまでか」と「結論はどこまでか」という発問を中心に据えて、文章構成を捉えさせていった。

まず、「序論はどこまでか」という発問に対して、主に「④段落まで」という意見と「⑤段落まで」という意見に分かれた。

「⑤段落まで」という生徒の意見は、「⑤段落には具体例の前置きが書かれているので、⑥段落から本論が始まっている」というものであった。しかし、話し合いの中で、翔太という生徒が「④

に問いかけが2つあって、その答えを⑤と⑪で答えようとしているから、⑤はすでに本論だ」という意見を述べたことで、多くの生徒が意見を改めていった。

この学年の生徒には、4月から継続してワークシートに考えを書かせる際には「必ず根拠に線を引き、理由を自分の言葉で書きなさい」という指導を行っている。翔太の意見は、他の生徒が気づいていないような根拠からの意見であったため、説得力があった。翔太の意見を受け、この時間の最後に彩奈という生徒が書いた振り返りシートの記述を以下に示す。

（第2時の振り返り）今日は、序論がどこまでかをみんなで発表し合いました。結果、翔太くんが④の問いを⑤と⑪で答えていると発表して、序論は④段落までとなりました。私は外れてしまったけど、⑤段落目は⑥の前おきという考えには変わりなかったと思うので発表もできたし、結果は悔しかったけどまあ良かったです。次回は、④の問いの答えについて考えていきたいです。



「オオカミを見る目」文章構造図（私案）

この彩奈の振り返りからは、皆で根拠と理由を話し合うという協動的な学びの場が、彩奈の考えを深めていっていたことがわかる。

教師が毎時間振り返りシートのチェックを行っていることで、ほとんどの生徒は、彩奈のように具体的かつ次の授業の見通しまで踏まえた振り返りを書いてくる。「チェックが全て埋まれば花丸がもらえるよ」という声かけをしているので、花丸を目指して、振り返りの5分間はいつも一生懸命にシートを埋めようとしていた。その結果、「学んだこと」だけでなく、それに至る「考え方」まで自然に記述する習慣がついてきているのを感じる。

続いて、第3時・第4時における彩奈の振り返りシートを示す。

(第3時の振り返り)今日は、問いの答えについて考えました。日本のオオカミに対する意見は、最終的に神から害獣となっていたのでかわいそうに思えてきました。また、今日は比較して考えることを習い、小学校のちょっとした作文と同じだったので、これからもよくまとめられるように頑張りたいです。

(第4時の振り返り)今日は、本論がどこまでかを考えました。私は⑩までだと思っていたけれど、⑩には問1と問2のまとめが書いてあり、私の答えはまちがっていたけど、途中から結論はまとめと考えが書いてあることに気づけて良かったです。(中略)次回は主張の納得度についてみんなでも考えたいです。

ここからは、第3時で〈比較〉という思考について改めて学び、第4時で〈一般〉という思考について学んだことがわかる(彩奈は「まとめと考え」という言葉で記述しているが、授業の中では〈一般〉という言葉にも触れて⑩段落の役割について指導している)。

このような学習を通して、第1次の学習では、単元の最後に意見文を書くというゴールに向けて「①説明文の基本的な構成(序論・本論・結論)②主張を述べるための問いや具体例の出し方③〈比較〉や〈一般〉などの思考の有効性」という3点を学ぶことができた。

## ② 第2次の学び

2次では、「スズメは本当に減っているか」の学習を行った。この教材は、根拠となる事実が図表やデータで示されており、視覚的に分かりやすい文章である。また、筆者はそれらの事実を多面的に考察し、複数の根拠を出すことで出来る限り多くの読者に納得してもらえるように工夫している。そこで、「スズメは減っていると本当に言って良いかどうか」という発問を中心に据えて授業を行った。

ここからは、彩奈の第7時から第9時の「見通し」と「振り返り」の記述を繋がりで見たい。

(第7時の見通し) 図やグラフのデータに着目して、「スズメが減っている」と言えるかどうか考える。

↓

(第7時の振り返り)今日は、第二のデータをふまえてスズメが減っているか考えました。(中略)私は虫が増えてそれを食べていると予想し、みんな考えていなかった所以我ながらに満足です。それでも作者はスズメが減っていると言っているのだから、読者の考えを先読みするのはすごいワザだと思います。

↓

(第8時の見通し) 筆者の反論の仕方に着目して、スズメが減っていると考えるかどうか考える。

↓

(第9時の振り返り)今日は、筆者のまとめを聞き、納得度はどのくらいか考えました。私は10%という低さで、理由は五つ用意しているけどどれも証拠不十分で絶対とはいきれなくて、100%の人は「五つもあるから」という意見で、そう考えるとそうなのかなと思いました。筆者が使ってきたワザとして、「多角的・多面的」という言葉も聞いて、聞いたことなかったけど、これから取り入れられたらいいと思いました。

振り返りシートの「見通し」の欄には、生徒がその時間に「どのように考えていくか」を書かせるようにしている。（生徒に全て考えさせることもあれば、一部だけ考えさせることや教師側から全て提示することもある。）

彩奈は、第7時の見通しでは「図やグラフのデータ」に着目していたが、振り返りでは「読者の考えを先読みするのはすごいワザ」と、筆者の多面的・〈批判〉的な思考に着目している。その結果、第8時の見通しでは「筆者の反論の仕方」に着目した見通しを持つようになった。これによって、第9時の振り返りで、筆者の用いている〈多面〉の思考が参考になったという振り返りをしている。ここから、毎時間の見通しと振り返りが上手く繋がり、彩奈の新たな学びに繋がっていたことがわかる。

このような振り返りの記述は、毎時間の最初に数名発表させ、全体に共有することになっている。これによって、前時の振り返りになるとともに、本時の見通しを持つことにも繋がっていると感じる。

以上のように第2次の学習では、意見文を書くため、「①根拠となるデータ（図表）を出すことの有効性 ②根拠となるデータを多角的に見ることの有効性」の2点を文章から読み取ることができた。



毎時間の振り返りの発表の様子

### ③ 第3次の学び

第3次では、これまでの学びをもとに説明文を書くという活動を行った。その際、「オオカミを見る目」で学んだことと「スズメは本当に減っているか」で学んだことをまとめた評価規準を生徒に示した（【資料5】）。

その結果、これらの評価規準を説明文の中に取り入れ、しっかりと序論・本論・結論に分かれた意見文を書くことができていた。下線は、彩奈が〈多面〉という思考を意識したと思われる部分である。

#### 今回の評価基準

「オオカミを見る目」で学んだこと

- ・「序論」…話題提示や問い
- ・「本論」…具体例や根拠となる事実
- ・「結論」…まとめや考え（主張）
- ・主張を言うために必要な問いや具体例を出す

「スズメは本当に減っているか」で学んだこと

- ・根拠となるデータ（図表やグラフ）を出す
- ・そのデータを「こんな可能性もないか」と多角的に見る

【資料5】生徒に示した評価規準

（彩奈が書いた説明文の一部）

まず私たちが今出来ることは、広げない・取り入れないことです。そのためにはどのような事をすれば良いのでしょうか？

コロナウイルスにかからないためには、飛沫感染を防ぐことが最も重要になってきます。そこでマスクをすることで感染を防ぐことができます。下記を見てください。どのマスクが効果があるか示したものです。この結果を見ると、最も防げるマスクは不織布マスクだということが分かります。ただ、手作りマスクでも十分に防ぐ事ができます。ですから、マスクをつけることが、コロナウイルス感染を少しでも防ぐために私たちが今出来る事なのです。

ところが、実際にマスクを着用して熱中症になる確率が上がるといった意見もあります。東京などの、全国救急搬送人員が昨年と比べると多くなっています。特に夏は、マスクをつけることによって体温が上がり危険です。そのため、暑い日はマスクを濡らして使うなどの対策をする事が出来ます。

ここでは、「マスクは大切」という自分の主張を述べるために、マスクに対して〈批判〉的な立場の意見を出し、多面的に考察できていることがわかる。

#### (4) 実践後の考察

本実践から、振り返りシートを使って毎時間の見通しと振り返りを丁寧に行うことで、「考え方」についての学びが促進されることが実感できた。特に彩奈の事例からは、前時の振り返りの際に「考え方」を意識できると、それが次時の見通しに繋がり、さらに次の振り返りにも繋がっていくことが明らかになった。ただし、「考え方」についての学びは1人で成し得るものではない。互いの振り返りの共有や、「根拠・理由・主張の3点セット」を用いた互いの考えの共有があって初めて、新たな発見や学びが促されていくのである。

しかし、実践を行う中で、1年生段階では自力で見通しを持てる子もいるが、持てない子も多いという課題も見えてきた。また、毎時間の振り返りは効果的に行えたものの、単元を通した振り返りをどのように行うかについては、まだ検討の余地が残った。

## 【読むこと部会】第3学年国語科学習指導案

(新しい国語3 東京書籍 p 62～71「絶滅の意味」 p 105～113「観察・分析して論じよう」)

授業者 熊本市立城西中学校 教諭 杉崎 勢

### 1 単元構想

<p>社会生活での理想の姿</p> 	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自ら課題に対して主体的に関わり、解決するための方策を他者と関わり合いながら考え、実行できる。</li> <li>・様々な文章を読んでその内容を正確に読み取るとともに、それをもとに自分の考えを形成することができる。</li> </ul>		
<p>単元名</p>	<p>2020年、君は「生物の絶滅」について、どう考えるか？</p>		
<p>本単元でめざす子どもの姿</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・新しく出会う本文を読み深めるための見通しを自ら立て、既習の説明的文章や自らが書いた意見文と、本文の内容や文章構成を比べながら読むことができる。</li> <li>・筆者の文章の内容や論理の展開の工夫を理解し、それを踏まえて自らの説明文をより説得力のあるものに更新することができる。</li> </ul>		
<p>単元の評価規準</p>	<p>知識・理解</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>①理解したり表現したりするために必要な語句の量を増やしている。(1)イ</li> <li>②文章の種類とその特徴について理解を深めている。(1)ウ</li> <li>③情報の信頼性の確かめ方を理解し使っている。(2)イ</li> </ul>	<p>思考・判断・表現</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>①「読むこと」において、文章の構成や論理の展開について評価している。(C(1)ウ)</li> <li>②「読むこと」において、文章を読んで考えを広げたり深めたりして、人間、社会、自然などについて自分の意見をもっている。(C(1)エ)</li> <li>③「書くこと」において、多様な読み手を説得できるように論理の展開などを考えて、文章の構成を工夫している。(B(1)イ)</li> </ul>	<p>主体的に学習に取り組む態度</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>①既習の説明文や自らが書いた意見文と比較しながら読みとりの見通しを立てようとしている。</li> <li>②説得力のある意見文になるよう、積極的に考えを文章にまとめようとしている。</li> </ul>
<p>単元の学習課題</p>			
<p>「生物の絶滅」について、未来を生きていく私たちの意見をまとめ、内容の吟味と構成の工夫を考え、学級の友達に向けて、より説得力のある意見文を書こう。</p>			
<p>学習前の姿(生徒の実態)</p> 	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の意見を持つ際に、他者の意見を参考にして、同じような意見になることが多い。本文の根拠に、自らの考えで理由をつけて意見を持つことに苦手意識を持っている。</li> <li>・説明的文章の学習に苦手意識を持っているが、説明的文章の学習は別の場面でいかせるという意識を持っている生徒が多い。書くことについて苦手意識が非常に高いので、書き方について学ぶ活動が必要である。(下記のアンケート結果分析より)</li> </ul> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>○説明的文章の学習は好きですか？</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・好き15.2% ・だいたい好き36.4% ・あまり好きではない39.4% ・好きではない9.0%</li> </ul> <p>○説明的文章で学んだことが、別の場面でいかせると思いますか？</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・思う33.3% ・だいたい思う51.5% ・あまり思わない15.2% ・思わない0%</li> </ul> <p>○400字詰め原稿用紙2～3枚の説明文や意見文を書くことは難しいと思いますか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・思う54.5% ・だいたい思う21.2% ・あまり思わない18.1% ・思わない6.2%</li> </ul> </div>		

## 2 単元について

本単元では、新しく出会う説明的文章を読むにあたり、読み深めるための見通しを自ら立てる力や、自らの意見をより説得力のある伝え方に更新していく力をつけることをめざす。

そのために、既習の説明的文章の構成や論理の展開を意識して「生物の絶滅」に対する意見文を書き、新しく出会う説明的文章と自らの意見文を比べながら読むことを通して、自らの意見の説得力を強化していくという単元を通した言語活動を設定した。

本校の生徒は真面目で丁寧であり、集中して授業に参加している。ワークシートやノートの記入、課題の提出もきちんとしている。また、生徒会活動やクラスの係や行事、部活動にも一生懸命取り組んでいて、労を惜しまない。しかし、その一方で、間違えることを不安に思い、発言をすることに対して、とても慎重である。発言する際も、単語での発言が多かったり、意見が完結せずにあいまいな思いを述べたまま場面が流れてしまったりすることがある。学校行事で新しいアイデアを出す場面や企画を考える際にも、前に発言した生徒に合わせて「同じです。」という発言をすることが多く、「同じです。」と言いつつも、本当は違った意見を持っていることが多々ある。国語科として、自らの意見を持つ力、持った意見を発信する力、発信した意見に説得力を持たせる力を伸ばしていきたいと感じた。

また、これからの社会生活の中で、新しいものに出会ったときに、今までに経験して自らの力になったものと比べながら、自ら見通しを立てて、新しい関わり方を構築していく力を身に着けていくことは、必要不可欠なものであると考える。

## 3 単元の系統

	第1学年	第2学年	第3学年
C 読むこと 構造と内容の把握 精査・解釈	オオカミを見る目 段落の役割や段落どうしの関係を捉える	鯉節一世界に誇る伝統食 文章の構成を捉え、要約する	絶滅の意味 説得力を高めるための論の進め方を捉える
	スズメは本当に減っているか 事実と筆者の考えを区別する	哲学的思考のすすめ 論証を吟味する	黄金の扇風機・サハラ砂漠の茶会 読み比べて自分の考えをまとめる
B 書くこと 考えの形成、記述	根拠を明確にして書こう 根拠を示す 読んで確かめ合う	反対意見を想定して書こう 反論を考える 分かりやすい構成で意見文をまとめる	観察分析して論じよう 複数の対象を比較する 説得力のある批評文を書く 批評文を評価する
本単元に関する「読むこと」の言葉の力	第3学年における「読むこと」の知識・技能を用いる単元(説明的文章)		
		絶滅の意味	黄金の扇風機・サハラ砂漠の茶会
i 文章の種類を踏まえて、論理や物語の展開の仕方などを捉える		◎	○
ii 文章を批判的に読みながら、文章に表れているものの見方や考え方について考える		○	◎
iii 文章の構成や論理の展開、表現の仕方について評価する		○	◎
iv 文章を読んで考えを広げたり、深めたりして、人間、社会、自然などについて自分の意見をもつ		◎	○

上記の表は、第3学年で取り扱う「読むこと」の知識・技能を整理したものである。「◎」は重点項目、「○」は副次的に用いたり、身につけているかどうかを確認させたりすることを意味している。

#### 4 研究の視点に沿った授業の工夫

##### (1) 視点① 学習意欲のサイクルを生み出す「見通しと振り返り」

「見通し」をもたせる手立てとして、既習の説明的文章の論理の展開と〈比較〉しながら本文を読ませることと、「絶滅してもいい生物もいるのではないか」というインターネット上の意見と出合わせ、自ら意見文を書かせることを行う。「絶滅の意味」には、既習の文章にはない論理の展開があり、それを自らの意見文に生かしていくという意識のもとで本文と出合わせることで、見通しと学習意欲を生み出させる。また、毎時間の終わりに、自らの学習を振り返り、どのような力が身についたか、その力が今後どのように生かしていけるか考え実践する時間を単元の最後の時間に設定する。自らの意見の説得力を強めるためにはどのような工夫をすればよいか、本文からその工夫を学ぶとともに、自らの意見と〈比較〉することで、より内容の理解も深まると考えた。

##### (2) 視点② 考えを深めるための協働的な学びの場の設定

各自が書いた意見文を班で読み合い、お互いの意見の内容や論理の展開についての意見を交流することで、自らの気づきが確かな力となるように仕組んでいきたい。既習の事項を振り返る自己との対話で終わることなく、筆者、他者との対話から生まれた気づきを踏まえて、自己との対話へと帰り、自らの意見に説得力を持たせる新しい論理の展開を獲得し、それを活用した上で、互いに評価し合う場を設定したい。自らの工夫を自らが意識し、互いにそれを認め合うことを通して、自信を持って、今後もその力を活用していけると考えた。

##### (3) 視点③ 学びの質を高める「思考のキーワード」

本単元では、文章を読み、意見を交流する中で〈比較〉〈類推〉〈具体〉といった様々な既習の思考を用いる。今回は、21 段落以降に筆者が用いた〈反証〉による説得力の強化を特に気付かせていくように、学習活動を組み立てていきたい。

#### 5 単元の学習活動と評価計画

次	時	学 習 活 動	評 価
1	1	・インターネット上の「絶滅しても良い生物がいるのではないか」という意見に出会う。 ・絶滅した生き物について調べ、関心を深める。	振り返りシート 【知①】 【思②】 【態②】
	2	・「生物の絶滅」についてどう思うか意見文を書く。 ・既習の説明文の論理展開を想起し、意識して書く。	振り返りシート ワークシート 【知①】 【思③】 【態②】
	3	・互いに説明文を読み合わせる。 ・それぞれの立場がどのような根拠を出しているか、どのような論理展開の工夫をしているか評価する。	振り返りシート 【知②】 【思①】 【態①】
2	4	・10段落までの本文を読み、筆者の主張への「納得度」を話し合う。 ・自分が書いた説明文と常に比較させながら考える。	振り返りシート ワークシート 【知②】 【思②】 【態①】
	5	・20段落までの本文を読み、筆者の主張への「納得度」を話し合う。 ・自分が書いた意見文と常に比較させながら考える。	振り返りシート ワークシート 【知②】 【思①】 【態①】
	6 本 時	・最後まで本文を読み、筆者の主張への「納得度」を話し合う。 ・いったん自分の主張を述べた後、自分とは異なる主張への反論が書かれているという論理展開の工夫に気付く。	振り返りシート ワークシート 【知②】 【思①】 【態①】
3	7	・論理展開をさらに工夫し、自分の文章をより説得力のあるものに書き直す。	振り返りシート ワークシート 【知②】 【思③】 【態②】
	8	・互いの文章を読み合い、評価し合う。	振り返りシート 【知②】 【思①③】 【態②】

## 6 本時の学習（第6時）

### （1）本時の目標

文章を批判的に読みながら、筆者のものの見方や考え方を捉えるとともに、文章の論理展開の工夫に気付くことができる。

### （2）本時の展開

過程	生徒の学習活動	形態	教師の指導・評価	備考		
導入 (5分)	1 前回までの学習を振り返り 本時の課題を知る。	全体	<ul style="list-style-type: none"> <li>・振り返りシートをもとに前時の学習を振り返らせる。</li> <li>・本文に続きがあり，その必要性について考えていくことを告げる。</li> </ul>	振り返りシート		
展開 (3分)	<table border="1" style="width: 100%;"> <tr> <td style="width: 15%; text-align: center;">課題</td> <td>2 1段落以降を読んで，筆者の主張に対する「納得度」を考えよう。</td> </tr> </table>	課題	2 1段落以降を読んで，筆者の主張に対する「納得度」を考えよう。	全体	<ul style="list-style-type: none"> <li>・音読の前に，2 1段落以降の必要性を考えるにあたり，どのようなことに着目すれば良いかを生徒に考えさせる。</li> </ul>	振り返りシート
課題	2 1段落以降を読んで，筆者の主張に対する「納得度」を考えよう。					
(10分)	3 2 1段落以降を読み，おおまかな内容を捉える。	個人	<ul style="list-style-type: none"> <li>・2 1段落以降を音読し，各段落の内容を簡単に確認していく。</li> <li>・最後まで読んでも筆者の主張は変わらず，2 0段落までで筆者の主張は伝わることを確認する。</li> </ul>			
(24分)	4 2 1段落以降の効果について話し合う。	個人 ↓ 全体	<ul style="list-style-type: none"> <li>・話し合いの中で2 1段落以降が筆者と異なる考え方を持つ人を納得させるために配置されていることに気付かせる。</li> <li>・話し合いの中では，自分が書いた説明文と比較した意見が出るように思考を促すようにする。</li> </ul>	ワークシート		
まとめ (8分)	5 本時の学習を振り返り，次時への見通しを立てる。	個人	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>〈 評価規準 〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・21 段落以降の内容を吟味し，文章の構成や論理の展開について評価している。</li> <li>【思】 / ワークシート</li> <li>・読み取った内容や構成の工夫を自ら書いた意見文に活かす見通しを立てている。</li> <li>【態】 / 振り返りシート</li> </ul> </div>	振り返りシート		

### (3) 授業の実際

#### ① 第1次の学び

1次では、「生物の絶滅」について意見文を書くことを告げた後、インターネットで調べ学習を行い、意見文を書く学習を行った。意見文を書く前に、既習の説明的文章の論理の展開を想起する発問を行った。特に、1年時に学習した「オオカミを見る目」の「序論・本論・結論の役割」、「スズメは本当に減っているか」の、「根拠となるデータを出すこと」や「多角的にデータを見ること」について触れた。

絶滅した生物について調べ、関心を高めていく中で、「絶滅してほしい生物がいる」という意見と「どんな生物も絶滅させてはいけない」という意見に分かれた。また、意見文の最後に、どのような論理の展開の工夫をしたかをまとめる欄を作り、意識して工夫ができたかを自ら考えさせた。菜々子という生徒は、調べたことをどのように書けば納得してもらえるかを振り返りシートにまとめていた。以下に振り返りシートを示す。

(第1時の振り返り)

私は今回、蚊について調べている。一見、じゃまで人間に悪影響を及ぼす蚊であるけれど、調べてみると、絶滅してしまったら、生態系に影響を及ぼしたり、食べ物がなくなったりと絶滅してはだめな理由がいくつもあった。一部の蚊は病気の原因になるものは絶滅してほしいけれど、それ以外のものはしてほしくないと感じた。次は文章をまとめるので、家でもう少し情報を集めたい。

(第2時の振り返り)

蚊についての情報が集まったので、作文の作成に取り掛かった。私は本論に蚊がいなかったら困る理由として、みんなが聞いたら、「あ、困る！」となるようなものを書いた。また、長い説明では文章の把握がしづらいので、最後あたりに文をまとめるようにした。今回は特に接続語に気を付けながら書いた。次回は他の人の意見を聞いて、様々なワザを取り入れたい。

(第3時の振り返り)

私は長い本論のまとめ方について注目した。読んでいたらどれも本論の内容を読んでいる人に伝えやすくするために「つまり」を使ったり、本論の最初や最後に一言まとめてあった。また、根拠と結論を結び付けて、内容を明確にしているのをまねしたいです。本論のまとめ方と結論と本論の結び付け方をこれからまねして使っていこうと思います。

情報を集める中で、「絶滅してほしいものもいるが、絶滅してほしくないものもいる」という自らの意見が出てきた。このことをわかりやすく伝えるために、情報を集めた。その際、工夫したことは、具体例により読者の共感を得ることであった。また、本論と結論のつながりがはっきりすることを強く意識して書こうとしていることがわかる。そのことに焦点を当てて、他者の意見文の読み取りも行っていった。

このような学習を通して、第1次の学習では、最終的な意見文の完成に向けて、「①自らの立場を明確にすること②意見に説得力を持たせる工夫について意識すること」を考えた。第1次で書いた意見文には、主張の説得力を高めるための根拠と理由を明確にしているものや、複数のデータを用いているものがあつた。

#### ② 第2次の学び

2次で学習する「絶滅の意味」は生物の絶滅に反対する立場で書かれた説明文である。論理の展開としては、過去と現在の絶滅を〈比較〉して述べ、読者に危機感を持たせたり、具体例の提示を世界から日本へとより身近に感じる順で提示されていたりなど、様々な工夫が行われている。また、一度自

らの意見をまとめ、それに対する反論に対する反論を行うことで、より説得力を増す仕掛けが後半にされている。

本文を読むにあたって、文章を①～⑩段落、⑪～⑳段落、㉑～㉗段落に分けて読み進めた。1時ごとにひとつのまとまりを読み進め、授業前半は本文の内容把握を行い、後半は「筆者の考えに対する納得度は(前回と比べて)どうか」という発問について考えた。

1次で書いた、自らの意見文の内容と、筆者の意見を比べながら読ませることを通して、自らの意見文の更新につながることを目的として読み進めていった。比べる際に、意見の「内容」と意見の「述べ方」について着目するように促し、筆者と同じ立場で書いた子どもも逆の立場で書いた子どもも、論理の展開をより詳しく学習する場につなげ、自らの意見に説得力を高めるように授業を組み立てた。

ここからは、生徒の第4時から第6時の「見通し」と「振り返り」、またワークシートの記述を見ていきたい。

まとめ	具体例	比較	問い
10のよう、現代では、人間の行為が生物に大きな影響を与え、絶滅まで引き起こしている	8例は、オーストラリアにはワビワビという動物がいて、オーストラリアの動物園に飼われていたワビワビが死んでしまった。ワビワビは、オーストラリアの動物園に飼われていたワビワビの卵だけから生まれたワビワビで、現在その数は五十頭と推定され、絶滅が心配されている。	7これによって、現代の絶滅の原因は、中略これらは全て人間が引き起こしたものである。	4「このように、過去にも絶滅は起こっていることを考えると、現代の絶滅が『問題なのだろうか』か」
		6過去に起こった絶滅は、かなりゆっくりとしたスピードで起こったと考えられている。中略現代の絶滅は、速いスピードで起こっていると考えられている。中略現代の絶滅は、速いスピードで起こっていると考えられている。中略現代の絶滅は、速いスピードで起こっていると考えられている。	5現代の絶滅と過去の絶滅の大きな違いは、そのスピードと原因である。

主張	事例の順序	問い	まとめ	問い
20このように、多様な生物が形成する生態系は、私たち人間にも大きな影響を与えている。人間の影響のなかでも、絶滅させてはならないのである。	16第一に、生態系は、光合成により酸素を生産し、土壌を肥やし、生物を育てる。水も供給している。また、私たちが生きる上で必要とする多くの生物は、生態系によって支えられている。生態系は、私たちが生きる上で必要とする多くの生物を育てている。生態系は、私たちが生きる上で必要とする多くの生物を育てている。生態系は、私たちが生きる上で必要とする多くの生物を育てている。	15生態系が私たち人間に与える影響は、具体的には何だろうか。	11では、このような生物の絶滅は、私たち人間に何か影響を及ぼすのだろうか。それについて理解するために、「生態系の仕組みについて知る必要がある」。	
	17第二に、生態系は、環境を浄化する働きを持っていて、そのために私たちが生きていくことができる。後略。生態系は、私たちが生きていくために必要である。生態系は、私たちが生きていくために必要である。生態系は、私たちが生きていくために必要である。		12生態系とは、ある地域に存在する生物と、それを取り巻く環境のことであり、土壌や水、空気など、全ての生物と、生態系は、私たちが生きていくために必要である。生態系は、私たちが生きていくために必要である。生態系は、私たちが生きていくために必要である。	

異なる主張への反論 (反証)	異なる主張
24そんな例として、ワビワビの話がよく知られている。中略一男一女が、結果として私たちが生態系全体に大きな影響を及ぼす可能性があるのだ。	21これに対して、絶滅してもかわらない生物もいるのではないかと主張する人もいる。絶滅しても生態系に大きな影響を及ぼさない生物も、人間におよぼす影響もたらさず、絶滅してもいい生物も、その根拠だ。
25もちろん、全ての生物がワビワビのように、生態系そのものに重要な影響を与えるわけではない。しかし、問題はどの生物が重要な影響を及ぼしているのかわからないという点である。	
26また、人間として有用な生物を絶滅させている。中略。生態系は、私たちが生きていくために必要である。生態系は、私たちが生きていくために必要である。生態系は、私たちが生きていくために必要である。	
27更に、富分け加えるなら、生物の絶滅は不可逆的である。一度絶滅した生物は、それを復活させることができない。絶滅してからの大切さについて述べている。	

【優子の振り返りシート】

(第4時の見通し) 自分で書いた説明文や友達の説明文と比べて、プロの説明文の良いところ、工夫点を見つける。

↓

(第4時の振り返り) 主張に対して、納得しない人たちの発表を聞いて、私も納得できないなと思いました。筆者の人が言っていることも分かるけど、人間に対して生物からの影響が書かれていないので自分の考えも変わりました。

第4時までで読み取った本文には、「生物を絶滅させてはいけない」という筆者の主張を強めるために挙げられている例が、「人間が生物に与えてきた影響」しかなかった。優子はそのことについて述べたクラスメイトの意見を取り入れ、具体例の挙げ方について自らの知識を広げた。「筆者の良いところ、工夫点を見つける」という見通しを持って臨んだ学習で、筆者の例の出し方について、自ら考えを更新していったことがわかる。

(第5時の見通し) 続きを読んで、筆者が挙げる例に意識してそれに対して意見を持つ。

↓

(第5時の振り返り) 文章を読んだら納得するけど、他の人の話を聞くと納得できなくなります。行ったり来たりで全然自分の考えがまとまりません。私は嫌いな生き物だけ絶滅すればいいと思います。植物はないと酸素がなくなるし、虫がいないと植物が増えないし、いないといけない生き物もいるので難しいなと思います。続きが早く読みたいです。

第5時では、「生態系と人間のつながり」に触れて筆者が主張を強めていた。優子は「生態系とのつながりのない生物だけ絶滅すればいい」と思っているが、「生態系と人間のつながり」を例に挙げた筆者の文章や他の生徒の意見を聞き、今までの自分の考えを揺さぶられている。答えが出ない状況が、「早く次を読みたい」という学びに向かう意欲を生み出したと考えられる。

(第6時の見通し) 最後を読んで、前回と比べて納得度が高くなったのか考える。納得するために書かれている筆者の工夫を見つける。

↓

(第6時の振り返り) 私はプロの説明文を読んで、次回、書き換える時、生物の具体例を取り上げたいと思います。そして、その例は「〇〇の可能性」や「〇〇かもしれない」などの言葉を使わずに、はっきり言い切るようにしたいです。そのために、グラフや図を使おうと思います。

第6時は、筆者が、自分の主張に対する意見に反論を述べることで、説得力を高めている工夫がされている部分を読み取った。第6時の導入では、優子の「私は嫌いな生き物だけ絶滅すればいいと思います」という意見をクラス全員で共有した後に本文に入った。優子は、前時で「生態系とつながりがなくない生物だけ絶滅すればいい」と考えていた。そのことに対する筆者の反論が②段落から説明されていたが、優子はそれでも十分には納得できなかったのだろう。クラスでの話し合いの中で、優子は「②段落以降に反論があるのはわかりますが、「可能性」や「かもしれない」という言葉が多く、その具体例が示されているわけでもないので完全には納得できません」という趣旨の発言を行った。

この優子の発言に大きな影響を受けた生徒の一人に、藍という生徒がいる。藍のワークシートのまとめを以下に示す。

#### 【藍の第6時のワークシート】

本文を読み、筆者の主張に対して、前回と比べて納得度が変わらない。

(その理由)

- ・人間側に立った一方的な考え(動物を守る)しか述べられていない
- ・いきなり未来の話をされても困る→これからどうすればいいのかわからない

↓

ある生物が絶滅した後、生態系がどうなったのか、筆者は、絶滅したあとの生態系がどうなったかを例として入れた方がいいと思う。

#### 【藍の振り返りシート】

(第6時の振り返り)

私は筆者の意見に納得できませんでした。(中略)けど、ラッコの例のように、人間側に対してデメリットを書くことで、意識を変える働きがありました。優子さんの意見で、(筆者の意見が)はっきりしていないことに賛成です。次回は自分の作文にも生かしたいと思います。



主張に対する納得度を発表する様子

藍は、振り返りシートで「人間側に対してデメリットを書くことで、意識を変える働きがありました」と、筆者の使っている論理の工夫を認めている。しかし、優子の意見にも強く納得させられたのだろう。「優子さんの意見で、（筆者の意見が）はっきりしていないことに賛成です。次回は自分の作文にも生かしたい」とも記述している。筆者の工夫をしっかりと理解した上で、さらに読者が納得するための工夫を考え、付け加えを行っていることがわかる。

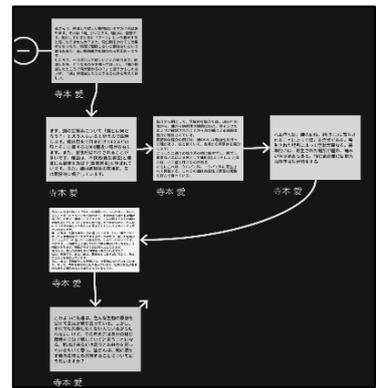
第一次の中で、自分たちで「絶滅」に関する説明文を実際に書いたからこそ、生徒は筆者の考え（論理）と自分の考え（論理）を〈比較〉することができた。その上で3点セットをもとにした意見の交流を行ったことで、このように筆者の論理を超えていく学びが生じたのだと考えられる。

### ③ 第3次の学び

3次では、これまでの学びをもとに1次に書いた意見文を書き直すという活動を行った。学習アプリを使用し、序論・本論・結論にシートを分けてつなげて作成するようにした（【資料6】）。

筆者の論理の展開方法を自らの意見文に生かして新たに構成を変える生徒や、論理の展開方法は変えずに、より具体的な根拠を新たに示す生徒もいた。その際、「絶滅の意味」で学んだことを含め、今までに学んできた論理の展開の工夫を意識化して書き直すことができていたかを評価規準とした。

藍が書いた1次の意見文と第3次に書き換えた意見文を比べながら考察していきたい。



【資料6】生徒が作成した意見文

#### （第1次に書いた作文）一部抜粋

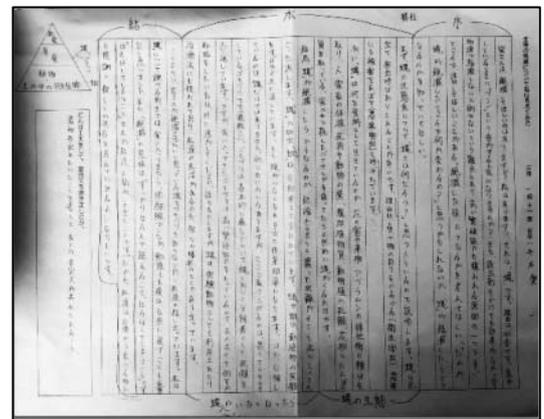
皆さんは、絶滅してほしい生物はいますか。私はいます。それは、「蠅」です。理由は羽音です。集中しているときに「ブーン」という音がすると気になりませんか。また、殺虫剤をかけても効果がなかったり、物理的に駆除しないと倒せないという難点もあり、高い繁殖能力も嫌われる原因の一つです。ところで注目してほしいことがある。絶滅した後、どうなるかを考えてほしい。「たかが蠅が絶滅したところで何か変わるの」と思うかもしれないが、「蠅」が絶滅したらどうなるのかを知ってほしい。

まず、蠅の生態系について、「蠅とは何だろうか？」

と思う人もいるので説明します。蠅は昆虫で、害虫と呼ばわりされることが多いです。食べ物の周りをぐるぐる（衛生害虫）、農業にも被害を及ぼす（農業害虫）と呼ばれています。

次に、「蠅」は何を食料として生きているのか、花の蜜や果物、アブラムシの排泄物=糖分をとり、人、家畜の体液、歯肉や動物の糞、不快植物質、動植物の死骸、花粉=タンパク質をとっている。だから、家の中で、熟したバナナとかを放ってたら、必然的に蠅がくるわけです。

結局、「蠅」が絶滅したら、どうなるのか、結論から言うと、腐った死骸がそこら辺にたくさんごった返します「蠅」の幼虫「蛆」は分解者とも言われています。蠅や蛆は、動植物の死骸を素早く土に返しています。もし蠅がいなくなれば10分の1の作業効率になります。（中略）蠅は、実験動物としても利用されたり、治療法にも使われており、私たちの生活があるのも、彼らの犠牲の上で成り立っています。（後略）



実際に藍が書いた意見文

序論で「蠅が絶滅してほしい」と思いつつ、「絶滅した後、どうなるかを考えてほしい」と、絶滅に反対する立場を出している。その根拠として、「蠅の分解作用」と「実験動物としての利用価値」を挙げている。このままでも藍の主張には筋が通っているが、蠅の「説明」「嫌なところ」そして「恩恵」などが混在して述べられていた。

次に3次の学習で藍が書いた意見文を示す。

(第3次に書いた作文) 一部抜粋

まず、蠅の生態系について「蠅とは何だろう?」と思う人もいると思うので説明します。蠅は昆虫で日本だけで60ほどの科とそこに属する3,000種近い種が存在します。また、害虫と呼ばわりされることが多いです。理由は、不快感(衛生害虫)と農業にも被害を及ぼす(農業害虫)と呼ばれています。また、蠅は病原体を直接的、又は間接的に媒介しています。

媒介する例として、間接的な媒介では、1990年以降から、蠅から病原性大腸菌(O157)、鳥インフルエンザが確認されたことから再び蠅による病原体媒介が着目されています。直接的な媒介の例では、蠅の中には吸血性を持った種があり、蚊と似ていて、皮膚から病原体を媒介します。こうした二通りの媒介系の他に衛生学上、医学上重要なハエによる害として蠅蛆症(ようそしょう)または、ハエ症と呼ぶものがあります。

おもにこれは、クロバエ科、ニクバエ科に寄生されて発症する。これらの蠅は肉食性で家畜の死骸を好んで食べています。ハエ症とは、蠅の幼虫、蛆(うじ)に寄生されることによって起こる症状である。寄生された場所によって症状が異なる。基本的には、寄生された場所が腫れ、痛みが伴う場合もある。特に畜産業には重大な経済損失が発生する。

今までの文章を読んで「あれ?作者、蠅の悪いところしか書いて無いじゃん」と思った人もいるかも知れない。読者の言う通り私は蠅の存在がこの世で一番嫌いです!ですが、こんな調子で自分の嫌いな物を消してしまったら後から取り返しがつかないので、どんなにちっけな存在でも私たちに恩恵をもたらしてくれることを今から紹介します。

序論は1次に書いたものと同様の内容であったが、本論に書いている内容が大きく変更されている。単元を通して学んだことを使い、第3次に書いた意見文では本論のはじめを「蠅による人間への被害」を中心にまとめていることがわかる。傍線部は、自らの論理の展開に疑問を持つ立場を予想して書いたコメントである。

藍は、この単元を通して、読み手が疑問に思いそうなこと、不満に思いそうなことを意識することを学び、自らの意見文に工夫を加えていた。また、「自らの意見に反論する人を納得させる」という意識を持って書いていると考えられる。書いている内容は第1次とは同じような内容であるが、単元を通して学んだ論理の展開の工夫と、筆者の具体例の挙げ方に付け加えた「はっきりと述べること」のおかげで、蠅が与える「人間への恩恵」がより際立つように書き換えられている。書き換えた作文の工夫点について、藍は「工夫した点は、具体例を増やし、はっきり書いたこと、否定の文章をはじめに書いておくと、後からの文章が美化されること」とまとめている。このことから、論理の展開や具体例の挙げ方を相手が納得するように意識して、使いこなそうとしていることがわかる。また、藍は「単元を通した振り返り」には次のように記述していた。

(単元の振り返り)

今回の授業で、反論に反論するという考え方に驚きました。自分も筆者の技を身に付けたいです。

筆者の文章から学ぶだけでなく、実際に自分で使ってみたことで、〈反証〉という思考方法を実感的に理解できたのだと考えられる。

#### (4) 実践後の考察

単元のはじめに、「生物の絶滅」について自ら意見文を書いたことが効果があった。自らの意見を持った上で本文に出会い、内容についてしっかりと考えることができていた。さらに、意見文を書く中で、具体例の挙げ方、内容、論理の展開について、困り感を持てたことが、より深く、教材と出会うきっかけになったと考えられる。「自らの意見文に説得力を持たせたい」という目的をもって教材と出会ったことにより、筆者が説得力を高めるために工夫した具体例の順序や内容を吟味し、論理の展開を学ぶことができた。自らが何気なく書いていた文章を読み直し、どのような順番で、どのようなデータを提示し、どのように述べることで自らの意見の説得力を高めたかを意識して取り組むことができていた。結果、「筆者の工夫の発見」を越え、「筆者の工夫に付け加え」まで行うことができた生徒もいた。

課題として、本文の内容の読み取りが不十分であったり、能動的に本文と出会えなかったりした生徒がいたということが挙げられる。すべての生徒が、自ら本文と対話し、学びを進めていけるように、基礎的基本的な読解力を高めていけるように、日々の学習を工夫し積み重ねていきたい。

## 2 文学的文章の実践例

「人物の描写をもとに自分の考えをまとめよう～メロスは勇者と言えるだろうか～」

### (1) 単元のねらい

本単元では、場面ごとの人物描写や情景などの表現に着目し、人物像や心情の変化をとらえることができる力や、展開や表現の工夫について、具体的な根拠を示しながら自分の考えをまとめることができる力の育成を目指している。そのため、「メロスは勇者だと言えるだろうか」というテーマについて、「人物の描写を中心に読み解き、自分の考えをまとめる」という言語活動を設定した。勇者だと考える立場と、そうではないという立場との意見の交流を通して、様々なものの見方、感じ方を通して「読むこと」の力を深め、自分の考えを形成する力を育成できると考えた。本単元と研究の視点との関係性を下に示す。

#### i 視点① 学習意欲のサイクルを生み出す「見通しと振り返り」

- |   |
|---|
| <p><b>ア</b> 単元を通じた見通しと振り返り<br/>→「メロスは勇者と言えるだろうか」というテーマであなたの考えをまとめるとい見通しを提示し、まとめた文章をもとに振り返りをする。</p> <p><b>イ</b> 毎時間の授業における見通しと振り返り<br/>→毎時間の「振り返りシート」に、その時間の見通しと振り返りを書く。</p> |
|---|

#### ii 視点② 考えを深めるための協働的な学びの場の設定

- |  |
|--|
| <p><b>ア</b> 自分の考えとみんなの考えを〈比較〉して考えやすいように、場面ごとの「メロスの勇者得点」をつけてグラフにまとめさせる。</p> <p><b>イ</b> 自分の「メロスの勇者得点」を発表させる際、本文の描写を「根拠」とした上で各自の「理由」を発表させることで、互いの読みを共有させていく。</p> |
|--|

#### iii 視点③ 学びの質を高める「思考のキーワード」

- |   |
|---|
| <p><b>ア</b> それぞれの場面では、自分の考えをみんなと〈比較〉することで、逆の立場の考えを自分の考えに活かすことで、考えをさらに深めさせる。</p> <p><b>イ</b> 最終的に考えをまとめる際には、自分の考えだけでなく、周りの意見も参考にしながら多面的に考えをまとめさせる。</p> |
|---|

以上の視点に留意し、次のように単元を計画していった。

(2) 単元計画 (6時間扱い)

次	時	学 習 活 動
1	1	・「走れメロス」の全文を読み、作品に対する感想をまとめ、疑問を挙げさせる。
	2	・本文を読んだ感想や疑問をもとに、「メロスは勇者と言えるだろうか」というテーマを提示し、城下町の場面でメロスはどんな人物か、考えをまとめる
	3	・王城での場面で、メロスと王様を比較しながら、それぞれどんな人物なのか考えをまとめる。
	4	・村に戻った場面で、メロスの行動やセリフから心情を読み取り、どんな人物か考えをまとめる。
	5	・王城に戻る場面で、メロスの行動やセリフから心情の変化を読み取り、どんな人物なのかまとめる。
	6	・刑場の場面でのメロスの描写をまとめ、「メロスは勇者と言えるだろうか」というテーマで自分の考えをまとめる

「メロスは勇者だと言えるだろうか」というテーマでまとめたみんなの考えは、掲示物にして紹介し、意見を交流できるようにした。

(3) 授業の実際

i 視点① 学習者の意欲を生み出す「見通しと振り返り」について

第1時に本文を通して読んだ際に、感想や疑問に感じたことを書いてもらった。生徒たちからは、「メロスはセリヌンティウスを信じ、セリヌンティウスはメロスを信じていたのがとても感動し、心に残りました。」というメロスに肯定的な意見と、「メロスはなんで途中で諦めようとしたのだろうか。」という否定的な意見との両方があがった。中には、「メロスの勇者感が一気になくなった。」という極端な意見もあり、メロスに対する様々な見方や考え方が出てきた。それらを紹介した後、「メロスは勇者と言えるだろうか」というテーマを提示し、自分の考えをまとめていくことを伝えた。

ただし、本文が長いのでいきなり全体を通して考えさせるのが難しいため、細かい場面に分けて考えさせるようにした。

The image shows two worksheets for the story 'Run, Meros'. Each worksheet has a table with 8 columns labeled '場面1' through '場面8' and a 'ページ' column. The first worksheet is titled '走れメロス 大塚治 二年(一)巻(前)' and the second is '走れメロス 大塚治 二年(一)巻(後)'. The tables are designed for students to record their observations and thoughts for each scene.

【資料7】実践に使用したワークシート

また、考えをまとめるときに文章だけだと曖昧な表現になり、周りの意見と〈比較〉することが難しくなるため、-5点~5点までの「勇者得点」とつけさせた。点数の根拠は、本文中の内容をもとにさせ、「根拠・理由・主張の3点セット」を意識させてまとめるようにさせた。【資料7】が実際に授業に用いたワークシートである。ワークシートで場面ごとの自分の考えをまとめることで、最終的には物語全体のメロスに対する考えが形成される。それをもとにテーマに対する考えをまとめることができるようにした。

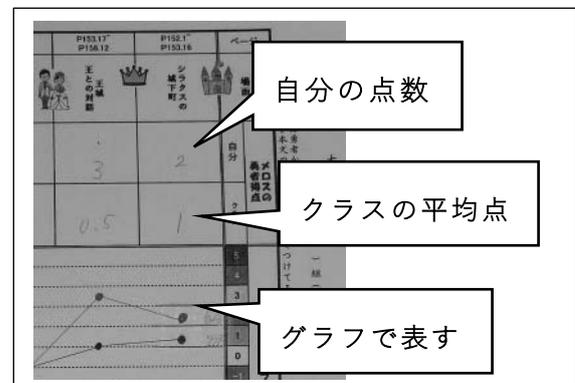
## ii 視点② 考えを深めるための協働的な学びの場の設定について

場面ごとにメロスに対する自分の考えをまとめる時には、以下のように授業の流れを設定した。

- ア その場面を読み、自分の考えを書く。(少なくとも点数はつける)  
 イ 周りのみんなと意見交流をして、考えをまとめる。  
 ウ 考えを発表した後、全員の点数の平均点を出す。  
 エ 授業の振り返りをする。

アとイの活動で、なかなか考えをまとめることができない生徒も、周りの意見を参考にしながら自分の考えを書けるようにした。また、ウの活動を入れることで、自分の考え(点数)がクラスの平均点に反映され、クラス全体の考えを組み立てる一助になっていることを実感できるようにした。

さらに、自分の考えとクラスの平均を〈比較〉することで、エの振り返りの際に自分の考えを顧みるポイントとなるようにした。様々な意見がある中で、自分の見方や考え方が揺さぶられることで、もっと良い根拠はないのか、他の見方や考え方ができないかと考えを深めていく姿が見られた。以下は、振り返りでの生徒の記述からの抜粋である。



生徒の記述例

- 自分はマイナスの面があったから-2点にしたけど、〇〇さんは+1としていた。また、人物像を考えると、情景、行動などを見ると良いと分かった。
- プラスの面しか思いつかなかったけど、老翁に対する態度や、王様を殺そうとしたことがマイナス面なんだということに気付いた。
- 自分は勇者得点は高かったけど、他の人はメロスの「生かしておけぬ。」等というところに反応してポイントが低かったのでびっくりしました。
- 自分は王と話しているときに死を恐れないメロスを勇者だと思っていたけど、結構勇者じゃないと思う人が多くて、平均もマイナスになったのが意外でした。

## iii 視点③ 学びの質を高める「思考のキーワード」について

単元の最後に、「メロスは勇者だと言えるだろうか」というテーマで自分の考えをまとめさせた。その際には、今までの学習で積み上げてきたワークシートにクラスの平均点や、友だちと意見交流した結果が反映されているので、様々な見方考え方をもとにして自分の考えをまとめることができた。以

下は生徒のワークシートからの抜粋である。

- 「勇者」としては99点、「人間」としては1点だと思う。自分の妹のために式を挙げたり、親友のために走ったことは、表面から見れば「勇者」として完璧に見えるが、親友を人質にするのは誰から見ても最低な人間だと思うだろう。さらに本文中にも「どうでもいい」と無責任なことを言っている。親友を人質にして何を言ってるんだと思った。これに対して、「挫折は勇者らしい」という意見を聞いて、それもそうだなと思った。映画や漫画でも良くあるシーンだ。(後略)
- 僕はメロスの勇者得点は75点と考えます。なぜなら僕の考える勇者が、単純で誠実で何があっても諦めずに負けないというものであり、メロスとは会わなかったからです。でも、単純で誠実というのは当てはまっていると思います。(中略)しかし、「そんな完璧な人間はいない。いくら勇者とはいえ人間であるから自分に弱いのは当たり前だ。」という反対の意見が出るかもしれないが、メロスは自分から友人を人質にしたのに、自分に言い訳をして諦めようとしたのだから、勇者以前に人としてどうなのかと僕は思います。

このように自分の意見だけにこだわるのではなく、多面的に物事を考えることができ、自分の考えをさらに深めるができた。

#### (4) 実践後の考察

成果として、生徒から出た疑問をもとにしてテーマを設定し、その内容に迫りながら学習を進め、振り返りシートで毎時間の振り返りを行うことで、生徒たちが主体的に学びに向かうことができた。また、意識的に意見を交流する場を設定することと、自分の考えが活かされるような授業展開を設定することでどうにかして自分の考えを確立させようと努力する姿が見られた。様々な見方や考え方ができるテーマをもとに授業を進めることで多面的な意見が出て、子どもたちの間に、どうにかしてもっと良い考えはないのかと意欲的に課題に取り組む姿が見られた。

課題として、実践を行う中で、場面ごとに考えをまとめる際に出ていた良い意見を活用せず、何となく最後の考えをまとめてしまう生徒も見られた。建設的に意見を組み上げることができるようになるためにも、単元を通した取組を通して力をつけていかなければならないと感じた。

## 【読むこと部会】第1学年国語科学習指導案

(新しい国語1 東京書籍 p.156～p.170「少年の日の思い出」, p.171・p.242～p.244「文脈を捉え、伏線に気づく」, p.203～p.208「作品のよさを表現しよう」)

授業者 大津町立大津北中学校 教諭 高宗 洋

### 1 単元構想

<p>社会生活での理想の姿</p> 	<ul style="list-style-type: none"> <li>小説や随筆、詩や歌詞などの表現を深く味わったり、話を聞いて相手の意図をくみ取ったりするときに、表現どうしの意味のつながりを捉えようとする姿。</li> <li>新聞や本を読んだり、テレビのニュース番組を見たりするときに、事実と考えを区別して理解しようとする姿。</li> </ul>																												
<p>単元名</p>	<p>作品を読み解いて、発見した魅力を伝えよう</p>																												
<p>本単元でめざす子どもの姿</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>物語を読むときに、自分が読み取ったことの根拠を考えたり、他の読み手の読み取ったことと比較したりすることを通して、文章をより深く理解する生徒 (C (1) ウ)</li> <li>作品の表現を根拠として整理し必要な材料を活用することで、感じたことや考えたことを分かりやすく伝える生徒 (B (1) ウ)</li> </ul>																												
<p>単元の評価規準</p>	<p>知識・技能</p>	<p>思考・判断・表現</p>	<p>主体的に学習に取り組む態度</p>																										
	<p>① 比較や分類、関係づけなどの情報の整理の仕方について理解を深め、それらを使っている。(2)イ) ② 原因と結果、意見と根拠など情報と情報との関係について理解している。(2)ア)</p>	<p>① 「読むこと」において、場面と場面、場面と描写などを結びつけたりして、内容を解釈している。(C (1) ウ) ② 「読むこと」において、場面の展開や登場人物の相互関係、心情の変化などについて描写をもとに捉えている。(C (1) イ) ③ 「書くこと」において、根拠を明確にしながら、自分の考えが伝わる文章になるように工夫している。(B (1) ウ)</p>	<p>① 読み取ったことの意味や効果について、場面や描写を関係づけながら学習課題に積極的に取り組んでいる。 ② 根拠を明確にしながら、自分の考えを分かりやすく伝えようと粘り強く取り組んでいる。</p>																										
<p>単元を通じた言語活動</p>																													
<p>「少年の日の思い出」を読み解いて、発見した魅力を鑑賞文にまとめ、伝え合おう。</p>																													
<p>学習前の姿 (生徒の実態)</p> 	<ul style="list-style-type: none"> <li>意欲的に学習に取り組む生徒が多い半面、苦手意識がある生徒が学習に取り組むまでに支援が必要である。(観察)</li> <li>教科書P.171に掲載されている「プリンが行方」をもとに行ったレディネステスト(記述式)の結果を下記に記す。</li> </ul> <table border="1" data-bbox="400 1581 1390 1991"> <tr> <td>1</td> <td>プリンを持ち去ったのは誰だと考えられますか。(全回答者数：34人)</td> </tr> <tr> <td></td> <td>・「私」(自分)：30人(正解)・お母さん：1人・兄：2人・未記入：1人</td> </tr> <tr> <td>2</td> <td>「私」と答えた根拠となる表現</td> </tr> <tr> <td></td> <td>・「何食わぬ顔で答えた」17人</td> </tr> <tr> <td></td> <td>・「怒った顔。何食わぬ顔。いろんな表情を作って」11人</td> </tr> <tr> <td></td> <td>・「思わず吹き出しそうになった」8人</td> </tr> <tr> <td></td> <td>・未記入7人</td> </tr> <tr> <td></td> <td>・「私は少し怒ったように」5人</td> </tr> <tr> <td></td> <td>・その他：「上出来、上出来」「怒ったように言った」「やはり兄だった」など</td> </tr> <tr> <td>3</td> <td>「お母さん」と答えた根拠となる表現</td> </tr> <tr> <td></td> <td>・「お母さんが食べちゃったのかな」・「知らないよそんなこと」</td> </tr> <tr> <td>4</td> <td>「兄」と答えた根拠となる表現</td> </tr> <tr> <td></td> <td>・未記入2人</td> </tr> </table>			1	プリンを持ち去ったのは誰だと考えられますか。(全回答者数：34人)		・「私」(自分)：30人(正解)・お母さん：1人・兄：2人・未記入：1人	2	「私」と答えた根拠となる表現		・「何食わぬ顔で答えた」17人		・「怒った顔。何食わぬ顔。いろんな表情を作って」11人		・「思わず吹き出しそうになった」8人		・未記入7人		・「私は少し怒ったように」5人		・その他：「上出来、上出来」「怒ったように言った」「やはり兄だった」など	3	「お母さん」と答えた根拠となる表現		・「お母さんが食べちゃったのかな」・「知らないよそんなこと」	4	「兄」と答えた根拠となる表現		・未記入2人
1	プリンを持ち去ったのは誰だと考えられますか。(全回答者数：34人)																												
	・「私」(自分)：30人(正解)・お母さん：1人・兄：2人・未記入：1人																												
2	「私」と答えた根拠となる表現																												
	・「何食わぬ顔で答えた」17人																												
	・「怒った顔。何食わぬ顔。いろんな表情を作って」11人																												
	・「思わず吹き出しそうになった」8人																												
	・未記入7人																												
	・「私は少し怒ったように」5人																												
	・その他：「上出来、上出来」「怒ったように言った」「やはり兄だった」など																												
3	「お母さん」と答えた根拠となる表現																												
	・「お母さんが食べちゃったのかな」・「知らないよそんなこと」																												
4	「兄」と答えた根拠となる表現																												
	・未記入2人																												

## 2 単元について

本単元は、複数の描写を〈関連〉付けて読み取ることを通して場面の展開や登場人物の相互関係、心情の変化を読み取る力と、根拠を示しながら工夫して自分の考えを伝える力を育てることをめざす。

そのために、「少年の日の思い出」を学習して感じた作品の魅力を鑑賞文として表現する単元を通じた言語活動を設定した。

本校の生徒は、協力して目標を達成することに意欲を高める傾向にある。このことはこれまでの体育大会や学習成果発表会などを通して、生徒の姿から感じられてきた。このような実態を踏まえると、授業の中で生徒が意欲を高める目標の設定や協力して課題に取り組む学習活動が有効であると考えられる。本単元では、「少年の日の思い出」、「文脈を捉え、伏線に気づく」、「作品のよさを表現しよう」という複数の題材から生徒は学習テーマを設定することから始める。この活動を通して、生徒を能動的な学習へと高めることが今回の研究の視点に合致すると考える。

学習に向けて行った「伏線を読み解く」の文章を活用したレディネステストでは、正解である「私」（自分）を選んだ生徒は、30人であった。このことから、ほとんどの生徒が正しく読み取れていることが分かる。そのうち23人の生徒はその根拠となる描写を答えており、描写と描写を結びつけることやそこに意味が生まれていることについて確かな理解が進んでいると考えられる。このような生徒にとって本単元は、描写のつながりだけでなく、場面や登場人物の関係が複雑に絡んでおり、これまで培ってきた力をさらに広げることができる単元である。その一方で、根拠となる表現を答えられなかった生徒が7人いた。これらの生徒は描写を正確に捉えることや描写と描写を結びつけることに課題があると考えられる。また、不正解である「お母さん」「兄」、未記入の生徒については伏線についての理解の定着が必要だと考える。これらの生徒にとって本単元の学習は、描写にこだわって読み取ることによって場面や行動に新しい意味が生み出されることが実感できる内容であり、複数の描写を〈関連〉付けることで新たな発見が生まれ、読む楽しさを豊かに感じることができる単元だと考える。

また、社会の中でおこる出来事は、様々な事柄が複雑に絡み合いながら生まれてくる。生徒には、今回の学習を通して、物語の世界ではあるが、場面や表現の関係を結びつけることでより深く理解し、生活の中の出来事を様々な視点で考えることにつながることを理解してほしい。

## 3 単元の系統

	第1学年	第2学年	第3学年
<b>C 読むこと</b> 精査・解釈	<b>少年の日の思い出</b> ・内容を解釈する ・展開や表現について考える	<b>走れメロス</b> ・作品の展開や人物の設定などを捉える ・展開や表現について考える	<b>故郷</b> ・内容を解釈したり吟味したりする ・自分の考えを持つ
<b>B 書くこと</b> 考えの形成・記述	<b>作品のよさを表現しよう</b> ・材料を集める ・表現を根拠にして書く	<b>いきいきと描き出そう</b> ・心情や情景の描写を工夫する ・読み合って、自分の考えを広げる	<b>今の思いをまとめよう</b> ・思いを文章にまとめる ・手紙の書き方に整える
本単元に関する「読むこと」の言葉の力	第1学年における「読むこと」の知識・技能を用いる単元		
	飛べ かもめ・さんちき	少年の日の思い出	
i 文章の展開と内容を捉える	◎	○	
ii 内容を解釈する	○	◎	
iii 展開や表現について考える	○	○	
iv 自分の考えを持つ	○	◎	

#### 4 研究の視点に沿った授業の工夫

##### (1) 視点① 学習意欲のサイクルを生み出す「見通しと振り返り」

生徒が「見通し」を持つために、単元の導入で、今回の学習題材である「少年の日の思い出」と「学びの扉 文脈を捉え、伏線に気づく」、「作品のよさを表現しよう」を関係づけ、単元のテーマを生徒の意見から作成する。この活動を通して生徒は、それぞれの題材の学習の目的を明確にすることができる。また、学習テーマを設定することで、それぞれの時間のつながりを理解しながら学習を進めることができる。さらに、「作品のよさ」をテーマに、授業での気づきをまとめ、単元を通じた言語活動を意識させる。このような一連の学習活動の中で生徒に「できた・わかった」を実感させるだけではなく、学習テーマの達成に向けた自らの学びを調整する振り返りを行わせていきたい。

##### (2) 視点② 考えを深めるための協働的な学びの場の設定

生徒が立てた「問い」を学習活動に位置づけ、「問い」を解決していく過程では個人解決の後に班や全体で協働的な学びの場面を適宜設定する。特に、学習テーマ作りや作者の意図を推測する学習活動では、学級全体で生徒が考えを整理し、関係づけ、考えを深められるよう指導する。さらに、自分の考えをまとめた後には、他の生徒と〈比較〉し、意見交換することを全体で行い、学習課題について深く理解することを促す。

##### (3) 視点③ 学びの質を高める「思考のキーワード」

学習活動の中で、生徒には結論に至った考え方を根拠や理由を明確にして発表することを意識させ、発表ごとに教師から思考の価値付けを行う。特に、複数の根拠となる描写を関係づけ〈関連〉させること。さらに〈関連〉させた考えたことをもとに、自分の生活から〈類推〉し、登場人物の心情をより深く理解させる。これらの学習活動では、思考ツールを活用し、「思考のキーワード」が意識できていない生徒にも視覚的に学習作業が行えるように支援する。

#### 5 単元の学習活動と評価計画

次	時	学 習 活 動	評 価
1	1 5 2	<ul style="list-style-type: none"> <li>「少年の日の思い出」と「学びの扉文脈を捉え、伏線に気付く」、「作品の良さを表現しよう」の特徴を理解する。</li> <li>3つの題材を合わせ、「作品を読み解いて、発見した魅力を伝えよう」という視点で学習テーマを設定する。</li> </ul>	【知①】 【態①】 ワークシート 振り返りシート
2	3 5 4	<ul style="list-style-type: none"> <li>「少年の日の思い出」について、生徒が「問い」を立てる。</li> <li>解決できた「問い」を通して読み取った作品の良さをマッピングする。</li> </ul>	【知①】 【思②】 【態①】 ワークシート 振り返りシート
3	5 5 7 本 時 3/3	<ul style="list-style-type: none"> <li>「作品を読み解く」ための「問い」を設定する。</li> <li>「問い」について読み解いたことを根拠に仮説としてまとめる。</li> <li>「問い」についての仮説を出し合い、冒頭の場面の意味について考えることができる。</li> </ul>	【知①】 【思①】 【態①】 ワークシート 振り返りシート
4	8 5 11	<ul style="list-style-type: none"> <li>作品を振り返り、この作品の良さをマッピングにまとめる。</li> <li>鑑賞文の書き方を学び、書き上げる。</li> <li>鑑賞文を読み合い、単元全体を振り返る。</li> </ul>	【知②】 【思③】 【態②】 ワークシート 振り返りシート

6 本時の学習（第7時）

(1) 本時の目標

場面と場面を関係づけることで、冒頭の場面の意味について考えることができる。

(2) 本時の展開

過程	生徒の学習活動	形態	教師の指導・評価	備考		
導入 (10分)	1 本単元の学習内容について知る。	全体				
展開 (15分)	2 「問い」の確認をする。	全体				
	<table border="1"> <tr> <td style="text-align: center;"><b>課 題</b></td> <td>思い出を話す前と後で客（僕）のチョウに対する気持ちは変化したか？</td> </tr> </table>		<b>課 題</b>	思い出を話す前と後で客（僕）のチョウに対する気持ちは変化したか？		
	<b>課 題</b>	思い出を話す前と後で客（僕）のチョウに対する気持ちは変化したか？				
	3 客（僕）のチョウに対する気持ちについて話し合う。	全体	<ul style="list-style-type: none"> <li>・仮説の段階での立場を黒板に示す。</li> <li>・「変わった」「変わらない」について、根拠とする場面を挙げながら発表させる。</li> <li>・生徒の発表で捕捉が必要な場合には、質問や全体への確認を行う。</li> <li>・発表が落ち着いたところで、再度、変化したのか自分の立場と理由をまとめる。</li> <li>・マグネットを動かし、最終的な全体の立場を確認する。</li> <li>・変化した生徒に理由を聞く。</li> </ul>	ワークシート ネームプレート 短冊 (生徒が根拠に挙げている描写)		
4 冒頭の部分の意味を考える。		<ul style="list-style-type: none"> <li>・客（僕）のチョウに対する気持ちについて、冒頭の場面で根拠として発表されている内容を再度確認する。</li> </ul>	ワークシート			
	<table border="1"> <tr> <td style="text-align: center;"><b>発 問</b></td> <td>全体の中で冒頭の場面は、どのような役割があるか？</td> </tr> </table>		<b>発 問</b>	全体の中で冒頭の場面は、どのような役割があるか？		
<b>発 問</b>	全体の中で冒頭の場面は、どのような役割があるか？					
			<ul style="list-style-type: none"> <li>・発表された意見も含め、自分の考えをまとめる。</li> </ul> <table border="1"> <tr> <td> <b>〈評価規準〉</b>                      ・複数の描写を関連させ、考えをまとめている。【思】／ワークシート                 </td> </tr> </table>	<b>〈評価規準〉</b> ・複数の描写を関連させ、考えをまとめている。【思】／ワークシート		
<b>〈評価規準〉</b> ・複数の描写を関連させ、考えをまとめている。【思】／ワークシート						
まとめ (10分)	5 読み取ったことをマッピングに加筆する。	全体	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今日の授業で作品について考えたことをマッピングに記入する。</li> </ul>	ワークシート 振り返りシート		
	6 本時の振り返りと、今後の授業の目標を書く。		<table border="1"> <tr> <td> <b>〈評価規準〉</b>                      ・学習テーマに関連して、本時の学習を生かして課題達成に向け調整しようとしている。【態】／振り返りシート                 </td> </tr> </table>	<b>〈評価規準〉</b> ・学習テーマに関連して、本時の学習を生かして課題達成に向け調整しようとしている。【態】／振り返りシート		
<b>〈評価規準〉</b> ・学習テーマに関連して、本時の学習を生かして課題達成に向け調整しようとしている。【態】／振り返りシート						

### (3) 授業の実際

#### ① 第1次の学び

1次では、単元6を構成している「少年の日の思い出」(読むこと)、「文脈を捉え、伏線に気づく」(学びを支える言葉の力)に加え、読むことの題材と〈関連〉できる言語活動を設定するために、単元7に含まれている「作品のよさを表現しよう」を追加して単元構想を行った。資料にあるように生徒は三つの題材を〈比較〉し、それぞれの特徴を整理した(【資料8】)。

資料に示す生徒は、それぞれの題材について要点を把握し、キーワードや短い言葉で題材の特徴を記している。「少年の日の思い出」では、場面で時間が遡っていることについて触れており、作品の終わり方に疑問を持っている。また、「文脈を捉え、伏線に気づく」では、伏線が「複数の表現を〈関連〉付けて考える」ことを記している。さらに、「作品のよさを伝えよう」では、鑑賞文を書くために必要な視点として「場面・心情・表現」を把握し、「読みとったことや感じたこと」と記していることから、どのようなことを伝えるのかを掴んでいることが分かる。

このようなことから、共通点として「表現のつながり」「場面・心情・表現を意識する」「言葉の使い方」「伏線を見つける」という4点に着目している。このような共通点は各班で考えられた単元テーマにもキーワードとなる「伏線」や「場面・心情・表現」、「表現の仕方」「表現の〈関連〉」などのように反映されている。最終的に生徒の単元のテーマは次の内容に決定した。

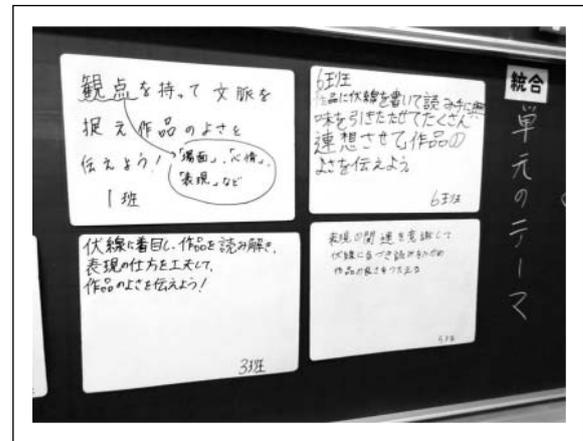
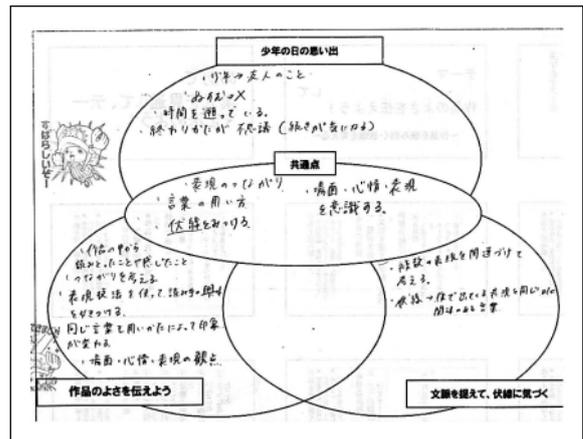
**単元のテーマ**  
伏線に着目し、全体と文章中の表現を〈関連〉付けながら読みを深めて、作品のよさを伝えよう。

このテーマは、「言葉の力」にある「伏線」や「全体と表現を関連付ける」が新学習指導要領における「言葉による『見方・考え方』」につながる内容だと考えられる。

次に第1次における生徒の振り返りを示す。

**第1時の振り返り**  
・伏線に気づくポイントを考えたい、それに伏線の役割がよく分かっていないので、それも考えたい。次回は単元のテーマを決めることを頑張りたい。

**第2時の振り返り**  
・伏線に気づくポイントが分かった。複数の表現の関連に気がつけることがポイントだと思う。また、それぞれの共通点を見つけて班で単元のテーマを考えることができた。



【資料8】生徒が整理した比較資料

この振り返りからは、第1時でのキーワードとなる伏線について第2時では生徒が理解し、学習の見通しを立てていることが分かる。この部分でも「思考のキーワード」にある〈関連〉させることが学習に必要であることを生徒が自覚している。また、学習活動である単元テーマの設定に向けてそれぞれの題材を〈比較〉することで共通点を見つけており、この共通点が単元テーマにつながり、単元全体の見通しを立てていることが分かる。

## ② 第2次の学び

2次では、「少年の日の思い出」を読み、生徒が「問い」を立てる学習を取り組んだ。「少年の日の思い出」を読んだ中で生徒が考えた「問い」(【資料8】)を以下に抜粋する。単元テーマにある「全体」「表現」とテーマ作成でも出された「心情」、さらにそれらには分類されない「その他」で整理した。

視点	問い
全体	① どうして現在から昔に遡るように書かれているのか。 ② どうして最後続きが気になるような終わり方をしているのか。 ③ なぜ続きが気になる微妙なところで作品が終わっているのか。 ④ 最初の場面から過去の話に入ったのに、そのまま現代の話に戻らず過去の話で終わっているのはなぜか。
表現	① 「僕は妬み、嘆賞しながら彼を・・・」とあるが、どのような意味なのか。 ② 「その直後・・・巻きたばこを私に求めた」はどういうこと。 ③ 「闇の中」とは何か。
心情	① どうしてちょうを一つ一つ指で押しつぶしたのか。 ② どうして僕は「このちょうを持っていることはならない」と悟ったのか。 ③ そうした微妙な喜びと、激しい・・・そうたびたび感じたことはなかった」微妙な喜びって？ ④ どうして友人は話すのも恥ずかしい話を「私」にしたのか。 ⑤ なぜエーミールは僕がちょうを台無しにしたのに怒鳴らなかったのか。 ⑥ エーミールのことを「僕」はどのように思っていたのだろうか。 ⑦ どうして思い出が不愉快でもあるかのように言ったのか。 ⑧ クジャクヤママユを盗むところからエーミールに言うところまでの気持ちの変化はどのようなものだったか。
その他	① 最初の「客は、散歩から帰って」という部分がよく分からなかった。 ② 「するとたちまち外の景色は・・・閉ざされてしまった」の情景は何を意味しているのだろうか。 ③ 「エーミール」は中庭の向こうに住んでいる先生の息子と同一人物？ ④ そんなにちょうをとって自然環境を破壊しないのか。

この一覧で示したように、生徒は様々なことに疑問を持ちながら作品を読み取ったことが分かる。これらの「問い」は、班で解決されなかった「問い」、全体で考えたい「問い」を選択し、全体で考えていった。

- |  |
|--|
| ① なぜ作者は現在から過去へと話をさかのぼらせたのだろうか。<br>② なぜエーミールは僕がちょうを台無しにしたのに、怒鳴らなかったのだろうか。<br>③ クジャクヤママユを盗むところから、エーミールに告白するところまでの気持ちの変化は？<br>④ なぜ少年は「ちょうを一つ一つ指で押しつぶしてしまった」のか。<br>⑤ クジャクヤママユを盗むところから、エーミールに告白するところまでの気持ちの変化は？ |
|--|

- ⑥ どうして友人は話すのも恥ずかしいような話を「私」にしたのか？
- ⑦ 「僕は妬み、嘆賞しながら彼を憎んでいた」とはどのような意味なのか？
- ⑧ 作品の中の「闇の中」とは何を表現しているのか。
- ⑨ どうして最初盗みをして満足感しか感じていなかったのに、そのあと恐ろしい不安に襲われたのか。
- ⑩ なぜ母は根掘り葉掘り聞こうとしなかったのか。
- ⑪ なぜ「僕」は盗みをしたことより自分がつぶしたチョウを見る方が心を苦しめたのか。
- ⑫ どうして「僕」は「このチョウを持っていることはできない。持っているてはならない」と悟ったのか。

班から出された「問い」は重なりがあるものもあり、そのような「問い」は合わせて解決していった。生徒は「問い」について意見を発表しながら、その「問い」についての理解を深め、作品への読みを深めていった。

【資料9】に示すのは問④「なぜ少年は『チョウを一つ一つ指で押しつぶしてしまった』のか。」について考えた場面である。生徒は、自分の考えをまとめることと合わせて、他の生徒の意見も参考にしながら考えをまとめていった。

これらの「問い」は一つの場面から考えられる「問い」も多かったが、①や⑥のように作品構成に関わる部分も含まれていた。これらの「問い」は今回の単元テーマにある「全体と表現」に迫る「問い」として捉え、班からの「問い」を解決していく計画の終末で取り扱うことにした。生徒は資料にあるように最初の場面での「客」の言動が後に出てくる「僕」の過去の行為への伏線であり、作品の最後の延長に現在の大人になった「僕」の姿であることを理解した。

次に第2次における生徒の振り返りを示す。

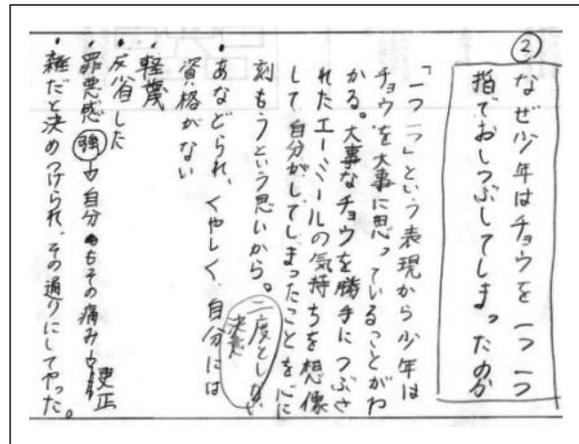
第3時の振り返り

- ・最後に少年は指でチョウを押しつぶすという行動をしていた私は、エーミールにチョウを盗んでしまったことに対して、つぐないたいという気持ちがあったからつぶしたと思っていたけれど、班の人は文章に注目すると少年はつぐないをできないことを悟っていると言っていたので分からなくなった。

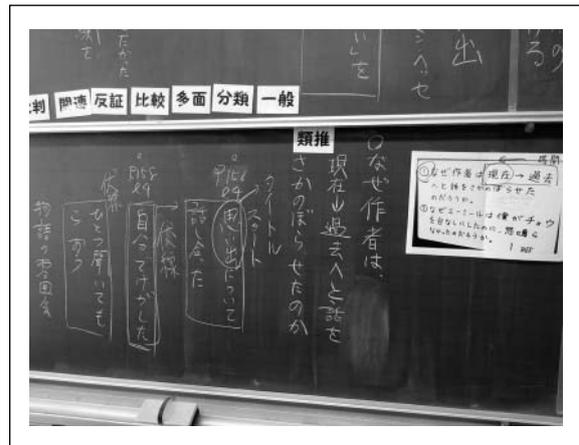
第4時の振り返り

- ・松本さんの意見が雑だと決めつけられ、その通りにチョウをつぶしたという考えを聞いて、そういう考えを聞いて、そういう考えもあるんだと新しく発見がありました。私はもう2度と盗みをしったりしないという決意と反省がこの少年の行動につながっているのかなと思いました。

第3時では、生徒が文章中の描写について、自分の考えが揺らいでいる様



【資料9】生徒が見出した「問い」



問①「なぜ作者は現在から過去へと話をさかのぼらせたのか」

子や、次の時間への課題意識を持っていることが分かる。また、第4時ではさらに学級全体での意見交換を行う中で自分の考えをまとめていることが分かる。このような学習を通して、生徒は「作品のよさを伝える」ために、試行錯誤しながら作品の読みを深めている。

### ③ 第3次の学び

3次では、さらに、単元テーマに迫る「問い」として「最初の場面には、どのような役割があるのか」を設定し、授業を行った。

この授業では、事前の授業のつながりとして⑥「どうして友人は話すのも恥ずかしいような話を『私』にしたのか？」に〈関連〉させて「思い出を話す前と後で、「僕」のチョウに対する気持ちは変わったのか。」を生徒に考えさせた。このことについて考えることで、場面の変化や、作品の終わりの延長が前半部分に描かれていることを理解させるねらいがあった。

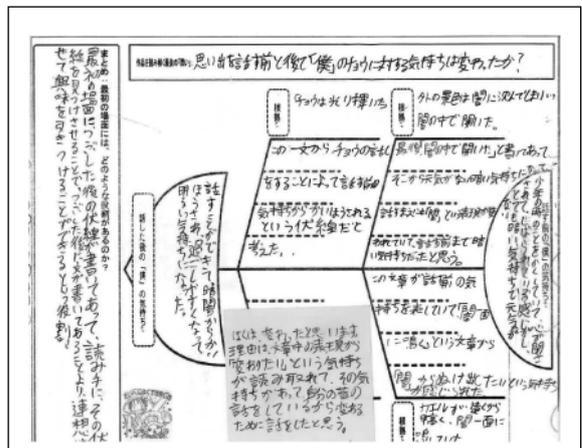
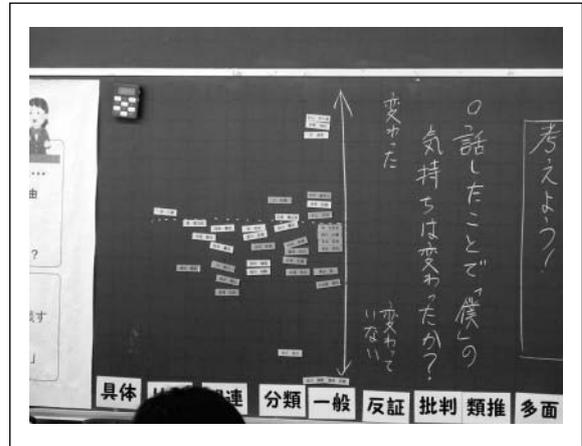
この発問に対して、生徒は「変わった」が9人、「変わらなかった」は25人という意見だった。また、この意見に対して、生徒が根拠を示しながら発表を行い、場面に出てくる描写やその意味を考えることができた。

さらに、生徒は、自分の考えに至った場面を〈関連〉付けながら自分の考えを述べていった。本時では、思考ツールの「フィッシュボーン」

（【資料10】）を活用し、場面やそこから読み取れることを〈関連〉付けながら生徒は考えをまとめた。生徒はそれぞれに意見を出し合いながら、前半の部分について理解を深めていった。

この活動のまとめとして、生徒は次のように考えをまとめた。

- ① 「実際話すことも恥ずかしいことだが…」という部分から、知ってほしいから話そうとしているという考えもできると思った。
- ② 「僕」の気持ちは変わっていると思います。いやな思いではあるけど、人に話してモヤモヤしている気持ちから抜け出したい。
- ③ 前の授業では、すっかりしたと思っていた。でも、話した後は、まだ少しすっきりしてないところがあるのかなあと思った。
- ④ 最初の場面で描かれていることを話した後のこととして捉えるのであれば、「僕」は話をしてから変わっていている（まだ完全ではないが変わろうとしている部分がある）と思う。



【資料10】思考ツールを用いた学習

冒頭の意見では、「変わっていない」という意見が多数だったが、生徒の意見からは「僕」の前向きな姿勢を読み取っている生徒が増えており、生徒

が「問い」にしている「続きが気になる微妙なところ」を様々な場面を関係づけ（類推）して解決につなげた。また、さらにまとめとして「最初の場面には、どのような役割があるのか」には次のような意見が出された。

- ① 最初の場面は、客が話しているときの心情を表すためだと思います。そのことにより今と昔の考え方の違いが表われていると思います。
- ② 作者が思い出を話す前の客の様子から思い出が悲しい思い出だと伝えたかったからだと考えました。理由は、本当は少年の話だけでよかったけど、話す前を描くことで思い出が嫌になったと少しだけ触れておくことができるからだと思います。
- ③ 「僕」の気持ちの変化を分かりやすくするため。また、前の場面の伏線を捉え、「僕」の気持ちを表現するため。
- ④ 「チョウを見るくらい、幼年時代の思い出を強くそそられるものはない」など、その思い出に対する思いを話す前に表す。
- ⑤ 「僕」の今の心情を表し、これからの話への伏線を入れる役割。また、「僕」にとって、少年の頃の思い出はどのようなものかを表す役割。

この作品はタイトル通り「少年の日の思い出」が話の中心であり、②にあるように「本当は少年の話だけでよかった」とする見方もある。しかし、生徒は文章全体から最初の場面の役割として⑤「これからの話への伏線」としての効果を理解し、①「今と昔の考え方の違い」や③「『僕』の気持ちの変化」、「『僕』の今の心情」へつながる部分だということを理解することができた。

次に第3次における生徒の振り返りを示す。

#### 第5時の振り返り

- ・「なぜ作者は現在から過去へと話をさかのぼらせたのか」という問いに対して、これからの話の雰囲気伝えるためという意見に納得しました。この働きがあるおかげでスムーズに話に入られるのかなと思いました。

#### 第6時の振り返り

- ・思い出を話す前の「僕」の気持ちが分かった。「僕」はチョウのことにまだ興味があるけど、嫌な思い出があるから、チョウをずっと見ていたくなくて、もう2度と同じ過ちはしないという気持ちがあったのかなと思いました。

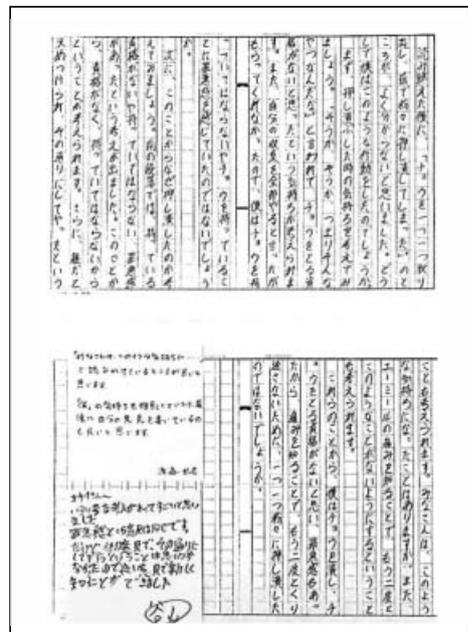
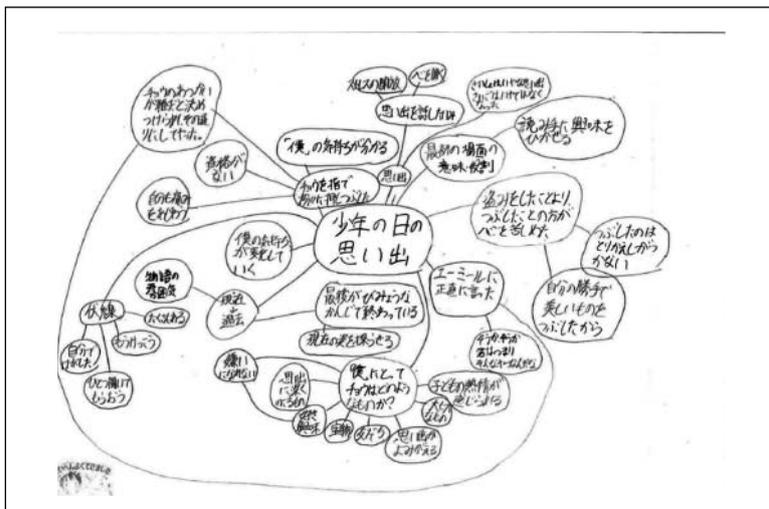
#### 第7時の振り返り

- ・友達の見解から、話した後の「僕」の気持ちに変化はあったという考え方もできるなと思いました。最初の部分には色々な情景描写が少年の気持ちを表していることが分かりました。

### ④ 第4次の学び

4次では、これまでの学習のまとめとして、鑑賞文の作成を行った。今回の学習では単元全体をつなぐ手立てとして、学習計画に見通しを持つことと合わせて、マッピングを毎時間行うことに取り組んだ。毎時間の振り返り活動で、学習の見通し立てることや自分の学びを整理することはできていたが、それらを形として単元テーマに結びつける手段が必要だと考えた。

生徒は、単元テーマにある「作品のよさ」を中心ワードに、学習の中で発見した作品の魅力をマッピング（【資料 11】）の形式で整理した。マッピングには、今回の単元テーマにある「伏線」や「文章中の表現」、さらに「全体と表現」につながる場面のことなど幅広く書き込んである。生徒は、マッピングの内容から、単元の学習全体を整理し、鑑賞文を書き上げており、このマッピングに書かれていることは単元学習をまとめた「学びの地図」としての役割があったと考えられる。



【資料11】生徒が記入したマッピングと鑑賞文

次に第4次における生徒の振り返りを示す。

第8時の振り返り

- ・「僕」にとってチョウはどのようなものなのかということに対して、「僕」はたばこを吸う年の大人になっても、チョウに心ひかれ嫌になれないということが分かった。「僕」は本当にチョウのとりこになったんだと思う。

第9時の振り返り

- ・私は鑑賞文で伝えたい「作品のよさ」が、チョウに対する少年（「僕」）の気持ちの変化と盗みするとき（前も含めて）の2つあるから、どちらを伝えるかこれから考えていこうと思った。

第10時の振り返り

- ・鑑賞文を書くのが難しかったです。より作品の良さを伝える言葉を探して書くところを次回は頑張りたいです。文章中の言葉のどれを使うかもよく考えたいです。

第11時の振り返り

- ・今日は作品に対する友達の考えを知ることができました。私とは違う考えがあって、とてもおもしろかったです。とくに〇〇さんの「昔と今の物語のつながりは何か」という考えに納得しました。

第8時では、マッピングを完成させるとともに、これまでの学習を整理するために「僕」にとってチョウはどのようなものか考えた。このことを通して、4次の学習活動である鑑賞文の作成につなげた。第9時からの振り返りでは、鑑賞文の作成に向けてどの場面を、どのような言葉で表すのかを考える生徒の活動での試行錯誤が分かる。第10時では、鑑賞文を完成させたが、まだ納得がいない様子から、今後の文章表現をさらに良くしたいという意欲の高まりが表われている。第11時では、書いた文章を読み合うとともに、単元全体の振り返りを行った。

① 単元の最初と比べて、自分はどのように成長しましたか。

- ・単元の最初には伏線の役割が分かりませんでした。でもこの単元を通して伏線が物語のつながりが分かって、読みが深くなる役割があると思いました。伏線に気づくことで物語の内容が、より心に残り、読書が楽しくなると思いました。単元の最初と比べて伏線を意識しながら、表現を関連付けることができるようになりました。

② 今回の単元では、どのような考え方が役に立ちましたか。

- ・共通点を見つけるベン図の考え方やフィッシュボーンやマッピングが役に立ちました。この考えをすることで関連付けることができると思いました。

①の「自分の成長」では、観点「思考・判断・表現」の評価規準1に示した「場面と場面、場面と描写などを結びつけたりして、内容を解釈」することの効果を実感していることが分かる。また、「読書が楽しくなる」とあるように、本を読むことの魅力を新たな視点から見つけることができるようになったと考えられる。また、②の「考え方：では思考ツールの効果を実感しており、思考ツールの活用を通して今回の視点である「思考のキーワード」にある〈比較〉することや〈関連〉させて新たな考えを生み出すことができるようになってきていることが分かる。

#### (4) 実践後の考察

視点①の「見通しと振り返り」を行うために、生徒が単元テーマを作成することの効果は、テーマづくりの中で「言葉による見方・考え方」につながるキーワードに気づくことである。今回のテーマでも「伏線」や「〈関連〉付け」の言葉が用いられている。これらの表現は、生徒が「何を学ぶのか」や「どのように学ぶのか」を表し、学習に見通しを持つことにつながるとともに「何ができるようになるのか」を示している。

視点②の「協働的な学びの場」として、生徒が立てた「問い」を解決する場面を設定した。生徒は「第2次の学び」で示したように、様々な視点で「問い」を立てている。このような「問い」を教師が発問として行うこともできるが、生徒の言葉や目線で作られることで、より生徒の考え方や文章の読み取り方に近づくことができたと考える。生徒は「問い」の解決に集中して取り組み、班や全体での意見交換もより活発になった。さらに、生徒が立てた「問い」だからこそ、答えが見つからないものもあるが、そのことが指導事項につながるような「問い」となった。また、課題としては、様々な「問い」や「問い」に対しての生徒の反応があるため、教師はこれまで以上にコーディネーターとしての力を高めていくことが必要だと感じた。

視点③の「思考のキーワード」の活用として、これを具体化した思考ツールの活用的成果を実感した。この思考ツールを使った指導を継続することで、生徒がすすんで思考ツールを活用するだけでなく、思考ツールの背景にある〈比較〉や〈関連〉といった思考する力が育てられると考える。

## IV 研究のまとめ

### 1 成果

「提案授業 I」の説明的文章の授業研究からは、振り返りシートを使って毎時間の見通しと振り返りを丁寧に行うことで、「考え方」についての学びが促進されることが明らかになった。特に、前時の振り返りの際に「考え方」を意識できると、それが次時の見通しに繋がり、次の振り返りにも繋がっていく。さらには、単元の最後に自分が使った「考え方」は何か振り返らせることも、学びの自覚化に有効であった。

また、見通しについては、生徒の発達段階に応じて、自力で持てる子もいれば持てない子もいる。そこで、実践授業では、単元のはじめに自ら意見文を書くという手立てを用いたことが効果的であった。「自らの意見文に説得力を持たせたい」という目的をもって教材と出会ったことにより、筆者が説得力を高めるため

に工夫した具体例の順序や内容を吟味し、論理の展開を学ぶことができた。自分の文章と筆者の文章を〈比較〉するという思考が働くことにより、学びの見通しを持つことに繋がっていたのである。結果、「筆者の工夫の発見」を越え、「筆者の工夫に付け加え」まで行うことができた生徒もいた。

さらに、このような学びを促進するためには「根拠・理由・主張の3点セット」を用いた互いの考えの共有が重要であった。自分と筆者だけでなく、自分とクラスの友人の考えの差異を〈比較〉したことが、互いの学びを深めていったと言える。

「提案授業Ⅱ」の文学的文章の授業研究からは、振り返りシートを活用することで、常に単元全体を通して考えさせたいテーマを意識して学習に取り組みさせることができた。テーマは、単元の最初に設定する際に、生徒たちが自分たちで話し合いながら絞っていったり、疑問をもとに組み立てていったりすることで主体的に学びに向かう姿勢を育むことができた。さらに、読み進めるうちに何について考えているのか分からなくなってしまう、迷っている生徒に対しても、何を目的として学習を進めているのか振り返ることができるきっかけとなった。

また、協働的な学びの場を意図的に設定することで、自分の考えだけでは満足いく答えにたどり着けなかった生徒が、友だちの意見を参考にして考えを広げたり深めたりする姿が見られた。交流の際も、互いの意見の良いところを認め合い、建設的に進めることができていた。そして、自分で考えたこと、友だちの意見、今までの学習内容、教科書の本文（根拠）などをまとめるときに、思考ツールを活用することで、生徒たちが自分の考えをわかりやすくまとめさせることができた。

## 2 課題

説明的文章の授業研究からは、課題として、本文の内容の読み取りが不十分である生徒がいたことが挙げられる。すべての生徒が、自ら本文と対話して学びを進めていくためにはどのようにすれば良いのか。「内容の理解」と「論理の理解」を両立させる学習指導の開発が求められる。また、今回は中学校1年生と3年生における実践を行った。今後は全学年を通した実践を積み重ね、学年に応じた指導の在り方をさらに追究していきたい。

文学的文章の授業研究からは、課題として、生徒たちが出す様々な「問い」をどのように解決へと導いていくかが挙げられた。自分たちで話し合いながら解決に導いていくにしても、どのように導くのか、準備と見通しが大切になってくる。主体的な活動となるためにも、教師がなるべく主導せずに、授業をコーディネートしていく力が必要だと感じた。

〈参考文献〉

- ・佐藤佐敏「思考力を高める授業」、三省堂、2013
- ・ジーマン著・塚野州一他訳「自己調整学習ハンドブック」、北大路書房、2012
- ・鶴田清司「授業で使える！論理的思考力・表現力を育てる三角ロジック：根拠・理由・主張の3点セット」、図書文化、2017

## 1 協同研究をとおして

「社会生活につながる国語科教育」との研究主題のもと、子供たちが社会や世界と関わり合って生きていくために求められる資質・能力を育成する国語の学習指導の在り方について、模索してきた。その中で改めて見えてきたのは、「見通し」と「振り返り」の意義である。平成20年及び29年告示の学習指導要領総則には「学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりする活動を計画的に取り入れるように工夫すること」と、教科指導上の配慮事項として示されているものの、授業内での実際の運用に関する具体的な言及はない。今回、「見通し」「振り返り」が学習活動として機能する実相を把握できたことは、非常に大きな成果であるといえよう。

## 2 今後の「読むこと」の授業に求めること

### (1) 学びとしての「見通し」

#### ① 自分の「問い」があってこそ「見通し」は立つ

「見通し」を立てるためには、暫定ながらも最終到達点が必要である。「解決」としての到達点に至るためには、学習者自身が解決したい「問い」からスタートしなければならない。その「問い」が、学習者自身が解決を渴望するものであれば、必然的に主体的な学びは生じてくる。ルーティン作業として「初発の感想」を書かせるのではなく、学習者が自分の「問い」を明確化するための営みとして位置付けたい。

#### ② 自分の「問い」を大切にこそ、自分の考えは形成される

交流・共有による解決を求めるにせよ、個でのじゅうぶんな思考を経た後でない、学習者は他者の読みを無批判に取り込んでしまいがちである。当人は「いろいろな意見に触れて発見があった」と満足していても、本来的な「発見」とは言い難い場合も少なくない。「見通し」が不確かなうちに行う安易な交流・共有を警戒したい。

### (2) 学びとしての「振り返り」

#### ① 「振り返る」ことで「振り返る」力を育む

PISA 調査「読解力」におけるアスペクト「熟考・評価」の「熟考」の原語は”reflect”である。”reflect”（リフレクト）の原義は「反射する」「反響する」であり、「影響する」「熟考する」「内省する」「振り返る」などとも訳される。テキストの内容を正確に読み取ることで自足していた学習者の思考の指向性を変革するには、日々の授業の中で常に「振り返る」必要がある。つまり、学びを「振り返る」ことによって、「振り返る」力を身につけるのである。是非とも、毎時の授業の最後に設定してほしい。

#### ② 「振り返り」の観点を学ぶ

学習者に「今日の授業で学習したことを振り返ろう」と指示したとする。すると、「現代の絶滅が生態系に与える影響はとても大きいことを学んだ」などと、教材文の内容に関して振り返る場合もあろう。また、「単に事例が多いからではなく、事例の順序の工夫によって説得力が増すことが分かった」として「読むこと」の資質・能力について振り返る者もいるだろう。重要なのは「振り返り」の観点である。後者のような「振り返り」により、学習者が自らの学びを自覚し、「振り返り」を意義ある学習活動として意識できるよう促したい。

Ⅲ 各部会研究報告及び学習指導案

# 「伝統的な言語文化」部会



# 【「伝統的な言語文化」部会】 研究報告

## I 研究主題との関わり

令和3年度からいよいよ新学習指導要領が全面実施になる。それは、グローバル化や人工知能・AIなどの技術革新が急速に進み、予測困難なこれからの時代という今後の時代を見据え、「子どもたちには、課題を見つけ、考え、判断し、学び、そして行動できる力、自らよりよい社会や人生を切り拓いていく力が求められていくだろう。」という考えのもと、「学校で学んだことが、子どもたちの『生きる力』となり、明日に、そしてその先の人生につながってほしい。」という願いをこめて作られている。

本研究会ではこれらを受け、「社会生活につながる国語科教育～言葉を駆使しながら自ら学び続ける生徒の育成をめざして～」という研究主題を設定し、研究を続けてきた。

そこで、伝統的な言語文化部会（以後「伝国部会」とする。）では、国語科で古典を学習する意義とは何か、次のように考えた。「古典の作品の中に登場する人々の物の見方や考え方を知り、共感し、現代の自分たちと比較しながら相違点や共通点を見つけ、そのことに関して自分の考えを持ち、深める。」また「古典に記されている日本語表現に触れることで、古から続く日本語の意味やその性質について知り、日本語について深く理解していく。このことをとおして言語生活を豊かにする。」この2点が古典を学習する意義であるとした。このことは、そのまま研究主題の「社会生活につながる国語科教育」につながると考えた。

また、「古典の中に登場する人々の物の見方や考え方を知り、共感し、現代の自分たちと比較しながら相違点や共通点を見つける。そのことに関して自分の考えを持ち、深める。」ことをねらいとする課題を、生徒自身が解決しようとして、個人で、ときには複数の仲間と協働で解決していく授業を行うことが、「生徒が言葉を駆使しながら、自ら学び進めていこうとする授業」につながると考えた。

## II 研究の視点

### 1 視点① 学習意欲のサイクルを生み出す「見通しと振り返り」について

「単なる記憶にとどまらず、知識を結びつけ理解することは学習意欲を高める上でも重要。」「学習者自身が能動的に学習に向き合える状況が、学習意欲を高める。」という考えにたち、子どもたちの学習意欲が高まるのはどんなときか、伝国部会では次のように考えた。

- 「解決したい。」と思えるような、魅力的な課題に出会えたとき。
- 自らの試行錯誤により、解決に向けて進んでいると実感できたとき。
- 自分の力で解決できたという経験を積み重ねられたとき。
- 課題を解決していくことで、自分に力がついたらと実感できたとき。

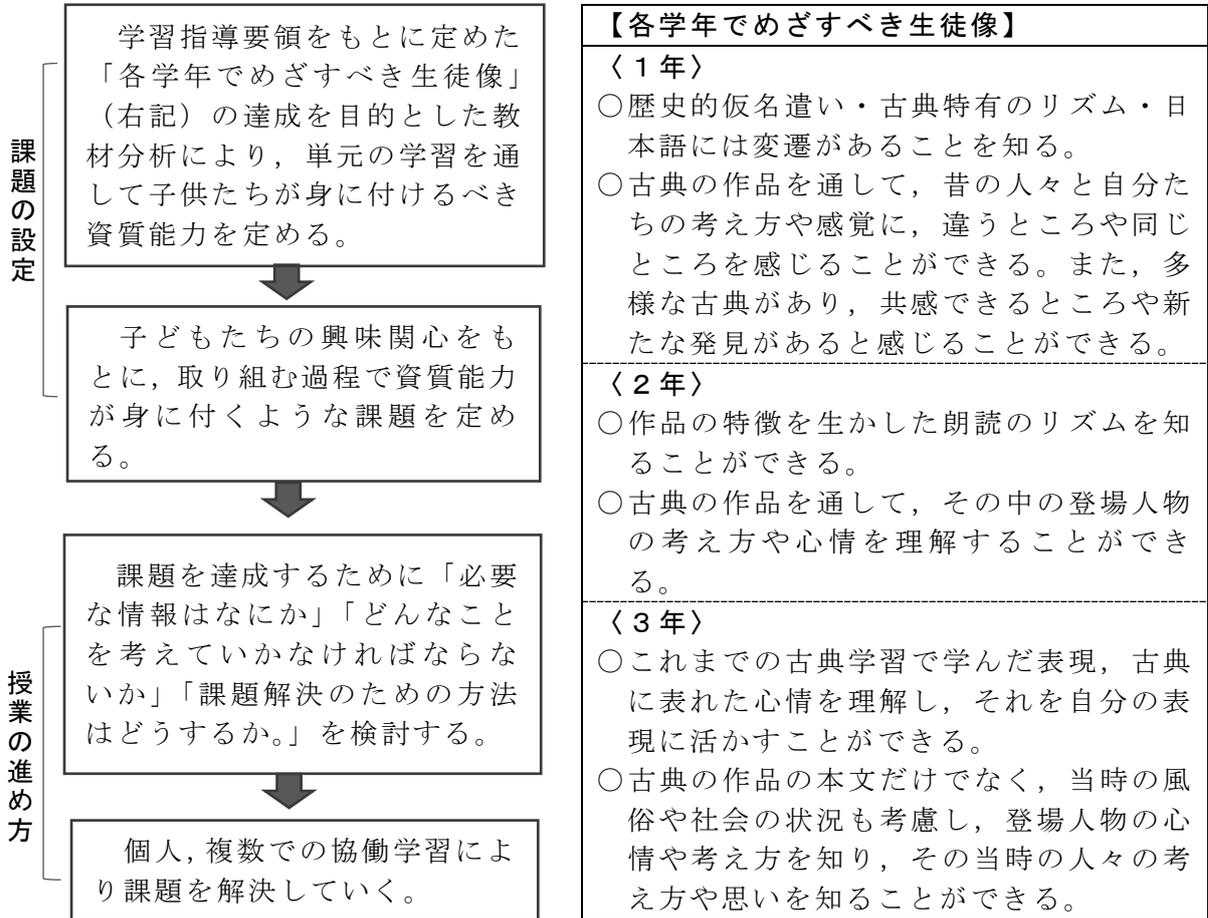
そのため、伝国部会では、単元を通して、他の3領域で培った力を駆使することで解決できるような課題を設定し、その課題を解決していくといういわゆる「課題解決型」の授業を行い、以下のような視点で振り返りを行うことにした。

- ア 単元や題材を通した課題の解決へ向けて進んでいるか。
- イ 古語で書かれた文章を読み取るために役立つことを学んでいるか。

ア 単元や題材を通した課題の解決へ向けて進んでいるか

生徒たち自身で有効な振り返りができるように、単元や題材を通した課題の設定、授業の進め方は、以下のようにした。

【課題の設定・授業の進め方】



イ 古語で書かれた文章を読み取るために役立つことを学んでいるか

古語で書かれた文章を読み取るために役立つこととは、「言葉の変遷により歴史的仮名遣いがあること」「歴史的仮名遣いを現代仮名遣いになおすこと」「主語・述語や助詞の省略がされていること」「言葉の変遷によって、現代では意味が変わったり、使われなくなったりした語句があること」などの、古文を現代語へと置き換えて読む際に知っておくべき古文の特徴と考えている。古典の内容を理解するためには、このような古文の特徴を踏まえながら、昔使われていた言葉を、現代に生きる私たちが使っている言葉に置き換えるという技能が必要になる。さらに、その後の内容を理解するためには、他の3領域で身に付けた能力が必要である。

上記ア、イの視点に立って振り返りを行うことによって、学習者が言葉を駆使しながら、自ら学び進めていこうとする学習ができると考える。またどんなことを学んだのかがはっきりし、習得した知識・技能、資質・能力の明確化ができると考える。

2 視点② 考えを深めるための協動的な学びの場の設定について

「協働学習」に関しては、現在様々な考察がされているが、伝国部会としては協働で学習を行っている姿を「ともに力を合わせて学習を進めている様子」とす

る。また、「それを行うことにより、個人で学習するよりも、考えが広がったり、深い考えが生じたりするような学習方法」とする。

古典は現代文に比べ文字数が少ないことから、現代文以上に、歴史的背景、作者の思想・立場・状況など、本文以外の部分から多面的に見ていく必要がある。そのため、一人で学習するより、より「協働的な学び」に適しているはずである。よって以下のような工夫を授業で行う。

- 「課題解決型」の学習において、「協働的な学び」に適した学習課題を設定する。
- 「協働的な学びの場」にすべての生徒が参加できるように、「協働的な学びの場」で必要な知識をスモールステップで獲得させる。

### 3 視点③ 学びの質を高める「思考のキーワード」について

「思考のキーワード」にある〈比較〉〈分類〉〈関連〉〈多面〉は、国語科でよく使われる思考法である。また、それ以外の「思考のキーワード」も、子どもたちが文章を理解し、自分の考えを形成する際に、頭の中で行う思考の方法を視覚化し、共有するために定義したワードである。これらは、学習者に獲得した力を認知させるには適したものである。

そこで、伝国部会では、「思考のキーワード」を、振り返りの際の重要なキーワードとして子どもたちに意識させることとした。そのために、授業中の子どもたちの思考を「思考のキーワード」をもとにして価値付けすることとした。

## III 研究の実際

### 1 実践①「竹取物語」（東京書籍 1 年）

#### 【ねらい】

- 古典にはさまざまな種類の作品があることを知り、それらにふれる。
- 現代語とは異なる言葉や表現の現代での意味を考え、古典の世界に描かれた人間の思いをとらえる。

#### 【課題】虫に食われてしまった冒頭部分の挿絵を完成しよう。

1 次	○竹取物語について知る。 ○冒頭部分を音読する。 ○課題解決にはどんなことが必要か検討する。
2 次	○現代語訳のポイントを知る。 ○現代語訳をする。
3 次	○現代語訳をもとに、かぐや姫の姿を考える。 ○他の人と意見の交流をする。交流する中で、「うつくし」のとらえ方に違いがあることに気づく。 ○「うつくし」の意味を考察する。 ・同時代の作品や、竹取物語に比べ、過去や、未来の作品の中での「うつくし」の使用例から探っていく。
4 次	○「うつくし」の意味を踏まえ、再度かぐや姫の姿を考え、意見の交流を行う。



【資料 1】冒頭部の挿絵



【資料 2】挿絵の選択肢

竹取物語の冒頭部分の挿絵(【資料1】)の、竹の切り株の中のかぐや姫を虫食い状にしたものを提示し、その中に描かれているべきかぐや姫はどんな姿だったのかということ【資料2】から選択させる。その活動のなかで、「うつくし」という言葉に着目していき、他の古典作品に出てくる「うつくし」の意味を探る。その活動を通して、「いくつかの古典作品に触れ、『うつくし』という言葉の意味の変遷を知るとともに、昔の人々の思いや感覚を知る。」ことをねらう。

また、「古文の現代語訳のポイント」(【資料3】)を示し、古文の現代語訳の練習も行う。

古文の現代語訳のポイント \*古文の特徴は使態にあり。  
 ①歴史的仮名遣いを現代仮名遣いになおす。  
 ②主語(省略されたものも含む)の後に「は・がを」をおきなう。  
 (省略されている主語を探す場合は)  
 i 一度Aという主語が出てきたら、次の主語になる語が出てくるまで  
 変わらない。  
 ii 複数の主語が出てきたら述語(動詞)で主語は判断する。古文に擬  
 人法はない  
 ③主語+述語(動詞)の単文として読む。  
 ④わからない古語は調べた後に覚える。

【資料3】現代語訳のポイント

2 実践②「枕草子」「徒然草」(東京書籍2年)

【ねらい】

- 「枕草子」・「徒然草」からそれぞれの作者、清少納言・兼好法師の人物像をとらえよう。

【課題】清少納言と兼好法師、友達にするならどっちがよい？

1次	○「枕草子」「徒然草」について知る。 ○「清少納言」「兼好法師」のどちらを友達にするか決めるにはどんなことをすべきか検討する。
2次	○「枕草子」の第一段の音読・現代語訳・歴史的仮名遣いの確認。 ○「枕草子」の第一段の内容確認。
3次	○「徒然草」の第五二段「仁和寺にある法師」、第九段「高名の木登り」の音読・現代語訳・歴史的仮名遣いの確認。 ○「徒然草」の第五二段「仁和寺にある法師」、第九段「高名の木登り」の内容確認。
4次	○「枕草子」「徒然草」から見える清少納言・兼好法師のどちらと友達になりたいか考え、意見の交流をおこなう。

「枕草子」「徒然草」という作品は作者が日々感じたことが書かれており、そこから作者の人となりをとらえやすい。そこで本題材では「清少納言と兼好法師、友達にするならどっちがよい？」という課題を設定した。この課題を考えていくことを通して、清少納言・兼好法師の思いや考え方、人となりをとらえさせた。

### 3 実践③「おくのほそ道」（3年）

**【ねらい】**

- 俳句と地の文を組み合わせるといふ「おくのほそ道」の表現方法について自分の考えを持つ。
- 俳句や地の文にこめられた、芭蕉の思いを読み取る。

**【課題】**芭蕉は、地の文と俳句、どちらに重きをおいて『おくのほそ道』を書いたのでしょうか。

「おくのほそ道」は紀行文として代表的な作品である。この作品の特徴は俳句と地の文という違う文種の組み合わせによって表現しているところである。そこで、「芭蕉は、地の文と俳句、どちらに重きをおいて『おくのほそ道』を書いたのか。」を考えることで、芭蕉の思いを読み取り、この構成の効果を感じとらせた。また、この構成は、写真と文字で構成されているSNSなどの自己表現ツールにも通じると考えた。SNSは子どもたちに身近な存在であるため、「おくのほそ道」の構造の理解を深めるために比較させた。

1次	<ul style="list-style-type: none"> <li>○作品・作者・歴史的背景について知る。</li> <li>○「おくのほそ道」と、SNSを対比させる。</li> <li>○「おくのほそ道」を書く際に、芭蕉は地の文と俳句のどちらに重きをおいたのかを探るための方法を考える。</li> </ul>
2次	<ul style="list-style-type: none"> <li>○冒頭部分の音読・歴史的仮名遣い・現代語訳・表現技法を確認する。</li> <li>○冒頭部分に表れている、旅にかける芭蕉の思いを、俳句や地の文から読み取る。</li> <li>○現代語訳をする。</li> </ul>
3次	<ul style="list-style-type: none"> <li>○「平泉」（「夏草」の部分）の音読・現代語訳・歴史的仮名遣い・表現技法の確認。</li> <li>○「平泉」（「夏草」の部分）での芭蕉の思いを、俳句や地の文から読み取る。</li> </ul>
4次	<ul style="list-style-type: none"> <li>○「平泉」（「光堂」の部分）の音読・現代語訳・歴史的仮名遣い・表現技法の確認。</li> <li>○「平泉」（「光堂」の部分）での芭蕉の思いを読み取る。</li> </ul>
5次	<ul style="list-style-type: none"> <li>○「芭蕉は、地の文と俳句、どちらに重きをおいて『おくのほそ道』を書いたのか。」について考える。</li> </ul>

## 【伝統的な言語文化部会】第2学年国語科学習指導案

(新しい国語2 東京書籍 p 128～141「平家物語」)

授業者 熊本大学教育学部附属中学校 教諭 荒牧剛志

### 1 単元構想

 社会生活での理想の姿	・古典での学びをもとに、今まで注目していなかった日常の風景に立ち止まり風情を感じたり、人間の本質を考えたり、作品等表現活動の発想を広げたりする。 ・古典に表れた先人の見方や考え方から得た「生き方の新たな視点」を自身の生き方に活かし、広い視野から物事をとらえて思考・判断・表現している。																																		
単元名	映画「平家物語」のパンフレットを作ろう																																		
本単元でめざす子どもの姿	・情景描写や言動から登場人物の心情を想像することで、武士の生き方や価値観についての理解を深めている。 【(3)イ】 ・作品の特徴を生かして音読したり、古典資料を調べたりする中で、歴史的仮名遣いや古典世界特有の文化などに慣れ親しんでいる。 【(3)ア】																																		
単元の評価規準	<b>知識・理解</b> ①リズムや表現を工夫して朗読することで、古典の世界に親しんでいる。 【(3)ア】 ②武士の生き方や価値観についての理解を深めている。 【(3)イ】	<b>思考・判断・表現</b> ① 情景描写や言動から登場人物の心情を想像することができる。 【Cイ】 ②武士の生き方や価値観と自分の知識や経験を結び付け、考えを広げたり深めたりすることができる。 【Cオ】	<b>主体的に学習に取り組む態度</b> ① 粘り強く登場人物の心情を考え、武士の生き方や価値観を演技指導書にまとめようとしている。																																
<b>単元の学習課題</b>																																			
武士の生き方や価値観が伝わるような映画「平家物語」のパンフレットを作ろう。 そのために、登場人物の言動の意味や情景描写の効果を考えてみよう。																																			
 学習前の姿 (生徒の実態)	・古典の学習に対して、おもしろさを感じている生徒は多いが、意義を感じている生徒は55%にとどまっている。したがって、生徒の発見や納得が生まれる授業構想の工夫が必要である。 ・音読に関して難しさを感じる生徒よりも、現代語訳や語の解説に難しさを感じる生徒が多い。したがって、じっくり古典を読み、親しむ授業設計を行う。																																		
<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td colspan="4">①古典の学習に対して、おもしろさを感じるか？</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">・感じる 75%</td> <td style="text-align: center;">・感じない 3%</td> <td colspan="2" style="text-align: center;">・どちらともいえない 23%</td> </tr> <tr> <td colspan="4">②古典を学ぶことに意義を感じるか？</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">・感じる 55%</td> <td style="text-align: center;">・感じない 3%</td> <td colspan="2" style="text-align: center;">・どちらともいえない 42%</td> </tr> <tr> <td colspan="4">③現代語訳や語の解説をもとに、古典を読解することに難しさを感じるか？</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">・感じる 57%</td> <td style="text-align: center;">・感じない 18%</td> <td colspan="2" style="text-align: center;">・どちらともいえない 25%</td> </tr> <tr> <td colspan="4">④古典を音読することに難しさを感じる</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">・感じる 35%</td> <td style="text-align: center;">・感じない 43%</td> <td colspan="2" style="text-align: center;">・どちらともいえない 22%</td> </tr> </table>				①古典の学習に対して、おもしろさを感じるか？				・感じる 75%	・感じない 3%	・どちらともいえない 23%		②古典を学ぶことに意義を感じるか？				・感じる 55%	・感じない 3%	・どちらともいえない 42%		③現代語訳や語の解説をもとに、古典を読解することに難しさを感じるか？				・感じる 57%	・感じない 18%	・どちらともいえない 25%		④古典を音読することに難しさを感じる				・感じる 35%	・感じない 43%	・どちらともいえない 22%	
①古典の学習に対して、おもしろさを感じるか？																																			
・感じる 75%	・感じない 3%	・どちらともいえない 23%																																	
②古典を学ぶことに意義を感じるか？																																			
・感じる 55%	・感じない 3%	・どちらともいえない 42%																																	
③現代語訳や語の解説をもとに、古典を読解することに難しさを感じるか？																																			
・感じる 57%	・感じない 18%	・どちらともいえない 25%																																	
④古典を音読することに難しさを感じる																																			
・感じる 35%	・感じない 43%	・どちらともいえない 22%																																	

## 2 単元について

本単元では、情景描写や言動から登場人物の心情を想像することで、武士の生き方や価値観についての理解を深めることをめざす。「理解を深める」とは、叙述から当時の武士の生き方や価値観を想像し、自らの経験や体験と〈比較〉して考えることとする。自らの経験や体験と〈比較〉しながら考えることで、古典は生徒にとって身近なものになると考えたからである。

また、本単元で取り扱う教材「平家物語（東京書籍2年）」は、武士の生き方や、戦乱に明け暮れた時代と社会の様子を描いたものである。情景描写や登場人物の言動が詳細に描かれ、読み手や聴き手が場面を想像しやすいことが特徴として挙げられる。特に「扇の的」では、与一が扇の的を射る場面と黒革緘の武者を射る場面が対比的に描かれており、名誉を重んじ、自軍の誇りをかけて活躍する武士の華やかな一面と、武士の世界の非情さがそれぞれの場面に表れている。

このような武士の生き方や価値観への理解を深められるよう、本単元では、武士の生き方や価値観が伝わるような映画「平家物語」のパンフレットを作るという言語活動を設定した。言語活動設定の意図は以下の2点である。

第一に、物語に登場する武士の心情を想像することで、当時の武士の生き方や価値観について理解を深めてほしいという意図を込めた。生徒たちは映画「平家物語」のキャッチコピー「武士とは、～ものなり。」という一文を考える。ここに綴る言葉について議論することで、生徒が武士の生き方や価値観についての理解を深められるようにする。

第二に、生徒に何度も古文中の叙述に立ち戻ってほしいという意図を込めた。平家物語の「扇の的」には、様々な人物の言動が具体的に描かれている。那須与一が神に祈る様子、鎬矢を手に取り射る様子、敵の平家の人々さえ感嘆する様子、黒革緘の武者を射ったことに対する「あ、射たり。」「情けなし。」といった反応など、古文中に描かれた登場人物の思いは多岐にわたる。このような叙述を読み込むことで、生徒がキャッチコピーとして綴る一文は変容していくと考えられる。「武士とは、～ものなり。」というキャッチコピーを考え、パンフレットの記事にまとめる学習を核として、子どもたちが何度も古文に立ち戻り、武士の生き方や価値観について思いを馳せられるような授業を構想していく。

## 3 単元の系統

	第1学年	第2学年	第3学年
我が国の言語文化に関する事項	伊曾保物語 竹取物語 ・古典の作品を読み、文章の特徴について考える。 ・古典作品を読み、人間の心のありようについて話し合う。	枕草子・徒然草 平家物語 ・古人に倣って短い随筆を書く。 ・古典作品に表れた価値観について考えたことをまとめる。	万葉・古今・新古今 おくのほそ道 ・好きな和歌の鑑賞文をまとめる。 ・古典の作品を読み、構成や表現の効果について考える。
本単元に関する「我が国の言語文化に関する事項」の言葉の力	第2学年における「我が国の言語文化に関する事項」の知識・技能を用いる単元		
		枕草子・徒然草	平家物語
i 作品の特徴を生かして朗読するなどして、古典の政界に親しむ。		○	◎
ii 現代語訳や語注などを手掛かりに作品を読むことを通して、古典に表れたものの見方や考え方を知ること。		◎	◎

上記の表は、第2学年で取り扱う「我が国の言語文化に関する事項」について整理したものである。「◎」は重点項目、「○」は副次的に用いたり、身につけているか

どうかを確認させたりすることを意味している。

#### 4 研究の視点に沿った授業の工夫

##### (1) 視点① 学習意欲のサイクルを生み出す「見通しと振り返り」について

「見通し」をもたせる手立てとして、まず、既習教材「竹取物語」を用いたパンフレットを提示し、ゴールのイメージを共有させたい。次に、各時間、自分の演技指導書を振り返る時間を設定し、次の時間に何を深めていくのかを「見通し」として持たせたい。

##### (2) 視点② 考えを深めるための協働的な学びの場の設定について

「キャッチコピー」を書く上で意見が分かると想定される生徒の考えを全体で取り上げ、議論する場を設ける。特に「武士とは、(A 名誉や武士の誇りを重んじる)が、(B 非情な世界に翻弄され生きた。)」という考えと「武士とは、(B 非情な世界に翻弄され生きた)が、(A 名誉や武士の誇りを重んじ潔く生きた。)」という考えを取り上げたい。このような意見を取り上げることで、A・Bどちらを強調して作品を締めくくるか、について議論したい。

また、上記のような生徒の悩みや生徒同士の読みの違いを(1)で述べた「振り返り」の中から取り上げ、全体で投げかけるようにする。

##### (3) 視点③ 学びの質を高める「思考のキーワード」について

(2)で触れた全体の議論では〈比較〉という思考を用いる。那須与一が「扇的を射る場面」と「黒革緘の武者を射る場面」とを〈比較〉し、登場人物の心情を想像することで、武士の価値観や生き方について理解を深められるようにする。

また、単元末に振り返る際には、自分自身と当時の武士たちの生き方や価値観を〈比較〉し、古典作品ならではの世界観や現代にも通じる考え方などについて自分の経験や体験と〈比較〉しながら思いを馳せられるようにする。

#### 5 単元の学習活動と評価計画

次	時	学 習 活 動	評 価
1	1	①本単元のゴールを知り、学習の見通しを立てる。 ・「祇園精舎」を朗読し、平家物語の基礎知識(作品のテーマ、源平合戦の流れなど)を知る。 ・「扇的」の内容を知り、本単元のゴールと出会う。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;">             武士の生き方や価値観が伝わるような映画「平家物語」のパンフレットを考えよう。           </div> ・「竹取物語」を用いたモデルを参考にしながら、学習の見通しを立てる。	【知①】 【態①】 振り返りシート
2	2 3 本時 2 2	②登場人物の心情を想像し、キャッチコピーを考える。 ・言動や情景描写をもとに、登場人物の心情をとらえる。 ・想像した登場人物の心情をもとにキャッチコピーを考える ・振り返りと次時の見通しを書く。 ③キャッチコピーの記述の違いについて議論し、武士の価値観への理解を深める。 ・那須与一が弓を射る2つの場面を〈比較〉して、武士の生き方や価値観について議論する。 ・振り返りと次時の見通しを書く。	【態①】 【思①】 【知②】 ワークシート 振り返りシート
3	4	④キャッチコピーを紹介し合うことで、考えを広げたり、深めたりすることが出来る。 ・キャッチコピーとそこに込めた思いを紹介し合い、考えを広げたり、深めたりする。 ・本単元と授業の振り返りをする。	【態①】 【思②】 【知②】 ワークシート 振り返りシート

6 本時の学習（第3時）

(1) 本時の目標

「結びの一文」で語る言葉について議論することで、武士の生き方や価値観への理解を深めることができる。

(2) 本時の展開

過程	生徒の学習活動	形態	教師の指導・評価	備考		
導入 (5分)	1 前時の振り返りもとにキャッチコピーを考える中で生まれた考えの違いを共有する。 ○「武士」とは、 ・「(A) 名誉や誇りを重んじ、懸命に生きたが、(B) 非情な命のやり取りに常にさらされた存在だった。」 ・「(B) 命の危険と隣り合わせの中でも、(A) 名誉を重んじ誇り高く生きた存在だった。」	全体	・内容は近くても、文の構成により強調される内容が異なることに気づかせる。	振り返りシート		
展開 (3分)	2 本時の課題を共有する。	全体				
	<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 15%; text-align: center; vertical-align: middle;"><b>課題</b></td> <td>平家物語の登場人物の生き方や価値観を考えながら、「キャッチコピー」を練り上げよう。</td> </tr> </table>				<b>課題</b>	平家物語の登場人物の生き方や価値観を考えながら、「キャッチコピー」を練り上げよう。
<b>課題</b>	平家物語の登場人物の生き方や価値観を考えながら、「キャッチコピー」を練り上げよう。					
(2分)	3 共有した考えの違いについて全体で議論する。					
	<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 15%; text-align: center; vertical-align: middle;"><b>発問</b></td> <td>平家物語のキャッチコピーでは 「A 名誉や誇りを重んじる武士の姿」 「B 非情な世の中を生き抜く武士の姿」 のどちらを強調すべきだろうか？</td> </tr> </table>				<b>発問</b>	平家物語のキャッチコピーでは 「A 名誉や誇りを重んじる武士の姿」 「B 非情な世の中を生き抜く武士の姿」 のどちらを強調すべきだろうか？
<b>発問</b>	平家物語のキャッチコピーでは 「A 名誉や誇りを重んじる武士の姿」 「B 非情な世の中を生き抜く武士の姿」 のどちらを強調すべきだろうか？					
	・「僕はBを強調すべきと思う。前半では華やかに描かれている与一の言動だけど、後半では中差を『うちくわせ』たり、『しゃ首』と相手を罵ったり、非情さを際立たせて描いてあるから。」	個人 全体	・A, Bどちらを強調するか自分の立場をはっきりとさせ、座席を移動させる。 ・1回目と2回目の矢を射る場面を〈比較〉して考えさせる。			
(13分)	4 議論を踏まえて、「キャッチコピー」を練り上げる。	個人 ↓ ペア	<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="text-align: center;"><b>〈評価規準〉</b></td> </tr> <tr> <td>・理由を明確にしながら、武士の価値観について考えを深めている。 【知②】 / ワークシート</td> </tr> </table>	<b>〈評価規準〉</b>	・理由を明確にしながら、武士の価値観について考えを深めている。 【知②】 / ワークシート	
<b>〈評価規準〉</b>						
・理由を明確にしながら、武士の価値観について考えを深めている。 【知②】 / ワークシート						
まとめ (7分)	5 本時の振り返りと、今後の見通しを書く。	個人	<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="text-align: center;"><b>〈評価規準〉</b></td> </tr> <tr> <td>・自分のキャッチコピーを分析し、次時にどのような修正を加えるのか見通しを立てようとしている。 【態①】 / 振り返りシート</td> </tr> </table>	<b>〈評価規準〉</b>	・自分のキャッチコピーを分析し、次時にどのような修正を加えるのか見通しを立てようとしている。 【態①】 / 振り返りシート	振り返りシート
<b>〈評価規準〉</b>						
・自分のキャッチコピーを分析し、次時にどのような修正を加えるのか見通しを立てようとしている。 【態①】 / 振り返りシート						

## 7 授業の実際

### (1) 実践のねらい

#### a 単元のねらいを意識させるための「学習課題」の工夫

これまでの自らの実践を振り返ると、教師のみが授業を通して「身につける資質・能力」を把握していて、生徒たちは、どのような力を身につけるために学んでいるのか？どのような力を発揮するのか？理解しないまま授業を受けることが多かったように感じる。

そこで本実践では、「身につける資質・能力（Aフレーズ）」、「取り組む言語活動（Bフレーズ）」、「考え方の道筋となる思考操作（Cフレーズ）」をまとめたものを「学習課題」とし、単元を通して生徒に提示した。実際には、以下のような学習課題を生徒に提示した。

【A 資質・能力】	武士の生き方や価値観が伝わるような
【B 言語活動】	映画「平家物語」のパンフレットを作ろう。
【C 思考操作（考え方）】	そのために、登場人物の言動の意味や情景描写の効果を考えてみよう。

生徒に提示した学習課題は毎時間の授業で板書や振り返りシートの中に位置づけ、単元を通して常に意識できるようにした。

#### b 単元のゴールをイメージさせるための「言語活動モデル」

「学習課題」で身につける資質・能力を明示しただけでは生徒が見通しを持つことはできない。そこで、本実践では既習教材「竹取物語」を用いて作成したパンフレットを提示した。【資料1】

「竹取物語パンフレット」をもとに、武士の生き方や価値観を伝えるための「①キャッチコピー」と読み深めたことを映画制作者の立場で語る「②プロダクションノート」を書くという学習の流れを生徒と共有し、単元を通じた学びの見通しが持てるようにした。また、班員の作ったプロダクションノートを合わせて、一つのパンフレットを作るというパンフレットの完成イメージについても共有した。

**①キャッチコピー**

竹取物語は、  
「人の心を動かすのは、想いのこもった人の行動である。」  
そんなことに気づかせてくれる物語だ。

**②プロダクションノート**

井上（竹取物語）の感想  
「井上（竹取物語）の感想」

プロダクションノート  
「プロダクションノート」

【資料1】 言語活動モデル



このような「問い」をきっかけにゆきは武士の生き方や価値観に関して、以下のように問いに対する自分の考えをまとめている。

私は、義盛を通して「武士として生きる哀れさ」というものを伝えようと思っていました。武士も人間ですから良心はあるでしょう。しかし、伊勢三郎義盛は自分たちを素直に「すごい」と言ってくれる人を平然と討つよう命令するのです。ここに気持ちの矛盾が存在します。

これは、「武士としていつづけるため。」に起こった矛盾です。①武士は上からの命令で行動するため上にそむいたら、いつ切り捨てられるかわかりません。さらに、武士は「武芸」で食べているので、武士という職業を失えば、自分は不要なものになります。つまり、武士は「武士という職業にしがみついて生きている」のです。そのため、上にそむくことができません。だから、自分の気持ちとは関係なしに、命令を実行するのです。自分の感情を表に出せないなんて、哀れだと思いませんか。ここから武士の世界の非情さを感じてもらえると思います。

ゆきは、傍線部①のように、自分たちを「すごい」と認める純粋な気持ちから舞った男を討つよう命じなければならなかった当時の武士の価値観について考えをまとめている。要約すると「武士は、いつ切り捨てられるかわからない世界の中を、「武芸」で功績を残すことで生き抜いている。だから、生きていくために自分の気持ちとは関係なしに、命令を実行する。」というのがゆきの結論である。

また、単元末の振り返りで、ゆきは武士の生き方や価値観に対する自分の考えの変容を以下のように語っている。【資料4】より抜粋)

私はこの結論に辿り着いた時、「仕方がないことなのだな。かわいそう。」と元々マイナスイメージを持っていたのが初めて武士に同情した。

「平然と男を討つように命じている。」という伊勢三郎義盛の言動に着目することで、ゆきは「將軍の命令に忠実」という知識を超えて、「命令に従わなければならなかった武士の生き方・価値観」に思いを馳せ、古典から新たな気づきを得ることが出来た。

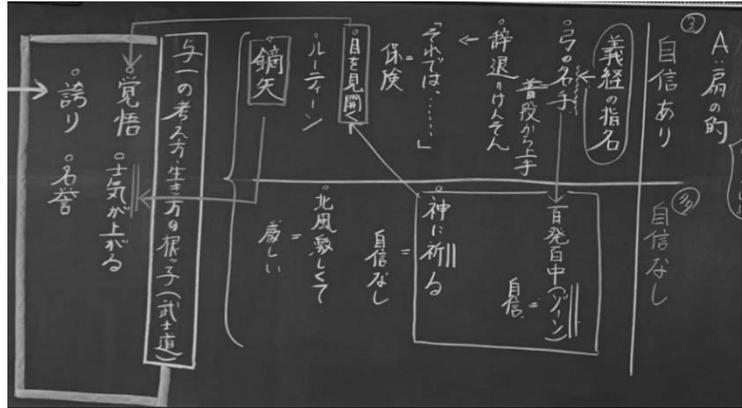
しかし、生徒たちは自然発生的に古典世界から気づきを得られたわけではない。ゆきのような考えの変容が生まれるためには、同じ作画監督と対話しながら「私の問い」を解決したり、問いを解決して生まれた自分の考えを持ちよりキャッチコピーを考えたりする第2時以降の学びが欠かせなかった。

ゆきは、この結論に辿り着いた時、「仕方がないことなのだな。かわいそう。」と元々マイナスイメージを持っていたのが初めて武士に同情した。	① 横線とした古文の表現を「…」で示すこと。	② 「生き方」もしくは「価値観」という言葉を必ず用いること。	③ こだわって用いたキャッチフレーズ中の語彙(表現)とその理由に波線(~~~~)を引くこと。
ゆきは、この結論に辿り着いた時、「仕方がないことなのだな。かわいそう。」と元々マイナスイメージを持っていたのが初めて武士に同情した。	ゆきは、この結論に辿り着いた時、「仕方がないことなのだな。かわいそう。」と元々マイナスイメージを持っていたのが初めて武士に同情した。	ゆきは、この結論に辿り着いた時、「仕方がないことなのだな。かわいそう。」と元々マイナスイメージを持っていたのが初めて武士に同情した。	ゆきは、この結論に辿り着いた時、「仕方がないことなのだな。かわいそう。」と元々マイナスイメージを持っていたのが初めて武士に同情した。

【資料4】 単元末の振り返り

b 第2時の学び考え方のモデルを共有する話し合いの設定

第1時では、A：監督、B：プロデューサー、C：作画監督、D：美術監督という役割分担を行ったが、第二時以降は同じ役割の生徒同士（美術監督は、美術監督同士といった具合）で班を再編成し、協働的な学びの場を設定していった。



【資料5】 第2時「与一は扇的を射る自信があったのか？」板書

まず、第2時では、それぞれが「私の問い」を立て、再編成した班で問いを共有した。このとき教師は、

子どもたちが「私の問い」を立て、武士の生き方や価値観迫る学びのモデルとなるように「与一は、扇的を射る自信があったのだろうか？」という発問を投げかけた。【資料5】のように、生徒たちは「自信はある。与一は、目を見開き、覚悟を決めているから、やる時はやるぞという生き様が伝わる。」と与一の言動に着目したり、「ない。北風激しくてなど厳しい条件が目浮かぶから。」と情景描写に着目したりしながら、与一的心情を読み取った。

自信がある派とない派の割合は、3：7ほどとなり、「自信がない」という立場の生徒が多数派となった。ここで教師は読み取った心情と武士の生き方や価値観を結びつけるために、「自信がないという人が多いけど、それならなぜわざわざ大きな音が出る鑄矢を選んだのだろうか？」と問い返した。また、このとき実際の鑄矢を放つ映像を生徒たちに見せ、鑄矢を放つときの音を共有した。生徒たちからは、「味方の士気を高めるため」「扇に当てられたときの源氏軍の名誉がより際立つように」といった与一の言動の根底に流れる価値観に触れた話し合いが展開された。

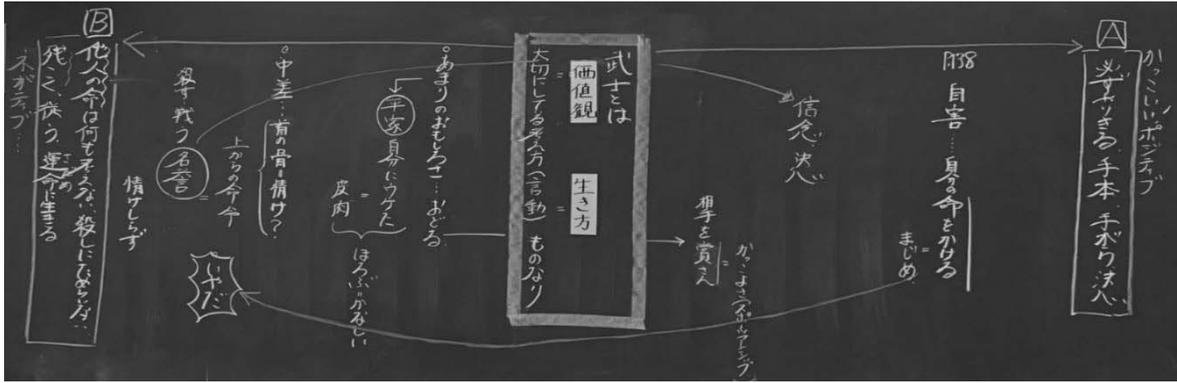
このような発問をきっかけに考え方のモデルを示し、「言動」「情景描写」「端役」などの視点から問いを立て、武士の生き方や価値観に思いを馳せるような学び方のイメージを生徒に共有した。その後、生徒たちは立てた問いを班員と共有し、問いの解決に向けて古文を読んだり、資料を調べたりした。また、この時間の終わりには「キャッチコピー第一弾」と称し、現在の武士の生き方・価値観に対する考えを一文でまとめさせた。

c 第3時の学び 考えを広げる話し合いの場の設定

第3時では、第2時末に生徒が書いたキャッチコピーを全体で紹介した。生徒たちがキャッチコピーを書いた振り返りシートを分析すると、「決めたことは必ずやりきる。かっこいい」などポジティブなもの、「他人の命は何も考えない。残酷」などネガティブなものに分かれていた。

そこで、「武士が大切にしている考え方（価値観）や生き様を言い表すには、ネガティブとポジティブのどちらの側面を強調すべきだろうか？」と発問し、生徒たちが自分の考えをもう一度見つめ直せるようにした。

例えば、「自分が良ければいい。自分のためのプライド。上からの命令に従うだけ。」などネガティブな印象を持っていたゆきは、ネガティブ派の意見に反論するななせの次のような意見と出会った。



【資料6】 第3時「キャッチコピーで強調すべきは？」板書

「心澄ます」とは、(心を) 雑念を除いて純粋な状態にすること。例えば、体育大会の練習で、相手側に強いものを見せつけられたら「すごい」というより、「ヤバイ、負けるかも。」という気持ちになる。でも、この場面で、平氏たちは、源氏にすごいものを見せつけられて、単に「すごい」「感嘆する」といった気持ちを持った。ここから武士には、純粋なきれいな心も持っているのではないかと思う。

(ななせのノートより抜粋)

ななせは体育大会の経験と平家の反応や舞を舞った男の行動を〈関連〉させている。このように自分と異なる立場の意見に触れたり、古典世界と自分たちの生活を〈関連〉させたりしたことで、ゆきは自分の考えを見つめ直し、振り返りシートの中で次のように語っている。

ななせさんの意見と出会って、今まで武士は人の心を持っていないと思っていた、理解できない部分があり、武士に対してマイナスなイメージを持っていたけれど、ななせさんとの話し合いを通して「仕方がないことなんだな」と同情する気持ちが生まれた。

このような話し合いを通して、ゆきとななせの学びのように子どもたちが考えを見つめ直すきっかけが生まれた。その結果ゆきは先に紹介したように、自分の考えを再構築できたと考える。また、子どもが実際に作ったキャッチコピーをもとに授業や発問を組み立てたことも、子どもが自分の考えを見つめ直そうとするきっかけになったと考える。

## 8 研究授業から見てきた成果と課題 (○・・・成果, △・・・課題)

### (1) 視点① 学習意欲のサイクルを生み出す「見通しと振り返り」

○既習教材を用いて「言語活動モデル」を提示したことで、既習の学びを想起しながら単元のゴールイメージを持たせることができた。

○振り返りに書かせることをしぼったことで、振り返りを見取り、次の授業に生かしやすくなった。例えば、考えたキャッチコピーを書かせ、その内容を次の授業で紹介するといった振り返りの活用ができた。

△第1時で生徒に示す資料や伝える内容が多くなり、教師の話す時間が多くなってしまった。資料の厳選が必要と感じた。

△言語活動の規模が大きすぎた。本来4時間で終えるはずの単元だったが、5時間かかってしまった。「書くこと」の学習と領域をつなげるなど柔軟で無理のない単元構成が必要だった。

## (2) 視点② 考えを深めるための協働的な学びの場の設定

- 一人ひとりが「問い」を立ててグループ学習に臨んだことで、主体的な学びが生まれた。
- 既習の読み方（端役の効果など）を活用しながら「問い」を立てられるようにしたことで、生徒が古文に立ち戻りながら、分析的に物語を読み深めていった。
- △キャッチコピーを考える第三時の学習では、ディベート的な話し合いを組織した。しかし、キャッチコピーとして武士の「ポジティブ」な側面と「ネガティブ」な側面のどちらを強調すべきか？という視点は、古文や資料に立ち戻り、武士の生き方や価値観に思いを巡らせる話し合いの視点にはなりにくかった。

## (3) 視点③ 学びの質を高める「思考のキーワード」

- 〈比較〉という思考をキーワードにしながらか単元を構成したことが、ゆきの「自分たちを感心してくれたのに、なぜ討つように伝えたのか？現代人のみなさんなら『ためらう』という感情が生まれると思う」という問いや、ななせの体育大会の経験と古典世界を〈関連〉させた意見が生まれることにつながった。
- △「思考のキーワード」を用いた学習を繰り返し行わなければ、生徒に学習習慣が定着せず、継続的な指導が必要だった。

## IV 研究のまとめ

### 1 視点① 学習意欲を生み出す「見通しと振り返り」について

- ・興味関心を考慮した課題を設定し、課題解決型の授業にすることにより、従来行われていた内容理解を中心に進めていく授業に比べ、子どもたちは主体的で意欲的に課題に取り組むことができていた。
- ・課題解決のために必要な、古文の現代語訳など、古文の内容を理解するために必要な知識・技能について、これまでの授業であれば取り組みをあきらめてしまっていたが、最後まで取り組む子どもたちが増えた。
- ・従来の授業に比べ、自ら歴史的背景や同時代の他の作品などを調べるなど、学習指導要領の「古典に親しむ」子どもが増えた。
- ・古文を読むために必要な「歴史的仮名遣い」「主語の省略」「ことばの意味の変遷」などの古文の特徴を、初見の古文を読むために生かせる子どもが増えた。

### 2 視点② 考えを深めるための協働的な学びの場の設定について

- ・本取り組みでは課題解決型の授業を行った。そこで、子どもたちに提示する課題は、一人で考えるより複数で考えていくことにより考えが深まる課題になるようにした。班活動や班同士の交流なども取り入れ、協働的な学びが生まれるようにしたが、終始子どもたちの対話は続き、協働的に学びを深めることができていた。

### 3 視点③ 学びの質を高める「思考のキーワード」について

- ・古文を読む際は、現代文を教材とする他の3領域「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」で身に付けた力を総動員して読み取っている。その中で、「思考のキーワード」は活かされていた。

#### <参考文献>

- ・文部科学省：中学校学習指導要領解説国語編，2018
- ・「国語科重要用語事典，明治図書出版，2015
- ・自己調整学習研究会「自ら学び考える子どもを育てる教育の方法と技術」，北大路書房，2012
- ・樋口万太郎「子どもの問いからはじまる授業！」，学陽書房，2020

# 【「伝統的な言語文化」部会】 助言者より

熊本大学教授 堀畑 正臣

## 1 協同研究をととして

- (1) 「伝国」部会では古典学習の意義として、「古典の作品の中に登場する人々の物の見方や考え方を知り、共感し、現代の自分たちと比較しながら、相違点や共通点を見つけ、そのことに関して自分の考えを持ち、深める。」また「古典に記されている日本語表現に触れることで、古から続く日本語の意味やその性質について知り、日本語について深く理解していく。このことをととして言語生活を豊かにする。」を掲げ、それらは研究主題「社会生活につながる国語科教育」に繋がると捉えた。

そこから、「作品の登場人物の物の見方や考え方を知り、現代の自分たちと比較して、相違点や共通点を見つけ、そこから自分の考えを深める」ことをねらいとする課題を生徒が個人または複数の協働で解決する授業を行い、「学習者が言葉を駆使し、自ら学びを進めていこうとする授業」につなげようと授業研究を展開した。「思考のキーワード(10種類:比較、分類、関連、類推、一般、具体、多面、統合、批判、反証)」の中から、その課題解決に必要な「思考方法」を用いるようにした。方向性と基本的な考え方は評価できる。但し、①掲げた目標と実際の単元や各授業での整合性はどうか、②単元や授業での課題の設定が、教師と生徒との吟味の上で価値のある課題となっていたか、③「古典を学習する意義」に相当し、生徒本人が古典教材の理解を深め、社会生活やその後の人生に繋がっていくか、④思考方法は有益であったか等を授業実践によって吟味・評価していく必要がある。

- (2) 「伝国」部会が、「従来の古典の授業では、歴史的仮名遣いや現代語訳中心になりかねなかったが、課題解決型の授業にし、自分たちでその課題解決の方法から考えさせていくことで、歴史的背景など、本文以外の様々なことを考慮して古典の作品を読んでいくようになった。」としているのは評価できる。但し、これも、①「よりよい課題であったか」、②「古典作品の本質に迫っているか」という問題はあろう。各学年の古典授業での検証を重ねていく必要がある。

## 2 『平家物語』「扇的」の研究授業について

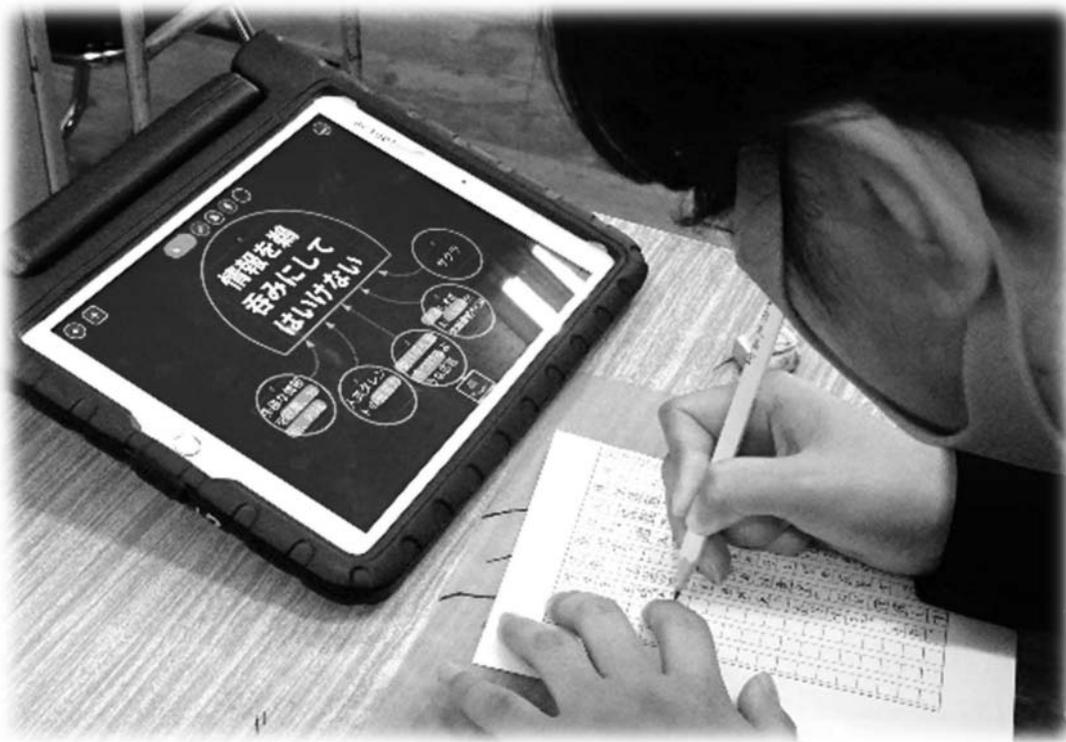
- (1) 「古典作品の中(『平家物語』「扇的」)に登場する人物の物の見方や考え方を知り共感し、自分たちと比較して相違点や共通点を見つけ、そのことに関して自分の考えを持ち、深める。」という点では、① 那須与一の考え方を踏まえ、自分との相違点や共通点を深めていくことが必要であろう。② 自分との比較は「ア、弓矢の技術〔的への距離・的の小ささ、船の揺れ〕、イ、心構え(失敗したら自害する覚悟)、ウ、置かれた立場(源氏の代表、那須家の代表、個人の名誉不名誉)」等、当時の武士が持っていた「名こそ惜しけれ」の思いを踏まえるべきであろう。
- (2) 「古典に記されている日本語表現」の箇所は、①「小兵といふぢやう、十二束三伏」②「あやまたず扇の要際一寸ばかりおいて、ひいふつと射切つたる。」③「夕日の輝いたるに、皆紅の扇の日出したるが、白波の上に漂ひ、」等の言葉の意味や描写を押さえていくべきであろう。尚、教科書本文には的までの距離「七段ばかり」(約70m)が挙げてない。ここは補う必要がある。
- (3) 研究授業では言語活動『平家物語』のパンフレットを作ろうのもと、キャッチフレーズで「武士とは…」を考える課題であった。そして、「A:プライド・誇り高い」と「B:残酷、心ない、切ない」に分けて協働で議論させたが、『平家物語』全体がAかBになるわけでもない。場面毎にAになったりBになったりする。よって、ディベート的に自分の論を主張し議論が噛み合わなかった。また、議論の際に本文を確認することが等閑になっていた。課題の精選と吟味、本文の熟読が必要である。

## 3 今後の「伝国」の授業に期待・要望すること

- (1) 課題の精選と吟味を行い、授業も目的に合わせて展開すること。例えば『枕草子』冒頭では、清少納言が中宮や天皇、貴族・女房達に向けて季節の良いと思う情景を述べている。さすがは清少納言と評価が高かったから残ったのである。清少納言が提示した四つの季節のどのような所が良いと思うかを生徒に熟読させ選ばせて説明させる。次は生徒が考える自分の季節の情景を発表させる。それを皆でどれのどこがいいか議論させ、生活の中から情景を見出す。それが社会生活の中での感性に繋がる。課題が作品の本質を捉えていて、自分達の生活に繋がるものであるかを吟味・精選すべきである。
- (2) 『平家物語』「扇的」では、今井正之助「扇的」考(『日本文学』63(5)、54~64頁、2014年)が背景や諸本の差異もわかりやすく説明していて有益な研究である。教科書会社の動向や誘導しすぎも見えてくる。古典文学の研究にアンテナを張り、その成果を取り入れることも大事であろう。



#### IV 九州各県の研究発表



## 研究テーマ

## 思考力・判断力・表現力を育成する国語科の授業の工夫

## ～互いに批評したり、考えを伝え合ったりする言語活動を通して～

福岡県 遠賀町立遠賀中学校 畠山智加枝

## 1 研究テーマ設定の理由

現代社会は人工知能が飛躍的な進化を遂げ、人間にとって変わろうとしている。しかし、どれだけ人工知能が発達しようとも人間には人工知能を超えることのできない力がある。それは、人と人との関わりの中で思いや考えを伝え合う力であり、思考力や想像力であるといえよう。また、それらこそ人間がこれからの社会を生き抜く上での最も大きな強みとなる力だといえる。中学校学習指導要領国語編では「思考力・判断力・表現力等」の目標には、「考える力や感じたり想像したりする力を養うこと」「社会生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えを広げたり深めたりすること」などができるようにすることが系統的に示されている。これを踏まえ、「A 話すこと・聞くこと」の言語活動例として「提案や主張など自分の考えを話したり、それらを聞いて質問したり評価などを述べたりする活動」が示されている。そこで、互いの立場や考えを尊重し、言語を通して理解したり表現したりする力を高めるため、互いに批評したり考えたことを伝え合ったりする「批評」を言語活動として設定することで、国語科の求める思考力・判断力・表現力を育成することができると考えた。

## 2 研究の概要

## (1) 研究の視点

- ① 俳句の鑑賞の学習において、視点をもとに互いの作品を批評しあうという活動を仕組み、俳句を批判的に読み、印象や表現について吟味したり検討したりすることで、思考力・判断力・表現力を育成する。
- ② 「俳句甲子園」で闘うという場面を設定して活動目標を示し、互いの立場や考えを尊重しつつ、自分の考えを伝え合う活動を仕組むことで、思考力・判断力・表現力を育成する。

## (2) 研究の実際

## ① 生徒の実態

本学年の生徒は、これまでも詩歌・物語の鑑賞や創作、また、それを批評し合うといった言語活動を継続的に行ってきた。生徒は全体的に明るく前向きで、学習の目標の達成に向けても真摯に取り組むことから、鑑賞の学習においても、また創作や批評といった言語活動においても、形式を整えることはできていた。しかし、批判的に読むことや批評するという点においては課題があり、相手を説得するための根拠の確かさや説得力のある論理の展開については不十分な点が多くの子に見られた。

また、批評し合う活動の場面においても、互いの作品を批評することに抵抗感はないものの、自分の知識や経験を結びつけて話したり、確かな根拠を示したりといった点で十分力が付いているとは言えなかった。これらのことを踏まえると、「話すこと・聞くこと」の指導事項にあげられる「自分の立場や考えを明確にし、相手を説得できるように論理の展開などを考えて、話の構成を工夫すること。」「ウ場の状況に応じて言葉を選ぶなど、自分の考えが分かりやすく伝わるように表現を工夫すること。」「エ話の展開を予測しながら聞き、聞き取った内容や表現の仕方を評価して、自分の考えを広げたり深めたりすること。」を指導するための言語活動が必要だと考えた。

## ② 取組の実際

指導にあたっては、まず、毎年愛媛県で開催されている高校生の「俳句甲子園」の動画を視聴させ、意識付けを図った。これにより、俳句の世界の広がりを生徒に伝えるだけでなく、言語活動の楽しさを知らせ、同時に学習に対する見直しを持たせることができた。

次に俳句の基礎・基本を理解させ、教科書に記載されている俳句についての鑑賞を行い、批判的な読みや根拠の確かさについての学習を行った。方法としては、まずは個人で、俳句に詠まれている季節や情景、作者の心情について、自分の知識や経験を結びつけて吟味したり検討したりしながら読ませた。

その後、グループでの交流を行った。個の学びからグループの学びへと広げることで、各自のものの見方や考え方を広げたり深めたりさせることができた。

さらに、学級を8グループに分け、「遠賀中学校版 俳句甲子園」の対戦相手を決め、2グループごと同じ季題での俳句の創作活動を行わせた。その際、テレビ番組の「プレバト」に倣い、季題の提示に

写真を用いた。写真を用いたことで、季節や情景はイメージしやすくなったと考える。また、思考ツールを活用し、表現に用いる語彙を増やす時間も設定したことで、創作活動を円滑に行うことができた。

創作活動が終わり、全ての生徒作品が揃った後、対戦相手のグループ同士で俳句を交換し、互いの俳句についてグループで吟味・検討し、対戦相手に対する質疑と予想される相手からの質疑に対する応答を考える時間を設けた。事前に吟味・検討する時間を設けたことで、表現の適切さや根拠の確かさについて、グループで意見交流することができ、考えを深めることができた。また、この吟味・検討をする際には、「季語」「切れ（切れ字）」「構造」「効果的な技法」「形象読み」という五つの吟味・検討の視点を示した。

これまでの過程で意識したことは、モデルの提示である。教科書記載の俳句の鑑賞では、鑑賞文のモデル文とサンプル文を用い、鑑賞の視点を生徒に考えさせた。次に、創作では思考ツールを用いて、作成の手順をモデルで示した。また、対戦相手の俳句の批評については、全体で、モデルの俳句を五つの視点をを用いて批評し、質疑を考えさせた。モデルを提示することで、それぞれの過程での課題をしっかりと意識させることができたと考える。

そして、最後に、準備した質疑をもとに、実際に「遠賀中学校版 俳句甲子園」を開催し、対戦相手のグループの俳句についての批評会を行った。

「俳句甲子園」の流れとしては、事前に準備した質疑、また予想される質疑に対する応答のメモをもとに、実際の「俳句甲子園」のルールに則って意見を交わし合った。審判は対戦グループを除いた他のグループとし、予め勝敗の判定基準を示して勝敗をつけさせた。

### 3 研究の成果と今後の展望



#### (1) 成果

「俳句甲子園」を模して、言葉を用いて闘うという場面を設定したことは、生徒の学習に対する意欲付けになった。

互いの俳句を批評する際に、五つの視点を示したことによって、俳句の基礎・基本の理解が深まったとともに、互いに意見を交流する際に論点がずれることがなく、議論を深めることができた。

批評を一方で行うのではなく、互いの俳句を批評したり考えたことを伝え合ったりする言語活動として設定したことで、互いの立場や考えを尊重しつつ、言語を通して理解したり表現したりすることができた。

#### (2) 今後の展望

中学校学習指導要領国語編「C 読むこと」の中に「文章を批判的に読みながら文章に表れているものの見方や考え方について考えること」とあるが、その言語活動例に「詩歌や小説などを読み、批評したり、考えたことなどを伝え合ったりする活動」が示されている。今回は「話すこと・聞くこと」として研究を行ったが、互いに批評したり、考えを伝え合ったりするためには、対象となる文章や詩歌を吟味したり検討したりしながら読むという「読みの力」が必要であると考えられる。また、「批評」するためには、自分の考えをもたせなければならず、その「考えの形成」のためにも「読みの力」が必要とされる。

このようなことから、「読むこと」と「話すこと・聞くこと」、また、「書くこと」と「読むこと」といったように、上手く関連付けていくことが大切だと考える。

また、学習に深まりや広がりを持たせるためには、個の活動で終わることなく、グループや全体での交流の時間とそれを個に返す時間が必要であると考えられる。

## 「主体的な学びを促す「話し合い」の学習指導の工夫」

熊本県 宇城市立不知火中学校 原武聡子

## 1 研究テーマ設定の理由

学校生活や社会生活において、自分と異なる考えや多様な価値観をもつ他者と話し合い、新たなアイデアや納得解を生み出したり、問題解決を図ったりする場面は、今後ますます増えることが予測される。しかし、生徒の現状を見てみると、一見すると活発に話し合いが行われているように見えて、実際には意見の出し合いに止まっていたり、一通り意見を出した後で、話し合いが停滞してしまったりと、適切に話し合いを行うための力を十分につけられていない状況にある。また、「話し合い」とは、「話すこと」と「聞くこと」が交互に繰り返されるものであり、その点において、国語科の「話すこと・聞くこと」領域の授業との関連は深いですが、個々の授業での学びが表面的な知識や理解に止まり、他教科の授業や総合的な学習の時間、普段の学校生活で活かされていないという課題が見られる。

そこで、本研究では、見通しをもって主体的に学び、学びを通して身に付けた知識・技能を活用できる生徒の育成を目指し、「身に付けたい力の明確化」「見通し・振り返りを位置づけた学習過程の工夫」「社会生活につなげる言語活動の工夫」という3つの視点から授業実践に取り組んだ。

## 2 研究の概要

## (1) 研究の視点

## ① 身に付けたい力の明確化

## ア スキルの明確化

「話し合い」が成立するためには、基礎となるスキルを明確にし、その定着を図ることが重要となる。ただ、そのスキルを教師から示すだけでは、生徒にとって表面的な知識に止まりやすい。そこで、本実践では、既習事項やモデル例をもとに、よりよい話し合いが成立するための要素を「技」として生徒自身が自分の言葉でまとめることで、意識づけと活用を図った。

また、「話し合い」とは、「話すこと」と「聞くこと」が交互に繰り返されるものであり、当然適切に「話す力」や「聞く力」が必要となる。そこで、本実践では、「話すこと・聞くこと」領域全体の中で、育成を目指す資質・能力を明らかにし、それぞれの学びを関連させることを意識して取り組んだ。

## イ メタ認知を促す学習活動の工夫

「話し合い」は音声言語を用いて行われるため、自分たちの話し合いをその場で客観的に捉えることは中学生にとって難しい。そこで、本実践では、グループでペアを組み、互いの話し合いの様子を観察し合い、気付きを伝え合わせた。その際、今日の話し合いで自分が意識したい「技」を相手に伝え、その「技」を重点的に観察することで、焦点を絞った観察になるようにした。

また、同時にタブレット端末を使って話し合いを録画し、自分たちの話し合いの状況や課題を客観的に捉えさせ、話し合いについて学ぶことへの意識を高めることを目指した。

## ② 見通し・振り返りを位置づけた学習過程の工夫

## ア 課題設定の工夫

生徒が主体的に学ぶためには、学習の必然性を実感できるような課題を設定することや、生徒自身が学習の見通しやゴールを明確に持つことが重要となる。そこで、本実践では、「小学生の体験入学で不知火中学校の校訓を紹介する」という学習のゴールを明確にし、その紹介をするために、「校訓の意味や目指す姿について、これまでの自分の体験や知識をもとに話し合い、自分たちなりに校訓を定義づける」という課題を設定することで、生徒自身が見通しを持って学習活動に取り組めるようにした。

## イ 振り返りの工夫

授業の終末では、「学習の内容」「学習を通じた考えの深まりや自己の変容」「既習事項とのつながりや他の場面での活用」という3つの視点を示し、生徒自身が多面的に自分自身の学びを振り返り、自分の言葉でまとめることで、学びの自覚化を図った。

### ③ 社会生活につなげる言語活動の工夫

学校生活においては、他教科の授業や特別活動、総合的な学習の時間、生徒会活動など、さまざまな場面で話し合いを行う機会がある。本実践では、このような話し合いの基礎や、KJ法、ブレインストーミング等、意見や考えの出し方や整理の方法についても学ぶことで、他教科や学校生活における話し合いでの活用へとつなげることを目指した。

## (2) 授業の実際（「話し合いで理解を深めよう グループディスカッション」東京書籍1年）

### ① 生徒の実態（不知火中学校1年生 52名）

- ・授業実践前に行った意識調査では、51名（98.1%）の生徒が「授業における話し合いは効果的」と回答しており、全体的に話し合いについては好意的に捉えている。その一方で、他者の意見の聞き方や受け止め方などに課題が見られる生徒もいる。
- ・話し合いが意見の伝え合いや情報収集に止まってしまうことが多く、話し合いの効果的な進め方や他者の発言に対する適切な応じ方に課題が見られる。

### ② 指導計画

本授業実践の指導計画は以下のとおりである。（6時間取り扱い）

次	時	学 習 内 容
1	2	1 目標や課題内容を知り、学習の見通しを持つ。 2 一度話し合いを行い、自分たちの話し合いの現状を把握する。 3 話し合いの「技」（ポイント）を自分たちの言葉で整理する。
2	1	1 自分たちのグループが担当する校訓に関して、知識や体験、考えを出す。（個人） ・辞書を使って漢字や言葉の意味を調べる ・これまでの体験と関連づけて考える。
3	2	1 グループで話し合い、理解を深める。 ・校訓について話し合う。（話し合いを互いに観察し合い、メモをとる。） ・話し合いを振り返る。（できたことや課題、次時の話し合いで意識すること）
		2 グループで話し合い、校訓を定義づける。 ・前時の課題を意識しながら話し合いの続きを行い、校訓を定義づける。
4	1	1 学級全体で各グループが定義した校訓の意味を紹介し合う。 2 校訓についてさらに理解を深めるための話し合いをする。→校訓の内容、順序等 3 今回の学習全体を振り返り、自分の学びをまとめる。

## 3 研究の成果と今後の展望

### (1) 成果

- 「話すこと・聞くこと」領域全体を見通して身に付けたい資質・能力を明らかにし、「聞くこと」「話すこと」における学びと関連づけながら授業実践に取り組んだことで、生徒自身が既習事項とのつながりを意識して考えたり、授業の中で実際に生かしたりすることにつながった。
- 学習のゴールを単元の初めに示し、生徒にとってリアルな課題を設定したことや、課題がさまざまな観点から考えられるものだったことによって、学習や話し合いの必然性が生まれた。また、実際に体験入学で校訓紹介を行ったことで、学習の達成感を感じることができた。
- 話し合いの相互観察やICT機器による録画など、自分たちの話し合いを省察する学習活動を取り入れたことによって、生徒自身が話し合いの状況や課題を客観的に捉えることができた。

### (2) 今後の展望

- 国語科での学びを表面的な知識・理解に止まらせないようにするためにも、学びを意識したり、活用したりする場面を継続的に作っていく必要がある。そのためにも、カリキュラム・マネジメントの視点から各教科の学習内容を確認し合い、学校全体としての実践にも取り組んでいきたい。
- 3つの視点からの学びの振り返りについては、年間を通して継続して取り組んできたことで、学習における学びの深まりや、既習事項とのつながり、他の場面での活用への意識は高まってきている。今後も継続して取り組み、さらに意識を高めていきたい。

## 1 研究テーマ設定の理由

現代社会は、高度経済成長、国際化・グローバル化社会の進展などに伴い、めまぐるしい変化を続けている。このような中で、これから生きる日本人には、幅広い知識と柔軟な思考力に基づいて判断したり、異なる文化や文明と共存し、国際的に協力して課題の追求・解決を図ったりする態度や能力の更なる育成が求められている。そのため、これからの社会を生き抜く子どもたちに、思考・判断・表現の基盤となる言葉の力を養い、感性や情緒の基盤となる豊かな言語感覚を身につけさせることは、言語を題材とする国語科教育の責務である。さらに、生徒一人一人の特性や経験の違いを互いに尊重してそれぞれの学びをつなぐことで、新たな価値を見出すことができるものとする。このような学習経験を通して、子どもたちは自己の能力や特性を認め、自信を持って社会へと参画していこうとする意欲と態度の向上を図ることができるものと考え、研究主題「豊かな言語感覚を育み、学びをつなげる国語科教育の創造」を設定した。

## 2 研究の概要

### (1) 研究の視点

#### ① 豊かな言語感覚を育てるための工夫

ここでは、相手・目的や意図・多様な場面や状況などに応じて、適切な言葉を選んで表現したり、話や文章に使われている言葉が醸し出す味わいを的確に捉えたりできる力の育成を目指す。実際の授業では、例えば、教科書の新出語句や教材の中で取り上げられている語句、慣用句などを用いて短作文を作らせたり、文学的文章の読解学習において、描写の工夫や表現技法などを手がかりとしながら、作品を読み味わわせたりする活動などが考えられる。また、書いた文章を互いに推敲する活動も、互いの語感を磨き合う契機となる。

#### ② 協働的問題解決力を育てるための工夫

協働とは、単なるグループ活動を指すのではなく、子どもたちが主体的・自律的に、それぞれの強みを生かしながら、仲間と共に課題解決に向かう活動と捉えている。ここでは、相手の考えに共感したり多様な考えを統合したりすることで、協力しながら課題を解決していくために必要な思考力・判断力・表現力の育成を目指す。実際の授業では、例えば、生徒の思考を揺さぶり、生徒同士の対話を促進させるために教師の発問を工夫したり、ジグソー学習を取り入れ、複数人で問題解決を図らせたりすることが考えられる。また、シンボジウムやパネルディスカッションなどにおいて、互いの考え方の共通点や相違点を考えたり、自分の考えを言葉にして説明したりする中で、他人と自分との違いを生かしながら学びを広げていくことができる。

#### ③ 主体的に社会や世界と関わろうとする態度を育てるための工夫

ここでは、主体的に学びに向かう力、自己の感情や行動を統制する能力、自らの思考のプロセス等を客観的に捉える力の育成を目指す。実際の授業では、例えば、文章構成や登場人物の人間関係などを、視覚的に確認しやすくするために図を用いさせる活動が考えられる。さらに、自己の体験や考えと比較しながら読んだり、読み取ったことを話し合ったりすることで、社会や世界と関わろうとする態度が育つ。また、読解の視点を定めることで、生徒が見通しを持って主体的に学ぶことができる。

### (2) 研究の実際

生徒の実態として、書くことに対する苦手意識を持っている生徒が多く、4月の実力テストでは記述の問題で空欄が目立った。感想文等でも自分の気持ちを表現する言葉に乏しい生徒が多く、伝えたいことを十分に表現できていない様子が見られた。

そこで、自分の伝えたいことをよりよく伝えるために、表現の効果を確かめながら書く力をつけたいと考え、描写に焦点を絞って授業づくりを始めた。しかし、取材や構成の段階でつまづき、表現を高めていくことに十分な時間を確保することが難しい生徒は表現の効果についてグループで学び合いをしたくてもそも

そも内容が出来あがっていないので、高めようがない。当然、自分がその段階に至っていないのに、その上のことを他の生徒に助言しようもない。どうすれば生徒たちが「表現の効果」について存分に考えることができるのか、その方法を試行錯誤した。

今回、題材を KTN テレビ長崎が 22 年間、五島に住む家族を取材してきたドキュメンタリー映画「五島のトラさん」に決め、監督から授業や研究発表で使用する許可を得ることができた。登場人物の感情が豊かなため、中学生も共感しながら観ることができる。ドキュメンタリーなので実際の出来事そのまま映し出されているので、生徒が印象に残った登場人物の心情を描いて物語として成立させるためには、出来事をそのまま並べるだけでなく「描写」を工夫しなければならない。そこが今回付けたい力となる。実際の授業では、まず映画を一通り視聴させ、その中から 5 分程度の、登場人物の様々な感情が伝わってくる場面を文章化させた。映像を使うことで、取材と構成のハードルはかなり低くなる。しかし、同じ映像を見ている、どの人物のどのような気持ちを表現するかによって描写の工夫は変わってくる。うまく伝わったかどうかの議論も同じ映像を見ているからこそ盛り上がり上がると考えた。

ただ、映像を文章にし、そこに描写の工夫を取り入れることは、書くことが苦手な生徒たちにとって、容易ではない。そこで、基本的な描写の種類やその効果を確認しながら書く練習をするために、登場人物設定とシンプルな筋書きだけを教師が用意した文章に、描写の工夫をするという時間を設けた。その際にはこれまでの教科書に出てきた効果的な描写をまとめた描写集を配付し、参考にさせた。その上で、よりよい描写の基準を①「人物の心情がわかる」、②「人物の人柄がわかる」、③「書き手の意図がわかる」という 3 点に明確化し、モデル文も提示することで生徒たちに見通しを持たせた。このように、終始描写にこだわり単元を構成した。

### 3 研究の成果と今後の展望

#### (1) 成果

映像が生徒たちの興味関心を十分に引き出し、500 字程度の文章を学級の全員が書ききることができたのは大きな成果だった。そして、自分なりに描写を工夫して書くことができたなら、グループで意見交換をする時間を設けた。ここでは、三人班で横一列に並び、真ん中の生徒の原稿について両隣の生徒が意見を出すようにした。この形態にすることで頭を突き合わせて、描写について活発に意見を出し合っていた。原稿には、自分なりに行間に検討したことを書いているが、一人ではなかなかうまく表現できなかった部分を相談させた。原稿の下段にも空欄を設けており、そこにグループで話し合ったことをもとに練り直したことを書かせた。手元にはそれぞれの原稿を持たせた上で、書き込んでいくための原稿は大きめに拡大コピーしており、書き込みやすいよう配慮した。実物投影機を使って、テレビ画面に映し出し、グループで話し合いが白熱している部分などは全体にも投げかけた。このように「グループ」→「全体」→「グループ」と活動が動くときも、前向きに横一列の班にしていたことでスムーズに活動が進んだ。このグループ活動を通して多くの生徒が描写の効果について以前より深く考えるようになった。たとえば、父の悲しみを強調したい場合、他の部分にあまりにも多く描写の工夫や表現技法が使われていると、「ここはくどすぎて、伝えたいことがぶれるのでは？」という描写の濃淡について触れる声も聞こえてきた。また、この涙は「流れた」がいいのか、「溢れた」がいいのか、はたまた「滝のように」という表現技法まで入れたほうがいいのかという一つの表現について熱く語り合っている班もあった。とにかく描写がたくさん入っていればよいというわけではないことに気付くことができたことを嬉しく思い、学級全体にも振り返りのときに共通理解をさせた。

#### (2) 今後の展望

今回描写の工夫をする際に参考にさせた描写集は教師が意図的に描写を集めたものであるが、物語や随筆などの単元で、生徒自身に気になる描写を書き抜かせるなど、生徒の学びが蓄積された描写集にしていった方が、より生徒の語感が磨かれると考えられる。

また、文学的な文章の創作は、推敲の話し合いの際も主観的になり難しい面もある。そのため、何をもって「よりよい描写」とするか基準を明確にすることが重要だった。生徒に何を意識して書くのかを明らかにすること、その具体的なゴールイメージをモデルとして示すことは今後どの単元でも必要になると感じた。

今回の実践で得た学びは多かった。こちらで用意するモデル文や、ワークシートの質、話し合い活動の人数や形態によって、生徒たちの思考の深まりは大きく違ってくる。これから作っていく単元でも、どんな力をつけたいのかを常に頭に置いて、生徒たちの力を十分に発揮できるような準備を心がけたい。

## 研究テーマ

## 自分の思いや考えを適切に表現できる生徒の育成

## ～「読むこと」で学んだことを「書くこと」に生かす指導の工夫を通して～

熊本県 多良木町立多良木中学校 那須裕貴

## 1 研究テーマ設定の理由

新学習指導要領では、国語科において育成を目指す資質・能力を「言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力」としている。「言葉による見方・考え方を働かせる」とは、「子どもが学習の中で、対象と言葉、言葉と言葉の関係を、言葉の意味、働き、使い方等に注目して捉えたり問い直したりして、言葉への自覚を高めること」であるとされている。

本研究で紹介する2年生は、熊本県の学力調査より、「書くこと」に対しての知識・技能は県平均を大きく上回っている。反面、登場人物の心情や行動の意味、描写の工夫などを読み取る力は県平均を下回っている。また、普段の授業やアンケートの結果より、「書くこと」の知識・技能を活用して、日記や生活作文のような事実を羅列する文章は書けるが、自分の考えや気持ちをうまく相手に伝わるように表現することに課題があることが分かった。今回の授業では『ある日の自分』の物語を書く（光村図書3年）を取り扱い、「盆土産」や「走れメロス」で学習した描写の工夫を「書くこと」に生かし、表現することで、課題の克服ができると考えた。

## 2 研究の概要

単元名 表現を見つめて 『ある日の自分』の物語を書く（光村図書3年）

指導時間数 6時間

単元の指導目標 人物の心情を読者に明確に伝えるために、様々な表現の中から言葉を選択し、描写を工夫して物語を書くことができるようにする。

## (1) 研究の視点

## ①生徒が主体的に学びを積み重ねる「見通しと振り返り」

本単元では「学習計画表」を作成する。現在の自分の国語の課題を振り返り、「単元のゴールの姿」「身につけたい力」を生徒たちと一緒に設定をし、学習計画を立てる。授業後には、本日の学びを振り返り、次時に何をやるのかを想定し、それを全体で共有して終わる。このような活動から主体的に学びを積み重ねようとする意欲が高まるだろうと考える。

## ②考えを深める協働的な学びの設定

協働的な学びを行うときには、班のメンバーがどのような描写を工夫し、どんな心情を表そうとしたのかを語り合う場面を設定する。また、困っていることや不安をみんなで考える時間を確保する。互いの工夫を学び合えることで、自分の気持ちや考えを表現する描写の幅を広げることにつながるだろうと考える。

## ③既習事項を次に生かす場の設定

今回の授業では「盆土産」や「走れメロス」で学習した描写の工夫を生かして、『ある日の自分』の物語を書く。描写の工夫を生徒たちはある程度捉えているものの、行動描写や情景描写から心情を読み取ることに苦手意識を持っている。そこで、実際に物語の書き手になって、心情を効果的に表すために、描写を工夫して、自分が登場人物となる物語を創作する。書く際に、自分がどんな心情だったのかを想像し、その心情にふさわしい描写を用いようとすることで、既習事項が生き、「書くこと」はもちろんのこと、「読むこと」の力の向上につながるだろうと考える。

## (2) 研究の実際

## ①生徒が主体的に学びを積み重ねる「見通しと振り返り」

生徒たちは、「盆土産」と「走れメロス」を通して、描写の効果や面白さを味わった。特に心情を「うれしい・悲しい」などの言葉を使わずに表現しており、心情がよりよく伝わっていることに対しては多くの生徒が興味を持っていた。しかし、描写から心情を読み取る力が不足していることはテストなどで生徒たちは自覚している。

また、今までの学習の中で「書く」学習は進んでいる。そこで、より効果的な学習にするために、授業前に、生徒たちが「書く」活動のどの過程で、どのような苦手意識を持っているのかアンケートをとった。その結果、「記述する」際に、「相手に自分の気持ちや伝えたいことが伝わらない。」「言葉が浮かばず、小学生のような文章になる。」「ついつい簡単な言葉で書くようにする。」という意見が多かった。このアンケート結果を生徒に提示した上で、今回の単元で「身につけたい力」と「目指す自分の姿（ゴールの姿）」を全員で設定した。その力・姿を目指すために「級友に自分の心が動いた日常生活の一場面を物語にして伝えよう。」という学習課題を設けた。1時間の授

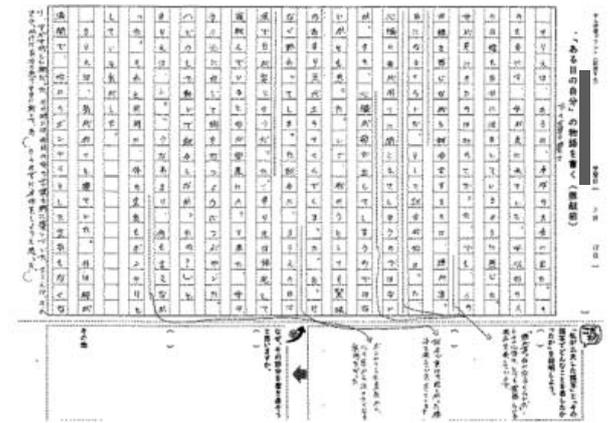
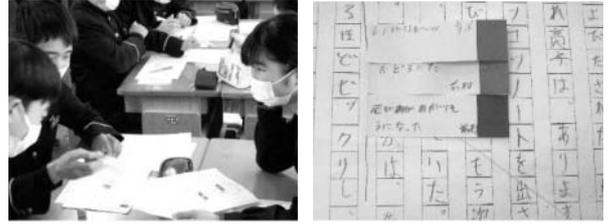
The image shows a handwritten learning plan table. The table has several columns and rows. The columns are labeled with numbers 1 through 5. The rows contain handwritten text in Japanese, detailing the learning objectives and activities for the unit. The text is written in a clear, legible hand.

単元の学習計画表

業後には、ペアで本日の学びを振り返り、自分ができるようになったこと、できなかったこと、次時何をするのかを想定し、それを全体で共有して終わった。単元を終えての振り返りでは、「自分たちが設定した身につけたい力に近づけた。」「工夫したら心情が伝わるかもというワクワク感で活動できた。」などの感想が見られ、生徒自身が先を見通し、自分の成長を意識しながら活動をしたことで、多くの生徒が主体的に活動できていた。

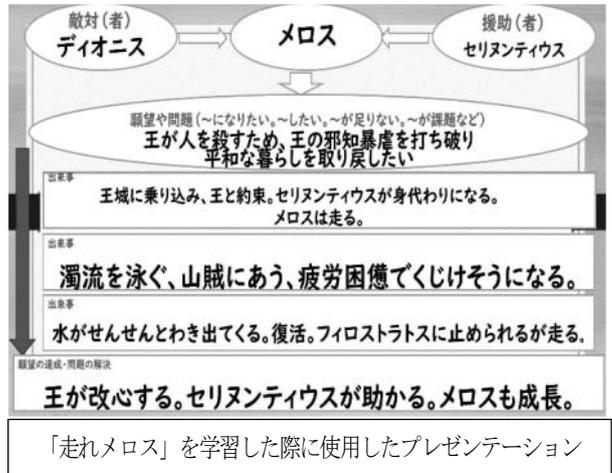
## ②考えを深める協働的な学びの設定

物語を創作後に「編集会議」と称した班学習を行う。まず、生徒は原稿に自分がこだわって用いた描写に線を引き、その描写にどのような思いを入れたのか書いておく。その後、グループで回し読みをする。推敲はもちろんだが、班のメンバーが自分の描写をどう読むのか、(読んだ人は赤付箋にその描写から読み取れる心情、青付箋にはその描写をもっとこうすると良くなるよというアドバイスを記入) また、他の人がどんな描写を工夫しているのかお互いに学び合える場を設定した。自分が表現したいことをうまく表現できないなど、悩みなどを出し合い、編集会議でも解決できない場合は、全体で解決する時間を設定した。編集会議後の振り返りには「他の人のアドバイスで物語がよりリアルになった。」「自分の描写が自分の意図どおりに伝わっていた。」「自分と同じ気持ちなのに他の人は描写の使い方が違っていた。」など、お互いに描写が表している心情を読み取り、より効果的な描写を探り、自分の描写の工夫の幅を広げる編集会議になった。編集会議後、清書を行い、推敲前の原稿と推敲後の原稿を比較した。比較した結果、多くの生徒が「以前より心情がよく分かるようになった。」「その場面がリアルになった。」「心情描写、情景描写を効果的に使うと、心情がドラマのように伝わった。」と述べていた。



## ③既習事項を次に生かす場の設定

物語は、今までに自分が体験したことの一場面を切り取って、400字程度で創作するように決めた。ただし、描写を工夫しやすいように大きな心情の変化があった場面を選ぶように条件を出した。生徒たちはまず、条件に合うテーマ(いたずら、失敗、ライバル、友情など)を設定し、その後、メロスを読み取る際に使用した、物語の設定(中心人物・中心人物と敵対するもの・中心人物を援助するもの)と物語のあらすじを捉えるためのワークシートを、今回、物語を創作する際にも使用し、自分で物語の設定、あらすじを考えた。その際、物語の山場を意識させた。また、創作前には、メロスや盆土産で学習した心情を表す描写の復習を行い、読者に効果的に心情が伝わっていることを確認して、創作させた。創作の際の振り返りからは、「難しかったが、自分の心情を相手に伝わるようにと一生懸命考えたことで集中して書けた。」「うれしいとき、悲しいときに自分がどんな様子だったかを振り返ったら行動描写に表すことができた。」「自分の言葉の使い方の幅が広がった。」という感想が多く見られた。



## 3 研究の成果と今後の展望

### (1) 成果

授業前と授業後のアンケートを実施したところ、相手に伝わるように自分の心情を書くことに自信が持てるようになったという生徒が20%以上増え、また、授業後、描写に注目して読書をするようになった生徒が増えた。また、描写から心情を読み取る問題を解決させたところ、多くの生徒がその描写から心情を読み取り、以前よりも、達成感を味わっていた。

### (2) 今後の展望

今回は、読み手の立場に立って、描写を工夫して書くという授業を行った。日頃、描写から心情をなかなか読み取ることができなかった生徒が、「書くこと」に描写を実際自分が使ってみたことで、その効果や描写に込められた心情を読み取る力がついた。「読むこと」で学んだことを「書くこと」と関連づけた指導という必要性を感じた。また、今後、このような授業を通して、効果的だった描写を挙げさせて、言動・情景・心情・心理などの描写に分類した上で「描写一覧」を作成することも、既習事項を生かす指導につながっていくのではないかと考えている。

研究テーマ

言葉を駆使しながら「豊かに書く」力を身に付ける生徒の育成を目指して

宮崎県 宮崎市立生目台中学校 野口晶子

1 研究テーマ設定の理由

「言葉を駆使しながら」「豊かに書く」力、「豊かに書く」力が身に付けた生徒とは具体的にどのような姿なのか。様々な考えやイメージがあると思うが、ゴール像を具体的にし、そこに近づけるための授業や評価、生徒への支援等を考えることで、研究を深めていきたいと考えた。そこで今回の発表にあたって、以下の四つを「豊かに書く」力の具現化されたものと考えた。

- ① 豊かな語彙力に支えられた、適切な言葉を選ぶ力
- ② 相手に伝わる分かりやすい文章を書く力(題材、構成等)
- ③ 「美」や「共感」を発見する視点を意識した創作をする力(短歌や俳句等)
- ④ 意欲的に「書く」学習活動に取り組む生徒の姿

この四つの力を身に付けさせるためには、どのように授業を構築していけばよいのか、ということに柱を据え、実践を積み重ねることで、本大会の大会主題に迫りたいと考え、本テーマを設定することとした。

2 研究の概要

(1) 研究の視点

① 仮説の設定

「言葉を駆使しながら」「豊かに書く力」を育成することは、一朝一夕にはできないことである。例えば一つの「書く」単元を学習したからといって、文章が上手に書けるようになったとは実感し難いし、書く力が付いたとも言い難い。力を伸ばすためには、「書く」単元を系統的に捉えることや、「読む」単元とも関連性を持たせた継続性が必要なのではないだろうか。以上のような考えから、本研究の仮説を立てた。

仮説

一年間から三年間のスパンで「書く」力を伸ばす指導を継続し、単元ごとに評価項目を具体的に目標として示し、達成するための手立てを講じていけば、「豊かに書く」力が育つであろう。

② 読み物教材との関連

前述したとおり、「書く力」を伸ばすには、「書く」単元の授業だけを意識的に指導しても、効果は思ったほど上がらない。「読む」単元で学習した筆者の描写の工夫や構成の巧みさ、語彙や表現技巧を「書く」学習に生かし、評価の視点として生徒に明確に示すことが大切であると考える。

(2) 研究の実践

① 3年間のスパンを考えて「読む」単元で取り組んだ「書く」指導の実践例

第1学年	第2学年	第3学年
「読む」単元を生かして豊かに書く。	「体験」を生かして豊かに書く。	「書く」単元を生かして豊かに書く。
<p>【詩の心—発見の喜び】 より深く感じる心 連想や比喻の楽しさ 新しい驚きの発見</p> <p>【飛べ かもめ】 人物描写 情景描写</p> <p style="border: 1px solid black; padding: 2px;">虹を見た少年の最後のつぶやきを書こう。</p>	<p>【鯉節 世界に誇る伝統食】 要約 筆者のものの見方や考え方の読み取り</p> <p style="border: 1px solid black; padding: 2px;">3種類のだしを実際に味わい比較する体験を通して、読み取ったことを振り返り、自分の考えを深めよう。</p>	<p>【観察・分析して論じよう 批評文】 マイボトルのポスター チョコレートの新製品</p> <p>【初恋 島崎藤村】</p> <p style="border: 1px solid black; padding: 2px;">なぜ、「初恋」が現代でも評価されるのか、詩の価値を批評しよう。</p>
※ 人物像を踏まえているか。	※ 筆者の主張と自分の体験を比較しているか。	※ 作品のもつ普遍的な価値を理解して書けているか。

<p>【さんちき】 時代背景 舞台設定 人物像の読み取り 会話文 起承転結の構成</p> <p>読み取ったことや既習事項を踏まえて物語の続きを作ろう。</p>	<p>【短歌から始まる物語】 自分の経験の中にある情景や、心情をいきいきと描き出して物語を作ろう。</p> <p>※ 登場人物の人物像や、心情が伝わる描写ができるか。</p>	<p>【俳句の批評文を書こう】 中学生が作った俳句を分析・評価することで批評文を書く力を伸ばそう。</p> <p>※ 作品の価値を、適切な言葉で読み手が納得できるよう表現できるか。</p>
---	---	--

② 言葉を駆使しながら豊かな表現を目指す「書く」指導の実践例

令和元年度に入学した学年から、作文指導の際には積極的にワープロソフトを使用している。ワープロソフトを使用することで「下書き→推敲→清書→評価」という一連の学習の流れを崩さずに指導することができ、生徒も推敲の段階での加筆や削除を抵抗なくできるようになった。手書きで書く学習も随時取り入れることで、手書きの良さを生かした作品を作るときの手立ても明確になった。

第1学年	第2学年	第3学年
<p>【風の五線譜】 詩の形式 リズム 表現技巧</p> <p>【詩の心 発見の喜び】 小さな発見を短歌にしよう。</p> <p>【作品の良さを表現しよう】 自分の好きな歌の良さを伝えよう。</p>	<p>【短歌を楽しむ・短歌五首】 表現の工夫 鑑賞</p> <p>学んだことを生かし短歌を創作しよう。 短歌の鑑賞文を書こう。</p> <p>【走れ メロス】 読み取ったことを基にこの事件を伝える「メロス新聞」を作ろう。</p> <p>【短歌から始まる物語】 好きな短歌から物語を創作しよう。</p>	<p>【俳句の批評文を書こう】 (実践I参照)</p> <p>【万葉・古今・新古今】 三大和歌集の特徴 普遍的な価値 共感</p> <p>好きな和歌を選び、時代の特徴や普遍的な価値に言及した批評文を書こう。</p>

3 研究の成果と今後の展望

(1) 成果

一昨年度の3年生に、批評文の指導を行ったところ、学習内容の定着が難しい生徒も含めて、量的・質的ともに書く力を伸ばすことができた。その要因として次の2点が考えられる。

- ・批評文を書く指導を見越して、作品の価値の分析をする視点を意識して読解の学習に取り組んだので、より作品の表現の特徴に即した根拠のある文章を書くことができるようになった。
- ・ワープロソフトを活用したことで、漢字が苦手な生徒や、整った字を書くことが不得手な生徒の「書く」ことへの心理的負担感が少なくなった。また、文章以外の要素が評価に結びつかないので、より「書く力」に特化した相互評価ができ、生徒自身の学びにつながった。
- ・今まで学習してきた「書く」単元で培った力をより伸ばすために、批評文を書く学習に取り組んでいるという意識が明確になることで、中学3年間の集大成としてよりよい文章を書こうという意欲が高まり、学習に積極的に取り組むことができた。

「書く」活動をするときは、評価の観点を「読む」授業より明確に示すことで、「書く」ことが苦手な生徒も、自分の今の力より、少しでもより良い文章を書こうという意欲が高まった。つまり、どう書けばより良い評価が得られるのかが理解できるので、書く意欲が向上したと言える。

(2) 今後の展望

評価の観点を具体的に示すことは、学習のねらいが明確になり、生徒の意欲を思い出すこと増す効果があった。しかし、1単元の評価で全ての観点を網羅することはできないので、生徒の力の定着を確認しながら、一年間の授業の中で補っていくことが必要である。

また、データとして作品を保存することができるので、3年次に自分の過去の作品の推敲等も授業に取り入れることが可能となる。生徒にとっては自己の成長を実感できる授業になると考える。

## 交流を中心とした協働的な「書くこと」の授業づくり

熊本県 阿蘇市立阿蘇中学校 熊谷潤一

## 1 研究テーマ設定の理由

本校では、「書くこと」に苦手意識を持っている生徒が多い。実態調査では、「観点はわかるが、どのように書いていいかわからない」「根拠や意見は書けるが、どうつなげればいいかわからない」といった、「書くこと」に関する悩みを持つ生徒が多かった。

本単元『説得力のある文章を書こう』（光村3年）では、批評文を書く。批評文とは、対象となる事柄のよさや特性、価値などについて評価して論じた文章のことである。前教材『観点を立てて分析する』では評価するための観点を立て、根拠を明らかにして述べることが求められた。この学習をふまえ、特に文章を引用する学習活動を取り入れることで、文章に説得力を持たせることについて考えることができる教材である。

本研究では、1人1台のタブレット端末を活用し、WEB共有ボードを使った学習活動に取り組んだ。簡単なイメージとしては、WEB上の付箋として考えることができる。付箋に書き込み、文章のつながりや順序などを考えることを通して、協働的に文章を書くおもしろさを実感させたいと考えた。

## 2 研究の概要

## (1) 研究の視点

- ① WEB共有ボードを活用し、「記述→交流→修正」を一連の流れとして取り組むことで、協働的な「書く」活動を展開する。
- ② 思考ツールを活用し、見方・考え方を視覚化することによって、適切な資料の引用について考えさせる。

## (2) 研究の実際

- ① 本単元の学習は次のような学習計画で行った。
  - 1 練習教材で扱った広告を見ながら、「批評」への関心を高め、イメージを明確に持つ。
  - 2 広告を選択し、材料にして観点ごとに分析し、具体的特徴と意見をまとめる。
  - 3 分析したものを基に、教科書の例文を参考にして、説得力のある文章の構成を考える。
  - 4 目的や意図を明確にして、説得力をもたせるために引用できる資料を探す。
  - 5 構成表をもとに、実際に文章を書く。
  - 6 書いた批評文を読みあい、そこから学んだことを共有しあう。
  - 7 学びを振り返る。

## (3) 指導の工夫と考察

- ① WEB共有ボードを活用し、「記述→交流→修正」を繰り返し取り組むことで、協働的な「書く」活動を展開する。

教科書のモデル文を参考にして、WEB共有ボードにワークシートを作成し、WEB上の付箋に記述する学習を行った。付箋であるため、キーワードから文章を記述したり、文の順序を入れ替えたりすることが簡単にでき、自分なりに工夫しながら文章を書くことができた(図1)。その後、全員のシートをいったん提出させ、画面上で共有した。生徒たちは画面をスライドすることで、全員のシートを見ることができ、お互いの文章を参考にしながら書くことに苦手な生徒も取り組むことができた。さらに、画面上で共有する際には生徒同士の対話が生まれ、コミュニケーションをとりながら書き進めていく様子が目立った。

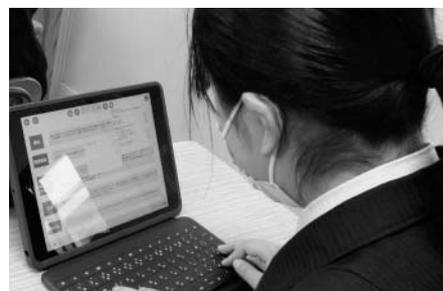


図1 タブレットを使って付箋に記述

- ② 思考ツールを活用し、見方・考え方を視覚化することによって、適切な資料の引用について考えさせる。

自分の意見と同様の引用文を入れることで、文章に説得力が出ることを再確認した。はじめに、どんな人物の言葉であれば説得力があるかを出し合った。「著名人」「偉人」「公的機関」など、意見を交流させる中で、生徒たちはお互いの見方・考え方を広げたり深めたりしていた。その上で自分の意見に合うキーワードを持つ引用文を数個探した。探した引用文は思考ツールでキーワードや理由を整理し、周囲と話し合いながら文章に入れたい引用文を選んでいった(図2)。誰の言葉であるかを重視して人物で比較したり、内容を重視してキーワードを比較したりと選び方は様々で、なぜその引用文を選択したのか、お互いの見方・考え方を交流しながら、互いに学びを深めていた。



図2 思考ツールを使った引用文の吟味

### 3 研究の成果と今後の展望

#### (1) 成果

- 従来の「書くこと」の学習では、生徒同士の文章の交流は少人数に限られ、書いている途中での交流は難しかった。しかし、1人1台端末であれば、画面をスライドするだけで全員分の文章を短時間に、しかも自分のタイミングで読むことができ、常に全員と交流できる機会がある。このことによって、「書くこと」に苦手意識を持っていた生徒も、お互いにコミュニケーションをとりながら、協働的に学習に取り組むことができた。
- 思考ツールの活用によって、調べた引用文を整理し、観点を立てながら取捨選択することができた。端末を使ってネットから情報を手に入れやすくなった分、観点を立てて分析する必要があるからである。思考ツールを活用し、個人及び相互の情報を比較できるように工夫したことで、生徒たちは協働的に取り組み、学びを深めることができた。

【生徒の感想】プリントで書くよりも打つ方が速くできるし、ボタンを押すだけで簡単に消したりできるので、使いやすかったです。他の人が書いたのを発表しなくても見るできるようになったので、時間がかからず、その分書くことに時間がとれるようになったのでいいと思いました。

【生徒の感想】みんなと作文を交流しようと思ったら、これまでは発表したり立ち上がってみんなの作文を見て回るっていうのが多かったけど、タブレットでまとめて意見を交流することによって、自分の席にいてだけで時間をかけずに他の人の意見をたくさん知ることができ、自分の意見をまとめることができました。

#### (2) 今後の展望

- 今回は、題材を限定して批評文を書くこととした。今後は、自分でテーマを決め、批評文が書けるように発展させていく必要がある。自分の関心に合った課題設定であっても同じように取り組めるように指導していきたい。
- タブレット端末の学習には、キーボードタイピングの技能が不可欠である。本単元では、毎時間、授業の冒頭部分でタイピング練習に取り組んだが、得意不得意の個人差が大きかった。今後は国語以外における活用も視野に入れ、朝自習の時間を活用するなど、学校全体で日常的、計画的に取り組んでいく必要がある。

【生徒の感想】あまりしたことがなかったので、最初はわからないことが多かったけど、後から慣れてきたので楽しかったです。打つのが遅いのでタイピングを速くできるように頑張りたいです。

【生徒の感想】難しいです。ですが、とても文字が見やすく、みんなの意見を自分のペースで見ることができるのでとても便利だと思いました。

## 主体的な読みに導く「問い」の設定に関する考察

大分県 大分市立滝尾中学校 山本賀奈子

## 1 研究テーマ設定の理由

大分県中国研では、「新しい学びを拓く国語教室の創造 ～自己の考えを深める伝え合いを中心に～」を研究主題として、学習者の実態に即して育てたい力を焦点化したうえで、自己の考えを形成する単元展開についての研究に取り組んできた。生徒は、中学2年生になって「メディアと上手に付き合うために」（池上彰）という説明的文章を読み、「筆者の主張を踏まえ、これからのメディアとの付き合い方について意見文を書く」という言語活動に取り組んだ。生徒の意見文は次の3つのパターンに分類される。① 筆者の主張を踏まえ、実生活の中でどのようにメディアを使っていくのかを具体的に記述できていた。② 筆者が主張するメディアとの付き合い方をまとめていた。③ 筆者の主張するメディアについて気を付けたい点を踏まえ、自分が考えるメディアの使い方を記述していた。①に該当する意見文を書いた生徒は、文章を読んで理解したことを自分の経験と結び付けて考えることができていたといえるが、②③に該当する意見文からは、読み取ったことを自分の経験と結び付けることが不十分であったり、文章を読み取る段階でつまづいていたりすることが見えてきた。その後、実施した「言葉の力」（大岡信）の授業では、多くの生徒が桜の世界と言葉の世界を重ね合わせることで、「言葉が人間全体の世界を背負っている」という筆者の主張を読み取ることができていた。しかし、「実生活でこの筆者が主張するような経験はないか。」との投げかけに、自分の生活と筆者の主張を結び付けて考えることができた生徒は約20%にとどまった。これらの単元では、単元計画を第1時に教師が示すため、生徒は見通しをもって毎時間の学習に取り組んでいた。しかし、第1時に「問い」を教師が提示し、生徒とその問いについて共有して学習を進めていくという計画のもと授業を行ったため、生徒自らが目的をもって問いについて考えることができず、受動的な読みになっていたとも考えられる。

大分県中国研の研究仮説の三つの観点の一つに「学習者の生活の中から他者と協力して解決する課題を見出すこと」がある。これまでの授業で行ってきた教師からの一方的な問いの提示ではなく、生徒自らが問いを設定することによって主体的な読みを行うことができるのではないかということ、実践を通して検証していく。

## 2 研究の概要

## (1) 研究の視点

## ① 主体的な読みに導く単元計画

時	主たる学習活動
	1次 問いに興味をもち、見通しをもつ。
1	① いろいろな動物の視点から撮影された映像を見せ、題材に興味をもたせる。 ② 本文を通読し、初読の感想を発表する。 ③ 生徒の発言をもとに、問いを設定する。
	2次 自分の力で読みを深める。
2・3	⑤ 筆者の主張するバイオロギングのよさを読み取る。 ⑥ 教科書からバイオロギングのよさを見つけ、練習用フリップを作成する。
	3次 相互交流をする。
4	⑦ ③を踏まえて、バイオロギングのよさを図書資料やタブレットで調べたことをもとにまとめる。
5	⑧ 発表用フリップを作成する。
6	⑨ 次時に向けて発表の練習をする。 ⑩ グループの中で発表し、バイオロギングのよさが伝わってきた発表を1名選ぶ。
	4次 問いを多角的に検討する。
7	⑪ 他の人の問いに対する答えを聞き、自分の問いに対する答えを再検討する。

## ② 主体的に考えられるような問いの設定

先に述べたように、主体的な読みに導くためには、単元の問いを生徒自らが設定することが望ましい。しかし、中学校2年生の段階で、単元を通して考えていくことができるような問いを、他者と協力して見だし設定することは難しい。そこで、視聴覚資料等の活用により生徒の教材に対する興味・関心を高め、生徒から出される発言をもとに「考えたくなるような」・「考えなくてはならないような」問いを設定することにより、解決する意欲を高めることとした。

### (2) 研究の実際

本単元の導入として教科書本文を読む前の生徒に、動物にカメラを取り付けて撮影したさまざまな映像を提示した。野生のライオンやクマ、イルカなどの動物自身が自然の中で撮影した映像は、迫力があり、生徒たちは興味深く映像を見ていた。その時に多くの生徒が「野生で生死をかけて戦っているのに、カメラを取り付けられてかわいそう。」「重たくて、負担になっているのではないか。」など撮影方法についての感想や疑問を漏らした。そこで、生徒の感想と同じようにバイオロギングという研究方法に疑問をもつ人に、そのよさや可能性を理解してもらえるように説明することを目指せば、読みの理解が深まるのではないかと思ひ、本単元の問いは生徒のこの発言をもとに設定することが有効だと考えた。以上から、第1次において、本単元の問いを「バイオロギングはこれ以外の研究方法で動物を研究している人を納得させるだけのよさや可能性があるか。」と設定するとともに、生徒と共有し学習を進めていった。

## 3 研究の成果と今後の展望

### (1) 成果

第1次で視聴覚資料を見た時には、ほとんどの生徒がバイオロギングのよさを「動物のリアルな視点で観察できること」と考えていた。しかし、その後の学習で「動物からもたらされるデータは、私たちが思考できる範囲を大きく広げてくれるはずだ。」という筆者の主張を確認したり、研究者たちはどのような活用の仕方をしているのかを図書資料やタブレット等を使って各自で調べたりしたことによって、「その他のよさがあるのではないか。」と考えを広げる生徒が出てきた。第7時には「生活を豊かにできる」「将来性に優れている」「動物の行動を新たに発見できる」「人間にとっても動物にとっても生きやすい世界を作れる」「動物にほとんど負担をかけず調査できる研究方法」「自然に優しい研究方法」「使い方次第でいろいろな視点で研究を進めることができる」など、調べたこと・聞いたことをもとに、自分の生活と筆者の主張を結び付けて考えることができる生徒が増えていた。学習後の生徒の振り返りには「最初に思ったよさは、カメラという視点で考えたよさだったけど、調べたり、みんなの発表を聞いたりしながらよさを考えていくと、共通して人間と動物のために生み出された研究方法だったということに気付いた」という記述が見られた。生徒の発言をもとに設定した問いを中心に学習を進めていくことで、その答えを探そうと主体的な読みをしたり意欲的に調べ学習に取り組んだりする生徒の姿につながった。

### (2) 今後の展望

本単元で取り組んだ主体的な読みに導く「問い」の設定は、他の単元でも繰り返し取り組んでいくことが重要であるが、設定の方法については検討の必要がある。今回の単元では、学習のはじめに「筆者が主張するバイオロギングのよさはわかるが、自分はやっぱり動物にカメラをつける研究方法は反対だ」という生徒の発言があった。しかし、本単元では、筆者と同じバイオロギング研究に肯定的な立場をとった生徒の発言をもとに学習を進めていったため、このような考えをもつ生徒にとっては考えにくい問いとなってしまった。今後は、筆者の主張を多角的にとらえ、幅広い考えを表現できる問いを設定することが望ましいのではないかと考える。そのためには、単元計画を設定する前に生徒の考えを想定しておく必要がある。また、生徒から出された考えを問いとして単元を中心に据えるために、綿密な単元計画を立てる必要がある。説明的文章の場合、資料の収集と指導者自身のその分野の理解が生徒の学びの深まりに影響することを実感した。今後は、生徒が自ら問い見いだせるように、生徒の付けている力と付けたい力を見取することを重視するとともに、授業者自身も問いを設定したり疑問を探究したりしながら「どのような授業が生徒に資質・能力を育成できるのか」を考えて単元計画を立てていきたい。さらに今回学んだことをもとに、説明的文章だけでなく文学的文章においても、生徒自らが問いを設定するような単元を計画し、継続的に授業の中で取り組んでいきたい。

## 社会生活につながる国語科教育

熊本県 水俣市立水俣第一中学校 寒川邦江

## 1 研究テーマ設定の理由

生徒たちは生活の中でさまざまな情報に触れるが、SNSでのやりとり等、顔の見えない情報交換の場面では特に、伝わりにくさや読み取りにくさを実感しているものと思われる。より確実なコミュニケーション力を身につけるためには、ことばによる伝達の特徴を理解し、留意すべき点を自覚することが肝要である。生徒たちは、要約や小見出しづくりの学習の経験から、文章から読み取ったことをある程度の文にまとめることはできる。ただ、教科書の言葉をそのまま型通りに抜き出してしまい文脈に微妙な矛盾があるなど、正しく理解した上でまとめているとは言えず、文やことばについて要点を捉え、自分なりにかみ砕いて表現する学習を丁寧に行っていく必要を感じる。そこで、本研究では、生きてはたらくことばの力の育成を目指し、「主体的に学習に臨む態度の育成」「多面的・多角的な読みに気付く場面の設定」「社会生活につながることばの力の育成」の3つの視点から取組を行った。

## 2 研究の概要

## (1) 研究の視点

## ① 主体的に学習に望む態度の育成

学習に臨む生徒の主体的な態度を引き出すためには、その学習を行うための場面の設定を工夫する必要がある。今回の実践では、情報社会におけるメディアとの関わり方についての学習に取り組むが、これについての自分の考えを「後輩にアドバイスする」という単元の学習課題に向けて、「筆者の主張をもとに自分の意見を自分の言葉でまとめる」学習に取り組ませる。生徒たちは1年生のころから、技術科や道徳科、学級活動の時間等において情報モラル学習に繰り返し触れてきている。「後輩にアドバイスする」というゴールに向けて、学習した中で得た知識や考えも踏まえて自分たちのことばで分かりやすく伝える場面を設定することで、主体的に学習に取り組む態度の育成を目指した。

## ② 多面的・多角的な読みに気付く場面の設定

主張に根拠を付けることは定着している生徒が多いが、その根拠が成立しているか、説得力があるかという視点で見ると、まだ十分とは言えない。また、単純に導き出した根拠でワークシート等を埋めてしまうとそこで満足してしまい、それ以上広げたり深めたりすることに至らない場合もある。本実践では、主張に対して複数の根拠を記入する図（タブレット内蔵の思考ツール：くらげチャート）を用いる等、幅広い思考を引き出す工夫をした。また、発想段階で一度交流を行わせ、仲間のアイデアをもとに更に自分の考えを練り上げる時間を設定した。

## ③ 社会生活につながることばの力の育成

特に説明文教材においては、扱われる題材が生徒の身近にないものであることも多く、用いられる用語もなじみのないことが多い。本実践でも、「メディア・リテラシー」等の用語について、教材文の読み取りの中でその概念を自分たちの暮らしに重ねてとらえさせた。また、説明的文章の言い回しはどちらかというと文語的であり、生徒の使う日常語と異なるため、語意や用法を正確にとらえきれない場合もある。文中の言葉を切り取って文を作ってしまうと、そのことの自覚がないまま要約文ができあがってしまうことがある。そこで本実践では、本文を読んだ自分の意見や考えについて、根拠となる知識や経験を一旦構成メモとして書き出し、それを用いて自分のことばで意見文をまとめられるよう、段階的に考えを引き出す工夫を行った。

## (2) 研究の実際（「情報社会を生きる—メディア・リテラシー—」三省堂3年）

## ① 生徒の実態（芦北町立佐敷中学校3年生 30名）

・意識調査の結果より、説明文に対して苦手意識を持つ生徒が63%程度おり、その生徒たちに「分かった・できた」と感じさせる授業づくりを行う必要がある。また、NRTの結果を見ると「文の内容を詳細に読み取る」「文の表現効果を読む」こと等の正答率が低いことが分かり、指導事項を明確にした指導計画の必要性を感じる。

・メディアとの付き合い方については、これまでの学習により情報モラルを日ごろから意識できている生徒もいるが、本単元の学習を通して自分の生活や社会と関連付けて考えさせることでより深く考え、更なる意識の向上につながるものと考えられる。

## ② 指導計画（5時間取り扱い）

指導計画と評価計画（5時間取り扱い 本時3/5）		
過程	時間	学習活動
1	3	(1) 「情報社会を生きる」を読み、段落の構成や語句の意味を確認する。 (2) メディアがもたらす「利点・限界」を読み取る。 (3) メディア・リテラシーについて理解する。 ・「情報を形づくる」→構成、編集機能 ・「事実を選び取る」→情報の取捨選択 ・「情報を送り出す」→発信、表現 (4) 文章の構成や表現の仕方について読み取り評価する。 <b>(5) 筆者の主張を読み取り、自分の意見をまとめる。</b> ・3つの留意点（自分の主張・本文を一部引用・身近な例や体験）の確認 ・シンキングツールによる構成メモ作成 ・交流による意見交換 ・意見文作成（200字）
2	2	(1) 「メディアとの付き合い方」について、アドバイス文を作成するための構成メモを作る。 ・文章の構成・表現の工夫・引用・体験等 (2) 構成メモを元に「メディアとの付き合い方」について、後輩へのアドバイス文を作成する。 (3) 互いに読み合い、構成や表現について意見交換をする。（推敲） (4) 全体で紹介し、アドバイス文の良い点や改善点を確認する。（共有）



## 3 研究の成果と今後の展望

### (1) 成果

- ・「メディアとの付き合い方」について後輩にアドバイスするためには、まず生徒自身が筆者の主張をきちんと理解し、自分たちの暮らしと重ねて考える必要がある。更にそれを後輩たちに伝えるためには、難解な語句を分かりやすく言い換えなければならない。そのため、生徒たちは交流の時間など、折に触れ仲間と活発に意見を交わし、積極的に学習に取り組む姿が見られた。また、200字程度にまとめる意見文も、与えられた時間内に全ての生徒が書き終えることができた。
- ・図の形にまとめた構成メモによって主張と根拠が明確になり、生徒たちは交流の中で、たとえ同じ主張であっても、その根拠となる事柄は体験や知識の違いによって一人ひとり違ってくることを実感していた。他者のメモを参考に根拠を書き足していく生徒もおり、多様な視点での気づきにつながった。
- ・教科書を読みながら書くと、生徒はどうしても教科書の用語にとらわれてしまい、要約文や意見文も似通ったものになりがちであるが、構成メモを用いることで自分の言葉で表現することができた。そのため、生徒自身の体験や知識に基づいて一人ひとり根拠も視点も異なる意見が引き出された。

### (2) 今後の展望

- ・本文の内容上やむを得ない面もあるが、情報の「受け手」としてのメディアとの付き合い方に生徒の意見が偏ってしまった。インターネットの普及に伴い、情報を「発信する側」に立つことも多い生徒たちの状況を考えると、情報を発信する時に気を付けるべきことや工夫すべきことなども考えさせる必要がある。きちんと自分の伝えたいことが表現できているか、意図と異なる受け止め方が可能で、結果的に誤解を生むものとなっていないか等、アドバイス文の推敲の折に観点として与えるなどして、様々な視点で物事を捉える力をつけたい。
- ・説明文教材の読み取りについては、単純に文中の語句を用いても形の上では要約文が完成することがある。本当に内容が理解できているかを測る一つとして、理解したことを「自分の言葉でまとめる」活動を取り入れたい。今回の文章はメディアというある程度生徒にも考えやすい題材であったが、今後他の内容を扱った文章についても取り組んでいきたいと考える。

研究テーマ

## 伝え合う力を高め、思考を深める国語科授業の創造

## ～「問い」を発する力の育成を意識した文学的文章の読みの指導を通して～

那覇地区中学校国語教育研究会研究部  
沖縄県浦添市立浦西中学校 名富綾乃

## 1 研究テーマ設定の理由

本校は、朝の読書活動が定着しており、休み時間や放課後の図書室の賑わいを見ても、生徒が意欲的に読書に取り組んでいるような印象を受ける。しかし、文学的文章を授業で取り扱うとなると、学習に苦手意識を訴える生徒は少なくない。本研究では、文学的文章の「読むこと」指導において、自分で設定した課題の解決を通して作者や作品の主題に迫り、考えたことを作品の魅力として紹介することを言語活動として設定する。自ら「問い」を生み出し、その答えを本文の描写に基づいて導きだそうとする力の育成は、生徒の主体的な学習活動を促し、思考の深まりを助けるものとなると考え、本サブテーマを設定した。

## 2 研究の概要

## (1) 研究の視点

## ① 問いを発する力の育成

「問い」を発するためには、自分が感じた違和感やわからなさを言葉にできる力、つまり問い返したり、質問したりすることのできる力を育成する必要があると考えられる。本研究では、教材文に対し、なぜそのような場面を挿入したのか、それにはどのような効果があるかなどについて考えさせる。

## ② 根拠に基づいた自分の考えの形成

「自分の考え」を持つ力を身につけ、それを表現して伝えるには、その考えを支える根拠を明確にする必要がある。本研究では生徒が自ら設定した「問い」に対する答えを根拠に基づいて導きだそうとする活動が、主体的に学習に取り組むことにつながるのかを検討する。

## ③ 自分の考えを伝え合う力の育成

これまでの指導では、教科書本文を何度も読み返したり、交流によって考えを広げたりするなど読みを深めるための手立ての必要性が感じられた。そこで、本研究では第2学年を対象に文学作品についてのポップ広告の作成に取り組むことにし、「作品の魅力を紹介する文を書くこと」を言語活動に設定した。教材には「走れメロス」を取り上げ、自分が疑問に感じた場面をもとに学習課題を設定し、その課題に対する自分なりの答えを持つまでの過程のなかで、文学作品の表現の効果に気づかせることをねらいとする。

## (2) 研究の実際

## ① 単元名 「作品の魅力ポップで紹介しよう」 教材名 「走れメロス」

## ② 単元の指導目標

- 心情を表す語句や情景の描写の意味などについて理解すること【知識・技能】(1)エ
- 観点を明確にして文章を比較するなどし、文章の構成や展開、表現の効果について考えること。【思考・判断・表現】C(1)

## ③ 指導計画

- 1次 学習目標と学習の流れを確認し、全文を通読する。
- 2次 学習課題として考えてみたい事柄を決め、疑問の形に整える。  
自分で設定した学習課題について、自分なりの答えを出す。
- 3次 学習課題の解決を通して感じた作品の魅力文章にする。  
書いた文章をもとにポップを作成する。  
作成したポップをグループで読みあい、自分の考えが相手に伝えられているか確認する。  
交流で得られた友だちの意見を参考に自分のポップや文章を推敲する。  
ポップの裏に作品の魅力を書いた文章を貼って提出する。

## ② 授業の実際

「走れメロス」については、小学生のときに読んだことがある、あるいはアニメで観たことがあるという生徒が多く、物語の流れや内容についての理解度はそれほど低いものではなかった。問いの設定も「なぜメロスは自分が殺されると分かっているのに戻ってきたのか」「なぜセリヌンティウスは人質になることを受け入れたのか」などとスムーズに行うことができた。しかし、「走れメロス」以外の太宰作品に触れたことのある生徒からは、「太宰らしくない」との声があがった。そこで原作を紹介すると、「走れメロス」には多くの描写やセリフが書き足されていることに気づき、なぜその部分が必要なのかと考えることを学習課題として設定する生徒も見られるようになった。そのような疑問について考えを深めた生徒からは、書き足された部分に「太宰らしさ」が表されているのではないかと考えに至り、それがこの作品の魅力であるとの意見が挙がった。

生徒が課題解決に至るまでの思考を可視化する手立てとしては、色違いの付箋を用いた。今回は「問い」とその問いに対する「自分の考え」、そう考える根拠としての「描写」をそれぞれ違う色の付箋に書き出し、同じ問いに対する友だちの考えも書き足していく活動も取り入れた。ワークシートに貼り付けた付箋紙を俯瞰し、必要なことばを取捨選択しながら、生徒たちは以下のような点を作品の魅力として挙げた。

- |      |   |
|------|---|
| 生徒 A | 災難や誘惑に心がくじけそうな場面が描かれているのは、そこで諦めたり死んだりするのは簡単だけど、誰かからの信頼に答えたいという気持ちがあれば、なんとしてでも乗り越えられるということ、それが「生きる」ということだと伝えるためだと思います。このようにメロスの弱さも描かれているところがこの作品の魅力だと思います。 |
| 生徒 B | セリヌンティウスがとにかくメロスを信じているという場面が描かれているのは、「おまえを信じている」というところを見せることが、相手に生きるパワーをあげることだと言いたいからだと思います。自分は誰かにパワーを与えているかと考えさせられるところがこの作品の魅力です。                        |
| 生徒 C | ラストシーンで少女が出てくる場面は、「俺ってかっこいいだろ」というところを見せたいナルシストなところがあるメロスが、ちょっと考えが浅かった自分に気付くことを表したと感じます。太宰も自分らしくないまま終わらせたくなかったのかなと思いました。それぞれに考えを持つことができるのがこの作品の魅力かなと思いました。 |
| 生徒 D | 原作より登場人物の心情描写やセリフが多いのは、人はそれぞれにドラマを背負って生きているということが言いたいのかなと思います。  |

## 3 研究の成果と今後の展望

### (1) 成果

本研究では、作品の魅力を伝えるという目的をもった言語活動を取り入れることにより、本文をよく読み、叙述に基づいて自分の考えを深めることができる生徒の育成に努めた。生徒が自ら問いを立て、その課題解決に向けて考えていくうちに見いだした文章の構成の工夫や表現の効果を、作品の魅力として捉えていく学習の過程は、自分の考えたことを伝えたいという意欲の向上につながったと考えられる。また、互いの感じた作品の良さを共有する場の設定は、伝えたいことが相手に理解されたかどうかを確かめ合うことができ、自分の考えを言葉で表す力を高める効果があったと思われる。

### (2) 今後の展望

ポップの作成を学習の成果として設定すると、作品に記される言葉は簡潔なものとなってしまう、その作成に至るまでの思考の深まりこそが評価につながることを生徒自身が実感しづらいことを感じた。今回のように文章の構成や展開、表現の効果に着目して読みを深めることを指導の中心にする場合は、学習のゴールをポップにするのではなく、言語活動は鑑賞文やプレゼンテーションなどで設定すると、生徒の力をより見取ることができると思われる。文学的文章の読みの指導にあたっては、どこに着目して読むか、感じたことをどのように表現するかなど、これまでの学習の積み重ねを意識した言語活動の設定や、生徒の考えを深めるために効果的な問い返しの工夫を検討し直すことで、指導改善へとつなげたい。

### <参考文献>

- 『中学校学習指導要領解説 国語編』平成 29 年 7 月 文部科学省
- 『国語科授業にスリルとサスペンスを』河野庸介 2010 年 3 月 教育出版
- 『国語力をつける物語・小説の「読み」の授業』阿部昇 2015 年 5 月 明治図書 ほか

## 生きて働く言葉の担い手が育つ国語科授業の創造

熊本県 天草市立牛深中学校 赤城孝幸

## 1 研究テーマ設定の理由

天草郡市では、小中合同での研究・研修会を毎年実施している。天草郡市国語部門研究委員会の主な活動は研修と授業研究大会を隔年で行うというものである。本報告の研究テーマは天草郡市国語部門研究委員会の研究主題でもある。本研究テーマは、大会主題「社会生活につながる国語科教育～言葉を駆使しながら自ら学び続ける生徒の育成をめざして～」とも多くが重なりを持っている。

「子どもたちにどんな力を、どのようにして育てていくか」を絶えず研究していくため、2017年度より佐賀大学教育学部教授、達富洋二先生を助言者にいただき、「単元づくり」の研究を進めている。達富先生には自主サークル「あまくさ国語教室の会」においても、ご指導をいただいている。達富先生の提唱される「3つのフレーズ（ABCフレーズ）による単元学習」も何度も繰り返し教えていただいたことで、天草郡市の小中学校でも根付きつつある。

本報告では、天草郡市国語部門研究委員会ならびに「あまくさ国語教室の会」の取組の一端を紹介させていただく。

## 2 研究の概要

## (1) 研究の視点

- ① Aフレーズ（明確な指導事項）を身につけることできたか。
- ② Bフレーズ（具体的な思考操作）を用いて、言語活動に取り組むことができたか。
- ③ Cフレーズ（学びがいのある言語活動）が生徒にとって価値ある言語活動であったか。

## (2) 研究の実際

## ① 単元について

ア〈単元名〉「おやじのせなか」で父を語ろう 実践者 天草市立河浦中学校 射場美智子教諭

イ〈学習材名〉「字のない葉書」(光村図書

ウ〈育成を目指す資質・能力について〉

エ〈知識及び技能〉 (2) 情報の扱い方に関する事項 イ

情報と情報との関係の様々な表し方を理解し使うこと。

オ〈思考力・判断力・表現力等〉 C 読むこと オ

文章を読んで理解したことや考えたことを知識や経験と結び付け、自分の考えを広げたり深めたりすること。

カ〈単元の目標〉

人物の言動や様子の描写から人柄や心情について自分の考えをもつことができる。

キ〈単元を通した学習課題〉

この単元では、登場人物の人柄や心情についての自分の考えをもつことができるようになる学習をする。

課題は、前半の描写と後半の描写を比較し、関連付けて、作者に代わって娘の立場で捉えた父親像を「おやじのせなか」で表現することである。

ク〈価値ある言語活動〉

作者に代わって、娘の立場で捉えた父親像を「おやじのせなか」で表現する活動

## ② 指導について

- ・単元を通して身につけるべき力と言語活動がつながっている学習課題を提示する。モデルとなる新聞記事「おやじのせなか」を紹介するとともに、学習計画を示し、見通しを持たせる。「字のない葉書」と出合わせ、おおまかな内容をつかませる。
- ・描写に着目、抜き出しながら読む。前半は、父親の人柄や「私」の心情を表現している言葉を見つけさせる。日常の父親像と手紙の中の父親像を分析することによって、後半につなげる。

- ・後半は父親の言動や様子の描写から、父親の人物像や心情を読み取らせる。読み取った心情を班で交流し、考えをひろげる。
- ・娘の立場で捉えた父親像についての考えを「おやじのせなか」で表現する活動に取り組みさせていく。導入で示したモデルの新聞記事は難しいので、既習学習材を使って、教師が作成したモデルを示す。
- ・書く中でも、生徒同士の意見交流の時間を適宜入れていく。交流を通して、つまづいているところに助言をもらったり、他の人と自分の考えを比較して聞いたりして、自分の考えを整理し、深めさせる。他にも、作者の表現の仕方に着目して、作品自体を味わわせる。
- ・単元の終末では、書き上げた「おやじのせなか」を読み合う活動を行う。感想を交流し、学びに対する成就感を味わえる場面を設定する。さらに、単元の振り返りや作品の振り返りを行い、学習を通して身につけた力や作品の内容を確実に把握させる。

### 3 成果と課題

公開授業を参観された国語部門の先生方、小学校の先生方から多くの意見をいただいた。

#### (1) 成果

- ・具体的な学習目標（課題）が提示されていることで、生徒が主体的に（見通しをもつての意）学習に取り組むことができていた。
- ・教師の言葉を待つ時間はなく、自立した学習者として、学習課題に取り組むことができた。

#### (2) 今後の展望

- ・授業時に「Bフレーズ（具体的思考操作）の『比較し、関連付け』ている様子が見える、確認できると良い」、「班で交流した内容が全体にひろげられるとよい」という意見があった。
- ・導入部において「私の問い（学習課題を解決させるための個人のめあて）」を設定させることができなかった。
- ・終末部において、「価値の自覚化（この単元で何ができるようになったか）」が十分に確保されなかった。
- ・Bフレーズ（今回は比較、関連づける）が具体的にどのようなことなのかを、児童、生徒に理解させていく必要がある。
- ・児童生徒にはA評価の姿（評価者がAと判断した基準）を事前に、もしくは活動中に生徒に伝えていく必要がある。

### 4 研究のおわりに

できあがった生徒作品を評価する段階において、各中学校の実践者からは「あらすじをおさえただけの文章」になってしまっているのではないか、という声があがった。そこで「あまくさ国語教室の会」では、参加者で生徒作品を3段階に評価し、その差異を検証した。

達富先生からは、「A評価にはさまざまなAが存在する。だから、A評価の基準はいらない。A基準はいろんな視点が入ってくる。だから、Bの評価基準をきちんと持つこと、Bに到達しているかどうかだけを見ること、評価がぶれないように、Aフレーズに立ち返ること」を教えていただいた。あわせて、このことは「学習評価の在り方ハンドブック（国立教育政策研究所）」にも明記されていることを教えていただいた。

天草郡市国語部門研究委員会ならびに、あまくさ国語教室の会で、字のない葉書の単元を一つ作り上げることができた。天草郡市では「国語科教師が学校に一人」という学校がほとんどである。そのような現状で、お互いの思いやアイデア、悩みを出し合いながらの単元づくりであった。参加者からは校種を超えて、学び合うことで、「教科の系統性が見える」、「小学校の手立ての細やかさを学ぶことができる」、などの声が上がった。本実践の授業や生徒作品の成果はもちろんであるが、この単元をともに作り上げた時間が一番の成果であった。

今回の成果と課題を元に、次は、小学校での単元づくりに取りかかっていたい。最後に、この場をかりて、公開授業を提案していただいた、射場美智子先生、そして、本実践の計画段階から、懇切丁寧にご指導をいただいた達富洋二先生に厚く御礼申し上げる。

学びの深まりを実感する国語科学習指導

—「学びをつなぐ振り返りシート」の活用を通して—

鹿児島県 屋久島町立安房中学校 中村 恵理

【キーワード】 資質・能力につながる学習課題 必要感・必然性をもたせる言語活動 学びの価値付けができる振り返り

1 研究テーマ設定の趣旨

国語科における学びの深まりとは、考えの変容(考えの広がりや深まり)を自覚し、学びが価値付けされることと捉え、本研究を進めることにした。そして、国語科の授業で、生徒が学びの深まりを実感するためには、図1にある五つの学習過程を踏まえた授業設計が必要であると考えた。そこで、本研究では、この五つの学習過程に学びの深まりを実感する3条件を位置付け、相互に関連し合うような授業改善に取り組むことにした。この3条件とは、①育成を目指す資質・能力につながる学習課題、②必要感・必然性をもたせる言語活動、③学びの価値付けができる振り返りのことである。

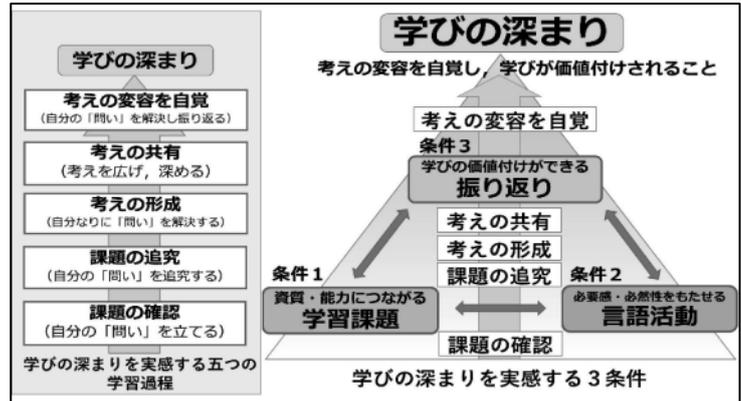


図1 学びの深まりを実感する五つの学習過程と3条件

また、生徒が国語科の学習において学びの深まりを実感するためには、学びの履歴を残し、学びの振り返りを言語化することが必要であると考え、本研究では「学びをつなぐ振り返りシート」を開発し、活用することにした。このシートは、学びを見通して、生徒が自分の「問い」を立て、1単位時間又は単元の学びについて観点を明確にして振り返り、学びが価値付けされ次の学びにつなぐシートのことである。

ここで生徒が立てる自分の「問い」とは、単元の学習課題を解決するために、生徒一人一人が解決すべき課題であると捉える。このシートを活用するねらいは、生徒が立てた自分の「問い」を解決するために、生徒が学びの方向性を見通し、考えの変容(考えの広がりや深まり)を自覚しながら、次の学びにつないでいくことである。このシートの活用を通して、生徒は国語科の学習に主体的に取り組み、学びを振り返りながら、学びの深まりを実感できるようになるのではないかと考えた。

2 研究の内容

(1) 授業づくりの視点

① 育成を目指す資質・能力につながる学習課題と「問い」の設定
② 必要感・必然性をもたせる言語活動の工夫
ア 評価の観点を明確にした言語活動のモデル提示と活用
イ 思考の流れを整理し、考えの形成を図るための思考ツールの研究
③ 「学びをつなぐ振り返りシート」を活用した、学びの価値付けができる振り返りの工夫

(2) 研究の実際

単元名 平家物語を生きた人々と対話をしよう
教材名 「平家物語」(『現代の国語 2』三省堂)
言語活動 叙述を根拠に登場人物の人物像を捉え、人物評「平家物語のかお」を書く

(3) 検証授業の指導の工夫と考察

① 育成を目指す資質・能力につながる学習課題と自分の問いの設定

本実践で単元の学習課題を3要素で構成することにした。本単元の学習課題は以下のとおりである。

敦盛の最期を読んで考えたことを、自分の知識や経験と結び付け、考えを広げたり深めたりして、会話文や叙述に着目し人物像を捉えます。捉えた人物像を参考に人物評「平家物語のかお」を書きましょう。(単元の指導事項, 着眼点や思考方法, 単元を通した言語活動)

生徒は、単元の学習課題を基に、「敦盛の人物像にあった語彙を使ってみる。」「自分の知識や経験を生かして直実の心情を捉えよう。」というような自分の「問い」を立てた。このことから、単元の学習課題を三つの要素で構成し、生徒と教師が毎時間共有することで、学びの方向性を見通すことができたと考える。

② 必要感・必然性をもたせる言語活動の工夫

ア 評価の観点を明確にした言語活動のモデル提示と活用

本実践では、教師が生徒の思考を妨げないようモデルは既習教材「小さな手袋のかお」を用いて登場人物「シホ」に焦点を当てて、人物評「小さな手袋のかお」を作成した(図2)。生徒は、言語活動のモデルを参考に評価の観点到に気付き「私もこんな人物評を書いてみたい」、「この言葉を使って考えをしっかりと伝えたい」と感じ、必要感・必然性をもつことができたと考える。具体的なモデルと評価の観点があることで、生徒は言語活動を通して、どのような力を身に付けることができるかが明確になり、学びへの意欲を継続している様子が見られた。



図2 言語活動のモデル例

イ 思考の流れを整理し、考えの形成を図るための思考ツールの研究

本実践では、思考ツール「人物評ボックス」を活用した。思考を可視化し、思考の流れを整理するねらいがある。思考ツール「人物評ボックス」には、1会話文、2根拠となる叙述、3そのときの心情や人物像、4人物への評価、5人物を端的に表す言葉の五つのボックスを設けた。また、自分の考えを端的に表すためには、語彙の充実が必要不可欠である。なぜなら、既習の語彙以外にも新たに語彙を習得し、語彙を活用することで、考えを一層端的に思考・判断・表現することができるからである。そこで、人物像を表す語彙プリントや辞書等の活用をしたり、対話的な活動を取り入れたりして、語彙の習得と考えの形成を図る手立てをとった。

③ 「学びをつなぐ振り返りシート」を活用した、学びの価値付けができる振り返り

生徒は、学びの価値付けをするために、「学びをつなぐ振り返りシート」を活用し、振り返りを行った。観点を明確にした振り返りとは、自分の立てた「問い」を基に、分かったこと・できたことを中心に学びを振り返ることである。例えば「(人物への評価のボックスに) 評価の項目を書き込むのがあまりうまくいかなかった。」と振り返りをした生徒の記述があった。これに対し、教師はこの生徒が登場人物への評価のボックスについて具体的に理解できていないと判断し、「自分は(その人物に対して) ○○と思うという視点で(その人物への) 評価が書けたらいいね」とコメントを記した。すると、次時の生徒の振り返りには、「直実の人物像について考え、自分の評価ができた。」と記述していた。このように、このシートは生徒が学びを的確に振り返るようになるとともに、教師は生徒の振り返りに対して、適切に価値付けや助言を行うことができる。

### 3 研究の成果と展望

(1) 成果

- 必要感・必然性をもたせた言語活動の工夫として、教師が言語活動のモデルを作成し、生徒に提示した。育成を目指す資質・能力を身に付けた具体的なモデルがあることで、生徒は言語活動に必要な感・必然性を持ち、意欲を継続させて取り組むことができた。
- 振り返りの時間を確実に設け、1単位時間や単元の学びを生徒に振り返らせた。生徒は、分かったことやできるようになったことを言語化することで、客観的に学びを振り返ることができた。教師も、生徒の振り返りに対し、価値付けや助言を行うことで生徒と教師が次時の在り方を客観視することにつながったと考える。単元の最後の振り返りでは、生徒が考えの変容(考えの広がりや深まり)を自覚し、学びの深まりを実感している姿も見られた。

(2) 展望

- 考えの形成を支えるには、語彙の習得・活用も必要不可欠である。生徒が培ってきた語彙を広げたり深めたりするための環境や場面づくりを今後も意図的に設定していく必要がある。
- 本実践では、生徒の立てた「問い」が言語活動のみに目を向けたものになっていた。今後は、単元の学習課題とのつながりを意識した自分の「問い」が立てられる手立てを考えていく必要がある。

## 対話を通して古典の世界に親しむ国語科学習指導

熊本県 小国町立小国中学校 後藤 葵

## 1 テーマ設定の理由

国語科の古典の授業では、学習指導要領にあるように生徒が古典の世界に親しむような学びが実現されなければならない。しかし、本校の実態調査では「興味がわからない」「読み取りが難しい」「何のために読むのかわからない」という生徒が多かった。そこで、生徒が「古典の世界に親しむ」姿を次のように捉えた。**①古典と主体的に関わる ②古典に表れた見方・考え方を捉える ③古典の持つ価値を捉え直す**

さらに、このような学びの実現のためには、他者との対話が欠かせない。ここでの他者とは、古典の作者であり、共に学ぶ学習者であり、自分自身である。生徒が対話を通して古典の世界に親しむことを目指して研究を行った。

## 2 研究の内容

## (1) 授業づくりの視点

- ① 古典と主体的に関わるための工夫【学習者同士の対話】
- ② 古典に表れた見方・考え方を捉えるための工夫【作者との対話】
- ③ 古典の持つ価値を捉え直すための工夫【自己との対話】

## (2) 研究の実際（「夏草—『おくのほそ道』から—松尾芭蕉」 光村図書3年 指導計画）

次	時	単元を貫く言語活動「『古典と私たちのつながり』を見つけよう！」
1	1	・テーマ「『おくのほそ道』を通して松尾芭蕉と出会おう！」 ・自分の探求課題を決める。
2	1	・現代の旅と芭蕉の旅を比較する。 <b>発問</b> 旅に出る前の芭蕉はどんな思いなのか考えよう。 ・「草の戸も～」の句を分析する。 ・振り返りシートを記入する。
3	2	・社会科教員に平泉の説明をしてもらおう。 <b>発問</b> 芭蕉はどのような思いで「涙を落とした」のか考えよう。 ・「夏草や～」の句を分析する。 ・振り返りシートを記入する。
4	1	・「五月雨や～」の句について考える。 ・「曾良旅日記」の記述を紹介する。 <b>発問</b> 光堂を訪れた芭蕉の思いを考えよう。 ・振り返りシートを記入する。
5	3	・探求課題に関する調べ学習 ・松尾芭蕉探求レポートを作成、交流する。

## (3) 授業の指導の工夫と考察

## ① 古典と主体的に関わるための工夫【学習者同士の対話】

古典と主体的に関わるためには、生徒が単元を通して探求する課題を持つことが重要だと考えた。まず、「おくのほそ道」に対する疑問を全体で出し合わせた。その中から、※1「『古典と私たちのつながり』を見つけられるような探求課題はどれか」ということをグループで考えさせた。グループの意見をもとに、全体で探求課題を十個程度にしぼり、個人の探求課題を選択していった。（探求課題例：「芭蕉にとって旅とは何か」「旅をしていく中で何と出会い何を感じたのか」）生徒は毎時間、探求課題への気づきを記入し、学習者同士で交流した。交流の際には、友達の気づきで参考になったものを書き加える時間を確保した。生徒の授業後の感想には次のような記述が見られた。

- |   |                               |
|---|-------------------------------|
| A | 自分の探求課題を頭に置きながら、授業を受けることができた。 |
| B | 意見の交流を通して自分の考えを深掘りすることができた。   |

Aの生徒は、単元を通して自分の探求課題について考え続け、主体的に古典と関わっていた。Bの生徒

は、自分とは異なる学習者の意見を聞くことで、探求課題への考えを深めることができていた。

## ② 古典に表れた見方・考え方を捉えるための工夫【作者との対話】

「おくのほそ道」に表れた芭蕉の見方・考え方を捉えるためには、芭蕉との対話を促すことが重要だと考えた。そこで、単元のテーマを『おくのほそ道』を通して松尾芭蕉と出会おう！とした。芭蕉を過去の遠い存在ではなく、自分たちと同じように様々な思いや考え方をを持った一人の人間として向き合えるようにするためである。また、各章を一読した後、芭蕉の言動に対して疑問に思ったことを出し合わせた。「なぜ涙を流したのか?」「なぜこのような句を作ったのか?」など) その上で、芭蕉の思いにせまる学習課題を設定し、考えさせていった。授業では、生徒の次のような記述が見られた。

- |   |
|---|
| C 言葉一つ一つから芭蕉の思いが感じられた。芭蕉は古人に近づいていると思う。        |
| D 芭蕉が見ている風景だけでなく、目に見えずともそこにある過去や未来のことも表現している。 |

Cの生徒は、細部の表現に着目して芭蕉の思いにせまっていた。Dの生徒は、高館で涙を落とした芭蕉の思いから、芭蕉ならではの見方・考え方を捉えていたと考えられる。

## ③ 古典の持つ価値を捉え直すための工夫【自己との対話】

「古典の持つ価値を捉え直す」ためには、生徒自身が「古典と私たちのつながり」を見出すことで、古典が自分にとって価値のあるものだと感じることを重要だと考えた。そこで、単元を貫く言語活動を『古典と私たちのつながり』を見つけよう！と設定した。(①※1 個人の探求課題もこの観点で選択している。) 何を「つながり」と捉えるかを生徒に考えさせ、「つながり」＝「私が未来に残したい部分」「私が魅力だと感じる部分」とし、授業を進めた。また、3つの観点(1. 授業で学んだこと 2. 探求課題についての気づき 3. 古典と私たちのつながり)についての振り返りシートの記入を積み重ねさせた。授業での学びを振り返り、それが自分にとってどのような価値があるのかを考える「自己との対話の場」になることを意図した。「つながり」に関して、次のような生徒の記述が見られた。

- |  |
|--|
| E 何歳になっても人生をかけて夢を追い求めるっていう生き方がかっこいい。(魅力)   |
| F そこであった出来事や人々の思いを「夢の跡」と表現する芭蕉の感覚を未来に残したい。 |
| G 昔の人にも憧れている人がいて、大切なものを守りたいという思いを未来に残したい。  |

生徒は、芭蕉の生き方・言語感覚・現代にも通じる思いといった、古典の持つ価値を自分なりに見出すことができていた。

## 3 研究の成果と展望

### (1) 成果

○生徒一人ひとりに探求すべき課題があることで、単元を通して古典と主体的に関わっていくことがわかった。また、自らの課題を探求しようという意欲が、学習者同士の対話を活性化させ、自身の考えを深めることにつながっていた。

○生徒の中に、作者への疑問が立ち上がることが、作者との対話を促すことがわかった。さらに、作者の思いにせまる学習課題によって、根拠に着目して作者の見方・考え方を捉えることにつながっていた。

○「古典と私たちのつながり」のように、授業での学びを自分自身との関わりで価値づけるような観点があることで、生徒の自己内対話を促すことがわかった。また、振り返りシートを活用した学びの振り返りと価値付けの積み重ねによって、古典の持つ価値を捉え直すことにつながっていた。

### (2) 展望

○本実践で、生徒が作成したレポートは、学級内の交流にとどまっていた。今後は、相手意識や目的意識を持たせる工夫を行うことで、さらに深い学びを実現していきたい。

## V 九州地区中学校国語教育研究大会の歩み

回次	年	研究大会主題	開催県	開催場所	講師（敬称略）
1	42	国語科学習指導上の問題点の究明とその対策	福岡	福岡教育大学附属 福岡中学校	教育評論家 久米井 東 国立音楽大学教授 熊谷 孝
2	44	国語教室の近代化をめざして	熊本	熊本市立 藤園中学校	児童文学作家 栗原 一登
3	46	中学校国語科の授業改造 —学習の主体化をめざして—	佐賀	佐賀大学 附属中学校	西条高等学校長 井上 芳夫
4	48	思考を深め、心情を豊かにする国語学習指導	長崎	長崎市立 江平中学校	文部省視学官 林 大
5	50	豊かさを育てる国語学習指導はどうしたらよいか	鹿児島	武中学校 紫原中学校	作家 戸川 幸夫
6	52	思考を深め心情を豊かにする国語学習指導	宮崎	宮崎市立 宮崎東中学校	元国立国語研究所長 岩淵悦太郎
7	54	豊かな学力を育てる表現と理解の国語科学習指導	大分	大分市立 明野中学校	鳴門教育大学教授 野地 潤家
8	56	（全国大会） 『国語を正確に理解し表現する能力を高める指導の研究』	福岡	城南中学校 中央市民センター	文芸評論家 山本 健吉
9	58	自ら学びとる生徒の育成をめざして基礎的・基本的事項を おさえた国語学習の実践	熊本	熊本市立 西原中学校	文芸評論家 尾崎 秀樹
10	60	豊かな心情と確かな国語の力を育てる学習指導	佐賀	佐賀市立 成章中学校	文部省視学官 渡辺登美雄
11	62	ことばの力を高めるための国語科指導のあり方 —言語事項を生かした学習活動の充実—	長崎	長崎市立 淵中学校	国語学者 金田一春彦
12	63	（全国大会） 『未来に生きる国語教育の想像』 —生活をきりひらく確かで豊かな言語能力の育成をめざし て—	熊本	熊本市立 藤園中学校 産業文化会館	作家 三木 卓 愛知教育大学教授 甲斐 睦朗
13	2	（全国大会） 『明日を拓く国語教育の創造』 —主体的な生き方を培う国語科学習指導を目指して—	鹿児島	鹿児島市立 伊敷中学校 市民文化ホール	元黎明館長 新納 教義 上智大学教授 渡辺 実
14	3	子供とともに造る国語教室	宮崎	生目中学校 生目南中学校	エッセイスト みなみらんぼう
15	4	確かなことばの力を育てる単元展開のあり方	大分	大分市立 東陽中学校	詩人 吉野 弘
16	5	新しい学力観に立った国語科教育の創造 —言語活動を主体的に展開する生徒の育成を目指して—	福岡	舞鶴中学校 大手門会館	作家・詩人 ねじめ正一
17	6	学ぶ心・伸び合う力を育てる国語科指導の研究	佐賀	伊万里市立 啓成中学校	文部省視学官 安藤 修平
18	7	生徒の自己学習力を育てる国語科学習教室の創造	長崎	長崎市立 江平中学校	作家 別役 実
19	8	未来に生きる国語教育の創造	熊本	熊本市立 東町中学校	映画監督 大林 宜彦
20	9	（全国大会） 『学習主体を拓く国語教育の創造』 —基礎基本を再び新しく、生徒が思い切って自分を発揮で きる授業—	福岡	北九州市立 思永中学校 女性センター ムーブ	文部省調査官 相澤 秀夫 鳴門教育大学学長 野地 潤家
21	10	ことばを拓き、こころを開く国語教室	鹿児島	鹿児島市立 伊敷中学校	鹿児島大学教授 北川 茂治
22	11	子どもとともに創造する国語教室	宮崎	宮崎市立 宮崎西中学校	宮崎大学教授・詩人 工藤 直子
23	12	ことばの学び手が育つ国語教室の創造 —一人ひとりのことばを見つめる単元学習の創造—	大分	別府市立 青山中学校	作家 三木 卓

24	13	新しい時代の国語教育を拓く —「伝え合う」言葉の力を育てる授業の構想—	沖 縄	那覇市立 石嶺中学校	宮城教育大学教授 相澤 秀夫
25	14	(全国大会) 『伝え合う力が育つ国語教育の創造』 —「言語活動例」の具体化を中心に—	長 崎	長崎市立 淵中学校	劇作家・脚本家 平田オリザ
26	15	新しい国語科授業の創造 —言語活動の具体化と評価を通して—	佐 賀	嬉野市立 嬉野中学校	佐賀大学名誉教授 白石 壽文 福岡教育大学教授 前田 真証 宮崎大学助教授 檜原 義頭
27	16	自らの言語生活を拓く国語科授業のあり方 —領域の特性を生かして確実に力をつける評価と指導—	熊 本	熊本市立 武蔵中学校	作家 落合 恵子
28	17	伝え合う力を高める国語科教育の創造 —基礎・基本の充実を図る場の工夫を用いて—	福 岡	大野城市立 大野中学校	NHK 放送博物館館長 中田 薫 愛媛大学教授 三浦 和尚
29	18	意欲的に伝え合い、自己を拓く生徒を育てる国語科教育	鹿児島	鹿児島市立 城西中学校	鹿児島国際大学教授 千々岩弘一 鹿児島大学助教授 上谷順三郎
30	19	確かな国語の力を培う国語教育のあり方 —「伝え合う活動」を通して、領域ごとの力を伸ばす工夫—	宮 崎	宮崎市立 赤江東中学校	千葉経済大学 野口 芳宏
31	20	ことばの学び手が育つ国語教室の創造 —ことば自覚を高める学習展開の工夫—	大 分	大分大学 附属中学校	作家 重松 清
32	21	言語力育成の中核を担う国語教室の創造 —言語活動例の具体化を中心に—	沖 縄	宜野湾市立 嘉数中学校	ことば文化研究室主宰 田近 洵一
33	22	生きてはたらくことばの力をはぐくむ国語科教育の創造 —「言語活動例」を具体化した学習展開の工夫—	長 崎	長崎市立 片淵中学校	お茶の水女子大学大学院 内田 伸子
34	23	確かな国語の力を育む学習の創造 —基礎・基本の力を培う授業の構築—	佐 賀	鳥栖市立 田代中学校	横浜国立大学教授 高木まさき
35	24	(全国大会) 『豊かに言語生活をいとなむ学習者の育成』	熊 本	鶴屋ホール くまもと県民交 流館パレア	文部科学省初等中等教育局 教育課程課教科調査官 富山 哲也
36	25	社会生活に生きて働くことばの力を育む国語科学習指導の 創造 —活用能力の向上を目指した言語活動の具体化—	福 岡	博多エクセルホテル東急 福岡市教育センター	文部科学省初等中等教育局 教育課程課教科調査官 富山 哲也
37	26	「ことばの力」を高め、豊かな心を育む国語科教育	鹿児島	鹿児島県民交流 センター	詩人・童話作家 工藤 直子
38	27	ことばを蓄え、ことばを生かす国語教室の創造	宮 崎	宮崎市立 加納中学校	杏林大学外国語学部教授 金田一秀穂
39	28	新しい学びを拓く国語教育の創造 —自己の考えを深める伝え合いを中心に—	大 分	大分大学教育学部 附属中学校	医師・作家 鎌田 實
40	29	ことばの力を高め、主体的に学ぶ国語教育の創造	沖 縄	琉球大学教育学部 附属中学校	秋田大学大学院教授 安部 昇
41	30	豊かな言語感覚を育み、学びをつなげる国語科教育の創造	長 崎	梅香崎中学校 淵中学校 長崎市民会館	作家・演出家 鴻上 尚史
42	1	生徒が生き生きと確かに学ぶ国語科授業の創造 —子どもが身に付けるべき資質・能力を明確にした授業づ くりを通して—	佐 賀	小城市立 牛津中学校	文部科学省教科調査官 ・国立教育政策研究所 教育課程調査官 杉本 直美
43	2	社会生活につながる国語科教育 —言葉を駆使しながら自ら学び続ける生徒の育成をめざし て—	熊 本	誌上发表	

## VI 九州地区中学校国語教育研究協議会規約

### 第一章 総 則

- 一条（名 称） 本協議会は、九州地区中学校国語教育研究協議会と称する。
- 二条（目 的） 本協議会は、九州各県及び山口県の中学校における国語教育の充実向上を目指し、国語科教師の研究・実践の振興に資することを目的とする。
- 三条（事 業） 本協議会は、前条の目的を達成するために、次の事業を推進する。
- 1 九州地区中学校国語教育研究大会
  - 2 研究物等の編集
  - 3 会誌の発行
  - 4 その他目的達成に必要な事項
- 四条（組 織） 本協議会は、九州各県及び山口県の中学校国語教育研究会をもって組織する。ただし、山口県はオブザーバーとしての参加とする。

### 第二章 役 員

- 五条（役 員） 本協議会は、次の役員を置く。
- 1 会長 一名
  - 2 副会長 七名
  - 3 理事長 一名
  - 4 理事 七名
  - 5 監事 二名（大会開催県会長及び次期開催県会長）
  - 6 顧問 若干名
- 六条（役員を選出） 役員を選出は、次のとおりとする。
- 1 会長及び副会長・監事は、各県会長会で互選又は推薦により選出する。
  - 2 理事は各県の事務局長がこれにあたり、理事長は事務局長（会長は事務局次長と理事とする）を互選で選出するものとする。
  - 3 顧問は、各県会長会において、本協議会の元会長及び前会長の中から選出する。
- 七条（役員の職務） 役員は次の職務を遂行する。
- 1 会長は、本協議会を代表し、会務を統括する。
  - 2 副会長は、会長を補佐し、会長に事故あるときはその職務を代行する。
  - 3 理事長は、会務・会計を担当し、理事への連絡・調整にあたる。
  - 4 理事は、理事会に出席し、本協議会の事業について審議する。
  - 5 監事は、会計を監査する。
  - 6 顧問は、会長会及び理事会に出席して、意見を述べることができる。
- 八条（役員の任期） 役員任期は一年とする。ただし、再任は妨げない。
- 1 役員に欠員が生じた場合、必要に応じて補充する。

### 第三章 会 議

- 九条 本協議会に、会長会及び理事会を置く。
- 1 会長会及び理事会は夏季と九州大会前日の二回開催する。  
その他、必要に応じて会長が招集することができる。
  - 2 会長会は九州各県の会長及び理事長・顧問をもって構成する。
  - 3 理事会は九州各県の会長及び理事長・理事・顧問をもって構成する。

- 十条 会長会及び理事会は、次の事項を審議し決定する。
- 1 九州地区中学校国語教育研究大会の内容・運営に関する事項。
  - 2 会務の運営・執行に関する事項。
  - 3 規約の改廃に関する事項。
  - 4 予算及び決算。
  - 5 その他重要事項。

#### 第四章 研究大会

- 十一条 本協議会は、九州地区中学校国語教育研究大会（以下「九州大会」という）を開催する。
- 1 九州大会は各県輪番で開催する。
  - 2 九州大会の実施内容の詳細は、担当県が原案を作成し、会長会及び理事会で審議し、承認する。

#### 第五章 会計

- 十二条（経費） 本協議会の経費は各県負担金（平成十一年度から三万円とする）プール金・寄付金及びその他の収入をもって充てる。
- 十三条 本協議会の収支予算は、会長会及び理事会の決議により定め、収支決算は会計年度終了後、監査を得て次の会長会及び理事会の承認を得なければならない。
- 十四条 本協議会の会計年度は、四月一日に始まり、翌三月三十一日に終わる。

#### 第六章 表彰

- 十五条 九州大会の席上において、前年度でもって退任した各県会長及び理事長・理事に感謝状を贈呈する。

#### 第七章 事務局

- 十六条 本協議会の事務を処理するため、会長所属の県に事務局を置く。
- 十七条 事務局の構成については、会長に一任する。

#### 第七章 その他

- 十八条 本協議会の編集による研究会の出版物については、(株)新学社に委嘱する。また、本協議会の継続的な事務補助及び調整についても、新学社に委嘱する。

#### 付記

本規約は昭和六十三年七月四日から施行する。

- 一部改正 平成 七 年 十 月 九 日  
平成 十 一 年 一 月 十 九 日  
平成 十 七 年 十 一 月 十 日  
平成 二 十 四 年 六 月 二 十 九 日

## Ⅶ 熊本県中学校国語教育研究大会のあゆみ

回	会長	研究大会	開催地	講師	研究テーマ
1	山崎貞士	39	小中合同の研究会で発足		
2	〃	40			
3	榎田長亀	41. 1. 24	熊本市 白川中学校	武藤光磨	読むことの指導を推進するためにはどのようにしたらよいか
4	〃	42. 1. 30	熊本市 帯山中学校	石森延男	書くことを通して読みを深めるにはどのようにしたらよいか
5	浜田 皓	43. 2. 2	八代市 第一中学校	安藤新太郎	〃
6	〃	44. 2. 7	玉名市 市民会館	田上正立	作文教育はいかにすすめたらよいか
7	〃	44. 8. 9	熊本市 藤園中学校	渡辺 実 栗原一登	国語教育の近代化を目指す学習指導の究明
8	松本 弘	45. 10. 23	熊本市 附属中学校	蓑手重則 安永藍子	国語科における読書指導をどう進めるか
9	〃	46. 10. 26	菊池市 菊池中学校	堀川喜八郎 田近洵一	作文指導をどう計画し、実践したらよいか
10	〃	47. 10. 20	天草郡 本渡中学校	八木橋雄次郎	表現力を高める作文指導はどのようにしたらよいか
11	〃	48. 11. 18	熊本市 白川中学校	西郷竹彦	教育機器利用による学習の効率化を図る
12	〃	49. 11. 1	阿蘇郡 阿蘇北中学校	望月久貴	国語科における読書指導はどのようにしたらよいか
13	〃	50. 11. 18	鹿本郡市 山鹿中学校	小泉 弘	中学校における古典の指導はどのようにしたらよいか
14	河上良輝	51. 11. 30	八代市 第二中学校	中本 環	豊かな感受性を育てる詩歌学習を求めて
15	渡辺清隆	52. 11. 29	熊本市 帯山中学校	浮橋康彦	表現と理解との関連指導はどのようにしたらよいか
16	〃	53. 11. 9	上益城郡 御船中学校	中本 環	ひとりひとりを生かす「読み」の指導過程はどのようにしたらよいか
17	元田正則	54. 10. 29	人吉市 第一中学校	滑川道夫	楽しい文学の授業をどうつくりだすか
18	藤森正巳	55. 11. 20	熊本市 白川中学校	中西一弘	作文の基礎能力を育てるにはどうしたらよいか
19	〃	56. 11. 26	下益城郡 松橋中学校	北御門二郎	いきいきした国語科授業の創造
20	八木 孝	58. 10. 13	熊本市 西原中学校	尾崎秀樹	自ら学びとる生徒の育成をめざして
21	〃	59. 11. 2	玉名市 玉南中学校	飛田多喜雄	「豊かさと確かさをめざす作文教育」 表現への関心・態度をどう育てるか
22	〃	59. 11. 27	熊本市 出水南中学校	斎賀秀夫	楽しく、力のつく国語の指導
23	中島正雄	61. 11. 27	芦北郡 佐敷中学校	上田幸法	確かな国語の力を育てる学習指導
24	〃	62. 10. 29	鹿本郡市 山鹿中学校	中本 環	説明的・論理的文章の理解力を高めるための効果的な授業の進め方はどのようにすればよいか
25	〃	63. 11. 4~5	熊本市 藤園中学校 産業文化会館	甲斐睦朗 三木 卓	未来に生きる国語教育の創造生活をきりひらく 確かで豊かな言語能力の育成をめざして
26	〃	平成元年 11. 14	八代市 第一中学校	八木 孝	生徒の学習意欲を高め、基礎・基本をおさえた 「わかる授業」の創造-文学教材を中心として-
27	今村正晴	02. 10. 26	熊本市 帯山中学校	中西一弘	学ぶ喜びを育てる国語教育の創造
28	池田昌昭	03. 11. 12	阿蘇郡 阿蘇北中学校	長谷川孝士	確かな読みから豊かな読みにせまる指導の研究

回	会長	研究大会	開催地	講師	研究テーマ
29	〃	04.11.20	天草郡 大矢野中学校	白石寿文	言語の教育に立つ国語科指導過程の研究 ～主体的な学習を促す指導法の工夫～
30	吉田 浩	05.11.5	熊本市 北部中学校	中本 環	自ら学びとる力を育てる国語指導 ～新教材による具現化～
31	〃	06.11.25	荒尾市 第三中学校	安河内義己	個を生かした豊かな表現をめざして ～表現の場を設定する授業の創造～
32	宗 裕彰	07.10.18	人吉市 第二中学校	浜本純逸	生き生きとした授業をどうつくり出すか
33	〃	08.11.22	熊本市 東町中学校	大林宣彦	未来に生きる国語教育の創造 ～言葉の力を磨く国語教室をめざして～
34	下城 統	09.10.3	菊池郡 泗水中学校	長尾高明	主体的な学習を促す国語の指導のあり方
35	〃	10.10.30	水俣市 第一中学校	北川茂治	中学校国語科教育の改善の方法
36	山並信久	11.11.18	熊本市 託麻中学校	工藤直子	学びがいのある国語の授業 ～新教育課程での国語授業のあり方を探る～
37	〃	12.11.17	上益城郡 嘉島中学校	安藤修平	国語科の新しい学び方への挑戦 ～新教育課程での国語授業のあり方を探るⅡ～
38	〃	13.11.15	八代郡 千丁中学校	新川和江	生きる力を育む国語科授業のあり方 ～「伝え合う力」を高めるための確かな言語能力の育成～
39	〃	14.11.1	熊本市 竜南中学校	あまんきみこ 三浦和尚	領域の特性を生かした国語授業のあり方 ～確実で豊かな国語の力を育てる言語活動・評価の工夫～
40	〃	15.10.22	玉名市 玉名中学校	安河内義己	「伝え合う力を育む国語科授業のあり方」 ～基礎基本を踏まえた新教育課程での授業づくり～
41	〃	16.10.8	熊本市 武蔵中学校	落合恵子	自らの言語生活を拓く国語授業のあり方 ～領域の特性を生かして確実に力をつける評価と指導～
42	江口哲郎	17.11.22	宇城地区 下益城城南中	甲斐睦朗	確かな国語の力を育てるために ～わかる喜びを味わえる授業の創造～
43	中島 衛	18.10.19	鹿本郡 鹿南中学校	相澤秀夫	伝え合う力を育む国語科教育の創造 ～自分の考えを生き生きと表現し合う授業をめざして～
44	齋藤公拓	19.10.25	八代市 第一中学校	上谷順三郎	「読みの力」をはぐくむ授業の創造 ～伝え合う力を求めて～
45	〃	20.10.24	熊本市 長嶺中学校	ねじめ正一	「わたしの言葉で語り合う学び手の育成」 ～学び手の言葉からの出発～
46	角居恭一	21.10.16	阿蘇市 一の宮中学校	杉本直美	生きてはたらく「ことばの力」を育てる国語科教育の創造 ～学びを生かす授業づくり～
47	米岡峰男	22.10.26	天草市 稜南中学校	富山哲也	「伝え合う力」を育む授業の創造 ～互いの考えから学び合う授業を通して～
48	本田恵典	23.11.8	玉名市 玉名中学校	中村青史	豊かな言語生活をいとなむ学習者の育成
49	吉井秀男	24.11. 15～16	熊本市 鶴屋ホール他	富山哲也 塚田泰彦 鶴田清司 河野順子	豊かに言語生活をいとなむ学習者の育成
50	〃	25.10.23	球磨郡 多良木中学校	富山哲也	社会生活に生きて働く思考力・判断力・表現 力をはぐくむ国語授業の展開
51	〃	26.10.21	菊池郡 合志総合センター 「ダイアブル」他	相澤秀夫	豊かに社会生活を営む学習者の育成 ～単元を貫く課題解決的な言語活動を設定し た授業の工夫を通して～
52	酒井康範	27.11.20	熊本市 熊大附属中学校	鶴田清司	豊かに言語生活をいとなむ学習者の育成
53	〃	28.11.24	水俣市 水俣第一中学校	河野順子	実生活に生きて働くことばの力の育成
54	田尻博道	30.10.31	熊本市 龍田中・力合中・江原中 鹿南中・日吉中	難波博孝	領域をつなげる国語科授業の開発
55	〃	令和元年 11.14	宇城市 不知火中学校	岩間正則	言葉の力を高め、互いに学び伝え合う生徒の育成
56	〃	令和2年	熊本市 誌上発表		社会生活につながる国語科教育 ～言葉を駆使しながら自ら学び続ける生徒の育成をめざして～

## VIII 大会関係者一覧

### 【令和2年度 九州地区中学校国語教育研究協議会】

○名誉顧問	竹下 政雄 (元 九州地区会長)
○顧問	竹内 純夫 (元 九州地区会長)
○会長	田尻 博道 (熊本市立日吉中学校 校長)
○事務局長	日浅 俊子 (北九州市立熊西中学校 教諭)
○理事	
鹿児島県 会長	新田 薫 (鹿児島市立南中学校 校長)
事務局長	渡辺 治 (鹿児島市立玉龍中学校 教諭)
宮崎県 会長	水俣 義雄 (宮崎市立生目南中学校 校長)
事務局長	三輪 由香 (宮崎市立高岡中学校 校長)
大分県 会長	柳井 雅子 (佐伯市立佐伯南中学校 校長)
事務局長	山田 紘一 (大分市立碩田学園 教諭)
沖縄県 会長	玉城 史江 (国頭村立国頭中学校 教頭)
事務局長	宮城 綾乃 (本部町立本部中学校 教諭)
長崎県 会長	萩原 郁子 (佐世保市立崎辺中学校 校長)
事務局長	諸熊 聡子 (佐世保市立祇園中学校 教諭)
佐賀県 会長	古賀 勝利 (佐賀市立昭栄中学校 校長)
事務局長	中原 悠樹 (佐賀大学文化教育学部附属中学校 教諭)
熊本県 会長	田尻 博道 (熊本市立日吉中学校 校長)
事務局長	西岡 大和 (熊本市立富合中学校 教諭)
福岡県 会長	猪俣 清貴 (須江町立須江中学校 校長)
事務局長	日浅 俊子 (北九州市立熊西中学校 教諭)
山口県 会長	中村 浩 (周南市立和田中学校 校長)
事務局長	三浦 里穂 (山口大学教育学部附属山口中学校 教諭)

### 【令和2年度 熊本県中学校教育研究会 国語部会】

○会長	田尻 博道 (熊本市立日吉中学校 校長)
○副会長	上妻 昭仁 (熊本市立出水南中学校 校長)
	山田 公洋 (荒尾市立荒尾第四中学校 教頭)
	吉田 誠 (山鹿市立菊鹿中学校 教頭)

#### ○支部長・理事

支部名	支部長	理事
玉名・荒尾	山田 公洋 (荒尾第四中学校教頭)	大法 公夫 (荒尾市立海陽中学校教諭)
山鹿	吉田 誠 (山鹿市立菊鹿中学校教頭)	大倉 一男 (山鹿市立山鹿中学校教諭)
菊池	大塚 尚子 (菊池市立七城小学校校長)	野田 麻衣子 (合志市立西合志南中学校教諭)
阿蘇	村上 豊優 (産山村立産山学園校長)	脇田 慎也 (高森町立高森中学校教諭)
熊本市	上妻 昭仁 (熊本市立出水南中学校校長)	三角 貴志子 (熊本市立白川中学校教諭)
上益城	荒牧 和子 (山都町立清和中学校校長)	坂田 友紀 (山都町立矢部中学校教諭)
宇城	前田 一孝 (宇土市立鶴城中中学校校長)	藤城 和多 (宇城市立松橋中学校教諭)
八代	沖村 巧 (八代市立第四中学校校長)	野田 貢一 (八代市立第一中学校教諭)
人吉・球磨	那須 さとみ (錦町立錦中学校校長)	谷川 浩子 (錦町立錦中学校教諭)
芦北・水俣	山下 暢子 (芦北町立佐敷中学校教頭)	塚原 綾美 (芦北町立田浦中学校教諭)
天草	益尾 慎吾 (天草市立有明中学校校長)	吉田 由紀 (天草市立有明中学校教諭)

#### ○県事務局

事務局長	西岡 大和 (熊本市立富合中学校 教諭)
副事務局長	中村 幸介 (熊本市立託麻中学校 教諭)
事務局員	中熊 正博 (熊本市立西山中学校 教諭) 斉藤 好徳 (熊本市立力合中学校 教諭)
	中村 茜 (熊本市立二岡中学校 教諭) 杉崎 勢 (熊本市立城西中学校 教諭)